ISSN 2432-9355

PAC 分析研究

2023

第 7 巻

Journal of PAC Analysis

Vol.7

PAC 分析研究

第 7 巻

目次

はじめに ..... 内藤 哲雄

【特別寄稿】

PAC 分析の未来　－基調講演「PAC 分析の起源とその発展」－ ..... 内藤 哲雄　1

Future of PAC Analysis　― Origin of PAC Analysis and Its Future of Development ―
.....Tetsuo Naito　10

【原著】

中国人日本語学習者の日本語による謝罪への違和感　- PAC 分析を通して - ..... 李 嘉隆　22

同職者同士の交流の場が地域コーディネーターに及ぼす影響
..... 真田 穣人、當房 詠子、南 雅則、佐々木 聡　33

家族の PAC 分析　― 個人別普遍性と共通普遍性の探索 ―
..... 内藤哲雄　45

【短報】

公的サービスとして実施されているある地域日本語教室の課題　－日本語支援ボランティアの語りより－ .....今城 淳、古田 梨乃　54

【2022 年度第 16 回大会（室蘭）発表抄録】

ホームステイ交流に関する認識の PAC 分析　－日本人ホストの受け入れ経験による比較－
.....木戸 志緒子　59

独居高齢者の骨折治療における多機能補完リハビリテーション　―日常生活適応志向、治療意欲高揚、生きがい、自己実現についての PAC 分析― ..... 佐藤 弘一郎、内藤　哲雄　63

子育てと農業のコラボに対する参加者評価の分析　－NPO 法人 A を事例に－
.....長沢 咲希、上田 賢悦、清野 誠喜、滝口 沙也加　67

多文化環境における日本人学生の国際化　―意識変容の研究に向けての予備調査の結果から―
.....今城 淳、岡部 真理子　71

教員免許更新制の PAC 分析　～制度が個人に与えた影響を個別のイメージから検討する～
..... 今野 博信　75

【2023 年度第 17 回大会（金沢）発表抄録】

Pac Helper Text(PHT)と他のソフトによる樹形図表現の比較 ..... 今野 博信　79

日本の小学校で外国出身の保護者が抱く違和感と不適応　―スリランカ人女性保護者の内面を探る PAC 分析を通して―.....S. M. D. T. ランブクピティヤ　83

海外ルーツ大学生が語る日本社会での自らの立ち位置 ..... 志賀 玲子　87

日本語のライティング指導に関する日本語教師の意識 .....坪根 由香里　91

新任小学校教師の個人別態度構造と児童をとらえる視点 ..... 南 雅則　95

僧侶となった青年は修行の経験をどのように振り返るのか　－密教における四度加行に注目して－ ..... 佐々木 聡　98

就職活動終了後の大学・大学院生における「キャリア」概念の探索..... 髙沼 理恵　102

小学校初任者教員の協同学習認識に関する研究 ..... 真田 穣人　106

第 8 巻の原稿募集について 110

編集後記

はじめに

『PAC 分析研究』第 7 巻が発行されます。今回の巻では締め切りに間に合わなかった投稿者が複数いらしたとのことです。残念ですが、次巻での投稿を期待しております。感染症のコロナは第 5 類となりましたが、インフルエンザの拡大もあり、引き続き感染対策にご留意ください。余談ですが、昨年度の内藤は、ベッドからの転倒で右手の拳であばら骨を強打し CT を、さらに熱中症で病院のベッドで点滴を 2 時間、バスを追っての 2 回目の転倒ではレントゲンを受け、2 回目の転倒の 1 週間後に帯状疱疹にも罹患。体調最悪の年で、コロナの予防接種は 7 回目、インフルエンザの予防接種も受けました。ここ数年のことですが、さすがの内藤も健康への危機を感じました。『PAC 分析研究』で内藤の一連の投稿や研修内容をお読みいただくと感じていただけると思いますが、内藤が秘匿とし自家薬籠としてきた実践技法についても次々と公開してきました。

さて、今回の「はじめに」では、私的な範囲を超えての学会発展の成果の実体験を吐露させていただきます。拙著投稿論文「家族の PAC 分析 ―個人別普遍性と共通普遍性の探索―」での査読過程についてですが、匿名の 2 名の査読者から大幅な修正指示を頂戴しました。文字通り、真っ赤になるほどの修正と増補を繰り返して再提出しました。著者の実感では、創案者であり技法改革者である内藤自身が、まさに「PAC 分析」の被検者になった体験でした。内藤が掴んでいる暗黙の理論や技法、関連文献が自在に追加連想されたのです。感覚がイメージとなり、言葉となり、次々と紡ぎ出されたのです。「査読の先生方のコメントが連想刺激となり、映画監督の指示やオーケストラの指揮を受けているような感覚が生じていました。振り返ると、まったく異なった原稿へと進化していたのです。」「査読とは、批判的な判定者である」と解釈し、合否の判定だけが意味を持つと解釈する投稿者が多い。実際には、査読者は投稿者が持つ潜在能力を引き出そうとする援助者である。少なくとも PAC 分析学会ではそうあってほしい。査読者は、世界的な成果を引き出すために投稿者を支援する、隠れた共同執筆者である。私は、PAC 分析学会の査読者のレベルが世界水準に達していることを意識した。編集委員会の責務は優秀な査読者の成長を促し、抜擢し、優れた論文を陸続させることである。会員の皆様に絶大な期待をしています。

理事会で、学会に倫理委員会を設置することが内定しました。学会誌掲載の前提条件としてだけでなく、研究や実務の実施そのものに学会の裏付けができるようになります。また、学会が広報などの支援の連携をする研究施設として、学会とは別途に設置される「PAC 分析研究所」の設置準備もはじまっています。研究所では、所長、副所長のほか、事務長の職をもうけるとともに、研究員制度を用意することとなっています。無給ではあるが、研究員としての身分と職歴を確保できます。定年退職された先生方だけでなく、大学院の課程を終えた人たちに、研究歴を確保できるし、将来定職を得たときの俸給算定にも貢献できる。勤務形態は、Zoom などでの遠隔地での勤務や国内外の研究者との共同研究も可能となります。何よりも「研究者としてアイデンティティを確保し、世界最先端の研究に挑戦し続けることができる」ことの働きがい、生きがいを得ることができます。邦文だけでなく、英文での投稿も可能な、「研究紀要」も構想されています。

PAC 分析学会のさらなる発展を祈念して

2023 年 12 月 30 日

PAC 分析学会理事長　　内藤哲雄

付記

能登半島地震により被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

2024 年 1 月 16 日

PAC 分析学会理事一同

【特別寄稿】

PAC 分析学会 2023 年度大会（於：金沢工業大学）　2023 年 11 月 11 日（土）・12 日（日）
基調講演資料　第 1 日目 11 月 11 日　14：00～14：45

PAC 分析の未来

―基調講演「PAC 分析の起源とその発展」―

講師：内藤哲雄　信州大学名誉教授　明治学院大学国際平和研究所研究員

1）PAC 分析の起源

PAC 分析は，特殊な技能を持つとか，ある事象の体験者であるとか，事例の典型者の持つ，スキーマ，暗黙の理論を探索するために開発された理論と技法である。測定を繰り返すことなく，平均値と標準偏差のない単一事例の分析技法であり，あるテーマに関する被検者個人の連想反応の組み合わせそのイメージの近さを，距離行列として，（通常はウオード法で）デンドログラム（樹状図）を析出する。ついで検査者の感覚に応じて，クラスターを分割する。ここで，分割されたクラスターの個人イメージを探索させ，報告させる。ついでクラスター間のイメージの類同と差異について比較させる。被検者個人の連想反応，クラスターのイメージ報告の全てを参照して，テーマに関連した先行研究を参照しながら，新たな解釈を試みる。

PAC 分析の研究には，初期の基準を厳格に守りながらの報告が多い。被検者が単独で気づいて発見した変数も少なくないが，技法に習熟した人なら容易に発見できる範囲にとどまるものが大部分である。技法が発達した現時点から振り返ると，墨守（ぼくしゅ）ともいえるものである。

2）その後の発展

社会心理学の研究に多いのだが，実験協力者に変数の発見，独創的な尺度項目の発見を期待すると，すぐに思いつく平凡な回答が多く，失望することが多い。被検者の大多数は，関連する専門知識を持っていないし，瞬間的に思いつく変数を（機関銃のように）報告して，「あっという間」に終わることが多い。研究者にはいかに短い時間で終了しているのかを自慢する人もいる。

認知的情報処理で素早く処理できることに疑問を感じない人が多いが，PAC 分析では，他の人々がすぐには思いつかない感覚やイメージを，時間をかけて何度も何度も探索することが求められる。あっという間に回答を生産することで，独創的な製品開発や商品開発ができることはまれである。他の誰も思いつかない連想こそが先例のない独創的な価値を産み出す可能性を持っているのである。

＜日常事例から連想する＞

連想の手がかりとなる単語は，抽象的なものよりも日常的な実例の方が豊穣な連想を引き出す。日常実例の一つ一つがもつ内包や外延は，多義的で，連想の視野はあらゆる方向へと伸びる。

ここで，久留米大学で 2023 年 8 月 30 日に開催された日本語教育研究会における「**感謝表現の異文化間コミュニケーションの探索―暗黙のスキーマ探索技法としての PAC 分析の利用―**」での内藤の研究を，引用しよう。

感謝表現に限らず，言語・非言語による伝達は，単語の生成，文章表現がそれぞれの文化内で創造され，変化を続けながら発達し，定式化されている。同一文化・言語環境に所属する人々は，幼少期よりの対人コミュニケーションを通じて，意識化されるとか，気づかれることもなく暗黙のうちに慣習や行動基準を学習

していく。ここでの慣習や原理は無意識に利用されていることから，異文化で暮らしてきた人々が相手国の人々との対話に不自然感や違和感を懐いたとしても，その背後にある社会文化の差異の実像を意識的に探索し理解することは困難である。

内藤（1997）は，人々が獲得している暗黙の行動基準やルールを探索する技法として，個人別にイメージや態度を探索するPAC(パック)分析(analysis of personal attitude construct)を創案した。これは，あるテーマについて被検者に自由連想させ，連想項目同士の類似度を直感的に評定させ，この距離行列に基づいてクラスター分析する。ついで，被検者自身にクラスターのイメージを連想，探索させて，被検者の暗黙のイメージを検査者（研究者）が間主観的（相互主観的）に了解する方法である。

ところが被検者自身は「違和感や不自然さをいだいたとしても」，自力で先行研究では発見されていない決定因を連想することは困難である。そこで，被検者の連想方向を誘導するためには，研究者による連想刺激の提示が重要となる。

1. 研究者自身が獲得している暗黙裡のスキーマを探索する

被検者から引き出す連想項目には，次のようなものが含まれていることが望ましい。クラスーとして出現すことが望まれるのは，異文化間コミュニケーションに不可欠な決定因であること，しかも先行研究では取り上げられていない独創性，独自性の高い変数である。

1-1. 決定因としての連想項目

ある現象を引き起こす原因となるもので，結果に影響する寄与率が20%とか30%なら大きな変数であり，決定因となる。他方で5%未満だと，関連はするものの決定因とは呼ばれない。先行研究もなく研究者1名で結果への寄与率を推量するときは，研究者自身の直感に頼ることになる。

ここで例を挙げよう。高齢者の乳がんは罹患率も高い。しかし，医師の多くは生命の危機に訴えて，スクリーニングの検診を推奨する。ところが，70歳，80歳の高齢者にとっても，がんが進行して手術により切除することを望まない者が多い。たとえ垂乳根（たらちね）となっても女性性の象徴である乳房の保持（Beauty of Brest）にこだわる人は多い。これが，検診受診への動機づけ，女性らしさ，自信，他者との交流への積極さなど，多くの側面と関連している。これらのうち先行研究にない変数となると，独自性，独創性の高い研究となり得る。他の研究者から後付けで指摘されると自明であったかのように感じるが，先行研究にはなかったテーマであることが望まれる。一般の被検者には想定外であったとしても先行研究の存在を意識化し，独自なものを探索する習慣は多くの研究者が身につけている。また，専門家であれば，基本的専門知識や科学的研究技法についても熟知している。独創的な研究開発は製品開発とか商品開発とかのマーケティングと近似している。なお，具体的な研究技法については，内藤（2022）の総説論文「独走・独創的なPAC分析を目指すために」PAC分析研究　第6巻，Pp. 41-48.を参照されたい。

1-2. 連想の出現頻度(accessibility)と 独創性

すぐに連想が頭に浮かぶ現象は脳内に既存のシナプスの連合があり，繰り返し連想することでシナプスは太くなり，ますます連想しやすくなる。連想しやすさはアクセスビリティと呼ばれる。多くの人々がすぐにアクセスできる思いつきでは，多くの人が開発のアイディアを思いつきやすく，関連する製品や商品が膨大となる。逆言すれば。すぐには思いつかない現象にこそ独創性の種が隠されている。「もうこれ以上は誰にもアイディアが浮かばない」との確信的信念を感じたときが独創の出発点である。「誰でも思いつく範囲内には達している」，「技術者としては十分に基準に達している」と感じて，さらなる探索を中断してしまう研究者が多い。人々が目を向けないところに注目する。逆転の発想をする，視点を変えてみるなどを試みることの重要性は知っていても，世界最先端を目指して努力を続けるのは苦しい。成果がでて喜びという報酬を得られる確率は極めて低いからである。

例えば，高齢の保母さんは，体力もなく，子どもを追いかけたりできないので，役に立たないと感じてい

る保育士は多い。園長経験者でさえそう信じている人は少なくない。 本当にそうであろうか？　役に立つ場面はないのかを連想してみる。そうすると，次のような場面が浮かぶ。一所懸命に子どもを追いかけていた高齢保母さんが，息を切らしながら「先生を置いてかないで……」とあえいだとする。すると，立ち止まったり「先生大丈夫？」と声をかけたりする子どもが出てくる。ここからが抽象的で普遍的な変数としての仮説発見の努力が始まる。若い保育士（保母さんや保父さん）は，体力的に強健で，子どもたちに次々と指示を伝える存在である。これに対して追いつくことができない高齢保母（保父の法制化は近年であり，高齢保父はいない）は，子どもたちが初めて出会う「弱者」であり，思いやり教育の対象者となり得る。これは逆転の発想から発見されたものである。思いつきつきにくい，すなわち連想の出現頻度が低いものの中から価値ある独創的着想に至る可能性がある。

2.　感謝表現の異文化間差異（先行研究）

ランプクピティヤ，S.M.D.T.と内藤哲雄は雑談のなかで，スリランカ人と日本人の間では，人々が使用している感謝表現のスキーマに違いがあることを感じた。日本人は,感謝を「ありがとうございました」と言葉で表現する。他方でスリランカのシンハラ語母語話者での感謝は,「ありがとう」の言葉で済ませる（終わったことにする）のは不誠実であり,将来において感謝に値する行為を実際に遂行すべきであると感じている。このことから,両者の間では,感謝表現の言語表現と非言語表現の量と質に文化差があるのではないかと感じた。

そこで,日本人とシンハラ人の間で,日常的には無意識に使用していて気づかない暗黙のルール,スキーマの違いを探索する方法として PAC 分析を用いて,言語と非言語の両者を吟味することにした。調査の結果は,次のことを示していた（ランプクピティヤ，S.M.D.T.・内藤哲雄，2020)。シンハラ母語話者の間では,やさしく細目で相手を見る,握手するなどの非言語表現を使用していることがあきらかとなった。他方日本語母語話者では 地位や性別，状況に関係なく，感謝の言語表現を用いるが，　同時に頭を下げる，会釈顔を見せるなどの非言語行動を使用していた。

無意識に使用されることの多い,暗黙の習慣や文化を探索する方法として効果的なのは，多くの具体的な変数が浮かびやすい日常事例の場面を思い浮かべて関連要因を連想していくことである。また日本語話者とシンハラ語話者の共通点として，場，相手の立場や地位に応じて感謝の表し方を変化させることも示された。ただし，日本語話者が相手の立場や地位によって感謝の言語表現やそれらの丁寧さを変更しているのに対して，シンハラ語母語話者は対等以下の関係では言語表現を控え，代わりに非言語表現を使用していることが明らかとなった。

3.　感謝表現の異文化間差異（新たな着想）

心理学実験の被験者から体験することであるが，実験者が思いつかない変数を次々と教えてくれると期待しても，インフォルーマントからアイディアを得られないことが多い。被験者は製品開発者のように，次々とアイディアを思いついてくれるわけではない。実験者がアイディアを誘導しやすい質問をしたときに，誘発されて連想が浮かんでくるのである。最近の内藤は，PAC 分析の第 1 被検者は実は研究者であって，研究者によって作成された連想刺激によって，本来的・最終的な被検者である第 2 被検者が無意識に感じている行動基準．規範，スキーマが引き出されるのを感じている。

ここで研究者内藤自身が日本の乗り合いバスの中での体験した事例を思い浮かべてみる。双子用に連結された乳母車に乳児二人を乗せてバスに乗ってきた夫婦との出会いである。私は杖を使用しており，右足踵の骨折や，脊髄の圧迫骨折で入院した経験があり，背筋の調子も悪かったが，乳母車が長くてなかなか乗せられない父親を手伝って乳母車を引き上げた。しかしお礼の声が聞こえないので，苦情を伝えた。父親は「お礼は言った」と反発した。母親からは，お礼もお詫びもなく，無反応であった。ここから 2 つのテーマが連想された。

テーマ 1 は，感謝表現の明確さについてである。私は 75 歳で聴力がやや劣っている。おそらくこの父親は

習慣的，惰性的にお礼を言っていたのであろう。私も，嫌々であったとしても，お礼を言っているであろうと判断できて，それを受け容れれば終わる。それではなぜ私は反発したのか，自分の親切な行為に対して，「相手からの感謝，お礼」という言語的報酬（交流分析でのストローク）を得るのを（日本の）文化規範として期待していたのではないか？　ここで新たな副次的効果に目を向けることができる。周囲の人たちが「ああ，父親はお礼を伝えている。私も手伝ったほうがよかったかな?!」と感じれば，援助者へのお礼はそれを見ていた観察者への代理強化となるし，援助行動の模倣の伝播が促進される。

第2のテーマとなるのは，母親も感謝を伝えることによる集団的感謝表現である。日本なら，家族である母親も言葉でのお礼を言い，頭を下げるなどの非言語行動での感謝表現を伝えれば，援助者の満足感が促進されやすい。援助者側も，助けてよかった。次回も助けよう。「たいへんですね」とねぎらいの言葉をかけたくなる。これに関連して対比すべき対照群となる情報は，中国系マレーシア人留学生からの話である。娘の卒業式だというので，父親が来日することになった。娘である卒業生から事前に伝えられたのは，(日本なら卒業生の父親は娘の指導教官に，在学中の指導への感謝を伝えるのが通例であるが)「マレーシアでは父親がお礼を言うことはないので，驚かないでください」とのことであった。実際に父親に会ったが，彼からは自己紹介も，黙礼のような非言語の挨拶も言語的な挨拶も一切なかった。ただただ私の顔を食い入るように見つめていた。感謝は指導を受けた学生個人がすべきことであり，家族は無関係である。「感謝行動の範囲は被援助者個人から援助者に限定される」という，規範が存在していると推量される。同じマレーシア人でも，マレー系，インド系，中国系の民族によって異なるのかもしれないが，日本人とマレーシア人とでは，個人・集団規範としての感謝表現に差異があると思量される。経験豊富な日本語教師にこの事実を確認すると，先行研究もないし，気づいたこともないとのことであった。

上記のように，自身の体験を想起し，感覚，感情，そしてどうした対応をしたいと感じるのか，さらに学問分野で先行する専門知識を想起しながら，関連する変数の働き，とくに決定因を模索しその機能を探索していくことである。現実の具体例は，豊かな連想的模索を引き出す場であり刺激である。

4. 連想刺激作成の方法

PAC分析では，人々が暗黙のうちに習得してきた認知や行動基準の枠組みを探索する。それらの行動は，無意識に行われることが多く，認知的要素だけでなく，さまざまな体験や感覚や感情と結びついている。そこで連想刺激は，抽象的な意味よりも，感覚や感情，エピソードに関連する記憶を想起しやすい日常用語で構成されているほうが，多様な連想を豊富にもたらしてくれる。また連想刺激では，被検者から多義的な回答を得やすいオープン・クエスチャンとする。

研究1の構想

上記3のテーマ1で既述したように，研究1では被検者は日本人。そして，日本人の間では被援助者からの感謝，お礼が存在し，これが援助者の行動への報酬（ストローク）となっていること，これが欠落していると援助者に不満や怒りが生じやすい。また，感謝の表明は，周りにいる観察者にとって代理強化（別の人への報酬であっても，自分が報酬を受けたような強化）となるし，援助行動の伝達，伝播をもたらす可能性があることを被検者の報告によって確認する。検査者が推測するのではなく，第3者も確認できる被検者の明確な報告（外顕的行動：overt behavior）は，操作的で客観的なデータとなる。

被検者：日本人

連想刺激：

「あなたの親切な行為に対して，相手からの感謝やお礼の言葉やしぐさが感じられないとき，あなたはどんなことを感じてきますか。どんなことをしたくない，あるいはしたいと感じますか。また，他の人が感謝をしている言葉やしぐさを聞いたとき，どんなことを感じますか。また，厚意を受けた人が感謝を表現していないときには，周りにいる人たちはどんなことを感じると思いますか。」

研究２の構想

第２のテーマとなるのは，集団的感謝表現である。日本では被援助者が属する家族などの集団メンバーからもお礼を言い，さらには頭を下げるなどの非言語での感謝表現を伝えれば，援助者の満足感が誘発されやすい。援助者側も，助けてよかった。次回も助けようと思う。さらに被援助者に，「たいへんですね」とねぎらいの言葉をかけたくなる。

被検者　①日本人,②（中国系）マレーシア人　③集団的感謝表現が見られないその他の国の民族など

連想刺激

「あなたが他の人から援助を受けたとき，あなたの家族やあなたが所属する集団のメンバーは，あなたへの援助者にどんな風に対応しようとしますか？　また，あなたの家族や所属する集団のメンバーが言葉やしぐさでお礼の感謝表現をしたときにはどんなことを感じますか。そして，感謝表現したメンバーにどんなことをしたいと感じますか？　また，あなた自身が援助したとき，被援助者の属する集団メンバー（家族や友人）から感謝やお礼の表現を伝えられたときは，どんなことを感じますか？　また，お礼を伝えてきた人にどんな応答をしたいと感じますか？　逆に，お礼を伝えてこないメンバーにはどんな風に感じますか？」

＊言語と非言語での応答に違いがあるかを聞き取る。

連想刺激の音読スピード

連想刺激の音読は，実際に感覚，感情などのイメージを誘発しやすい，ゆったりとしたスピードとする。音読の速度が速くなるほど，認知的な情報処理が優先となる。そこで，検査者自身は自己内で生じるイメージ感覚を利用する。検査者がイメージを感じる自身のスピードに合わせて被検者の感じるスピードを同期させ，シンクロナイズさせるようにする。

日常的事例でアクセシビリティの低い関連変数を引き出す工夫

先行研究者たちが思いつきにくい（アクセシビリティが低い）連想項目やクラスターのイメージ報告や補足説明のなかにこそ，検査者が独自性や独創性を発見する関連変数が含まれている可能性が高い。被検者から聴取を繰り返すときとき，「そんなところです」「それだけです」と応答してくることが多い。そこからが研究者の出番です。「ほかにはどうですか？」と聞き続けていくことです。ここで，「ほかにはどうですか？」「ほかにはどうですか？」「ほかにはどうですか？」「ほかにはどうですか？」「ほかにはどうですか？」「ほかにはどうですか？」と，「ほかにはどうですか？」「ほかにはどうですか？」「**その**ほかにはどうですか？」「ほかにはどうですか？」「ほかにはどうですか？」との質問系列を比べてください。後者には３回目に「その」が加わっているだけですが，飽和（あきあきした）感覚が減少します。製品開発や商品開発がそうですが，もうあり得ないと感じた後になって，クリエイティブな発想が生じることは少なくないのです。世界最先端の創造的な科学を構築していく努力を継続することです。

5.　客観的・操作的データ収集と独創的解釈の提案

「被検者の内界体験をまとめること」と「検査者によるリハーサル(追体験)の繰り返し」：信頼性と間主観的妥当性，共感的実感を高める技法

デンドログラム（クラスター）のイメージを聴取したら，それらを聴き取りの順序に沿って文字化していく。全てのクラスターで終了したらまずセーブする。次に，プライバシーに関わる報告を削除する。ついで，第１次連想反応項目とクラスターでの聴取内容を合わせながら，順序を適宜調整し，移動して物語として第三者がよりわかりやすく，共感的理解を得やすいように，各クラスターの被検者イメージの報告をまとめていく。重要な内容は，黄色のバックを付けて発見しやすくして移動する。具体的には．クラスター1，クラスター2 などのクラスター内からははみ出さないで，連想項目と聴取内容の順序を適宜変えながら，ストリーの流れを再構成する。全く同じ内容の重複は削除する。これを全クラスターで終えるとセーブする。修正は，

逆説的であるが，第三者にとっては，わかりやすく，共感しやすいが，読者からは「検査者はただ順序を変えただけではないか」「何ら考察していない」と，検査者の能力や技量が批判され，揶揄されるようにするのが目標である。というのは，結果として，検査者の主観をできるだけ排除し，被検者の報告（外顕的行動）という事実のみをまとめあげること（客観データの連続）になるからである。そして，その後に続く検査者による推論や解釈が，被検者の主観に基づいて外顕的行動として意味と解釈が構成されることになるからである。検査者の主観や推論ではなく，被検者の主観の科学を徹底することが肝要である。

創造的解釈を目指して

今度は，第三者の理解，解釈イメージの流れが，第１クラスターから最後のクラスターまで自然に流れるように，繰り返し，繰り返し修正していくことで，違和感がなく，自明であるかのように感じられるようにしていく。これによって，論考全体が整理され，論の流れに違和感や引っかかりがなく，円滑になり，精緻化してくる。

次に関連研究や先行研究の知見を追加し，引用，援用しながら，独自の解釈や論考を加え，独自性を目指す。論文化している自身の研究に対して自身の研究データで追加するのではなく，他の研究者の知見を追加して援用することに問題はない。自身の論考にいわば鎧兜を着せて理論的価値を付け加えていくことで，徹底的に論考を補強する。読者や審査者を説得するための，外部からの補強データは重要である。反論の余地を次々と塞いでいくことである。それは，換言すれば，関連研究を精査することで，自身の研究を，現代科学と現代技術の最先端の水準にまで引き上げることである。問題提起部分や考察部分を含めて，新たな気づき，論考を加え，最新研究としての質を高める。

因子分析での因子名，多次元解析での次元名についてだが，絶対的な基準は存在しない，言語の本来の機能である多義性,「あそび（解釈の幅）」，ファジーの部分を含み，伝えるべき原材料として指し示しているものは同じでも，命名にはあそびがあり，命名者によって異なった解釈が可能である。詩や短歌，俳句では，伝える素材は同じでも，芸術的・文学的価値は多様に多次元に偏在する。自然科学，社会科学でも同様である。命名の根拠たる間主観的妥当性が失われることなく，全く異なった命名に作り替えられている。つまり，最初に書いた自身の論考を，科学的には新たな発見であり，これまで誰もが気づかなかった新概念や新仮説，新理論へと創造することである。

注

(1) 複雑性の科学は，複雑であいまいな対象の全体をそのまま捕らえることである。今西錦司の『私の霊長類学』講談社学術文庫は，自然科学の分野で「私の〇〇〇学」と「私の」がついている。自然科学もまた主観を援用する。同一種での「生態学」の例は，今西の主張する「トンボの棲み分け」など。動物が同一種の世界に関心を集中する例としては，「雉も鳴かずば打たれまい」がある。雉は同一種の雉が縄張りを荒らすことが関心事であり，このときは人間の存在など気にしていない。他方で，人間だけの世界を取り上げた科学分野の１つが，「人文地理学」である。

(2) 自己の内観から探索を始めた研究で著名なのは，『ファウスト』の作者であり，政治家としても知られているゲーテの『色彩論―色彩学の歴史―』岩波文庫（菊池栄一訳）である。自身の主観を徹底的に内観することで，ニュートンのプリズムの分光理論を承服できず，この大自然科学者に立ち向うため異常な努力を傾注して，色彩解釈に関する 3000 年の歴史を記述し，独自の色彩心理学を構築した。現在では，色彩心理学分野でも実証されており科学史上特異である。

(3) 論文化を進め，精緻化していく作業は，研究者自身が自身の研究の新たな価値に気づき，仮説や理論を洗練し，構築していく過程に他ならない。研究データは投稿や執筆した時点で終わりだとしても，再論考の作業は延々と

続くのである。曖昧さ，多元性，多様性，複雑性，ゆるやかな精度の視点からの再論考が持続する。論文が掲載されたあとで，「今なら」と気づくことは少なくない。

参考文献

(1) 内藤哲雄 2022 独走・独創的なPAC分析を目指すために PAC分析研究第6巻，41-48.
(2) 内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門 ―「個」を科学する新技法への招待― ナカニシヤ出版
(3) 内藤哲雄 2002 PAC分析実施法入門 ―「個」を科学する新技法への招待―（改訂版）ナカニシヤ出版
(4) ランプクピティヤ，S.M.D.T.・内藤哲雄 2020 日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の「感謝の表し方」についてのPAC分析久留米大学外国語教育研究所紀要第27号,Pp.65-77.（英文概要，p81.）（査読付き）
(5) ランプクピティヤ，S.M.D.T.・内藤哲雄 2022 シンハラ語母語話者の、日本語「感謝表現」への違和感と適応：PAC分析から示唆された感謝表現の文化差と適応過程 PAC分析研究，第4巻，Pp.10-26.（査読付き原著論文）
(6) 今西錦司 1976 私の霊長類学 講談社学術文庫
(7) ゲーテ 1952 （翻訳） 色彩論―色彩学の歴史― 菊池栄一訳 岩波文庫

6. 社会科学的な研究視点

ここで日本文化内での社会科学的な研究について取り上げよう。テーマは関西の「漫才」についてである。卒論の学生に，漫才を標準語と関西弁に変えてテープに録音し，第1要因（関西の大学生と関東の大学生に2分）×第2要因はデパートでの（繁忙期と通常期の2分）の2×2の要員配置とした。

結果は，通常期では関東と関西に差がないが，関西圏の人々では繁忙期になると緊張感が増し，「ぼけ」と「突っ込み」の応答が始まる。最後に緊張感がほぐれる「言い回し」で終了となる。これによって，観客は緊張感がほぐれ，すっきりとしてくる。これを心理学の用語で描写すると，「リフレーミング（再解釈)」となる。回りの集団には，緊張感の解消と笑いが生じる。そして漫才の当事者と周囲の観客には，リフレーミングの捉え直しの技術が伝わり，向上していく。職場風土の向上に全員参加の雰囲気が醸成される。

これに対して関東圏では，この繁忙期に漫才などして時間を無駄遣いしている。「サボタージュではないか」「ふざけるんじゃない」と感じている。漫才の実施は，職場風土を悪化させていると感じている。ストレスや問題は社員それぞれの努力で解決すべきだと感じている。

上記のように，日本国内でも，地域によって社会文化的な背景が異なることがあることを示している。

上記3の感謝表現の異文化間差異で取り上げたように，国外で社会文化的規範の差異があることを示したが，アジア各国では，インドネシアの1,000を超える同国内民族数に始まり，50を超える民族を有する国家が多い。アジアほどではないにしてヨーロッパでも，少数民族や他部族の移民を抱える国は多い。こうした背景から，社会科学的な課題ある異文化間差異，異文化間コミュニケーションは，地球規模での問題であり，身近な研究テーマであるといえよう。民族間の異文化間の差異の組み合わせは無数にあり，今後検討される課題は無限大に近いといえよう。内藤が科学研究費で実施した過去の関連研究を取り上げると以下のようになる。

（1）これまでの研究活動

信州大学で，留学生センター長を 4 年間併任したことから留学生の孤独や異文化適応に強い関心を持ち，科学研究費助成事業(以下「科研」と略称)での「留学生の孤独感の個人別構造(課題番号 13610124)」(平成 13 年度～平成 15 年度)の研究を進めた。しかし留学生の孤独感の研究を続けることで，その根源に，母国との人間関係のあり方，人間関係スキーマの違いが，対人関係の困難さや葛藤を生じていることに気づき，科研による「留学生の異文化間対人葛藤の個人別構造分析(16530399)」(平成 16 年度～平成 19 年度)の研究を推進した。ところが，日本人教員が多くの支援をしていても言葉にしないため，言葉で明確に伝達する国からのある留学生は，何もしてもらえないと不適応になった事例から，言語伝達様式の文化差によって違和感や不適応が生じることに気づかされた。この問題意識で実施されたのが科研「異文化間対人コミュニケーションの葛藤と不適応(23530817)」(平成 23 年度～平成 25 年度)である。ついで，無意識・無意図的になされることの多い非言語コミュニケーションにおいても，暗黙裡に文化的スキーマが機能しているのを明らかにしたのが，科研「異文化間非言語対人コミュニケーションの違和感と適応(26380848)」(平成 26 年度～平成 28 年度)である。これら一連の研究を実施する中で，地位の上下によって，また男性同士か女性同士か，異性間かで用いられる単語や尊敬・謙譲の表現の差異が少ない国と著しく多い国の存在を見いだしてきた。この継続の中で気づいたのが，留学生等の日本化過程での葛藤や適応に，文化的スキーマが介在していることである。

研究業績

1. Naito, Tetsuo 2021 Analyses of Personal Attitude Construct about Influences of Social Hierarchy on Communication (in Japanese and Thai)　ICP_ID#4617_poster_Naito_Tetsuo.pdf (査読あり)
2. Naito, Tetsuo 2021 Differences of Communication Scheme of Honorific Expression between Japanese and Chinese. ICP_ID#6329_poster_Naito_Tetsuo.pdf. （査読あり）
3. S.M.D.T. ランプクティヤ・内藤哲雄 2020 シンハラ語母語話者の，日本語「感謝表現」への違和感と適応　― PAC 分析から示唆された感謝表現の文化差と適応過程 ―　PAC 分析研究 第 4 巻, Pp. 10－26. (査読あり)
4.Naito.Tetsuo 2019 Analyses of Personal Attitude Construct about the Influences of Social Hierarchy on Language in Japanese and Chinese. *The European Federation of Psychologists' Associations (EFPA) The 16th European Congress of Psychology.* (査読あり)
5.Naito, Tetsuo 2019 Analyses of Personal Attitude Construct about the Influences of Social Hierarchy on Language in Japanese and Chinese. *Asian Association of Social Psychology (AASP) 13th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology*(査読あり)
6.Naito, Tetsuo 2019 Analyses of Personal Attitude Construct about the Influences of Social Hierarchy on Language. *American Psychological Association (APA2019)*(査読あり)
7.Naito, Tetsuo 2018 Analyses of Personal Attitude Construct about the Influence of Social Hierarchy of Language. *American Psychological Association (APA2018) Program, 400.* (査読あり)
8.Naito, Tetsuo 2017 Analyses of Personal Attitude Construct on Similarities and Differences of NVC between Japanese and Vietnamese. *The European Federation of Psychologists' Associations (EFPA) The 15th European Congress of Psychology. (*査読あり)
9.Naito, Tetsuo　2017 Analysis of Personal Attitude Construct for Diagnosing Single Cases Operationally, Qualitatively and Quantitatively.　PAC 分析学会　PAC 分析研究第 1 巻第 1 号,2-10.

10.Naito, Tetsuo 2017 Analysis of Personal Attitude Construct on the Scheme of Nonverbal Communication of Turk. *Asian Association of Social Psychology (AASP) 12th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology Final Program, 39-40.* (査読あり)

11.Naito, Tetsuo 2017 Analysis of Personal Attitude Construct on Turkish Discomfort in NVC with Japanese. *Reginal Conference of Psychology, 2017 (RCP 2017) University of Social Sciences and Humanities, Vietnam National University, Hanoi* (査読あり)

12.Naito, Tetsuo 2016 Analyses of Personal Attitude Construct on the Scheme of Nonverbal Communication style of Mexican Which was perceived by Japanese Exchange Student. *The 31st International Congress of Psychology (Program), 213.*(査読あり)

13.Naito, Tetsuo 2016 Analysis of Personal Attitude Construct for Diagnosing Single Cases Operationally, Qualitatively and Quantitatively. *The 31st International Congress of Psychology (Program), 73.*(招待講演)

14.Naito, Tetsuo 2016 Analysis of Personal Attitude Construct on the Nonverbal Communication Style of Japanese Which Was Perceived by a Polish Exchange Student. *International Association for Cross-Cultural Psychology, 23rd International Congress(Program), 83.*(査読あり)

15.Naito, Tetsuo 2016 Analysis of Personal Attitude Construct on Characteristics of Japanese Nonverbal Communication Which Were Perceived by an International Student. *American Psychological Association, 2016 Annual Convention (Program), 321.*(査読あり)

16.Naito, Tetsuo 2016 Analysis of Personal Attitude Construct on Discomfort against Japanese non-verbal communication which Was Perceived by an Iraqi Student. *Australian Psychological Society, 2016 APS Congress (Program), 48.* (査読あり)

17.Naito, Tetsuo 2009 A Schema of Japanese Interpersonal Relationships: An Analysis Using the Personal Attitude Construct Method. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 34(*special edition*), *65-71.*(査読あり)

【特別寄稿】

Interactional Lecture about PAC Analysis in Graduate School at Kyushu University.
30th, Novenber,16：40～18：20

Future of PAC Analysis

― Origin of PAC Analysis and Its Future of Development ―

Tetsuo Naito, Emeritus Professor of Shinshu University

What is PAC Analysis? How to use this technique for finding implicit theory.

Abstract

What is PAC Analysis? PAC means Personal Attitude Construct. There is no repetition of measurement. This is a case study. People acquire their cognitive scheme about the outside world by everyday living. Their environment and experience are individually very different. So individual personal attitudes are diverse. The subject who has idiosyncratic experience may have a special scheme unconsciously. PAC Analysis makes use of free association. At first researcher decides research project direction. He/she induces the research informant into his/her direction. And informant is asked to estimate the similarity between association items. Now, we make use of cluster analysis. Nevertheless, there is no average or standard deviation. The subject is directed to describe the matter of clusters and compare among clusters. The researcher arranges all descriptions fluently. And he/she tries to discuss consulting with antecedent studies and findings. And he/she creates originality initiatively and intently. This theory and artifice contribute to language, culture、social norms, and even natural science. The subjectivity of an informant is the most important thing. The validity of the intersubject between researcher and subject is the keyword. At the same time, this is the tool for providing consultation.

Speaker: Tetsuo Naito, Ph.D.
Emeritus Professor of Shinshu University (Professor of Social Psychology)
Fukushima Gakuin University　(Former Professor of Clinical Psychology)

~~~~~~

Principles for Creative Research:

① Have interests in everyday beliefs, feelings, and behavior. And compare people's (cultural) differences.
② Have always doubts about old classic science (hypothesis and theory) and your own beliefs.
③ Don't hesitate to recreate old theories and reconstruct new ones.

~~~~~~

From

Schema Acquisition and Development (Fiske, S.T. & Taylor, S.1991 Social Cognition, Second Edition, Pp.147-148. McGraw-Hill, Inc.) New York

Schemas develop from encounters with instances or from abstracted communications of the schema's general characteristics. People are extremely good at learning complex schemas from experience, although they may overdo it and become biased toward schema consistency. When people generalize a

schema from experience, it typically becomes more abstract. The critical shift in abstraction may occur after two exposures, between the two experiences. Although the schema itself may well become more abstract, it is also possible that people store all the original encounters (exemplars) and then, as needed, they extract principles from their accumulated experience. In either case, the resulting descriptions become more abstract with experience. For example, as peoples' impressions of other people develop, their descriptions rely more on abstract traits than on concrete behaviors or specific contexts.

Schemas also become richer and more complex as they develop. The more fraternity parties or the more department parties one attends, the more dimensions one recognizes in them. One moves beyond the quality of the food and drink to notice the quality of the conversation, the music, the setting, who speaks (or doesn't speak) to whom, and so on. Moreover, the more one knows, the more one can describe the details of the schema.

Schemas also become more tightly organized as they develop. "The paradox of expert" is that as one learns more, the knowledge is simultaneously more complex more usable, and more richly interconnected (its internal structure is more organized). Thus, at a party where one has known everyone for quite a while, one can quickly gauge the meaning of the pairs that form and other pairs that may form in response (or retaliation), but a newcomer would simply see an undifferentiated mass of people entertaining themselves. The well-developed schemas of experts contain more links among the elements and more complex organization, so they are in effect richer.

One consequence of experts' well-developed schema is that, despite the greater amount and complexity of expert knowledge, their well-organized quality makes them more cognitively compact. As schemas develop with practice, they may become "united," that is, a single mental construct activated in an all-or-nothing manner. The unitization process is even more obvious with motor skills: consider the difference between learning to drive, struggling to master the separate elements of the clutch, brake, accelerator, steering, etc., versus being a well-practiced driver who can use all those elements at once, without even thinking. The efficiency of a unitized schema emerges when one tries to do two things at once (e.g., drive and have a serious conversation). A unitized schema takes up less mental capacity, so it frees one to attend to other matters. Consequently, experts can organize schema-consistent information quickly, and they can evaluate schema-consistent evidence quickly, and confidently.

As schemas develop, they become more resilient to inconsistency. As they become more abstract, complex, organized, and compact, they more easily incorporate exceptions. As noted earlier, people first form a schema and focus on inconsistency to make sense of it, while the experts focus on it because they can notice and use it. In contrast, intermediate in-between these two groups, the novices have their attention full just focusing on the consistencies. Thus, it seems likely that schema development is not a simple linear progression, but it may represent both gains and losses at different points, resulting in a curvilinear pattern.

On the whole, all else being equal, schemas should become more accurate as they develop. The accuracy issue in perceiving other people has a long and difficult history, but our point here is relatively simple and all too obvious. If people learn from their experiences with acquaintances, social situations, and certain social roles, then such well-developed knowledge ought to reflect reality fairly well. For people to function adaptively, increasing knowledge ought more and more to fit the stimulus world, at

least well enough, if not perfectly. For example, friends' judgments of their mutual friends and themselves agree more than do strangers' judgments of the same person, which may indicate greater accuracy. This point merely serves as another reminder that "there" is a 'there' there."

Origin of PAC Analysis

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

Analysis of Personal Attitude Construct for Diagnosing Single Cases Operationally, Qualitatively and Quantitatively[1)]

Tetsuo Naito
Graduate School of Psychology, Fukushima College[2)]

Key Words:*PAC Analysis ,Qualitative Analysis by Single Case, Operational Procedure, Association Items, Cluster Analysis, Intersubjective Interpretation*

———————————————————————————————

[1)] This is the rewritten paper that was prepared for the invited address (IA29-08, Methodology, and Statistics) in the 31st International Congress of Psychology at Yokohama.

ABSTRACT

Analysis of personal attitude construct (PAC Analysis) was created to diagnose single cases operationally, qualitatively, and quantitatively. The procedure is as follows; 1) present the stimulus sentences for free association, 2) required to order the cards of association according to importance, 3) instruct to estimate the psychological distance intuitively, comparing all pairs of cards, 4) cluster analysis is done, 5) asked to describe the image about each cluster, and 6) required to answer single item image (plus, minus or zero). The process of analyzing personal attitude construct is shown in Figure 1. So, we can get whole critical variables and factors that are recalled (accessed) from the long-term memory of the informant, and we discover individualistic generality in this single case through phenomenological interpretation of data, consulting with a subject. At the same time, we can make use of this for finding new critical variables, common generality among all cases, and a new framework of theory. This technique refers to uniqueness, holism, and the rest.

For an explanation of PAC Analysis, I would like to show you a research example about loneliness. This theme is well-known among phenomenological behaviorists. It is subjective and measured operationally. However, there was no single case measured by ideographic cluster analysis. There was no bridge between a subjective single case without mean and standard deviation and statistical interpretation. Now we have a new scientific method for single cases (PAC Analysis).

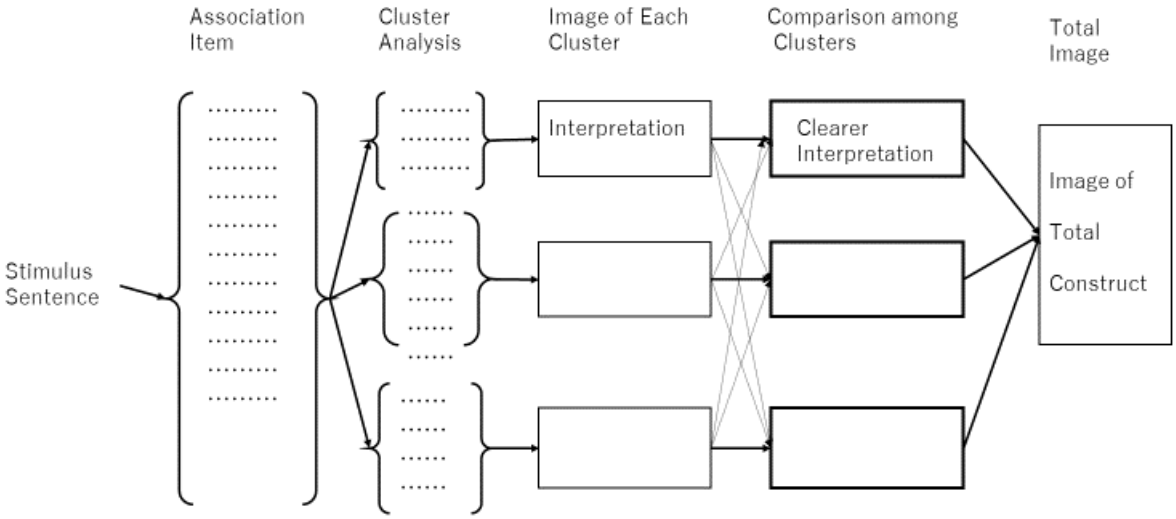


Figure 1 Analyzing Process of Personal Attitude Construct

Method

Subject: The subject was a senior (3rd. grade) female student. She lived alone in an apartment.

Procedure: The stimulus sentences for free association were at first presented and read out to the subject. They were as follows.

" Which scene or situation easily makes you feel lonely? What condition are you in at the time of lonesome? What do you think want to do? What do you do actually? Write each your association items on the cards."

Next, the subject was required to order the cards according to importance, regardless of the plus or negative direction.

Table 1. Association Items

order of association	content	order of importance
1.	When the TV stations stop airing for the night	⑭
2.	After the party	⑪
3.	When I love someone one-sidedly	②
4.	When someone I trusted betrayed me	①
5.	Despair	⑯
6.	There is no space (place) for me	⑥
7.	Cry	③

8.	Listen to the music	⑩
9.	Call someone	⑤
10.	See the photographs in my album	⑮
11.	Write a letter to somebody who lives in the distance	⑫
12.	Write in my diary	⑦
13.	There are many people, but nobody whom I know	⑬
14.	Talk to myself	④
15.	Buy flowers	⑧
16.	Drink alcohol	⑨

Instruction for an estimate of the distance of similarity

The instruction for an estimate of distance is "Compare all pairs of items and estimate the distance of similarity, not linguistically but intuitively". Cluster Analysis by the Ward method was done. Then the subject was asked to describe the image or interpretation of each cluster. At last, she was asked to answer about single-item images (positive[plus], negative[minus] or neutral[zero]).

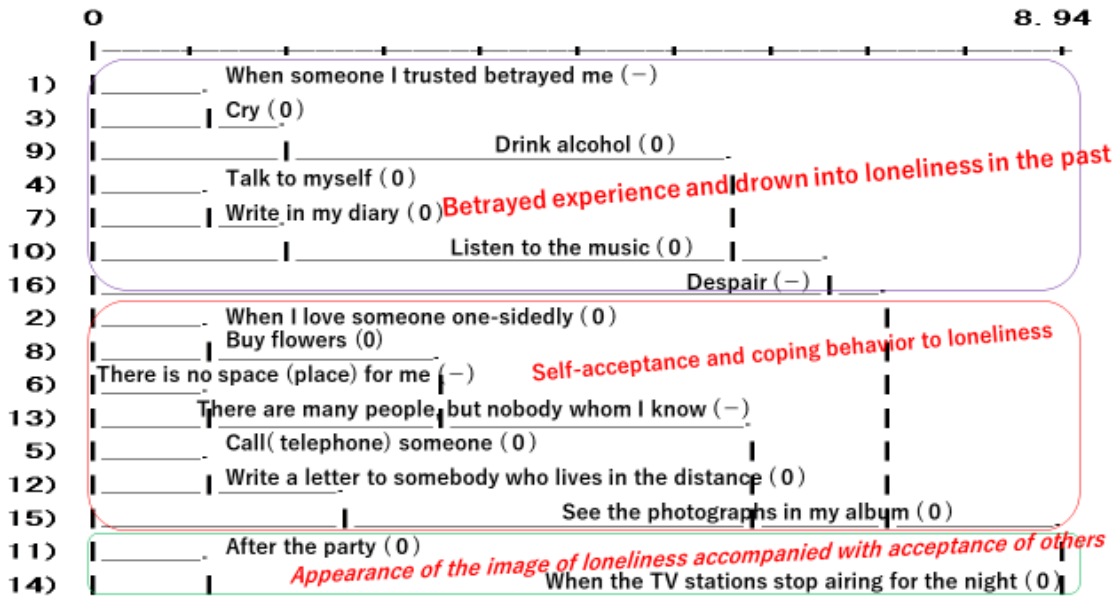


Figure 2 Construct of Loneliness of Female Subject

*The item number on the left side indicates the intuitive order of importance.

** +−0 in parentheses right end of associate items means +−0 of the thought list technique.

Results and Discussion

Image or interpretation of clusters by the subject

<1st cluster>

① When someone I trusted betrayed me

③ Cry
⑨ Drink alcohol
④ Talk to myself
⑦ Write in my diary
⑩ Listen to the music
⑯ Despair

(Question: Then, See your copy. From the top, "When someone I trusted betrayed me" "Cry" "Drink alcohol" "Talk to myself" "Write in my diary" " Listen to the music" "Despair," these " one " "two" "three" "four" "five" "six" "seven," these seven items look like one gathered group. What image are you calling? What contents are you feeling?)

・・・・・・・・・・Negative image, huh, absolutely drop out. I tried to drop to the bottom. There I give myself light. Try to do so. That's my image. ・・・・・・・ It's a dark image. Generally, what I was apt to do in the past. In the past that ・・・・・・・, (directing by a finger "When someone I trusted betrayed me") there was this top experience, then, though I didn't drink alcohol, (directing other items of 1st cluster by finger) did other these things. So, I tried to isolate myself from loneliness, I did, and even now I am apt to do so. Hu-n! That's what I am feeling.

(Question: What are gathered, do you feel?) ・・・・・・・"Negative tendency," may I call so?

(Question: What is negative?) Hun, not that I climb up by all means, but that I drop till the bottom, I am sheltered in my shell, and toward loneliness, I am taking my eyes off loneliness. When I feel lonely, I try to make myself lonelier. I am feeling so.

<2nd cluster>

② When I love someone one-sidedly
⑧ Buy flowers
⑥ There is no space (place) for me
⑬ There are many people, but nobody whom I know
⑤ Call(telephone) someone
⑫ Write a letter to somebody who lives in the distance
⑮ See the photographs in my album

(Question: Now let's see the next group under the first group. "When I love someone one-sidedly" "Buy flowers" "There is no space (place) for me" "There are many people, but nobody whom I know" "Call someone" "Write a letter to somebody who lives in the distance" "See the photographs in my album." These " one " "two" "three" "four" "five" "six" "seven," seven items look like one gathered group. What image are you calling? Why is this group gathered, do you feel?)

Relatively positive. I'm trying to climb up, even though I depend on other people and articles, rather than try to do it by myself. Compared with the previous group, I feel this is my present situation.

(Question: Could you feel another?)

Hu・・・・・・・, I feel relatively progressive.

(Question: Why gathered, do you feel?)

Positive tendency, my present situation. Different from my previous group, though I'm lonesome, I do not take my eyes off them. I believe I can manage; I endeavor to do many things. I guess I am attempting to put myself close to the best condition in the past when I was most vivid. When I dropped out, I seldom wanted to buy flowers or call somebody. But I guess I'll be made happy if I do the same thing which I did at a happy time. I think so. Then, the contents of the phone and letter do not talk about worries but about my happy experiences. Generally, about my happy episodes. The photograph in my album is symbolic. When we take our pictures, ordinarily we are laughing!? There was such me, so I guess I will surely laugh again like this even though I am sometimes depressed. It seems to me that I am trying to be tender toward myself, sometimes buying flowers, so that I may cheer myself and make endeavors. I can see myself making every effort when depressed. Yes, I can!

<3rd cluster>

⑪ After the party

⑭ When the TV stations stop airing for the night

(Question: See the last group. "After the party" "When the TV stations stop airing for the night." These two items are attributed to the same group. What image are you calling from this? Why is this group gathered, do you feel?)

I guess this shows my condition. Indifferent with being positive or negative, maybe, because of my first alone living after the entrance to university, I am simply recognizing " I'm alone here" without feeling lonesome, sad, or such a thing. I feel not sad, but rather "calm", wondering to feel suddenly the room larger. I am surely alone and lonesome, but scenes of the party and TV remain in my ears and eyes. Not-lonesome-like lonesomeness though the curious description.

Comparison between clusters and total image:

<Comparison between 1st and 2nd>

(Question: Now compare two groups. First, "When someone I trusted betrayed me" "Cry" "Drink alcohol" "Talk to myself" "Write in my diary" " Listen to the music" "Despair," and second, "When I love someone one-sidedly" "Buy flowers" "There is no space (place) for me" "There are many people, but nobody whom I know" "Call someone" "Write a letter to somebody who lives in the distance" "See the photographs in my album." What's the same, what's different?)

The different point is that at 2nd I tried to cope positively, but in the 1st not so. And the matters in 1st happened so long ago. In 2nd near to the present. I don't entirely stop the past behavior, even now I do the accustomed behaviors of the past. But I try to cope at last. That's a different attitude from that of the past.

(Question: Then, compare between 2nd and 3rd groups. 3rd is "After the party" "When the TV stations stop airing for the night." Which is similar, which is different?)

The difference is that in 2nd mental loneliness, but that in 3rd literally aloneness. 2nd is my coping

attitude toward lonesomeness. 3rd is not related to managing. I guess 3rd is becoming the material for climbing up when the matters in 2nd happen.

(Question: Anything else?) That's all.

<Total>

(Question: Now glance over 1st, 2nd and 3rd. What image do you feel?)

1st, as I told you already, "myself in the past, especially myself when something happened." 2nd is generally "myself in now at which something happened." 3rd is "ordinary state of myself in the present." By the way, I guess my habits, personality, and being apt to drop out in the past remain now in the habitual behavior or so. If I could be satisfied with presenting myself, experiences of loneliness or despair would be very important to me after a long time.

(Question: Anything else?) I can't imagine it anymore.

<Additional Question>

"When someone I trusted betrayed me"→(Question: When did the Top item "When someone I trusted betrayed me" happen ?)

2nd in the high school.

"Drink alcohol"→(Question: What image do you feel from "Drink alcohol" ?)

I drink alcohol until losing memory to change into another person. Usually at home. One point I guess is that I couldn't drink even one drip in the past and was only inspired by drinking to forget, though I said, "drinking was the matter in the past."

"Write in my diary"→(Question: What image do you feel toward "Write in my diary" ?)

Though I'm relatively nervous about another person's eye, only in my diary I confess any tiny thing to myself. I tried to be honest with myself, and I, who writes, am a supporter of myself, who is depressed.

"Listen to the music"→(Question: What image do you feel to "Listen to the music" ?)

When I am depressed, I listen to songs that are thoroughly noiseless and suitable for my present feeling and listen until I cry.

"Buy flowers"→(Question: How about "Buy flowers" ?)

Buy for myself.

<＋,－ and 0 images of each item>

(Question: Now, ask you about the image of each item. Plus? ・・・ Minus? ・・・ Zero, which means neutral? Which image can you call? Regardless of literal meaning, report actual feeling. How about the top " When someone I trusted betrayed me"?)

It's a minus.

(Question: Then, how about "Cry"?) It's zero.

(Question: How about "Drink alcohol"?) It's zero.

(Question: "Talk to myself"?) It's zero.

(Question: "Write in my diary"?) It's zero.

(Question: "Listen to the music"?) Zero.

(Question: "Despair"?) Minus.
(Question: "When I love someone one-sidedly"?) Zero.
(Question: "Buy flowers"?) Plus.
(Question: "There is no space for me"?) Minus.
(Question: "There are many people, but nobody whom I know"?) Minus.
(Question: "Call someone"?) Zero.
(Question: "Write a letter to somebody who lives in the distance"?) Zero.
(Question: "See the photographs in my album"?) Zero.
(Question: "When the TV stations stop airing for the night"?) Zero.

<Order of importance and ＋－ image>

1/3 Items in order of importance are (1) When someone I trusted betrayed me, (2) When I love someone one-sidedly, (3) Cry, (4) Talk to myself, (5) Call someone. (1) and (2) are the interpersonal situations that call up loneliness, and (3)－(5) are the defense and coping behavior. Only (1) is minus, the other four are zero items. On the whole, plus is 1, the number of minuses is 4, and zero is 11. Zero-item percentage amounts to 68.8%. We can read, from this result, the strength of the tendency to alienate herself and her defense mechanism.

<General interpretation>

1st cluster: All loneliness started from the most (1st) important item which was the experience at 11th of her senior high school; "When someone I trusted betrayed me." She had never tried to confront the experience nor recover herself. She had run away into her shell and drowned her loneliness in stronger loneliness. She felt that she could not be helped unless dropping into the deepest bottom. and destroyed herself. She had desired a change of personality by losing consciousness with crying and drinking alcohol (actually did not drink in those days). She talked to herself and wrote in her diary about her depressed situation. She who read her diary is the only sympathizer and comforter. She listened to the sad music and was drowned in desperate loneliness. These should be attributed essentially to the betrayed person, but her hostility and attack ran against herself. Drowning into desperate loneliness and avoiding facing her actual situation means the defense mechanism. We can call this cluster "Betrayed experience and drown in loneliness in the past."

2nd cluster: This cluster is constituted of two parts. The first is about conditions for the occurrence of loneliness, the second is about coping behavior. And both parts are about the present.

When she loves somebody one-sidedly. There is no space for herself. There are many people, but nobody whom she knows. These social isolation situations evoke loneliness. Even now defense mechanism of drowning in loneliness exists. And she is accustomed to drinking until losing consciousness that was only desirous in the past. We can guess that her psychological trauma is not recovered even now. Nevertheless, she is climbing up, not by herself but even depending on another person and thing. Contrary to the past, she does not seal her eyes, believes in managing and is endeavoring to do something. By doing something happy in the past, she strives to recover and

reinforce a positive self-image. The only positive image item is "buy flowers" for herself. To exchange happy episodes, she telephones someone and writes a letter to somebody who lives in the distance. To recall the happiness in the past, she looks at laughing photographs of herself in the album. She is trying to give encouragement and comfort to herself. It means self-acceptance behavior. So, we can interpret this cluster as "**Self-acceptance and coping behavior to loneliness**."

3rd cluster: Indifferent toward lonesomeness or sadness, she recognized simply herself alone. When she felt that the room was calm, she felt also the room had suddenly larger. Although the party finished or TV stations had stopped airing, scenes of the party and TV remained in her ears and eyes. She was feeling no-lonesome-like lonesomeness. We can read her unconscious acceptance of loneliness, enlargement of self, related-with-others self, and acceptance of (existence of) others. So we can call this cluster "**Appearance of the image of loneliness accompanied with acceptance of others.**"

Discussion: When we look at the total structure among clusters, we can draw it as <**Betrayed experience and drown in loneliness in the past.**> →<**Self-acceptance and coping behavior to loneliness.**>→ <**Appearance of the image of loneliness accompanied with acceptance of others.**> We can interpret this stream as the time transference of <**the past**>→<**the present**> and the change of acceptance styles of <**self-rejection**>→<**self-acceptance**>→<**others-acceptance**>.

This case shows that it is not good that long-period loneliness was measured about one year ago and short-period loneliness is about two weeks in typical research. Clinical Psychologists will be interested in this type of loneliness caused by strongly unreliable-toward-human experiences. The subject could not use any kind of social support at first stage, because she had never been able to trust any other human beings. This is a typical case. We cannot get many of these cases for multi-sample research.

By the way, every association item was derived from the subject. These items have high accessibility from everywhere in long-term memory. This fact refers to personal history. They have a high probability of critical variables for the subject. It seems that research is done with the original questionnaire made by the subject. Those come from depending on not the researcher's scheme but the subject's scheme. Which refers to holism.

The researcher understands the meaning of the construct by consulting with the subject. We discover individualistic generality in this single case through the phenomenological interpretation of data. Because of single-case research, we can use intersubjective interpretation. The subject finds the meaning of these constructs with the researcher (therapist). At the same time, we can make use of this to find new critical concrete variables for practice and, a new framework of theory. This technique refers to uniqueness, holism, and the rest.

In this research, we can find the following facts. At first, we can read "psychological field." Second, "structure of the complex." Third, "cognitive construct of stress for cognitive behavioral therapy." And so on.

Reference

Naito, Tetsuo 1997 How to use PAC analysis: An Invitation to New Scientific Method for Single Cases.

(in Japanese) Nakanishiaya-Shuppan.

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
Let's talk about the revised PAC Analysis

In experimental social psychology, many confederates cannot afford to supply creative variables to the researcher. They almost do not have profound science, they think speed is the most important human ability, and they fire their opinions like machine-gun.

In creative thinking, we try to feel with emotion, sensation, and episode memory with body. Goethe was the one of most famous poets and politicians in Germany who watched and researched his own sensation in the perception of color. He struggled and competed with Newton who was the most famous physical scientist. Goethe created new theory of color. Even in humanities art and cultural science, we can make use of sensation, feeling, and thought in our inner world. We try to endeavor, as Goethe did.

Analyze daily life cases and draw hypotheses from intercultural differences

I met a father with two infants in the baby buggy. I helped the father lift the buggy. But I could not hear him expressing any appreciation to me. I told the father that it was rude of him. He replied he had answered surely. The mother did not say anything at all. I thought that this is caused by generation gap and their personality. But I was very interested in appreciation.

I was an adviser of Malaysian female student. When she graduated from our university, she told me that her father come to see her. And she informed me additionally that family members do not appreciate to adviser in Malaysia. Family members are indifferent with her appreciation. Her father did not appreciate at all, not only in verbal but also in non-verbal. I guess that there is a huge cultural difference . Social norms of collective appreciation are completely different between Japan and Malaysia, maybe between east Asia and west Asia.

Some of the research achievements

1. Naito, Tetsuo 2021 Analyses of Personal Attitude Construct about Influences of Social Hierarchy on Communication (in Japanese and Thai) ICP_ID#4617_poster_Naito_Tetsuo.pdf
2. Naito, Tetsuo 2021 Differences of Communication Scheme of Honorific Expression between Japanese and Chinese. ICP_ID#6329_poster_Naito_Tetsuo.pdf.
3. Naito, Tetsuo 2019 Analyses of Personal Attitude Construct about the Influences of Social Hierarchy on Language in Japanese and Chinese. *The European Federation of Psychologists' Associations (EFPA) The 16th European Congress of Psychology.*
4. Naito, Tetsuo 2019 Analyses of Personal Attitude Construct about the Influences of Social Hierarchy on Language in Japanese and Chinese. *Asian Association of Social Psychology (AASP) 13th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology*
5. Naito, Tetsuo 2019 Analyses of Personal Attitude Construct about the Influences of Social Hierarchy on Language. *American Psychological Association (APA2019)*
6. Naito, Tetsuo 2018 Analyses of Personal Attitude Construct about the Influence of Social Hierarchy of

Language. *American Psychological Association (APA2018) Program, 400.*

7. Naito, Tetsuo 2017 Analyses of Personal Attitude Construct on Similarities and Differences of NVC between Japanese and Vietnamese. *The European Federation of Psychologists' Associations (EFPA) The 15th European Congress of Psychology.*
8. Naito, Tetsuo 2017 Analysis of Personal Attitude Construct for Diagnosing Single Cases Operationally, Qualitatively and Quantitatively. Journal PAC Analysis, 2-10.
9. Naito, Tetsuo 2017 Analysis of Personal Attitude Construct on the Scheme of Nonverbal Communication of Turk. *Asian Association of Social Psychology (AASP) 12th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology Final Program, 39-40.*（査読あり）
10. Naito, Tetsuo 2017 Analysis of Personal Attitude Construct on Turkish Discomfort in NVC with Japanese. *Regional Conference of Psychology, 2017 (RCP 2017) University of Social Sciences and Humanities, Vietnam National University, Hanoi*（査読あり）
11. Naito, Tetsuo 2016 Analyses of Personal Attitude Construct on the Scheme of Nonverbal Communication style of Mexican Which was perceived by Japanese Exchange Student. *The 31st International Congress of Psychology (Program), 213.*
12. Naito, Tetsuo 2016 Analysis of Personal Attitude Construct for Diagnosing Single Cases Operationally, Qualitatively and Quantitatively. *The 31st International Congress of Psychology (Program), 73.* (Invited Lecture)
13. Naito, Tetsuo 2016 Analysis of Personal Attitude Construct on the Nonverbal Communication Style of Japanese Which Was Perceived by a Polish Exchange Student. *International Association for Cross-Cultural Psychology, 23rd International Congress (Program), 83.*
14. Naito, Tetsuo 2016 Analysis of Personal Attitude Construct on Characteristics of Japanese Nonverbal Communication Which Were Perceived by an International Student. *American Psychological Association, 2016 Annual Convention (Program), 321.*
15. Naito, Tetsuo 2016 Analysis of Personal Attitude Construct on Discomfort against Japanese non-verbal Communication which Was Perceived by an Iraqi Student. *Australian Psychological Society, 2016 APS Congress (Program), 48.*
16. Naito, Tetsuo 2009 A Schema of Japanese Interpersonal Relationships: An Analysis Using the Personal Attitude Construct Method. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 34(*special edition*), *65-71.*

【原著】

中国人日本語学習者の日本語による謝罪への違和感
- PAC 分析を通して -

李嘉隆

1 はじめに

謝罪は，人間関係を維持するために実質的な罪を緩和する修復作業である（Goffman, 1971）。そして，謝罪はそれを行う話者の潜在的な価値観，ビリーフが反映されるため，異なる言語を母語とする話者の間においてその差異が見られる（清水，2009）。

中国語を母語とする筆者は，母国で数年間日本語教育を受けて来日したが，日本の謝罪行為に大きな違和感を抱いていた時期がある。また，筆者がうまく謝罪できなかったため，アルバイト先の日本人の上司からの叱責も経験したことがある。こういったことが生じる原因の一つとして，日本語の謝罪と中国語の謝罪はかなり異なることが考えられる。その相違点の一つを例として挙げると，中国語の謝罪で使用される相手との良好な関係を示すための「冗談」や「親しさへの言及」などのストラテジーは，日本語の謝罪では用いられない（王，2011）ことが従来の研究で観察されている。このような日中両言語間の謝罪の異同を明らかにするための研究は異文化間語用論（Intercultural Pragmatics），及び中間言語語用論（Interlanguage Pragmatics）などの分野において盛んに行われてきた。しかしながら，これらの研究によって膨大な知見が蓄積されたにもかかわらず，言語使用者，とりわけ第二言語としての日本語（JSL:Japanese as a Second Language）を学ぶ中国人学習者 [1]（以下中国人学習者）がどのように目標言語の謝罪を捉えるかについて未だに不明な点が多い。

近年，言語の使用実態のみならず，第二言語学習者の視点に立ち，彼らの異文化における言語行為に対する理解の仕方を明らかにすることの重要性が説かれている（Kotani, 2016;ランブクピティヤ・内藤，2020; Tajeddin,Alemi&Razzaghi, 2014）。このことから，第二言語学習者の異文化への理解を深めるために，彼らが目標言語の謝罪をどのように捉えているかを解明することは重要な課題となり，多言語話者の間の友好な関係の構築にもつながると考えられる。しかし，現状では，中国人学習者がいかに日本語による謝罪を認識するかについてまだ十分に検討されているとは言い難い。さらに，謝罪の言語的な要素に注目している研究は多いが，非言語コミュニケーションの要素を含めて謝罪行為の全体像を把握する研究は少ない。

以上のような背景を踏まえて本研究では，日本に在住している一人の中国人学習者を対象に，彼が実生活の中で経験した日本語による謝罪に対していかなる違和感を持っているかを探索的に考察し，違和感の生じる原因を分析した。

2 先行研究

日本語と中国語の謝罪に関する研究は，具体的な謝罪の慣用表現を分析した研究（陳，2012;金田一，1987; 佐久間，1983）のみならず，両言語話者による謝罪発話を分析した研究も数多くなされている。

日本語と中国語の典型的な謝罪の慣用表現として，中国語の「対不起」と日本語の「すみません」が挙げられる。高橋（2011）は先行研究を概観し，日本語では謝罪，感謝，依頼，呼びかけなど多様な場面で「すみません」が使用されるが，中国語の「対不起」はこのような多義性を有せず，謝罪場面しか用いられないことを指摘している。

一方，日中両言語話者による謝罪発話の間に差異が大きいことが従来の研究によって示唆される（ボイクマン・宇佐美，2005; 趙，2012; 王，2011; 李，2018; 李，2021; 佐竹，2005）。例えば，日本語の謝罪では「すみません」のような謝罪の慣用表現が重要なストラテジーとして頻繁に使用される（ボイクマン・宇佐美，2005; 池田，1993; 王，2011）が，中国語の謝罪は謝罪の慣用表現を必ず使用しなくても依然として成立する（李，2018; 鄭，2006）ことが報告されている。

このように，これまでの日中の謝罪に関する研究は謝罪の慣用表現の機能並びに異文化間の話者の謝罪発話の比較に重点を置き，特に後者は量的研究によって対照的に言語運用の実態を考察するものが多い。その一方で，日本語の謝罪に対する認識に注目した上での中国人学習者の視点からの考察は多く行

われていない[2]。しかし，言語習得過程に様々な要因が複雑に関わっていることが従来の研究において指摘され（Brown,2000; 林，2006; 渋谷，2001），異文化に対する態度が言語習得と深く関わることが解明されている（Schumann, 1986）。そのため，第二言語学習者がどのように目標言語による発話行為を捉えるかは当該行為の習得とも密接に関連しており，検討対象とすべきであると考える。

以上を踏まえ，本研究では中国人学習者の抱える日本語による謝罪行為に対する違和感とはどのようなものかについて考察し，さらに違和感が生じる背景を明らかにすることを目的とする。

この目的を実現するために，PAC分析は有効であると考える。PAC 分析（個人別態度構造分析;Analysis of Personal Attitude Construct）とは，内藤が個人の態度やイメージの構造を分析するために開発した手法である。内藤（2002）によれば，PAC分析は，従来の集団的研究法と比べ，少数の事例の場合でも「要因やメカニズムを発見する可能性」があり，操作的，統計学的手法と間主観的，事例記述的手法の両方の性質を有する。本研究では，中国人学習者の日本語の謝罪に対する個人の違和感へ注目して考察するため，個人の主観的特徴を探索するPAC 分析の技法が適切であると考え，採用することとした。

3 方法

3.1 被験者

本研究の被験者は理系の男性中国人留学生W（26歳）であり，彼は9年の日本語学習歴を有する日本語上級学習者である。調査時点においては，Wは日本の大学院の博士課程1年生であった。

Wの留学歴が長く（4年半），日本語母語話者の言動へ触れるチャンスが多かったと推測される。そして，アルバイト先，大学研究室，サークル，民間奨学財団などで，性別，年齢層，職業，社会的地位の異なる日本人と頻繁に接触バリエーション豊富な謝罪場面に遭遇し，異文化と自文化の差異への気づきも促され，日本語による謝罪への違和感を抱えていると推測される。

3.2 倫理的配慮と調査方法

被験者Wに対して，口頭で実験について詳細な説明を施し，研究内容が記載されているファイルを送った。そして，個人を特定できる情報を削除したうえで，研究の結果を論文として投稿することの旨を伝え，了承を得た。また，インタビューにおいては，話したくないことは話さなくて結構であること，いつでも中断できること，中断しても何ら不利益は無いことを伝えて，承諾を得てから実施した。

なお，調査を実施する時点まで，Wに自分の研究内容について告げたことがない。実験では，自分の考えたこと，思ったことを素直に述べるよう依頼した。

連想刺激文は，本研究と同様に外国人を対象に日本語のある種の表現への違和感を調査しているランブクピティヤ・内藤（2020）の刺激文の内容を参考にし，日本語と中国語の二種類のものを作成した。また，謝罪は実質的な謝罪行為と謝罪の定型表現の使用という 2 つの側面がある（熊谷，1993）。本研究ではその両方を取りあげたいため，刺激文において「謝罪行為や謝罪表現の使用」という表現を用いて表すこととした[3]。

＜刺激文（日本語版）＞：

「あなたは，日常生活における日本人との接触，もしくは自分の観察を通して，日本語による謝罪行為や謝罪表現の使用に対して不自然だと感じたり，違和感が生じたりすることがありますか。そのように感じるのは，どのような場面や状況だと思いますか。また，不自然さや違和感を覚えた時にどんなイメージが頭に浮かび上がりますか。そして，それらを解消するためにはどのようにしたら良いと感じますか？頭に浮かんできたイメージや言葉を，キーワードまたはフレーズや文の形で，思い浮かんだ順に「自由連想語（文）」のところにご入力ください。」

刺激文はやや長いため，読みあげの速度を落とし，被験者自身に刺激文を理解するための時間も十分に設けた。調査は 2023 年 4 月に，実験者である筆者と被験者 W という一対一の形で Zoom 上[4]で行った。データ収集に土田が開発した PAC-Assist2 を用い，クラスター分析（ウォード法）には R を用いた。PAC-Assist の Zoom 上での使用法は土田（2021）を参考にした。手続きの詳細は，以下の通りである。

(1) 刺激文に対する自由連想と重要度判定

画面共有で刺激文を提示し，リモートコントロールを活用しながら被験者に自由連想の項目と重要度

などを記入してもらった。使用言語に制限を設けず，被験者は母語である中国語で記入した。なお，連想していた間，Zoom の実験者のビデオ機能をオフにした。

(2) 連想項目間の類似度評定

類似度評定について説明をしたうえで，被験者に項目間の類似度を評定するよう依頼した。評定のプロセスでは，Zoom の実験者のビデオ機能をオフにした。

(3) 類似度距離行列によるクラスター分析

実験者は，類似度評定によって得られたデータから分析ソフトRによりクラスター分析（ウォード法）を行いデンドログラムを作成した。

(4) 被験者によるイメージや解釈の報告

クラスター分析によって得たデンドログラムを被験者に見せながら中国語でゆったりとイメージや解釈を尋ねた。また，実験者は適宜 Zoom の注釈機能を利用し，クラスターの塊を視覚的に明示した。加えて，被験者の内界を探索する流れを中断させるのを避けるために，実験者による発話を控え，確認したいことがある場合は被験者の発話が一段落した時点に問いかけるようにした。

4. 結果

デンドログラムの結果は Fig.1 に示す。各連想項目の左側の数値は重要順位であり，右側の（ ）の符号は単独でのイメージを表す。

【被験者によるイメージ報告】

全ての会話は被験者と実験者の母語である中国語で行い，被験者の許可を得たうえで録画した。そして，筆者がイメージ報告のデータを文字化して日本語に翻訳した。

イメージ報告の中の（Q:…）は実験者の質問を示し，「」の中の内容は被験者の発話を示す。非言語コミュニケーションの要素を【】の中に入れて表示する。また，イメージ報告において，中国に関する文化スキーマを持っていない読み手にとって理解しにくいと想定される箇所に注釈で補足説明を加えた。

第１クラスター：

（Q:それではこのデンドログラムをご覧ください。上から見て，［相手によって謝罪が異なる］，［書き言葉の謝罪は話し言葉と異なる］，［謝罪はあまりにも定型化，特にメールの場合］の３項目が１つのグループにまとまっているようですが，これらのグループからどんなイメージが浮かんできますか。またどんな内容でまとまっていると感じてくるでしょうか。）[5]

「相手の社会的地位によって謝罪が変わる。例えば友達に謝罪する場合の表現と目上の人に謝罪する場合の表現と全く違う。同じ遅刻の場合，友達に『ごめんね』とかを言う。先生との約束をキャンセルす

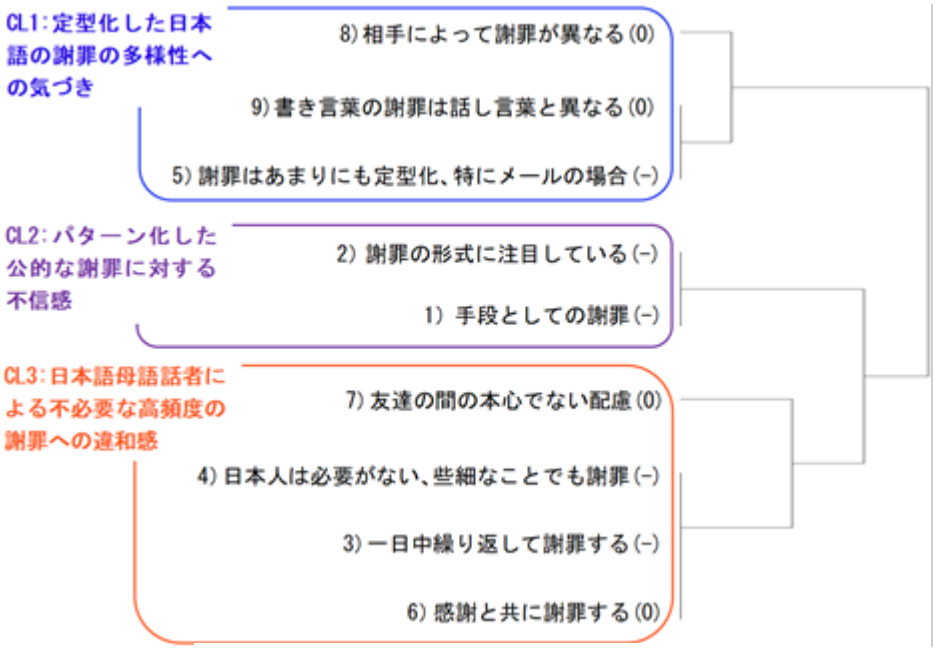


Fig.1　被験者 W のデンドログラム

る場合，詳細に説明して丁寧に謝罪しないといけない。例えば,『多大なご迷惑をおかけしまして，申し訳ございません』とか,かなり改まった表現を使う。目上の人には丁寧であれば丁寧であるほどいい。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「うん，以前クレジットカードを申請して拒否された。銀行の人が，簡潔に説明したのではなく，ものすごく時間をかけて説明して，結局申請を断ったんだ。単刀直入に申請拒否であることを説明していなくて，とても婉曲だった。もちろんその時は銀行の人がいろんな表現で謝罪していた。話し言葉でさえこんなに複雑なのに,書き言葉はもっと複雑になる。特に，メールの場合は，ネットで検索したら出てくるはずだけど，決まり文句が多い。なので，謝罪のメールを書く時に従わなければならないルールが多い。ちょっと煩わしいと思った【笑】」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「話し言葉の謝罪なら，ジェスチャーが伴う点に特徴がある。普段は謝罪とともにお辞儀や会釈とかするので，最初来た時にそれを見てびっくりした。お辞儀しながら謝罪するなんてテレビでしか見たことがなかったため，びっくりした。そこまでやらなくてもいいなと思った。私にとっては，大げさな謝罪だ。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「ないね。」

（Q:このクラスターについて，どんな内容でまとまっていると感じてくるでしょうか。）

「相手の地位によって，謝罪の仕方や表現がたくさんある。ただし，どのような状況でも定められているパターンに当てはめて謝罪する。特にメールの場合は決まり文句のように定着している。」

第 2 クラスター：

「これは何か大きなミスを起こした時の謝罪を指す。その時記者会見を開いて，みんなの前で大げさな謝罪をするじゃないか。まあ，ひたすら謝罪して，実質的な補償がない場合もあるね。謝罪自体が重要視され，謝罪を通して何か改善できるかが結局わからないままで済む。コロナ禍でミスを起こして，責任者がみんなの前で謝罪したが，もしかしたら責任を逃れるための手段かもしれない。」

（Q:コロナ禍で起こしたミスというのは？）

「ワクチンをうまく冷蔵保存できず，かなりの数を廃棄してしまったことがあった。記者会見の時，責任者がお辞儀をして謝罪した。謝罪のパターンとして定着している。お辞儀して謝罪する。それは，真剣に反省しているようにみんなに見せるための手段だと思うね。何かを解決できればいいのに，まず解決に注目してほしい。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「ないね。」

第 3 クラスター：

「友達の間でも頻繁に謝罪する。正直，僕にとっては意味がわからない謝罪が多い。友達なら親しい関係なのに，頻繁に謝罪するというのはあえて距離を隔てる行為だと思うね。それはいまだによく理解できない。友達ならお世辞が要らないもんね。たとえ私が日本人の友達ができても，頻繁に謝罪できないかもしれない。もちろん，本当に何か悪いことをしたら絶対謝罪するけど，普段は口癖のように頻繁に謝罪しないタイプなんだ。後は，日本人はいつも『すみません』を言っている。他人の利益を侵害した場合はもちろんだが，自分の利益が誰かに侵害された場合まで使っている。電車で足を踏まれても，踏まれた人も『すみません』を言うかもしれない。で，もし他の人の足を踏んだら，その人に何回も『すみません』を言って謝罪する。これはまあまあ言うべきだと思うが，お礼を言う時にも謝罪することも見たことがある。バイト先の日本人はよくそうする。しかも，当たり前のこと，上司が配分した業務を完了しただけで，私は部下で相手が上司なのに，私に感謝するとともに謝罪の表現も言う。すごいと思った。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「謝罪の頻度が高い。些細なことでも謝罪するので，頻度が高くなるわけね。私がバイト先でよく見たのは，店員が何かミスを起こしたら，まず謝って，その後問題解決を講じること。お客様のために何かをするなら，まず問題解決じゃない？問題解決できなければ結局お客様にとって損するので，私だったら先に問題解決に注目する。謝罪の頻度が高すぎるから，謝罪は大切なことじゃなくなる可能性がある。謝罪しても申し訳ないと思わない可能性がある。とりあえず謝罪すればいいことになってしまう。なの

で，一日中繰り返して謝罪する。謝罪して済むことが多いので，みんなよく謝罪する。これは中国と異なる。中国は日本と比べて謝罪の頻度が低いね。些細なことなら『Sorry』[6] を言って済むことが多い。『対不起』まで使わなくってもいい。ひどいことじゃない限り，ちょっとだけのミスなら，そっけなく言って済ませることが多い。もちろん何回も謝罪しなくてもいいし,場合によって謝罪しなくてもいい。だから私もよく『対不起』の代わりに『Sorry』とか言って謝罪するね。」

（Q:『Sorry』は中国語の『対不起』より軽い謝罪表現ですよね。）

「そうそう。中国語の『対不起』を言わなくてもいい。特に友達に『対不起』を言うのが恥ずかしい。適当に『Sorry』を言って済ませるんだ。相手にとっても負担がなく,友達に謝罪する時にぴったりだね。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「他はないね。」

【クラスター間の比較と全体について】

第１クラスターと第２クラスター：

（Q:今度は第１クラスター［相手によって謝罪が異なる］,［書き言葉の謝罪は話し言葉と異なる］,［謝罪はあまりにも定型化，特にメールの場合］と，第２クラスター［謝罪の形式に注目している］,［手段としての謝罪］とを比べてみてください。どんなところが似ていて，どんなところが違っているでしょうか。比較してみてください。）

「似ているところは，どのような日本語の謝罪であっても定められた一定の形式があることだね。しかも，謝罪の形式が非常に重視され，相手によって，多様な謝罪の表現があって，ただ丁寧さが変わるだけで，中核は同じだと思う。要は，繰り返して謝罪することは一緒だと思う。違うところは，第１クラスターは日常生活の謝罪を指す。第２クラスターは個人じゃなくて，組織や集団の謝罪を指す。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「ない。」

第１クラスターと第３クラスター：

「この２つはともに日常生活の謝罪を指す。第１クラスターは種類が多いことに注目しているが，第３クラスターは頻度が高いことに注目している。私の自論だが，第１クラスターは文化の枠組みに依存して生じた文化だね。書き言葉，話し言葉などの謝罪の表現だね。で，第３クラスターはこういう文化の枠組みの中の人の行為が表現されている。謝罪の表現は今まで発展してきたと思う。様々な場面や行為で頻繁に使用される必要があるため，謝罪表現の種類もそれなりに多い。つまり，相互に補い合って成し遂げてきたかもしれない。ただし，種類が多くて頻度が高いが，申し訳ない気持ちがあるかどうかが読み取れない場合がある。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「ないね。」

第２クラスターと第３クラスター：

「日本人は小さい頃から知らず知らずのうちにこういう謝罪の文化に感化されてきたんだと思う。大きなことであっても小さなことであっても，とにかく謝罪する。慣習になっているかもしれない。慣習にしたがって形式上の謝罪をするので，謝罪の頻度もそれなりに高くなると思う。ただし，第３クラスターは日常生活の謝罪を指す。日常生活において些細なことであっても謝罪の意思が強い。第２クラスターは，公の場の謝罪を指す。責任を逃れるためのストラテジーとして謝罪が使用されている。形式だけの謝罪になっている。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「特にない。」

クラスターの全体について：

（Q:今度は，３つのクラスターの全体を見た時にどんなイメージが浮かんでくるでしょうか。）

「日本語の謝罪は様々な種類があって，日本人も頻繁に謝罪する。ただし，謝罪を責任を逃れる手段として利用することもあり，かつ，必要がない時も謝罪するので，相手に向けた謝罪だが，相手のための謝罪じゃない。つまり，実質的なものが少ない。昔，アルバイト先で日本人の同僚と喧嘩したことある。工場で勤務していた時に，操作の流れが間違っていると先輩に指摘され,どんな操作か忘れたんだけど,私のやり方がだめって言われた。ほかの人もそういうことをずっとやっていたので，私は他人を真似しただけだと説明したが，ものすごく怒られた。その後,別の日本人の社員が,何かあったらひたすら『すみません』を言えばいい，無駄なことを言うな，何を言っても弁解としてしか見なされないというふう

に教えてくれた。理由を説明すればもっと言い訳っぽく聞こえるから【笑】。納得のいかないところもあるけど，どうも日本ではこれがルールになっている【笑】。」

（Q:納得のいかないところというのは？）

「こっちが正当な理由があっても先に謝罪することに対してちょっと納得ができないな。ちゃんと正当な理由を説明したいけど，二度と喧嘩したくないので，その後は私も『すみません』ばかり言うようになった【笑】。」

（Q:他にはどうでしょうか。）

「特にない。」

【総合解釈】

第１クラスターは，日本語による謝罪のバラエティに注目して連想していると言える。被験者は文語と口語の差異，及び相手との関係によって謝罪の仕方が変化することへの理解を示している。しかし，これだけ多様な謝罪の存在を知覚しているが，被験者は「どのような状況でも定められているパターンに当てはめて謝罪する」と総括していた。すなわち，多様性を備えつつも，本質的には変わらないという考えから日本語の謝罪を捉えているように見える。これらのことから，第３クラスターの名称として【定型化した日本語の謝罪の多様性への気づき】を採用することができよう。

第２クラスターは，被験者の語りにも示されている通り，日常的な謝罪ではなく，公的な謝罪を指す項目によって構成される。そして，W はこのようなお辞儀をしながらの謝罪を責任逃避のための手段であると見なしている。謝罪より実際の問題解決が重視されている中国の謝罪文化（李，2018; 佐竹，2005; 鄭，2006）に馴染む被験者は，日本滞在時にメディアでパターン化した公的な謝罪を見聞し，それに対してある種の不信感を抱いたようである。そのため，このクラスターを【パターン化した公的な謝罪に対する不信感】と命名する。

第３クラスターには，日本語母語話者の謝罪行為の頻度と必要性に関する項目が属することになった。頻度について，被験者は日本語母語話者がいつも謝罪しているという印象を受けている。W は友人との交際で頻繁に交わる謝罪表現と感謝時の謝罪表現の使用がお世辞であると判断している。特に，友人間での頻繁の謝罪について「友達なら親しい関係なのに，頻繁に謝罪するというのはあえて距離を隔てる行為だ」，「よく理解できない」と評価しており，違和感を大いに抱いていることが読み取れる。そして，他人の足を踏んだという具体例を提示し，日本語母語話者がその場で繰り返して謝罪すると述べている。これは，本来の謝罪の受け手である被害者も謝罪することへの言及であり，日本語の本末転倒の謝罪表現の使い方まで察知していることがわかった。また，頻繁に謝罪する人の心境として，被験者は「謝罪しても申し訳ないと思わない」と推測している。さらに，被験者は自分の母国である中国の謝罪を連想しており，「Sorry」という非定型表現を用いてそっけなく済ませる中国の謝罪と改まりの度合いが高い日本語の謝罪を鮮やかな対比として思い浮かべ，違和感を覚えてきた。ここでは，被験者が頻度と必要性に注目し，必要がないことまでも謝罪するから頻度がそれなりに上がり，高頻度のために謝罪する人は罪悪感を感じなくなり，必要がないことまで謝罪するという密接かつ相補的な関係で両者を捉えているといえよう。したがって，第３クラスターを【日本語母語話者による不必要な高頻度の謝罪への違和感】と名付けるとする。

また，各項目に対するイメージはマイナスとゼロしか見られない。しかも，重要順位の前五位の項目に対してすべてマイナスなイメージを持っている。よって，全体として自己疎隔的傾向があると推測される。

クラスター間の比較を通して，第２クラスターは公的な謝罪に対する違和感を指すのに対し，第１と第３クラスターの項目はともに日常的な謝罪を意味するが，着眼点が異なることがわかった。具体的に，第１と第３はそれぞれ日本語の謝罪文化と日本語母語話者による謝罪行為という２つの側面に注目しているという。さらに，3 つのクラスターの全体に対するイメージを尋ねたところ，これらの違和感が日本語の謝罪の不必要かつ高頻度，パターン化，形式に重点に置くという三点にまとめられることがわかった。このように，被験者の着眼点が多角的であるものの，異なる違和感の生じる原因が互いに絡み合う部分が多いと考えられる。以下では，これらの違和感の生じた原因とそれが異文化適応にどのような

影響を与えるかについて，被験者自身の経験を振り返りながら日中両国の文化背景の相違を視野に入れつつ考察する。

5. 総合考察

日常的な謝罪に対する違和感についての言及は第1クラスターと第3クラスターに集中している。熊谷（2013）に指摘しているように，日本語母語話者は相手のフェイスを守るために，あえて自分のフェイスを危険にさらして謝罪するという配慮の仕方が存在し，日本語の謝罪表現は摩擦を避けるための潤滑油のような機能を持つ。そのため，本来の謝罪場面に限らず，日本語の謝罪表現の使用域が拡張し，様々な場面で良好な対人関係を維持するために頻繁に用いられると考えられる。それに対して，「対不起」をはじめとする中国語の謝罪表現はそのような多義性を持たず，罪悪感を覚える加害者が許しを乞うためにしか使用されない（高橋，2011）。中国語の謝罪では，謝罪の表明よりは修復行動の部分が重要視されている（鄭，2006）。したがって，日中両言語話者の謝罪における配慮の仕方が異なる。どのような状況において謝罪表現をすべきかについて，両言語話者の認識に大きな差異があると推測される。日本語母語話者は，様々な場面や状況で謝罪表現を使用するうちに，感覚を付随しながらその使用方法を徐々に習得していく。一方，Wが日本語の謝罪表現を中国語の謝罪表現として理解し続けるにつれ，次第に日本語による謝罪に対して不必要，高頻度，実質的な意味がないなどの違和感を覚えていったと考えられる。

次に，公的な謝罪と日常的な謝罪の両方についての語りに共通して見られるのは，Wが日本語の謝罪に定められた一連のパターンがあると感じているようなことである。そして，このような一連のパターンがある謝罪について述べた際に，必ず「お辞儀して謝罪する」「普段は謝罪とともにお辞儀や会釈とかする」のような非言語的コミュニケーションによる行動も言及していた。被験者は長い間日本で生活してきており，多様な場面で直接的に日本語母語話者と接触し，もしくは間接的に日本語母語話者の言動を観察することによって，無意識のうちにこのような日本語の謝罪の言語及び非言語の所感が重層的に絡み合ってきており，その結果固定したイメージが形成していると推測される。それゆえ，多種多様な日本語の謝罪が存在していることに感知しているにもかかわらず，「変わるだけで，中核は同じだ」という語りからも提示されるように，日本語の謝罪は表面の形式のみ変化して根本的には変わらないという考え方が浮かんで見えた。また，従来の研究（李，2018；鄭，2006）でも示唆しているように，中国語の謝罪は慣用表現を必ず使用しなくても成立するとされる。そのような文化で成長してきたWの発言の通り，中国では非定型表現である英語の「Sorry」を言って冗談めかしながら簡単に謝罪しても場合によっては問題なく許される。この点においては，しきたりのような言語及び非言語の行動様式が要求される日本語の謝罪は，中国の謝罪と大いに異なると言える。そのため，パターン化した日本語の謝罪に対する違和感がさらに深まると推測される。

そして，Wは日本語の謝罪が形式に重点を置くと感じており，違和感を抱いていることがうかがえる。この点は前述したパターン化という特徴に深く関連していると考えられる。被験者は公的にも日常的にも形式が定められた日本語の謝罪について「責任を逃れるための手段」，「形式だけの謝罪」，「謝罪の形式が非常に重視され」と述べていた。また，「私だったら先に問題解決に注目する」という発言が見られ，W は謝罪の重点を効率的に問題を解決するところに置くべきだという根強いビリーフを持っていることが見てとれる。すなわち，被験者が形式に重点に置いた日本語の謝罪に対してマイナス的に捉え，謝罪の形式の重要性を察しても実生活で謝罪する際に依然として先に問題解決を図ると想定される。中国の謝罪では弁償などのストラテジーがしばしば使用される（李，2018；佐竹，2005）傾向が見られ，謝罪行為では問題解決が第一義的であるという文化スキーマが存在する（鄭，2006）。そういった社会文化の影響を受けているため，Wは日本語の謝罪が問題解決ではなく，謝罪の表明という形式に重点を置くことに違和感を覚えていると推察される。

また，被験者は最後に思い出した事例をより深く理解する必要があると考える。被験者によれば，彼は不愉快な揉め事の経験を通して，理由を言わず「すみません」のみを言う日本式の謝罪の仕方を身につけたという[7]。ただし，この経験について語ってい

た際に何回も笑った。筆者の観察によると，ここの【笑い】は単純に面白いから笑ったというわけではなく，むしろ苦笑に近いものであると感じている。被験者は「納得のいかない」まま，日本式の謝罪をできるようになっているが，未だに違和感を抱いているということが見てとれる。このことから，日本式の謝罪の仕方を習得しているように見えても必ずしもそれに対する違和感を覚えないとは限らないことが示唆される。

Berry（1997）は，異文化へ移行した後，異文化と自文化に対する態度を基準として，「離脱／分離 Separation/Segregation」「同化 Assimilation」「周縁化 Marginalization」「統合 Integration」という 4 つの文化変容の方略を定義している。この中で，自文化を保ちながら異文化へ溶け込むという「統合」が一番求められる方略である（井上，2001）。本研究の被験者 W は，日本語の謝罪に対する違和感を覚え，マイナス的に捉えることが多いため，未だに統合的アイデンティティへ変容していないと言えるのであろう。さらに，揉め事を避けるために，日本語の謝罪に対する違和感を抱いたままで，やむを得ず日本式の謝罪で行動化するということがうかがえるため，彼が日本社会に溶け込んでおらず，むしろ異文化の世界に身をまかせるような無力感さえ感じていると推測される。

謝罪のみならず，ほかの日本式の行動様式や表現の使い方に対する違和感も積み重ねると，やがて周縁化（自文化中心）の状態になる可能性があり，異文化へうまく適応できないのであろう。とりわけ，謝罪のような日中の間に大きな差異が見られる行為について，現実生活における日本語母語話者との接触経験の蓄積が重要であるが，長年にわたって自文化との差異に気づいてきているにもかかわらず，日本式の謝罪が存在する理由が依然として判然としない可能性が大きい。そのため，日本語教育の立場から，謝罪の方法を教える段階にとどまらず，日本の社会的文脈における謝罪の機能，並びにその重要性を学習者に気づかせることが言語の習得と異文化への適応の一助となると考えられる。その一方で，コミュニケーションは双方向の行為であるため，相互理解の増進を促すために，日本社会の古参者である日本人は新参者としての外国人生活者と接する際に，相手文化と自文化との差異を尊重し，可能な限り柔軟に自分の行動様式を調整する姿勢をとることが望ましい。このように，多文化共生社会の構築は日本人と外国人の両方の努力が欠かせない。

6.おわりに

本研究では，中国人学習者を対象に PAC 分析を行い，日本語の謝罪に対する違和感を考察した。その際, 中国人学習者の違和感とはどのようなものか, 違和感が生じた背後にはいかなる原因が潜んでいるかを論じることができた。本稿で一貫して述べてきたように，現時点ではこれらの違和感を抱いていることが被験者 W の異文化適応のプロセスにマイナスの影響を与えている可能性が大きい。異文化である限りそれを受容する過程においては違和感を覚えないことは不可能であるため，筆者はそれを完全に避けるべきであるということを主張したいわけではない。ところが，W のような学習者は長期間にわたって日本文化に触れつつあり，すでに固有印象を形成している可能性があるため，必要に応じて周囲から適切な支援を行うことも検討すべきなのではないかと考えられる。

また，PAC 分析という研究手法について，本研究ではそれを使用したことが以下の 2 点において顕著な貢献を果たしたと考えられる。第一に，言語と非言語的な要素の両方を含めた謝罪の全体像に対するイメージを具象的に再現し，実生活の謝罪行為を感じ取った際の注目点という暗黙裡に潜在する観点を読み取ることを可能にさせる点である。第二に，従来の謝罪の産出実態に注目している研究で見逃している当事者の態度を忠実に捉えられる点である。PAC 分析による検討を通して，学習者が日本式の行動様式でコミュニケーションをとるように見えても，安易に異文化へ適応したことと同等に見なさず，当事者である学習者に視点を据えて彼らの認識を明らかにすることの重要性を確認できた。それはたとえを用いると，氷山の水面に浮かび出ている部分を観測できても，それは一角のみであり，水面下に隠れている部分の比重も大きく，重要な意義を持つことと類似する。本研究では，「個」へ向けて豊饒な内心内面の世界を念入りに吟味する PAC 分析は学習者の異文化の言語運用に対する認識の解明に資する手法であることが改めて確認できた。

なお，本研究は事例研究として一人の男性中国人学習者のみを調査したため，このような違和感がほかの事例に当てはまるかどうかを検証していない。よって，被験者 W と同様及び相違な背景を持つ学習者を対象に，日本語の謝罪行為に対する認識を調査し続け，違和感の多様性と普遍性を把握する必要がある。また，5 節でも述べたとおり，コミュニケーションは双方向行為であり，意思疎通のために相互理解が不可欠である。それにより，逆の立場に立って考えれば，日本語母語話者は日本語学習者の謝罪に対してどのような印象，態度を持つかを解明することも重要な意義を有する。これらについて考察を深めていくことを今後の課題としたい。

注

1. 日本語教育学では，日本で日本語を学ぶ学習者を「第二言語としての日本語（Japanese as a Second Language）を学ぶ学習者（JSL 学習者）」と呼び，日本語が使用されていない海外の国・地域で日本語を学ぶ学習者を「外国語としての日本語（Japanese as a Foreign Language）を学ぶ学習者（JFL 学習者）」と呼ぶ。

2. 管見の限りは，鄭（2006）しかない。しかし，鄭（2006）は発話行為理論（Speech Act Theory）という既存の概念的枠組みに基づいて，日中両言語話者が謝罪行為における重要視している要素の差異を検討したが，当事者である調査協力者の謝罪に対する認識を深く掘り下げていない。

3.「謝罪表現の使用」とは，謝罪のみならず，ほかの行為でも見られる謝罪表現の使用のことを指す。調査時に，被験者に「謝罪行為と謝罪表現の使用」の区別について口頭で説明を行った。

4. 今野（2021）は，PAC 分析の被験者が対面実施と遠隔実施の差異をさほど感じていないことを報告している。それに加え，本稿の被験者と筆者が本来は知り合いであるため，遠隔実施による疎隔感がめったに感じないと想定され，Zoom 上において実施することとした。

5. 紙幅の関係で，以下では，最初の質問の内容を省略した。

6. 2019 年 12 月，中国の某有名なアナウンサーはある大きな授賞式で受賞者である名俳優の名前を言い間違えたミスを犯し，本人に注意されたところ軽く「Sorry」と言ったことが中国国内で大炎上し，大きな話題となった。中国でもこのような状況においては正式な中国語による謝罪が求められているが，この事例からマスコミ関係者まで「Sorry」を使用していることが伺え，どれほど「Sorry」がという表現が中国語の謝罪に浸透しているかが示される。

7. 先述した「私だったら先に問題解決に注目する」という発言がここの言及とやや矛盾しているように見えるが，一般の謝罪と揉め事を避けるための謝罪という区別があると考えられる。つまり，揉め事にならない限りは，謝罪ではなくて先に問題解決を図ると想定される。

謝辞

本研究は，JST 及び名古屋大学による名古屋大学融合フロンティアフェローシップの支援を受けたものです。この場を借りて御礼申し上げます。

引用文献

Berry,J.W.(1997). Immigration,acculturation, and adaptation. Applied psychology, 46(1), 5-34.

ボイクマン 総子・宇佐美 洋（2005）. 友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策 ——日本語母語話者と中国語母語話者の比較—— 語用論研究，7, 31-44.

Brown,H.D.(2000). Principles of language learning and teaching.(4th ed.).White Plains,NY: Pearson Education.

陳 臻渝（2012）.「すみません」と「対不起」の使用条件の対照分析 言語文化学研究，7, 45-61.

趙 翻（2012）. 日本語と中国語における謝罪表現の対照研究——家族と親友間の異なりに注目して— 東洋大学大学院紀要，49, 124-98.

Goffman,E.(1971). Relations in public: microstudies of the public order.New York,Basic Books.

林 さとこ（2006）. 第二言語習得研究から見た第二言語学習／習得の個別性 津田塾大学言語文化研究所言語学習の個別性研究グループ（編）第二言語学習と個別性－ ことばを学ぶ一人ひとりを理解する—（pp.48 - 58）春風社

池田 理恵子（1993）．謝罪の対照研究:日米対照研究 —face という視点からの一考察— 日本語学，12（12），13 - 21.

井上 孝代（2001）．留学生の異文化間心理学 —文化受容と援助の視点から— 玉川大学出版部

金田一 秀穂（1987）．お礼とお詫びの言葉 言語，16（4）,75-82.

Kotani,M.(2016).Two Codes for Remedying Problematic Situations: Japanese and English Speakers' Views of Explanations and Apologies in the United States. Journal of Intercultural Communication Research, 45(2), 1 26-144.

今野 博信（2021）．対面と遠隔の PAC 分析体験の比較から —一人の調査協力者が両タイプの PAC 分析を体験した記録— PAC 分析研究，5，74-75.

熊谷 智子（1993）．研究対象としての謝罪 —いくつかの切り口について—日本語学，12（12），4-12.

熊谷 智子（2013）．日本語の「謝罪」をめぐるフェイスワーク —言語行動の対照研究から— 東北女子大学比較文学研究所紀要，74，21-36.

内藤 哲雄（2002）．PAC 分析実施法入門 —「個」を科学する新技法への招待— ナカニシヤ出版

王 源(2011)．コミュニケーションにおける中日の謝罪行動の比較 学苑出版社

ランブクピティヤ, S.M.D.T.・内藤 哲雄（2020）．シンハラ語母語話者の，日本語「感謝表現」 への違和感と適応 —PAC 分析から示唆された感謝表現の文化差と適応過程— PAC 分析研究，4，10-26.

李 竺楠（2018）．家庭内における日中の謝罪言語行動 —ホームドラマの謝罪談話の分析— 地域政策科学研究，15，117-140.

李 嘉隆（2021）．中国人日本語学習者の謝罪に見られる方策使用の特徴 日本語用論学会第 23 回大会発表論文集，16，113 - 120.

佐久間 勝彦（1983）．感謝と詫び 水谷 修（編）話しことばの表現講座 —日本語の表現 3—（pp.54-66） 筑摩書房

佐竹 千草（2005）．日中語「謝罪」に関する一考察 —母語話者の意識調査を通じて— 聖心女子大学大学院論集，27（1），182-159.

Schumann,J.H.(1986). Research on the acculturation model for second language acquisition, Journal of multilingual and multicultural development, 7, 379-392.

渋谷 勝己（2001）．習得研究の過去と未来 —習得の仕方を調べるといろいろなことが分かる— 野田 尚史・迫田 久美子・渋谷 勝己・小林 典子（共著）日本語学習者の文法習得（pp.213 - 227）大修館書店

清水 崇文（2009）．中間言語語用論概論 スリーエーネットワーク

高橋 優子（2011）．これまでの日中の「謝罪」表現研究の問題点と今後の課題 文化外国語専門学校紀要，25，1-8.

Tajeddin,Z.,Alemi,M.,&Razzaghi,S.(2014) . Cross-cultural perception of impoliteness by native English speakers and EFL learners: The case of apology speech act. Journal of Intercultural Communication Research, 43, 304-326.

鄭 加禎（2006）．謝罪行為における差異 —日本語母語話者と中国語母語話者の事例研究 —アジア社会文化研究，7，57-73.

土田 義郎（2017）． PAC-Assist2 Retrieved February 14, 2022 from https://wwwr.kanazawa-it.ac.jp /~tsuchida/lecture/pac-assist.htm

土田 義郎（2021）．Zoom で使う PAC-Assist PAC 分析研究，5，76-77.

中国人日本語学習者の日本語による謝罪への違和感　-PAC 分析を通して-

Feelings of Incongruity with Apology in Japanese among Chinese Learners of Japanese：　Examination through PAC Analysis

【執筆者】

李 嘉隆　LI Jialong（名古屋大学大学院 人文学研究科）

【要旨】

本研究の目的は，中国人日本語学習者が日本語の謝罪行為に対してどのような違和感を抱いているかを明らかにすることである。具体的には，9 年の日本語学習歴を有する中国人日本語学習者 1 名を対象に，PAC 分析を使用して考察した。その結果，被験者が日本語の謝罪に対して，「パターン化」（CL2），「不必要且つ高頻度」（CL3），「定型化した日本語の謝罪の多様性」（CL1）というイメージを持ち，違和感を覚えていることがわかった。そして，全体的に日本語の謝罪をマイナス的に捉える傾向が強いことが観察された。そのため，不本意ながら日本式の謝罪で行動することがうかがえた。これらのことから，単に学習者自身の順応に委ねるのではなく，教育の現場で，日本の文化スキーマにおける謝罪の機能，並びにその重要性を学習者に気づかせることが大切であると考えられる。また，本研究を通して，PAC 分析は学習者の言語と非言語行為に対する態度を深く掘り下げる手法として非常に有効であることが確認できた。

This study is aimed to consider how Chinese learners of Japanese feel incongruent with apologies in Japanese. Specifically, PAC analysis was used to analyze one Chinese learner with a history of learning Japanese for 9 years. As a result, it was found that the Chinese learner felt incongruent because he had the impression of "Formalization" (Cluster2), "necessity and high frequency" (Cluster3), "variety of standardized Japanese apologies" (Cluster1) of the Japanese apology. There is a strong tendency to take Japanese apologies negatively as a whole. For that reason, it was suggested that he acted with a reluctant Japanese-style apology. Therefore, in the field of education, it should not just be left to the learner's adaptation, making learners aware of the function of apology and its importance in Japanese cultural schema is important. In addition, this study confirmed that PAC analysis is extremely effective as a method to delve into learners' attitudes toward language and non-verbal behavior.

【投稿受理日】　2022 年 11 月 7 日

【掲載決定日】　2024 年 3 月 21 日

【原著】

同職者同士の交流の場が地域コーディネーターに及ぼす影響

真田穣人・當房詠子・南雅則・佐々木聡

1 研究の背景と目的

学校の教育力の向上とともに，子どもが安心して暮らせる環境をつくりつつ，地域の活性化を図るために，コミュニティ・スクールの導入が進められている。コミュニティ・スクールとは，地域住民や保護者などから構成される学校運営協議会を設置した学校のことであり，そこでは学校と保護者，地域住民などが力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる（文部科学省，2024）。しかし，コミュニティ・スクール（以下，CS）の運営に関しては，教職員の関心の低さや保護者・地域住民の理解不足が依然課題としてあること，学校運営協議会委員や学校支援ボランティアの人材確保が難しいことが指摘されている（長畑，2015）。

そのような課題もある CS において，極めて大きな役割を担うことが求められているのが地域コーディネーター（以下，地域 CD）である。地域 CD とは，学校教育活動への教育支援人材や教育プログラム等の導入にあたり，学校と教育支援人材，あるいは教育支援人材間の連絡調整などを行い，実質的な運営を担う地域人材（スクール・アドバイス・ネットワーク，2013）である。公立小・中学校長の意識調査から学校と地域の連携・協働に係る今日的課題を分析した野村（2017）は，「児童生徒の発達段階や実態を理解し，『地域 CD』として活動を進めていく上での配慮事項への視点をもっていること」や「地域における教育資源への視野を広げネットワーク構築が必要であることを理解していること」など多くのことを，調査校 222 校のうちの９割以上の小・中学校長が地域 CD に対して求めていることを明らかにしている。また，学校における子ども・教員・保護者・地域住民等のつながりを調査した露口（2016）は，CS において，学校と家庭・地域の双方向性を高め，ソーシャルキャピタルを醸成するためには，新たな団体・集団の設置や，対話交流の機会を設ける「構造づくり」，協働的活動による課題解決を通しての互酬性規範（お互い様）を高める「活動づくり」，対話・交流関係の長中期化・継続化による信頼を高める「関係づくり」の３つの段階があり，これらの段階をスムーズに進めていく上で地域 CD が中心的な役割を果たすことを述べている。

このように，CS において，地域 CD には数多くの役割が求められている。しかし，地域 CD は，活動初期の関係づくりの困難さ，関係者の意識共有の困難さ，意識化しづらい子どもを中心とした CS 運営が課題となり，大きな負担を強いられている（真田・當房・南・佐々木，2023）。それにも関わらず，研修をはじめとする地域 CD 同士の交流の場が地域 CD にとって重要な意味をもつ可能性を真田他（2023）は指摘している。また八尾坂（2012）は，CS のキーパソンである地域 CD がその活動を促進するためにも，各学校の地域 CD 同士の連携を進めることが重要であると指摘している。CS の質的向上のためには，地域 CD の育成が欠かせない要件（長畑，2015）であり，そこに地域 CD 同士の交流や連携が欠かせない。しかし，地域 CD が同職者同士で，どのような交流や連携を行い，そこにどのような効果や影響があるのかを検討した研究は，取り上げた変数が限定的であるとともに希少である。

そこで，地域 CD 同士の交流の場において，どのような関わりが行われ，そこからどのような影響を互いが受けているのかについて明らかにすることを，本研究の目的とする。本研究の仮説について述べる。地域 CD は，研修や交流の場において同職者同士で情報交換を行い，情報的サポートや情緒的サポートを互いに行うことで，地域 CD としての資源を増幅させて CS の運営を促進させているであろう（仮説１）。一方，そのようなサポーティブな交流が得られない場合は，ディスエンパワーメントされるだろう（仮説 2）。

2 倫理的配慮

調査協力者には，回答をしたくないときは拒否できること，調査そのものもいつでも中止を要求できること，調査データは厳重に管理し，個人のプライバシーに配慮するとともに，学会や論文での発表等の研究目的のみに使用することを伝え，了解を得た。

3 方法

調査協力者：調査協力者は，X 市の地域 CD 経験者で研究の趣旨および参加に同意した，職業および委嘱校種の異なる 3 名（Table 1）。なお，X 市地域コーディネーターの研修は，X 市教育委員会によって，計画運営されていた。年に 2～4 回の悉皆研修と同数程度の自由参加研修で構成されていた。

Table 1 調査協力者の概要

調査協力者	A	B	C
性別	女性	女性	女性
年齢（地域CD経験最終年次）	40代前半	50代後半	50代後半
経験年数	9年	6年	9年
職業	大学教員（非常勤）	パートタイマー	専業主婦
委嘱校種	小学校	小学校	中学校
委嘱条件	月に10時間程度		

手続き：連想刺激として，以下のような刺激文を提示するとともに，口頭で読み上げた。

「あなたは，地域 CD として，CD 同士の交流の場で，どのようなことを感じていましたか。また，CD 同士の交流の場でどのようなことを求めていましたか。CD 同士の交流は，どのような効果や影響があったと感じていますか。頭に浮かんだ文章やイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

ついで，内藤（2002）の PAC 分析の実施法に沿って面接を 2 分割した。まず用意したカードに連想内容を記入させた後，重要だと感じられた順に番号を調査協力者に記入させた。次に項目間の類似度距離行列を作成するために，1：「非常に近い」～7：「非常に遠い」の 7 段階尺度で評定させた。そして，作成された類似度距離行列に基づき，ウォード法でクラスター分析を行った（Figure 1，2，3）。第 2 回目の面接では，連想項目が記入されたデンドログラムを調査協力者に渡し，調査協力者がクラスターとして解釈できそうな群ごとに項目を調査者が読み上げ，群全体から連想されるイメージやそれぞれの項目が併合された理由として感じられるものについて質問した。その後，群間比較させてイメージや解釈の異同を聴いた。この後さらに，デンドログラム全体のイメージや解釈について報告させた。また，各連想項目単独でのイメージがプラス，マイナス，どちらともいえない (0) のいずれに該当するのかを回答させた。

使用分析ソフト：デンドログラム析出のための統計ソフトは HALWIN を使用した。

聴取期間：2023 年 6 月～9 月にデンドログラム抽出までと，イメージ解釈の 2 日間に分けて聴取した。

4 結果と考察

【調査協力者 A の結果】

＜調査協力者 A によるクラスターの解釈：抜粋＞

クラスター1 は，「多数の同職者の存在を実感できた安堵感」[1] から「CD によって，得意不得意がある」までの 11 項目で構成される。以下に，調査協力者が述べたクラスターに対する解釈を抜粋して示す。つながれた安心感。他の CD と話せたことで自分の役割がわかったし，他の方の実践がよくわかったので，あたたかい場でした。CD 同士の交流がもてたことで，それぞれの学校での活動の幅が広がった。

クラスター2 は，「様々な立場，背景の CD」と「CD 業務以外でも関わることができた」の 2 項目で構成される。様々な立場，背景の CD がいるんだということ。自分自身が校区に住んでいるわけでないのに CD をしていること，別の仕事をしていて，そっちもしつつ小学校にも行くということが特殊と思っていたけど，研修に行くといろんな方が CD に選出されていることがわかって。その方たちと，学校とは関係なく CD とは違う関わりをもてたことがあった。

クラスター3 は，「失敗事例や，活動や業務上の注意点を知ることができる」から「市教育委員会担当者によって異なる充実度」までの 5 項目で構成される。担当者の人によって，研修のやり方が変わったり，いろいろ様々変わったりするところがありました。最初の年度に担当されていた担当の方が，CD が集まりやすい場を設けてくださったことや関係づくりしやすいようにファシリテートしてくださったことが，後々見学ができる環境につながっていった。

クラスター4 は，「講演会よりも連絡会」から「近い地域の CD が集まることによる実践的な話し合い」までの 3 項目から成る。講演型の研修と，自分たちの実践を持ち寄る連絡会という研修があるけど。講演会は忙しくて行けないけど，連絡会は行こうと思っていました。連絡会に行くならあの人に会える，

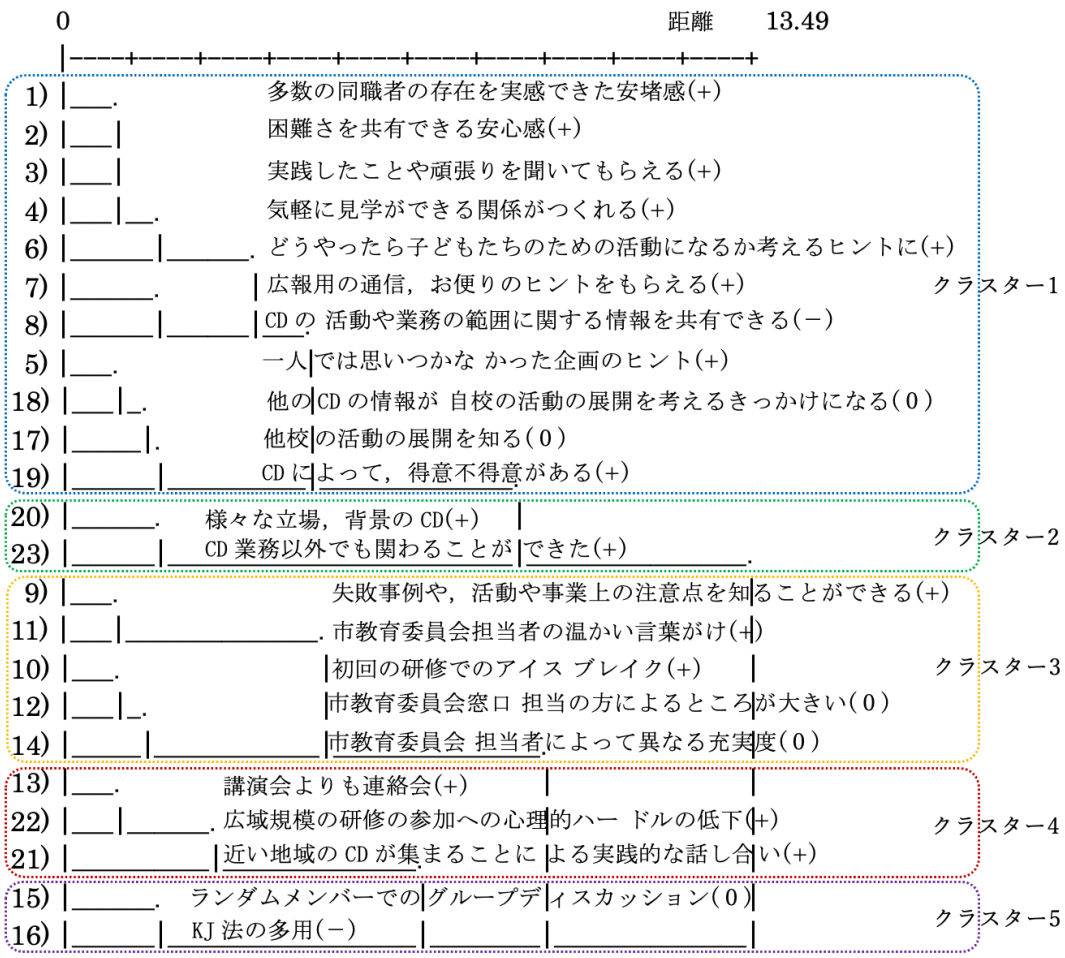


Fig. 1 調査協力者 A のデンドログラム
1)左の数値は重要順位　2)各項目の後ろの( )内の符号は単独でのイメージ
23 の連想項目の内，+は 16 項目，−は 2 項目，0 は 5 項目

あの人から話が聞けるという思いで。連絡会という場はありがたかった。広域規模の研修に参加するのって，気持ち的にハードルがあったけど，あの人が一緒に行けるなら行こうとか。そこで，心理的ハードルが下がりました。でも，より近い CD 同士で集まることで地域での話ができるので，話しやすいだけでなく，実現可能な企画が浮かんだりすることがあったので。そういう場を設けてもらえるということはありがたかったです。

クラスター5 は,「ランダムメンバーでのグループディスカッション」と「KJ 法の多様」の 2 項目で構成される。研修の場で，ディスカッションの場が設けられているのはありがたいけど，ランダムのメンバーというのは，いい面とそうでない面があった。学校規模が違う CD の話を聞いても自分の学校で採用するのは難しかったり。また， KJ 法よりも自由に話せる時間をいただけた方が，よかった。手法，研修の方法に関すること。

クラスター間の比較：クラスター数，比較内容が多いので，結果の考察や論考に関わる主要なもののみ掲載。

クラスター1 と 3 の比較：3 の委員会の窓口担当の人の動き，対応が， 1 のつながりに影響する。研修を担当する教育委員会に支えられて CD の活動があるのかなと思う。

クラスター1 と 4 の比較：1 は，その人がいることの安心感，一人一人とつながることの安心感。4 は場と自分がつながっていることの安心感という感じ。

クラスター4 と 5 の比較：研修の方法によって CD 同士のつながりや深さにも影響するように思う。KJ 法だと手法に頭がいって，形式的なところでまとまってしまう。メンバーや集まる規模なんかも，できれば狭い方が。あと，似ている学校の規模の CD のお話がより参考になる。

全体のイメージについて:学校に一人配置のCDが一人で奮闘するよりも同じ経験をしているCDが集まるだけではなく，意見交換をすることで，つながりをもつことができる。心理面でも安心が得られるだけでなく，実践にいかせるのが大きい。ただ，個々のCDがつながるだけでなく，それを支える担当者の存在もあるから動ける。つないでくれるからという安心感もあるので，土台となる教育委員会が窓口となる役割は大きい。また，研修を受ける機会がある人とない人では，感じるものは違うんじゃないかなと思う。

【調査協力者Aについての考察】

はじめに，それぞれのクラスターの内容について記述した後で，全体的特徴について考察する。クラスター1は,「実践したことや頑張りを聞いてもらえる」ことや，企画のヒントをもらえるなど，一人一人との直接的な関わりのなかで，安堵感や活動のヒントを得ていることから，＜個々のCDとのつながりから得られる安堵感と活動展開のヒント＞[2]と命名できよう。

クラスター2は,「様々な立場，背景のCD」と交流することで,「CD業務以外でも関わることができた」ことが挙げられていた。業務外まで影響が及んでいることから，＜CD業務外への波及効果＞のクラスターといえる。

クラスター3は，交流について,「市教育委員会担当者によって異なる充実度」を感じていたが，委員会担当者が交流の中心となり，支えとなっていたことから，＜つながりの軸となる窓口担当＞と解釈できよう。

クラスター4は，実践的な話し合いや研修への心理的ハードルの低下は,「講演会よりも連絡会」で感じられていたため，このクラスターは＜身近な話ができる場があることの安心感＞といえよう。

クラスター5は,「ランラムメンバーでのグループディスカッション」や「KJ法の多様」には交流の観点から疑問を感じていたため，＜つながりを阻害する研修方法＞のクラスターとよぶことができよう。

全体として:この調査協力者のクラスター構造は，＜個々のCDとのつながりから得られる安堵感と活動展開のヒント（クラスター1）＞と＜CD業務外への波及効果（クラスター2）＞が結節するとともに，＜つながりの軸となる窓口担当（クラスター3）＞と＜身近な話ができる場があることの安心感（クラスター４）＞，＜つながりを阻害する研修方法（クラスター5）＞が結節し，さらに大きな2つのまとまりになっていた。これらは，同職者同士の交流による効果と同職者同士のつながりがつくられる場を表していると考えられる。

同職者同士の交流で活動のヒントとなる情報のやりとりをするなかで，それぞれの学校に一人配置で孤軍奮闘する苦労を分かち合い，安心感や安堵感がうまれるつながりがつくられていく。その一部はやがて業務外への関わりにまで波及していくが，そのような関わりやつながりがうまれるためには，地域CD同士の出会いの場である研修会が重要となってくる。つながりの軸となる教育委員会窓口担当者が研修方法を工夫し，身近な話ができる場があることの安心感を感じられるような場の設定を行うことで，地域CD同士の関わりやつながりがつくられ，それらがひいてはCSにおける活動の促進となるということが考えられる。同職者同士の交流の効果とともに，それらをうみだす教育委員会窓口担当者の関わり，研修方法や研修内容の重要性が示されたといえよう。

【調査協力者Bの結果】

＜調査協力者Bによるクラスターの解釈：抜粋＞

クラスター１は,「最終的には自分は自分」から「先進地域との交流が衝撃だった」までの４項目で構成される。交流を行ったなかで，自分のやり方を見出すことができたプラスの方の感情。驚いたり迷ったりもあったけど，そのなかでもう自分なりにやっていくしかないなと落ち着けたという感じ。

クラスター2は,「他校の新任CDから『見学させてほしい』と頼まれたことがある」の１項目で構成される。見学させてほしいという方がいるということは，やっぱりみんなやり方を迷っているから，見学をさせて欲しいになるんだよなぁって。CDの役割は，他の人たちも難しいと感じているんだなぁと。

クラスター3は,「CDが一校に2人以上いれば相談しやすい」から「CD同士だけでなく，教員とも同じ研修や交流ができたら，もっと共通理解が得られる」までの３項目で構成される。複数人のアイデアがあった方が発展していけるというか，より良い方法を見出すことができるなぁと常に感じていたので。できるだけ子どもに関わっていく人が，立場が違う

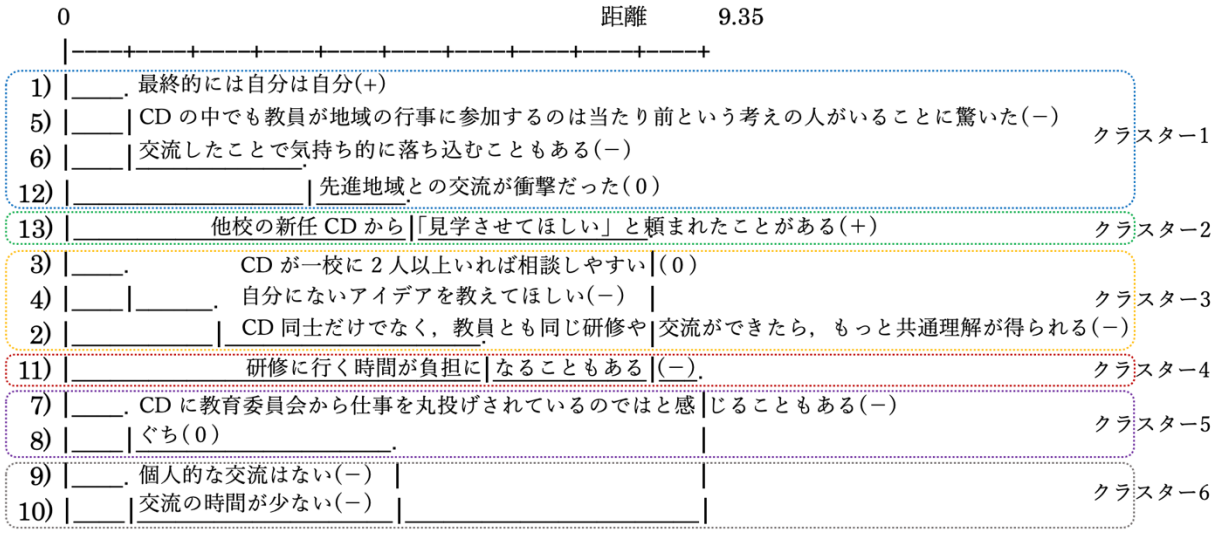


Fig. 2 調査協力者 B のデンドログラム
1)左の数値は重要順位　2)各項目の後ろの( )内の符号は単独でのイメージ
13 の連想項目の内，+は 2 項目，−は 8 項目，0 は 3 項目

人であっても共通理解を図ったほうがいいかなぁという感じ。

クラスター4 は,「研修に行く時間が負担になることもある」の 1 項目で構成される。研修を受けた方がいいのはわかっていても，実際には自分が仕事をもっていたりだとか，夜に研修に行くとなると，自分の家を空けて出ないといけないというのがあって。自分の本来の仕事を調整するというのがなくなるので，CD がちゃんとした賃金が出るような仕事になればいいのかなというのは感じていました。

クラスター5 は,「CD に教育委員会から丸投げされているのではと感じることもある」と「グチ」の 2 項目から成る。教育委員会の方が制限をかける割には，やりたいようにやってください，そしてなるべく地域を巻き込んでくださいというようなことを伝えられると，子どもたちと関わる仕事となっているけど，ようは地域全体を見てくれっていうことなんだよねっていうのがあって。荷が重すぎる，都合よく使われているというような雰囲気，感覚をときどき感じて。他の方も感じていて，そんな話を結構な頻度で聞いた。

クラスター6 は,「個人的な交流はない」と「交流の時間が少ない」の 2 項目で構成される。研修の後半 30 分だけ交流というのはありましたけど。一グループ 4〜6 人いると，そんなに喋る時間ない。本当に交流したいのであれば，がっつり時間をとらないと無理。

あとは，自分自身で交流とかする時間をとる余裕がやっぱりなかった。自分の仕事もある，家庭のこともある，学校行事はどんどんやってくる，準備をしないといけない，後処理もしないといけない，書類も書かないといけないというなかでは，やっぱりちょっと難しい。一人でこんなのでいいのだろうかと思いながらも,行事が終わっていくっていう感じ。

クラスター間の比較

クラスター1 と 3 の比較：最終的には自分で判断して進めていくしかないんだけど，３はその中でも相談できる相手とかアイデアをくれる相手とか共通理解して一緒に進める人がいてくれたらもっとよかったらっていう感じですかね。希望みたいな感じ。

クラスター3 と 5 の比較：相談し合えたりアイデアを出し合ったり，学校の先生たちと一つの物事に対して共通理解が得られるような話し合いができれば，CD だけが孤立するというか，教育委員会って丸投げしているよねっていうグチは出なくなるかなぁという気がします。3 は 5 の解決策につながる。

クラスター5 と 6 の比較：研修でもう少しサポートがあれば，教育委員会に対するグチが減るのかなぁ。こういう現場をつくってほしいんですという希望は出されるけど，じゃどういうことをやっていけばいいですかという質問に対しては，それはもうそれぞれ学校の状況とか地域の状況によって違うので，それぞれの学校でやってくださいで毎回必ず終わるので。委員会の説明の中にはない以上は，交流の時

間の中でそういう情報のやりとりをするんだと思うけど，その交流の時間がない。5 は教育委員会からの説明が足りないってこと。6 は交流の時間の確保が課題ということですかねぇ。5 は内容が足りなくて，6 は時間が足りないってことですかねぇ。

全体のイメージについて：地域 CD は一校に一人しかいないので，他校間の同職者で連絡をとれるようにして,つないで,話ができるようにするとよい。連絡をつないで相談できる環境をもっていたらよかったのかなぁ。ラインなども活用して。やり方は学校でそれぞれ違うけど，何かのヒントになるから。情報を共有できるツールがあれば便利ですかねぇ。

【調査協力者 B についての考察】

クラスター1 は,「先進地域との交流」で先駆的な取り組みを知ったり，同じ CD であっても考え方や価値観に違いがあったりすることに衝撃を受け，どのように活動を進めていけば良いか悩み考えるものの,「最終的には自分は自分」と考え，自分ができることをしていくしかないと気づき，地域 CD として決意新たに活動を進めようとしていることから，＜多様な CS・CD との出会いと自地域の活動の主体的選択＞と命名できよう。

クラスター2 は,「他校の新任 CD から『見学させてほしい』と頼まれ」実際に交流するなかで，情報が少ない中で地域 CD の活動を進める難しさを再確認していた。また，後輩 CD の悩みを共感的に受容するとともに，何とか役立ちたいという思いをもち支援していたことから，＜後輩 CD への共感と援助行動＞のクラスターといえる。

クラスター3 は，基本的には一人で活動を企画し各所をつなげていく地域 CD の役割の難しさから，「自分にないアイデアを教えてほしい」,「CD が一校に 2 人以上いれば相談しやすい」のにという思いをもつとともに,「CD 同士だけでなく，教員とも同じ研修や交流ができたら,もっと共通理解が得られる」と感じ,願っていたことから,＜一人配置の CD の孤立と同職者や教員との連携の願い＞と解釈できよう。

クラスター4 は，調査協力者 B は，地域 CD が短時間，少額手当の勤務であることから，パートタイムの他の仕事も同時に行っていた。その仕事や家庭生活と折り合いをつけながら CD 業務を行い，さらに研修にも参加するなかで,「研修に行く時間が負担になることもある」と感じていた。そのため，このクラスターは＜研修時間捻出の負担＞といえよう。

クラスター5 は，CS における CD に求められる役割や活動の留意点は説明されるものの，具体的な活動の進め方は説明されないために,「CD に教育委員会から仕事を丸投げされているのでは」と，自ら感じるとともに，同様の「グチ」を同職者との交流のなかで聴き，ともに教育委員会への不満や不信感を募らせていた。そのため，＜教育委員会への不信感＞のクラスターとよぶことができよう。

クラスター6 は，他の仕事や家庭もあるなかで，「個人的な交流」の交流の時間はなかなかとれない状況であった。数少ない交流の機会である研修においても「交流の時間が少ない」なかで，交流の時間をとりたい理想と現実の差を感じていた。そのため，このクラスターは，＜研修における交流機会・時間の増大の願い＞といえよう。

全体として:この調査協力者のクラスター構造は，＜多様な CS・CD との出会いと自地域の活動の主体的選択（クラスター1）＞と＜後輩 CD への共感と援助行動（クラスター2）＞が結節するとともに，＜一人配置の CD の孤立と同職者や教員との連携の願い（クラスター3）＞と＜研修時間捻出の負担（クラスター4）＞,＜教育委員会への不信感（クラスター5）＞と＜研修における交流機会･時間の増大の願い（クラスター6）＞が結節し，さらに大きな 3 つのまとまりになっていた。これらは，それぞれ他の地域 CD との関わりや交流のなかでの自らの業務への向き合い方の確立，研修や交流に参加し情報や安心を得たいのに時間的制約から参加が難しいという葛藤，状況への不満を表していると考えられる。

調査協力者は，その他の仕事や家庭と両立させながら，地域 CD 業務に取り組むなかで，研修や交流の重要性を感じながらも時間的な制約があり，交流ができないでいた。項目の多くがマイナスの印象であったが，それらのほとんどは同職者同士の交流の欠如に起因していると考えられる。2 つしかないプラスの項目のうちの 1 つは，後輩 CD から見学を頼まれ，経験のない CD の抱える困難さに共感し，役立ちたいと援助行動をおこした項目であった。調査協力者 A と同様の交流を確保できていたら，さらに多くの情報的・情緒的サポートを同職者同士で提供し合うことで，B の項目の印象や内容，クラスター構造そのものが大きく変化していたのではないだろうか。

もっともそのためには，時間の確保が必要である。Bが望んでいたように地域CDの業務の専従化も検討する価値があるだろう。また，PAC分析の面接内でB自身が気づいていたが，コミュニケーションアプリの活用は時間の少ないなかでの交流を促進するために有効な方法となるのではないだろうか。

【調査協力者Cの結果】

＜調査協力者Cによるクラスターの解釈：抜粋＞

クラスター1は,「他の中学校でやっている生け花活動を見学させてもらって，それを担当中学校で実現でき，CDとのお付き合いは大切だと思った」から「図書活動や読み聞かせで，担当中学校のボランティアさんたちは子どもへの愛情が深いと感じることが研修等でよくあり，そこで価値を感じた」までの5 項目で構成される。学校の役に立っているのか，子どもたちのためになっているのかっていう疑問があるけど,そういうのが話をしているなかでわかる。研修や交流というのはヒントをもらえて，やり方もやったことのない活動も教えてもらえるし，最終的には自分の学校の評価につながったり，これからの課題につながったりしている。

クラスター2は，「経験豊かなCDの方にはいろいろ相談に乗ってもらえるので助かるし，意見が合ったときは自分の考えに少し自信をもって行動ができる」から「活動でうまくいかないときや困ったときは，よその地区の CD と話をしたり悩みを共有したりすることで，活動がうまくいったり自信がついたりした」までの3項目で構成される。他の学校のCDと話しているなかで解決策をみつけたり，共感してもらってお互いに精神的に支え合うというか。私に反対意見もしてくれる，グチも聞いてくれる，共感もしてくれる，指摘もしてくれる，そういう人たちって必要ですね。研修も大事なんですけど，この人たちの存在っていうのがすごい大事で。情報交換ができるし，今の活動がいいのかという見極めもできる。

クラスター3は，「県内の各市の発表で，教師ではなく，CDにしかできない発表があり，私がCDとしてお手伝いできたのはよかったと思う」から「研修を企画していくのも大変だと思うので，CDの研修に参加し，とてもよい内容のときは，担当者や教師に伝えるようにしている」までの3項目で構成される。共感して自信をつけてくれるのは教育委員会の方なので。こうことやっていいですかねっていうのもCD同士だといいんじゃないぐらいしかもらえないけど，先生や教育委員会の方にいいと言われると自信がついてできるから，つながっていないといけない。

クラスター4は，「町おこし，地域の活性化に力を

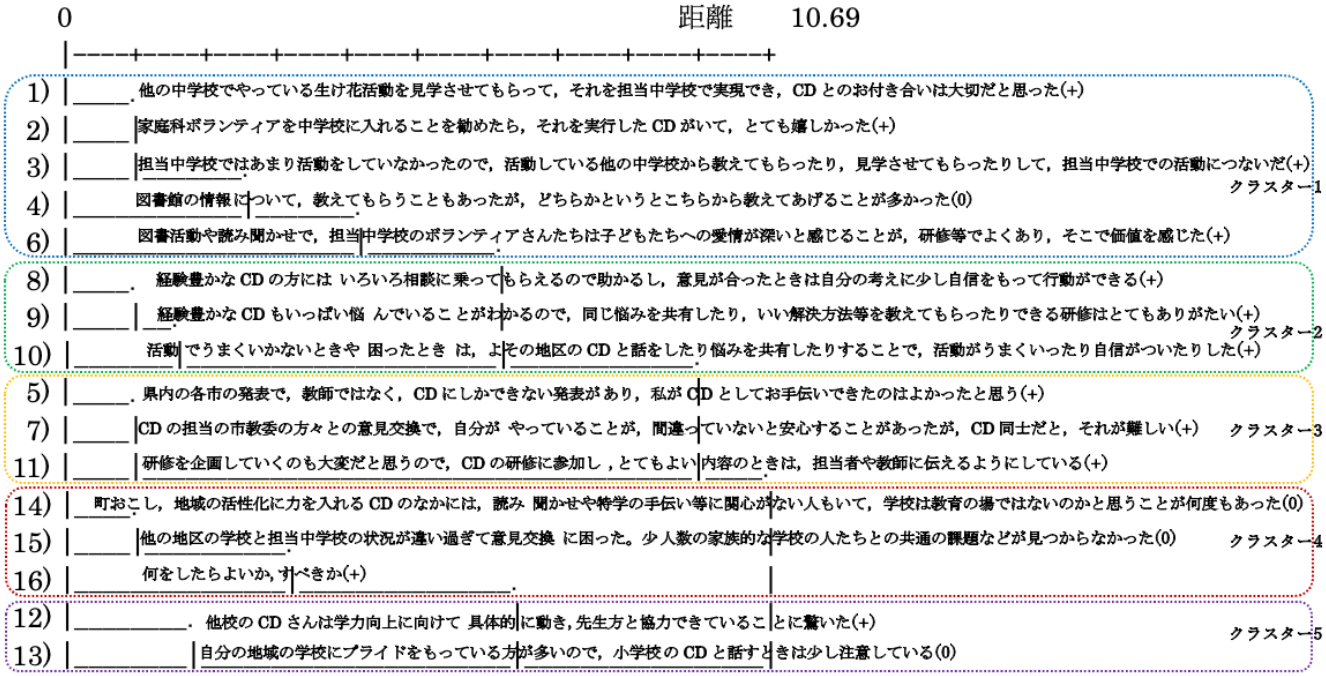


Fig. 3 調査協力者Cのデンドログラム>

1)左の数値は重要順位　2)各項目の後ろの( )内の符号は単独でのイメージ

16の連想項目の内，+は12項目，−は0項目，0は4項目

入れる CD のなかには，読み聞かせや特学の手伝い等に関心がない人もいて，学校は教育の場ではないのかと思うことが何度かあった」から「何をしたらよいか，すべきか」までの 3 項目で構成される。地域を活性化っていう目的で地域 CD になった人も結構いて，すごいいいことだけど，私は教育の場というのを優先すべきだというのがあって。地域の町おこしが目的で入った人たちとは合わないし，両方大事だから教育委員会がまとめるのは大変だろうなとは思います。

クラスター5 は，「他校の CD さんは学力向上に向けて具体的に動き，先生方と協力できていることに驚いた」と「自分の地域の学校にプライドをもっている方が多いので，小学校の CD と話すときは少し注意している」の 2 項目で構成される。学力向上や何かに特化して成功している学校って CD さんが職員なみに学校に入りこんで学校の先生と会議しながらやっている人だろうと。私もしたいと思うけど，どっかで先生じゃないという意識があるもので。あと小学校ってそれぞれの学校で特色があるんですよ。学校ごとにやり方が全く違うし考え方も違う。だからこの 2 つは私が注意していかないといけないなという意味では同じ。やり方と態度は気をつけないといけないのが，このまとまり。

クラスター1 と 2 の比較：2 は井戸端会議の中でヒントを得る。共感して，ときにはストレス発散をして。優劣はつけられないけど，専門性やいろんなことを知れたり，出会えたりするのは 1 で，2 は一緒にいる人たちのなかで共感しあったり，ときには慰め合ったり，まぁ近場の情報交換ですね。両方バランスよくという感じ。

クラスター 1 と 4 の比較：私は基本的に，町おこしとかに積極的じゃないというのもあって，そっちの情報というのは入りにくい。そこを研修会ではバランスよく教えてくれるので，ありがたい。

クラスター2 と 3 の比較：意見交換したり，教えて合ったりやっていることは同じなんですけど，2 は立場が同じ人という意識。3 の相手は教員だったり担当者だったり。私も頑張るから，頑張ってよという気持ちが 3 にはある。2 はお互い頑張ろうねという気持ち。

クラスター2 と 4 の比較：結局は，学校によくなってほしいという思いは変わらないんだろうなと。そこが町おこしにいくのか，もっとボランティア活動にいくのかは違うけど。

クラスター3 と 4 の比較：3 は教育委員会や先生と話をすることは，自分が自信をもって活動を続けていくことにつながっていて，4 は自分とは違う活動をしている人や，その考え方の違いを知っておくことも大事というか。

全体のイメージについて：CD になったときは，たいした自分の目的とか目標はなかった。CD をしていくなかですごい自分のなかのやらないといけない幅が研修でどんどん広がっている。研修ではいろいろ教えてもらえるし。生きた情報を知るのも大事なんですけど，研修や交流で教えてもらえるのがてっとりばやいというかやりやすい。

【調査協力者 C についての考察】

クラスター1 は，「他の中学校でやっている生け花活動を見学させてもらって，それを担当中学校で実現」したり，「家庭科ボランティアを中学校に入れることを勧めたら，それを実行した CD」がいたりするなど，同職者同士で教え合い，次の活動のヒントを得ていた。情報的サポートを互いに行いながら，それぞれの自地域の CS の活動を促進させていることから，＜コミュニティ・スクールの活動促進につながる同職者同士の互恵的な情報交流＞と命名できよう。

クラスター2 は，経験豊かな CD をはじめとする同職者に相談に乗ってもらったり，ともに悩みを共有したりすることが，問題の解決方法を得ることだけでなく，自信につながっていた。そのため，＜感情交流による地域 CD 効力感の向上＞のクラスターといえる。

クラスター3 は，教員主体の発表会で地域 CD として手伝ったり，研修担当者の企画の難しさを慮り，よい研修内容には積極的に肯定的なフィードバックを行ったりするなど，教員や教育委員会担当者をサポートしていた。その一方で，教育委員会担当者に共感してもらうことで，安心したり自信をつけてもらったりしているとも感じていた。教員や教育委員会担当者とも相互にサポートし合う関係になっていたことから，＜コミュニティ・スクール運営に欠かせない学校教員や教育委員会担当者との連携＞と解釈できよう。

クラスター4 は，地域の活性化に力を入れる地域

や農村地域の小規模校の CS の活動は，自らのそれとは，全く異なっていたことへの気づきと戸惑いがあった。このクラスターは＜様々な背景によって大きく異なるコミュニティ・スクールの活動内容への考察＞といえよう。

クラスター5 は，他校には，自らとは違う関わり方，スタンスでCSの活動を進める地域CDがおり，今後活動を進める上でその活動の一部を取り入れたり連携したりする際には自らの方法や態度を改善する必要を感じていた。そのため，＜今後活動を進めるうえでの改善点＞のクラスターとよぶことができよう。

全体として:この調査協力者のクラスター構造は，＜コミュニティ・スクールの活動促進につながる同職者同士の互恵的な情報交流＞，＜感情交流による地域 CD 効力感の向上＞と＜コミュニティ・スクール運営に欠かせない学校教員や教育委員会担当者との連携＞が結節するとともに，＜様々な背景によって大きく異なるコミュニティ・スクールの活動内容への考察＞と＜今後活動を進めるうえでの改善点＞が結節し，さらに大きな2つのまとまりになっていた。これらは，同職種とCD業務に欠かせない他職種を含めた交流や連携とその成果と，異なる価値観や方法による CS 運営への気づきを表していると考えられる。

調査協力者Cは，業務に必要な交流の範囲を同職者内に留まらず，教員や教育委員会担当者に広げて捉えていた。教員や教育委員会担当者を地域 CD 業務に欠かせない連携対象と捉えて実際に連携しながら活動することで，相互に援助し合い，項目の印象のほとんどがプラスであったようにポジティブに地域 CD 業務に取り組めている可能性が示唆された。また，積極的に同職者と交流し，自地域とは異なる活動や実践，地域 CD 業務と出会うなど多様な視点を得ることで，そこでの気づきや学びを今後の活動に取り組む際の留意点につなげたり，あまりに多様な実践をとりまとめる教育委員会担当者の苦労に気づいたりすることができたと考えられる。そして，その気づきをいかして，教育委員会担当者を支援だけをしてくれる人と捉えるだけでなく，連携する対象と捉えてともに活動に取り組むことで，またさらにより良く活動をすすめていった可能性が示唆された。

5 総合的考察

本研究では，地域CD同士の交流の場において，どのような関わりが行われ，そこからどのような影響を地域 CD が受けているのかを検討することが目的であった。調査協力者の連想項目や語り，それらのクラスターから，以下のようなことが示された。

調査協力者A，Cのようにどちらかと言うと，時間に余裕がある地域CDは，同職者同士の交流の場で，CSにおける活動の種類や内容，実践の際の工夫やアイデア，企画のヒント，業務の範囲等，多くの情報を交換し合い，互いに情報的サポートを行っていた。また，自らの実践や頑張り，活動の困難さや悩みを話し合い，聴き合い，励まし合うなど，情緒的サポートも互いに行っていた。そして，そのようなソーシャルサポートの中で得たことをもとに，自地域のそれまでの活動に新たな視点や工夫をつなげていかしたり，自地域の活動の課題や問題を解決したり，新たな活動に取り組んだりしていた。また，悩みを共有するなかで安堵感や安心感を得たり，自信を得たり，ときにはストレスを発散させたりしていた。

同職者同士の交流の場は，学校一人配置で孤立し，困難な状況に置かれがちな地域 CD にとって，他職者からは得ることが難しい必要な情報や共感などのソーシャルサポートを得られるかけがえのない場となっていた。同職者同士の交流を多く行っていた調査協力者A,Cの重要順位の高い項目や重要順位が高い項目群で構成されたクラスター1 がソーシャルサポート，特に情緒的サポートを表す項目やクラスターになっていたことから，同職者同士の交流の効果の中でもそれらは特に意味あるものであると考えられる。ソーシャルサポートが十分に得られるときには，人はストレスフルな状況によく対処することができる（Caplan,1974)。比較的時間の余裕がある地域 CD は，多くのソーシャルサポートを得ることができる同職者同士の交流の場から大きな正の影響を受けていると言えるだろう。

一方，パートタイムの仕事と地域CD，家事のバランスを保つのが難しく同職者同士の交流が少なかった調査協力者Bは，限られた交流のなかで自地域では同じ活動が考えられないような先進地域との交流によって衝撃をうけたり，交流したことで気持ち的に落ち込んだりしていた。B は，研修会後半に設定される短時間の交流では全員が話し合う時間を確保

できないこと，その結果，特徴的な活動を行っている地域のCDや活動がうまく進んでいる地域のCDなど一部のCDだけが話す場となり，そうでないCDは話す時間もなくその話し合いで抱いた疑問を解決することもなく帰路に着くことを述べていた。同職者が集う機会である研修は，交流を行ったりつながりをつくったりする絶好の機会である。しかし，交流の時間が短時間である場合，あるいは効果的な進め方がされない場合は一方向的な情報の伝達にとどまり，質疑応答の時間をとることができない。そのため，本質的な意味での情報共有の時間とならず，また感情交流も起きないことから，CDに負の影響を及ぼす可能性が示された。以上のことから，仮説1は，一部支持されたと言える。

本論文でとりあげた地域CDの3つの事例から，他にも共通点1点と相違点1点が見いだされた。

共通点は，地域CDやその研修を統括する立場にある教育委員会担当者や企画された研修の影響についてである。調査協力者A，Bは，教育委員会担当者の研修内容や方法が地域CD同士の交流やつながりを促進したり阻害したりすることについて言及していた。Cも教育委員会担当者と交流，連携する必要を感じ，研修内容や方法についてフィードバックを行っていた。これらのことから，同職者同士の交流の出現，機会創造に教育委員会担当者と企画される研修が大きな影響を及ぼす可能性が示された。具体的には，①講演型でなく地域CD同士が情報を共有し合うような連絡会型の研修の機会を設定すること，②研修等において情報共有の時間を設定する際には，限られた学校による一方向的な情報伝達でなく，互いに情報を共有したり質問し合ったりする時間を十分に確保すること，③情報共有だけでなく，地域CD同士の感情交流が起きるような活動を研修内に設定することが，重要である可能性が示唆された。

一方，相違点が1点見出された。全項目の2/3以上の項目がプラスの印象であり，一つ一つのクラスターもそのほとんどがプラスの内容で占められていた調査協力者A，Cと異なり，調査協力者Bは，全13項目中プラスは2項目（3項目が0），逆にマイナスの印象が8項目で，一つ一つのクラスターもほとんどがマイナスの内容となっていた。研修時間捻出の負担を感じる交流が難しい状況で，同職者や教員との連携を願うとともに交流機会・時間の増大を願っていたことから，マイナスの印象の項目の多くは，同職者同士の交流そのものへの印象というより，同職者同士の交流がとれない状況に対する印象というように考えられる。同職者との交流の時間や連携の機会がとれるCDは，そこで得られる資源を活用してCS運営に自信をもって関わり，効果的な活動を積極的に企画，実践していく。その一方で，同職者同士で交流する時間がとれない地域CDは，活動の企画や実践に必要な情報を十分に得ることができず，そうであるからといって相談することもできず，疑問を抱えたまま活動を企画し，自信なく不安のうちに実践に取り組む可能性が示唆された。また，その同職者同士の交流の時間や機会の確保に，地域CDの職業の違いや忙しさが関連する可能性が示された。これらのことから，仮説2も支持されたと言えよう。

本研究で得られた知見をもとに，今後地域CDに関わる現場で求められることは，次のようなことであろう。同職者同士の交流やつながりの軸となる教育委員会担当者が，研修や様々な機会において，意図的に地域CDが同職者同士で十分に交流し，その後も情報交換や相談ができるようなつながりをつくる場と時間を設定する。また，地域CD一人一人が職業や他の仕事とうまく両立ができているか，あるいは地域CDの職務の遂行の観点から孤立していないかを把握し，状況に応じて支援する。地域CDは，それらのつながりや支援をもとに連携しながら自地域のCSの活動に取り組むことで，自らも安心しながら，効果的な活動を企画実践する。また，時間や機会が少ないなかでもつながりがもてるように，ICTやSNS等を積極的に活用する。そのような実践を積み重ねた結果，CSの目的である学校の教育力の向上や地域の活性化，そして子どもが安心して暮らせる環境をつくることができると言えるのではないだろうか。

最後に本研究の課題について述べる。本研究の調査協力者であった女性と違い，男性，あるいは年齢の差によって，異なる態度構造や同職者同士の交流の影響の違いも考えられる。それらについて検討するとともに，本研究で示された孤立しがちな地域CDのCSにおける組織や活動への適応測定や効力感測定などへの応用可能性を探っていくことが今後の課題となるだろう。

注

1 「」内の語句は，連想語を示している。

2 ＜＞内の語句は，クラスター名を示している。

引用文献

Caplan, G.(1974). Support system and community mental health. Behavioral Publications. （近藤喬一・増野肇・宮田洋三郎（訳）(1979). 地域ぐるみの精神衛生 星和書店）

文部科学省(2020).「コミュニティ・スクールの作り方」.文部科学省. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/school/detail/20210119-mxt_chisui02_001.pdf.(参照 2024-02-01)

長畑実(2015). CS の推進に関する研究 (2) :CS の課題と展望　山口大学大学教育機構 12, 78-94

内藤哲雄(2002). PAC 分析実施法入門 :「個」を科学する新技法への招待（改訂版）　ナカニシヤ出版

野村一夫(2017).香川県における学校と地域の連携・協働に係る今日的課題　−公立小･中学校長の意識調査から− 香川大学教育実践総合研究 35, 49-62

露口健司(2016). 「つながり」を深め子どもの成長を促す教育学 ミネルヴァ書房

真田穣人・當房詠子・南雅則・佐々木聡(2023). コミュニティ・スクール運営の課題に関する研究 −地域コーディネーターの視点から−　梅光学院大学論集 56, 71-84

スクール・アドバイス・ネットワーク(2013).学校と地域をつなぐ地域コーディネーター.文部科学省. https://manabi-mirai.mext.go.jp/document/15(4) sanettext.pdf(参照 2024-02-01)

八尾阪修(2012). CS の展開と課題克服への展望 ：学校支援地域本部からの示唆　九州大学教育経営学研究紀紀要 15, 1-6

同職者同士の交流の場が地域コーディネーターに及ぼす影響

The influence of opportunities for interaction among people in the same profession on regional coordinators

【執筆者】

真田 穣人　Shigeto SANADA（兵庫教育大学）

當房 詠子　Eiko TOBO（梅光学院大学）

南 雅則　Masanori MINAMI（びわこ学院大学）

佐々木 聡　Satoshi SASAKI（高野山大学）

【要約】

コミュニティ・スクールにおいて重要な役割を担う地域コーディネーターにとって，同職者同士の交流や連携は，活動促進のために重要な意味をもつと考えられる。そこで，地域コーディネーター同士の交流の場において，実際にどのような関わりが行われ，どのような影響を地域コーディネーターが受けているのかを検討することが，本研究の目的となった。委嘱校種，職業が異なり，5 年以上の経験がある地域コーディネーター3 名を対象に，同職者同士の交流の場が地域コーディネーターに及ぼす影響について，事例研究法である PAC 分析により検討した。その結果，学校に一人配置で孤軍奮闘する地域コーディネーターが，同じ経験や思いをしている同職者同士で交流することで，心理的安定を感じたり実践的情報の交換をしたりするなど，ソーシャルサポートを相互に得ていることが明らかになった。一方，他の職業との両立等の時間的余裕の有無，教育委員会窓口担当者によって，その効果が大きく異なる可能性が示された。

For regional coordinators, who play an important role in community schools, interaction and collaboration among people in the same profession are considered to have an important meaning in promoting activities. Therefore, the purpose of this study was to examine what kinds of interactions take place in the exchanges between regional coordinators, and what kind of influence regional coordinators receive from them. We used PAC analysis, a case study method, to examine the effects of opportunities for interaction among co-workers on regional coordinators, targeting three regional coordinators with different types of commissioning schools and occupations, and with more than five years of experience. As a result, we found that community coordinators who are assigned to schools and struggle alone can feel psychological stability and exchange practical information by interacting with colleagues who have the same experiences and thoughts. It became clear that they received mutual social support. On the other hand, it was also shown that the effects differed greatly depending on the availability of time to balance work with other jobs and the contact person at the board of education.

【投稿受理日】　2023 年 10 月 9 日

【掲載決定日】　2024 年 3 月 10 日

【原著】

家族の PAC 分析
― 個人別普遍性と共通普遍性の探索 ―

内藤哲雄

1 問 題

1.2 イメージの探索と了解技法

臨床の対象となる個人 CP(critical person)にとっての家族イメージは，当該対象者 1 名のイメージである。そしてイメージには家族の構成員や独自な構造，家族の歴史，所属集団の社会規範などの文化的背景など，多くの変数が関与する。特殊事例であるとともに，その個人にとっては家族の中で繰り返される経験が蓄積され，複合化され，抽象と捨象が生じ，恒常的，普遍的，一般的(constant, universal & general)な理解枠（scheme）として発達していく。被検者(CP)から聞き取られた家族イメージは，多標本での平均値イメージを総合・統合したものとは質的に異なる。家族との個々の具体的な関わりの中で生まれたそれぞれの体験内容が，記憶され，関連づけられ，ネットワーク化され，スキーマとして形成，変容される。そして CP 個人における暗黙のスキーマ理論となっていく。伊藤（1996）は，人間を主体的，独自的，創造的，歴史的，社会的，超越者的，全体的な存在としての「学習者」として意味づけている。そして一見すると厳密に見える実験的方法には限界があり，人間科学の活路を，「個」の内界に迫る臨床心理学的な事例研究法に求めるべきだと主張する。

PAC 分析では，デンドログラムで検査者が切断する下位クラスターの提案を第 2 次連想刺激として，被検者の気づきやイメージ，解釈の報告が進んでいく。このときの第 2 次連想反応もまたローデータである。被検者が内界でイメージしている段階では外部から観察不能であり，文字または音声によって表明されたときにはじめて外顕的行動(overt behavior)と呼ばれ，外部からの観察が可能な客観的データとなる。同時に内界でのみイメージしていたものは，内潜的行動(covert behavior)として客観データとはならず排除される。

操作的・実験的・記述統計学的手法と，間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法の両者が包含されている PAC 分析によって，被検者の内界の報告とそれらを検査者が了解的に追体験していくプロセスは，読者や聴衆である（新製品・新商品の開発者や博士論文の主査・副査や学位論文発表会の参加者などの）第三者にとっても，「なるほど」「実感が伝わってきた」と追体験させられる。

PAC 分析での相互理解は，検査者（聞き手）が被検者（話者）のスキーマの内容を繰り返しリハーサルすることで，話者のスキーマ内容へのアクセスビリティ(想起力)が高まり，話者のスキーマに沿っての了解レベルが高まってくる。具体的には，各クラスターでの「連想項目の結節をたどり，被検者の解釈イメージを読み込む作業」を 10 数回以上繰り返すことで，次第に被検者のスキーマ構造が感覚的に伝わってくるようになり，共感の感覚が高まってくる。別言すれば，共感的実感が高まることを意味する。被検者による内界主観探索の報告の聴取やその記録の読み取りの積み重ねは，検査者と第三者である読者や聴衆（学位論文の主査・副査や製品・商品開発者，政策立案者など）に上述した共感的・了解的実感の豊穣をもたらす。因みに，本論文での研究 1 の 2 事例の PAC 分析実施（内藤,1992）は引用文献から明らかなように,31 年前，研究 2（内藤,2008）は 15 年前のものである。まるで昨日のように生き生きと描写されたデータを，繰り返し，繰り返し熟読し，関連学会の最新研究を参照しながら，数十年間にわたり研究を続け，データの再考を繰り返すことの価値を例証するものであろう。

ところで，「個」の唯一性を尊重する臨床の視点にそうような形で統計の手法を用いる技法として PAC 分析を解説した石原（2006）は，考察における研究者の関与性に触れている。彼は，「いわゆる統計的研究にせよ，PAC 分析にせよ，あるいはその他どんな研究法であっても，それ自体が臨床心理学に独自の研究技法というものは存在しない。」「面接法がデータ収集の中心となる以上，被検者の語りを深く聴き，理解していくに際して十分に臨床的な態度でいることが不可欠になるのである。」と説いている。

それでは具体的にはどのように対処すればよいの

だろうか？　筆者は次のように提案したい。臨床心理学に限らず，考察に際して重要なのは，まず，収集したデータを丹念に読み取り，自身の身体感覚や情感を含め全身全霊で感じ続けること。ついで，研究者自身が感じる感覚と先行研究の概念や仮説や理論とを照合し続けること。この対比による論考は，自身の研究を現代科学の最先端の水準にまで引き上げることを意味する。その際には，既存の先行研究や自身の信念にとらわれず，常に疑念を懐きながら傍らに置き，先行研究にも寄与する独自の新概念や新仮説や新理論を大胆に創造していくことである。被検者の内界深くからにじみ，沁みだし，迸しる思いを大切に，大切に扱い，最大の価値を引き出していくことである。研究者による最終的な解釈や考察は，被検者と検査者(研究者)が一体となって制作した「総合科学」であり，「総合芸術」となり得るものである。

2 本研究全体の目的

本研究では，それぞれの被検者が暗黙裡に獲得している家族に関する独自のスキーマを，家族イメージの連想項目を個別に数量的に解析したクラスター分析の結果と，各被検者にとってのクラスターのイメージや解釈を外顕的行動として抽出し，被検者本人に解釈させ報告させた全体構造を，検査者が了解的に共感し論考することで，客観的・科学的に分析しようとした。

そして研究 1 では，それぞれの被検者個人にとっての家族生活体験から得られたスキーマが，複数の事例を比較することによって，その個人にとっての独自な解釈（物語）へと結実していく過程を明らかにすることを目的とした。

研究 2 では，研究 1 と同じく被検者個人の独自の家族体験を統合的に探求しながら，より多くの構成員で成立している家族との関わりと呼称を分析することで，日本文化特有の社会規範の存在とその意味を追求することを目標とした。とくにほとんど注目されてないか，気づかれてこなかった，通文化的な背景をもつ，社会の集団一般にあまねくみられる社会規範を「共通普遍性（common generality）」と名づけ、これについて探索することを目指した。

3 研究 1 拡大家族と核家族の2事例の了解的理解

研究 1 は内藤(1992)の再分析である。

【目的】

家族は，拡大家族か核家族か，また構成員数，さらに構成員の力動的な関係は多様である。このため，家族の特定の一員（CP）が家族に対してもつ態度構造の全体像を解明するには，個性記述的な事例研究法によるアプローチが有効である。研究 1 では，内藤(1992）によって開発された個人別態度構造での分析技法（PAC 分析）による事例研究法を，技法開発初期の簡明な連想刺激を用いる方法で実施することを目的とした。

【方法】

＜被検者＞　家族の関わりの歴史や独自性を比較するために，被検者の家族の選定には拡大家族と核家族をとりあげた。拡大家族では，家族の歴史の流れがあり，家族内呼称の種別も核家族よりも多いと考えられる。選択したのは，女子大学院生 1 名 A（拡大家族），男子大学院生 1 名 B（核家族）である。いずれも 20 歳代前半で合計 2 名。

＜手続き＞被検者には個別に参加を要請した。最初に PAC 分析の技法について簡単に説明し，いつでも調査の中止を要求できること。中止による不利益はないこと。自身の結果の説明を要求できること。研究以外の目的では使用しないこと。研究発表ではプライバシーの保護には万全を尽くすこと。個人のデータは厳重に管理することを伝え，了解を得てから調査を実施した。

連想刺激は，「家族について，意味あるもの，重要なものとして，頭に浮かんできた言葉やイメージ」とし，想起順とともにカードに記入させた。この後，重要と感じられる順に並べさせた。つぎに，それぞれの組合せが，言葉の意味ではなく，直感的なイメージの上でどの程度似ているかを，「非常に近い」から「非常に遠い」の 7 段階で回答させた。最後に，家族構成や職業等について聴取した。上記の繰り返しなしの親近性データにより，被検者別に HALBAU のウォード法でクラスター分析し，翌日に各群に共通するイメージや併合された理由の解釈イメージを質問した。（実施時間は、いずれの事例も 2 時間以内）

【結果】

女子大学院生 A と男子大学院生 B の，それぞれの

クラスター分析の結果は，Fig.1，Fig. 2 のようになった。

＜女子被検者 A のイメージ報告＞

クラスター1 は「庭」～「新築した家」までの 5 項目：「(父方の祖父母の）家を 7 年前に建て直した。祖母と母(専業主婦)の折り合いがよくない。今は寝たきりの祖母が元気な頃，庭に何を植えるかでもいろいろあった。今は祖母が何もできないので落ち着いているが，前のわだかまりが残っている。父も祖母と仲が良くないので，ここに入ってないのだろう。台所は，居間とともに大きな位置を占めている。」

クラスター2 は，「父親の見送り」～「テレビ」の 5 項目：「母は昔風の人で，どんなに早くても父が出かけるとき（子ども達に）見送らせる。家と駅が離れているので，母が車で父を送り迎えする。

夜のお茶は，私の(大学)受験勉強時代からの習慣で，みんながいるときはいつも夜 10 時に，テレビのある居間で漬け物にお茶となる。仕事で出かけることの多い父も，どんなに酔っていても，家族が寝てくれた方が良いと思っても，家族とのつながりを考えているのか参加する。一家団らんというイメージ。」

クラスター3 は，「電話」～「母方の祖父母」の 8 項目：「きわめて現在の状況という気がする。私も弟も大学で離れている。母は子供べったりで，周りから過保護といわれている。私から週に 2 回位電話をしないと不安になるらしい。それで不自由。母は，弟にせっせと宅急便で(煮物まで)送る。母方の祖父母が出たのは，学部の 3 年まで（私が）一緒に住んでいたから。祖父母は娘(母)がかわいいので，週末には自宅に帰るように催促する。

被検者 A についての解釈

クラスター1 の解釈：祖母と母が何を植えるかでもめていた「庭」がマイナスで，新築した家は感情が生じない「0」項目。残りはプラスイメージである。このクラスターは，母と祖母の生活の場の中心である庭と台所を舞台とした父方の祖母と母との確執の過去と，寝たきりになった祖母と，母との表面的な平穏。このクラスターは，父方の祖母と母のサブシステムで，＜父方の祖母と母との過去の確執と祖母の寝たきりによる表面的平穏＞と名づけることができよう。

クラスター2 の解釈：このクラスターは，「父親と母親」の子どもたちとの関わり方についての，数年前までの生活場面である原風景の描写で＜昔風の伝統的な専業主婦の母の家族対応と父母との一家団らん＞と呼ぶことができよう。「夜のお茶」のありがた迷惑で気を遣ってくれる「父」だけが「0」項目で，あとはすべてプラスの団らんである。

クラスター3 の解釈：「宅急便」だけがプラスで，あとの項目はマイナスと「0」の，ネガティブなイメージのクラスターである。クラスター3 には，連想項目としては被検者 A 本人が出現していないが，姉弟サブシステムの分離独立へと変化した家族の現在で，子離れできないで A に不自由と感じさせる母とともに，＜姉弟とも別々の大学に進学したことによる物理的な分離に伴って，「母親と弟」，「母方の祖父母と被検者」がそれぞれ分岐しつつある新たなサブシステム内での過保護的関わりの迷惑と葛藤＞と命名できよう。

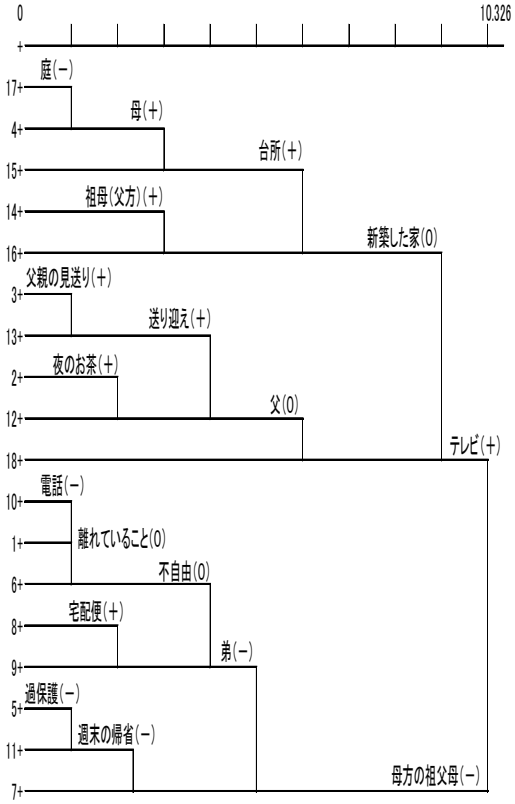


Fig. 1　女子被検者 A の拡大家族の家族史と現在の姉弟の分離・自立イメージ
1）左の数値は重要順位
2）各項目の後ろの（　）内の符号は単独でのイメージ

各クラスターの最終項目の結節

クラスター1 の「新築した家」，クラスター2 の居間にある一家団欒を象徴する「テレビ」，成長してバラバラとなった「母親と弟」だけでなく，被検者

との交流を示すクラスター3 の「(母方の) 祖父母」との結節は家族の歴史的変遷の各段階を象徴する連想項目であると解釈できよう。

＜男子被検者 B のイメージ報告＞

クラスター1 は,「あたたかい」～[落ち着ける]の 7 項目:「弟はわりと明るく, 家族を楽しませる感じ。離れているが, 緊密に連絡を取っており, よく会い, 友達みたいで仲がよい。それで「やさしい」,「楽しい」が出た。一緒にいても気兼ねせず,「落ち着ける」。明るく, 家族を楽しませる感じ。

クラスター2 は,「頼りにできる」～「融通のきく」の 8 項目 :「父と母(両親ともに義務教育教員)との関係では, 父とは, わりと何でも分け隔てなく相談し,「理解がある」,「頼りにできる」,「相談できる」,「許し合える」が近く, 話もする。 母とは,「助け合える」,「理解される」,「融通のきく」が相対的に近い。家族として補い合ったり, 助け合ったりしている。『融通のきく』は書いているときはどれも結びつかない感じだったが, 助け合ったり, 許されたり, わがままを聞いてもらえるという感じではないか」。

被検者 B についての解釈

クラスター1 の解釈 :「弟」だけが「0」項目で, ほかはすべてプラスイメージである。被検者本人の連想項目はないが, 兄弟サブシステムの描写と推定できるもので, ＜家族を楽しませる弟との緊密な友人のような仲の良さ＞のクラスターである。

クラスター2 の解釈 :「父」と「母」いずれも「0」項目イメージであるが, 両親は職業も同じで共働きで, 父親は相談などの支援サポート, 母親は情緒的サポートが近いことが読み取れるが, いずれも両親がサポートする関係である。クラスター2 は, ＜被検者へのサポート内容を示す両親サブシステム＞を描写しているといえよう。「弟」「父」「母」の家族メンバーの項目全てが「0」で＋－の感情がわかないのは, 他者として対象化しているからであろう。その他の連想項目は, いずれも＋である。

各クラスターの最終項目の結節

クラスター1 の兄弟サブシステムの最終項目の「落ち着ける」と, クラスター2 の両親サブシステムの最終項目「融通のきく」の結節は, 被検者 B における家族の現在のそれぞれの機能の恒常的安定を示すものであろう。

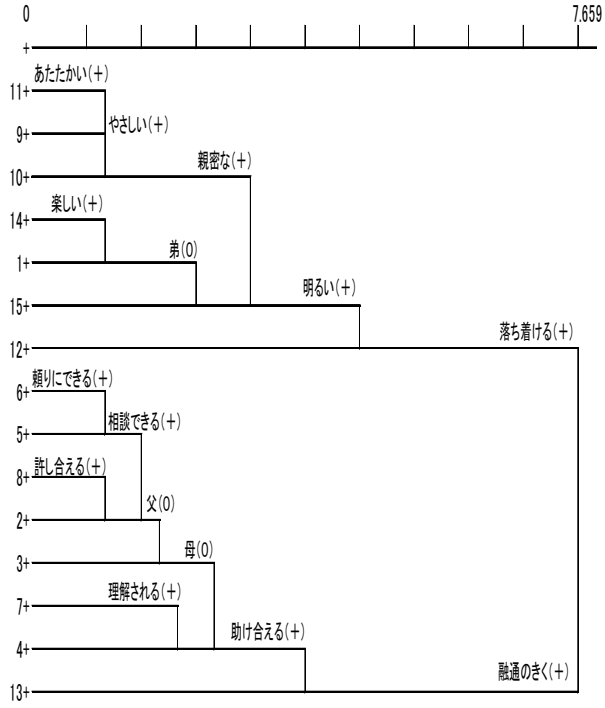


Fig. 2　男子被検者 B の兄弟サブシステムと両親サブシステムからなる核家族イメージ
1) 左の数値は重要順位
2) 各項目の後ろの (　) 内の符号は単独でのイメージ

研究 1 の 2 事例の結果と総合的考察

研究 1 での, 被検者 A では, 拡大家族の過去から, 現在の姉弟の分離独立への葛藤に至るまでの歴史的変遷が鮮やかに描写されている。被検者の連想項目とイメージ報告のリハーサルを検査者が繰り返すことで, 被検者が感じている内界世界へのアクセスが容易となり, 被検者の家族ドラマの歴史的経緯を傍観するかのように, 検査者もまた実感しながら感じるようになった。また, 被検者 B では, 核家族での兄弟サブシステムと, 両親のサポートシステムの恒常的で安定した構造の継続を見いだすことができる。両者の事例を対比することで, 家族の歴史や現在の実態をクリアーに構造分析できたことがわかる。

しかしここで 2 事例についてさらに注目すると, 事例 1 ではクラスター2 と 3 に被検者 A も母親も項目として出現してない。サブシステムは被検者の語りから推量された。事例 2 では, 弟と被検者が緊密で仲良しで友達のようなとの描写はあるが, 被検者 B 本人の連想項目の出現がなく, 兄弟サブシステムであることは, 本人のイメージ報告に依拠することとなった。これらのサブシステムの確定のための家族メンバーの連想が不十分であることが示唆される。

研究２ではこれらの問題も含めてさらに検討していきたい。

4 研究 2　呼称と役割認知を示す１事例

研究２は内藤（2008）の再分析である。

【目的】

研究 2 では，検査実施時に就労している同性と異性のきょうだいがいて，家族の人数が多く家族間の関わりに違いがあり，家族の呼称が複数ある可能性をもつ者を被検者とした。そして研究 1 で問題提起された，家族のサブシステム構造を詳細に吟味することを可能にするため，連想刺激の内容に変更を加え，「家族構成員全員」を一律に連想項目として付加させた。これによって、家族構造やシステムについての新知見を得ることを目標とした。

【方法】

＜被検者＞大学院修士課程進学直前の学部 4 年生女子 C。

＜手続き＞提示された連想刺激文は，「まず，あなた（私）自身を含めて家族の構成員を連想項目としてください。そして，家族のイメージとして，意味あるもの，重要なものとして，頭に浮かんできた言葉やイメージをあげてください。」と教示した。このほかの手続きは，研究 1 と同じであった。(統計処理は HALWIN のウォード法。実施時間は 2 時間 30 分)

＜女子 C の家族構成＞

C は検査実施時点では学部 4 年生で，関西の大学院修士課程に進学直前。一人暮らしでうさぎと同居。

家族について

家族（父，母，姉，兄，祖母の実名）・・犬の実名，うさぎの実名，ハムスターの実名）・・を連想項目としてあげていた。

祖母は大阪に住んでいた。祖母の夫のおじいちゃんは早く亡くなり，おじいちゃんの母親と住んでいた。小学 5 年の時に C は，家族と一緒に，かつて C が育ち，祖母が今住んでいる京都の家に引っ越した。今現在は，C の他の家族は別の所に住んでいるので，父方の祖母は一人暮らしだが，1 カ月弱したら C はこの父方の祖母と同居する。

現在，父は会社員で海外赴任中であり，両親は同居。母は専業主婦。

姉は会社員で，大阪で一人暮らし。兄は，お菓子・ケーキの料理人で修行中。東京で一人暮らし。

犬（○○ちゃん），オスで年齢不明，すでに年取っていて，虐待されてボロボロになって徘徊していたのを引き取った。最近死亡。

うさぎ（○○ちゃん），オス。はじめの名前は「ももちゃん」だったが，近所の子どものウサギも「ももちゃん」だったので変更。学部時代一緒に住んでいたが，卒業して引っ越すので，数日前から京都の父方の祖母の所にいるが，うさぎは祖母に懐かない。

ハムスター（ハムちゃん）は性別不明，昔飼っていたが死亡。

（死んだ動物を含めて C は家族と認知しており，C のきょうだいは就職などでそれぞれが別居。分離，解体しつつある。）

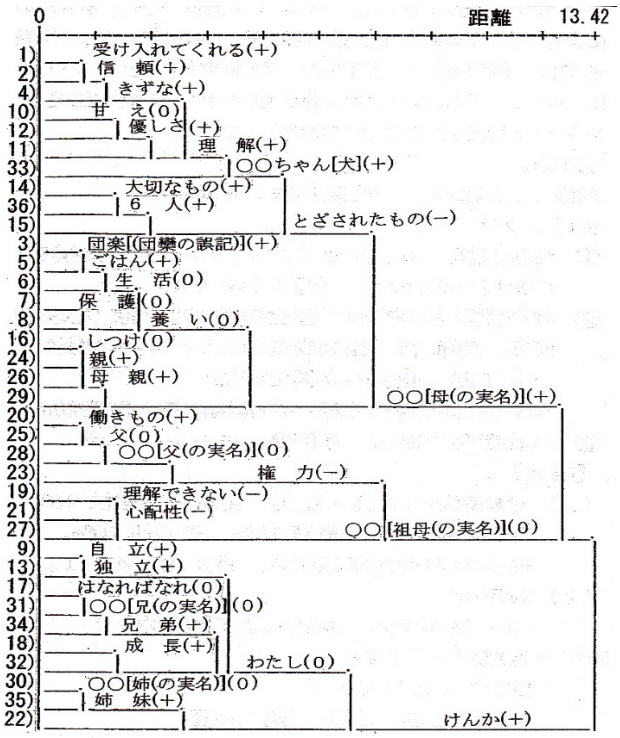


Fig. 3　女子 C の家族史と現在の「きょうだいの自立・独立・はなればなれ」のイメージ

1）左の数値は重要順位

2）各項目の後ろの（　）内の符号は単独でのイメージ

【結果】被検者 C によるイメージ報告

クラスター1 は，「受け入れてくれる」～「○○（母の実名）」までの 19 項目：……温かいもの……，うーん……守られた感じのものです。…うーん　ん……（クラスターに記入された項目を見つめながら）家族ですね。家族のイメージ。……か入れもの，受容，受容してくれるもの。イメージですかね。…うーん，(頭に)浮かんでくる場所とかでもい

いですか？　家のリビング。…やっぱりイメージなんですけど，ちょっと（指で〇く円を描きながら）〇く閉じられた(両手で輪をつくって)こういう感じ。

クラスター2は，「働きもの～〇〇(父方の祖母)の実名」の7項目：えーとぉ……うーん，ちょっと異質な感じのものですね。(上のクラスター1を指して)こちらが中（閉じられたイメージ）だとすると，こちら(クラスター2)は，少し開かれた感じですね。……うーん……うーん　ん……こっち(クラスター1)がさっき〇のイメージと言ったんですけど，こっち(クラスター2)が□なイメージ。不可抗力という言葉ありましたか？　…なにか自分には，うーん，どうすることもできないもの。(目をしばたたかせながら，遠くを見る感じで，口を横に強く結んで，顎に左手をあてたり)…うーん(両手の甲に顎を載せ，両手を組んで)……うーん…何か父と（父方の）祖母のイメージが近いので，その二人の顔が思い浮かぶだけです。以上です。

クラスター3は，「自立」～「けんか」までの10項目：う～ん，……ここにある言葉でもいいですか？自立，独立ですね。……うーん，イメージですよね。イメージ。(両手のひらに顎を載せて）…（両手で髪を梳いて）上のもの(クラスター1と2)からは離れたイメージ。離れていくイメージ。あとは，こっちが…うん。自立，独立とか成長ですね。

クラスター間の比較

クラスター1と2の比較：似ている所？　似ている所，ないですね。……でも生活っていう意味では「養い」とかではあるかも知れない。…うーん　ん……違うところですよね!?　…イメージで違うところですね。イメージで…うーん，上がプラスとしたら，こっち(クラスター2)はマイナス。良いとか悪いとかいうイメージではないんですけど。…こっち(クラスター1)は温かいイメージだとしたら，こっち(クラスター2)は冷たいイメージ。…うん以上です。

クラスター1と3の比較：……うん，(両手で互いに反対の手を押さえながら)同じですよね？　(両手に顎を載せて）　…何かこっち(クラスター1)がプラスだったら，こっち(クラスター3)もプラスなんですよね。うーん……あああ(小さな声で呟きながら)似ているところ，きずな。似ているところ？　イメージでは両方とも〇なんですね。〇というか球体。でもこっち（クラスター1）は，大きくて重い感じですね。こっち（クラスター3）は，ちっちゃくて軽い，軽いもの。…うーん，…以上です。

クラスター2と3の比較：　…うーんとぉ……外を向いていることが同じとこですね。……うーん……イメージですよね!?　イメージで違うところ。…うーん，うん。こっち（クラスター2）は硬くて，不動な感じなんですけど，こっち（クラスター3）はもっと自由な感じです。

＜補足質問＞　[斜体は被検者Cの回答内容]

受け入れてくれる→温かい感じ。信頼→強いイメージ，結束した感じ。きずな→つながり。甘え→ちょっと生ぬるいお湯みたいなイメージ。優しさ→温かいもの，優しさ，さりげないもの。理解→理解は理解です，信頼。〇〇ちゃん（犬）→のほほんとした癒しのイメージですね。大切なもの→かけがえのないもの，代わりのないもの。6人→6人家族。とざされたもの→疎外感，閉塞感，マイナスのイメージですね。団楽（注：団欒の誤記）→楽しく，温かい，居心地のいいイメージ。ごはん→美味しい，団欒。生活→生活のイメージ，家のイメージです。保護→守られたイメージ。養い→義務的感じですか？　しつけ→温かさと冷たさが混じったようなイメージ。親→（浮かばない）。母親→温かい感じですね。〇〇[母(の実名)]→母というよりは一人の人。働きもの→忙しい感じ，しっかりした感じ。父→不思議な，あまり温かくないイメージ。〇〇[父(の実名)]→一家の大黒柱。権力→強いイメージ，自分には操作できないイメージ。理解できない→異質な感じ，わからない。心配性→マイナスのイメージですね。〇〇[祖母(の実名)]→（日頃）実名で呼ばないので何も浮かばない。「おばあちゃん」と呼んだ。おばあちゃんは懐かしいイメージ，想い出，ふるさと，年老いたイメージ。自立→飛び立つ感じ，自由なイメージ。独立→強いイメージですね。はなればなれ→自由な方向に向かっていく感じ，好きな方向に。〇〇[兄(の実名)]→いつもは，呼んでいるのはお兄ちゃん，兄がわたしを心配，努力している，ちょっと頑固。兄弟→けんか，信頼。成長→力強い感じです，伸びていく感じです。わたし→混沌としたイメージ。〇〇[姉(の実名)]→いつもはお姉ちゃんですね。頼れる，しっかりと自分を持っているイメージ，でもち

ょっと抜けているようなイメージ。姉妹→きずなとか信頼，仲良し，けんか。けんか→騒がしいイメージ，そんなマイナスなイメージではないですね。

【考察】被検者 C についての解釈

聴取にあたって，被検者 C は，言いよどみが多く，不安解消と考えられる顎を手の上にのせたり，髪を手で梳いたり，声が小さくなったりが見られる。わたし(「私」被検者 C)は「混沌としたイメージ」であり，第 1 クラスターで取り上げられた，虐待されボロボロになって徘徊していた犬が，囲まれ守られる所で安息し，母に守られ保護されること，第 2 クラスターで働き者の，異質でわからない，コントロールできない父の経済力に依存してきた家族史のもと，第 3 クラスターできょうだいが分離独立していくことへのそれぞれの，無意識の不安や葛藤によって引き起こされていると推測される。はじめての大学の大学院への進学も、不安に関連しているのであろう。

クラスター1 の前半は，「0」項目の虐待でボロボロになった犬に象徴されるように，守るべき大切な家族が隠棲するマイナス項目のシェルターを暗示する「とざされたもの」を除けばプラスイメージである。後半は，「生活」「保護」「養い」「しつけ」の日常生活に関わる支援は「0」項目であるが，他はすべてプラスイメージである。クラスター1 は，前半の 6 人家族を養い，ごはんなどの日常生活を支え保護し，しつけを担ってきた母親を描写した生活イメージの後半からなる。＜シェルターとして閉ざされた輪の中の大切な家族への，母親による生活サポートのクラスターである＞と解釈できよう。

クラスター2 は，唯一のプラス評価である働きもので一家の大黒柱であり，＜経済的に力強くリーダーとして生活を支える父と，異質でコントロールできない近寄りがたい父とのイメージが近い，心配性の一人の人間としての祖母とのサブシステムである＞。

クラスター3 は，クラスター1 とクラスター2 を歴史的経緯として，きょうだい 3 人が，それぞれにけんかもしながら自立・成長を目指しており，現在と近未来の家族イメージである。クラスター3 は，＜けんかしながらも信頼し，それぞれに成長と自立を目指している同胞サブシステム＞である。

クラスター間の比較

クラスター1 はとざされた家族イメージであり，クラスター2 と 3 は，家族以外の社会との関わりを示すものである。

各クラスターの最終項目の結節

クラスター1 の「母の実名」，クラスター2 の「祖母の実名」は，それぞれのクラスターの機能を象徴する人物であり，第 3 クラスターの「けんか」は，自立，成長を目指している同胞サブシステムの現在の葛藤と自立を象徴するものであるといえよう。

全体的考察：個人別普遍性と共通普遍性

研究 2 で，注目されるのは「家族の呼称」である。日本では，末子を中心として，末子は名前で，上の子どもは末子以外の家族からも「お兄ちゃん（2 番目の兄である「にあんちゃん」という呼び方もある）」「お姉ちゃん」と呼ばれ，個人としてよりも社会的役割機能「保護する，リーダーシップをとるなど」を意識させる。同時にメンバー同士でもお互いを「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」「お父さん」「お母さん」「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ぶようになる。成長して何歳になっても年齢に関係なく、互いに社会的役割関係そのものを意識させる呼び方である。横谷(2014)は，家族内呼称と家族関係について，鈴木(1972)の理論的考察を次のように引用している。「鈴木は，家族内呼称がそのまま家族の役割関係を表すことを示した。例えば，鈴木は話し手が聞き手を『お兄ちゃん』と呼ぶ場合，聞き手に兄としての役割を求めると同時に，話し手に弟もしくは妹として役割を求めていることを理論的に示した。また，この呼称によってきょうだいの役割関係が維持されると考えている」。実際，家族内呼称の変化によって家族の役割関係が変化する例が報告されている(石井，2005；渡辺，1998)。本論文でも研究 2 で，被検者 C がクラスター3 で語っている「お姉ちゃん」「お兄ちゃん」との関係がそうである。姉，兄のいずれも，末子である妹 C を保護し指導しようとする役割行動をとっている。さらに家族同士でも，実名に「○○ちゃん」をつけるのではなく，互いを「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」と役割関係で呼び合っているのが通例である。この考察を敷衍するならば，子どもが生まれての「お父さん」「お母さん」と，孫が生まれての「お爺ちゃん」「お婆ちゃん」の呼称変化とその呼称持続と役割関係についても，同様の推論が成りた

つ。通常は意識することなく使っている，「お父さん」「お母さん」の呼び方は子どもが親を呼びかけるときだけでなく，父親と母親が相手に呼びかけるときにも使っている。同様に、祖父と祖母についても，互いを「お爺さん」「お婆さん」と呼びかけるのが多い。因みに韓国では，母親が花子という名の娘と話しているとき，母（妻）が父（夫）を指すときは，「花子のお父さんはね‥」と呼ぶ。他方日本では家族内でも，所有格を省略しており，当事者同士の関係でも，独自の一個人としての関係よりも一般化した役割関係の方が中心である。同時に家族を個人名で呼んだり，クラスター3 での「兄弟」のようにサブシステムを構成する内容を連想項目としたり，現実の役割関係の呼称（お母さん）とメンバー個人としてのイメージ「一人の人間として」のように，二重以上の機能をもつ家族メンバーとの重複関係を意識することがあることを示している。家族における複数役割機能関係の呼称と意識に注目する必要があろう。

また，研究 2 では，動物なども家族としてイメージされることを示している。ロボットなども含めて，今後の家族イメージ研究で取り上げられる必要があろう。

さて，本研究では，研究 1 のように，連想項目を被検者の完全自発型から，研究 2 のように，連想反応の一部を検査者が提示することで， 被検者にはこれまで連想されることなく気づかれることのなかった関係内容（例えば「一人の人」とみなすときの母と被検者 C「私」との関係）について吟味することが可能であることが示唆された。そして，解釈を進化させるためのプロセスにおいて，検査者と被検者との相互主観的交流，対話の循環過程が重要であることが改めて確認されたといえよう。

最後に研究 1 と研究 2 で注目されることを要約すると,研究 1 では共通普遍に言及することなく，家族の構造の独自性と唯一性を中心に明らかにされていた。他方研究 2 ではさらに，祖母や母や姉や兄のように，呼称に沿ったリーダーシップがみられる一方で，実名の呼称を用いるとイメージが浮かばないとの報告が示すように，日本社会では，家族関係の中心は所有格を抜きとした呼称を核とする役割認知の関係であることを示唆していた。これは暗黙裡のスキーマに接近する PAC 分析だからこそ，連想反応を検査者が追加することで得られた知見であるといえよう。これらは PAC 分析という技法によって可能になったものであるが，新たな変数の発見や仮説や理論の創成に適合しているといえよう。

井上(1998)は PAC 分析の機能として 11 の機能を指摘した。そのうち本研究の被検者たちにもみられた自己明確化は、「明確化機能」として位置づけられている。また「実務説明機能」は製品開発・商品開発・政策の企画立案者などの，第三者へのコンサルテーションのツールとして有用なことを指摘するものであろう。

引用文献

石井宏祐　2005 「役割」論再考—インタラクショナル・ビュウから役割を考える　現代のエスプリ, 456, 209-220.

伊藤隆二　1996　展望／教育心理学の思想と方法の視座　「人間の本質と教育」の心理学を求めて　教育心理学年報, 35, 127-136.

井上孝代　1998　カウンセリングにおける PAC (個人別態度構造)分析の効果　心理学研究, 69, 295-303.

石原　宏　2006　統計的研究と個　河合俊雄・岩宮恵子編　新/臨床心理学入門　こころの科学　日本評論社, 122-126.

内藤哲雄　1992　家族への事例的態度構造分析　日本心理学会第 56 回大会発表論文集, 234.

内藤哲雄　2008 家族イメージの PAC 分析 : PAC 分析によるサブシステムの構造分析　日本教育心理学会総会第 50 回総会発表論文集, 336.

鈴木孝夫　1972　日本人の言語意識と行動様式　思想, 572, 102-113.（横谷[2014]より引用）

渡辺友左　1998　「呼称」という論点　(特集人の呼び方　日本語学, 17, 9, 4-11.

横谷謙次　2014　家族内呼称の心理学 : 集団の構造と機能への呼称の関与　ナカニシヤ出版

家族の PAC 分析　― 個人別普遍性と共通普遍性の探索 ―

PAC Analyses of the Families　― Investigation for Personal and Common Generalities ―

【執筆者】

内藤哲雄　Tetsuo Naito（明治学院大学国際平和研究所　研究員）

【要旨】

本研究では，被検者から得られた連想反応とクラスターのイメージに基づいて，個人独自の家族イメージである個人別普遍と，先行研究を参照しつつ共通普遍の探索を試みた。本研究では，被検者による連想項目及びクラスターのイメージを重視する。しかし被検者の報告の全ては，操作的で客観的に得られた外顕的行動である。また，共感的イマージネーションと共感的理解を重視する。そして，研究者の共感的感性と共感的実感を拠り所に，本研究で見いだされた知見について論考した。研究 1 では，拡大家族と核家族の 2 事例を比較し，拡大家族では過去から，現在の姉弟の分離独立への葛藤に至るまでの歴史的変遷が鮮やかに描写されていた。他方の核家族では，兄弟サブシステムと，両親のサポートシステムの恒常的で安定した構造の継続を見いだすことができた。両者の事例を対比することで，家族の歴史や現在の実態をクリアーに構造分析できたことが明らかとなった。研究 2 では，兄や姉の呼称が庇護や指導の行動を誘導すること，また実名の呼称を用いるとイメージが浮かばないとの報告のあることが根拠となるように，日本の家族関係の中心は共通普遍である役割認知の関係であることを示唆していた。ついで，結果を追体験し，共感的に説明する方法が，被検者の自己明確化と製品開発・商品開発・政策の企画立案者などの第三者へのコンサルテーションに有効であることに言及した。

PAC Analysis (analysis of personal attitude construct) is a method for analyzing a case study that leads to diffusion investigation. We ask an informant-free association about a certain theme. Stimulus sentences are meditated by a researcher at first which facilitates the subject to find out new critical variables in its theme. The subjects estimate the similarity distance of each associate item. Now, we make use of cluster analysis. And we ask the informant to describe the imagery of each cluster. In this research, we investigate personal and common generalities. In the end, the researcher interprets all the data toward originality and outdistance the pack, consulting with previous studies. We got much of reports about association items and images of clusters from the informant which included an adaptable room, for instance, ambiguity, diversity, degree of precision, number of significant figures safety factor, etc., but those reports consisted of all objective overt behavior. We also think a great deal of sympathetic imagination and empathetic understanding. So, we can propose new academic concepts, which are derived from "intersubjective validity of sympathetic sense" and "empathic convincing." At last, in this technique, we construct new scientific hypotheses and theories, based on sympathetic sense and empathic convincing. It means PAC Analysis is toward originality and outdistance the pack. In addition, we present that we can make use of PAC Analysis as a consultation tool for the third person.

【投稿受理日】　2023 年 9 月 29 日

【掲載決定日】　2024 年 3 月 10 日

本研究は，2023 年 4 月 9 日(日)10：00～12：00 に Zoom で開催された PAC 分析学会主催の講演(講師：内藤哲雄)の資料を再考察し，まとめたものである。

【短報】

公的サービスとして実施されているある地域日本語教室の課題
－日本語支援ボランティアの語りより－

今城淳・古田梨乃

1 はじめに

出入国管理局によれば,2022 年の在留外国人の数は過去最多の 296 万人であった。2018 年の入国管理法の改正，新型コロナウィルスの渡航への影響の減少から,今後一層外国人住民の増加が予想される。また，少子高齢化が劇的に進行する日本は外国人住民の支えが今後さらに必要になるだろう。そこでは,「外国人を含め誰もが対等・平等に参加できる社会にすることが双方の人々にとって生きやすい社会」（山田, 2018）である多文化共生社会実現が求められ，地域日本語教室は，その実現の拠点の一つである。教室には，外国人労働者やその家族，日本人配偶者を持つ者など様々な背景の在留外国人と日本人が集まり，日本語の支援や異文化理解のための活動などが行われているからである。地域日本語教育は多くの場合，日本語支援ボランティアによって運営されているため，その数の確保が多文化共生社会実現のためには不可欠だが，その新規参加のなさや，高齢化，または定着の難しさなどの理由で，ボランティア人材の確保が課題となっている（文化庁, 2022)。

ボランティア人材の確保のためには，地域日本語教育の問題点を明らかにし，そこがボランティアにとって継続的に関わりたい魅力的な場所となるよう改善を図ることが必要である。本研究においては，地域日本語教育に関わる日本人ボランティアに対しインタビューを行い，地域日本語教育の改善点を明らかにしたい。

地域日本語教育は地域や外国人住民の役に立ちたいというボランティア精神によって支えられていることがほとんどで，それで生計を立てている者が非常に少ないことから，本稿では，有償・無償を問わず地域日本語教育で外国人住民を支援する者を「ボランティア」と呼称する。

2 先行研究

地域日本語教室においては従来外国人住民の支援に焦点が当てられてきた。しかし，日本人（ボランティア）が教え，外国人住民が教えられるという一方的関係ではなく，ボランティアも外国人住民から学ぶ双方向的関係を築き，国籍を問わず全ての市民に対する市民性形成の教育の場として機能するのが地域日本語教室の理想だという考え（萬波, 2019）に基づけば,外国人への焦点だけでは不十分であり，日本人（ボランティア）側の立場から地域日本語教育の意義や課題を検討することも必要である。

ボランティアに着目した研究はきわめて少ないが,小島（2014）はあるボランティアにインタビューを行い，本人の自己成長感が活動の原動力であったことから，ボランティア人材の確保のためには活動で得られる自己成長（自己実現）という「報酬」を明示することが有効だとしている。村田（2023）ではあるボランティアのインタビューから，教室が閉鎖的な環境である場合，それは新しい価値観に触れることを妨げ，活動の固定化を招き，新参ボランティアの継続的参加が難しくなることが明らかになったことから，コーディネーターや日本語教育専門家が地域日本語教育のキーパーソンに働きかけることが必要だとしている。

本研究では，これら先行研究のボランティアの継続的参加が課題だという問題意識のもと，地域日本語教育ボランティアの視点からの現状を明らかにし,具体的な改善の方策を考えたい。そのため, 意識下・無意識下の態度構造を引き出すことができる PAC 分析が最適だと考え，まず，あるボランティアの PAC 分析を行い, 課題点の傾向を探る第一段階とした。

3 方法

被検者：本稿では以下 P と呼ぶ。P の希望により，匿名性確保のため背景の詳細記述は割愛するが，教育機関での留学生への日本語教育を行っている。地域日本語教室には延べ 6 年間関わっており，以前から筆者らが教育についての相談を受けていたことから，今回調査協力者に選んだ。本稿の地域日本語教室は，とある市が公的サービスの一環として主催しており，調査時点で約 80 名が無料登録・利用している。学習者は約 30%が技能実習生で，その他就労

者，留学生，主婦/主夫など多様な背景の学習者がいる。ボランティアの年齢は 20 歳から 50 歳以上までと幅広い。クラスはレベル別で，授業は『みんなの日本語』を使って週 1 回（90 分）行われている。一つのクラスを何人かのボランティアで順番に教え，半年に数回全体会議がある。当該市は，面積が広いが，公共交通機関が不十分であるため，通学が困難になる学習者もいる。

提示刺激：教室の改善を目的とし，現在 P が意識下，無意識下のボランティアとしての喜びや問題，ストレスなどの態度構造を引き出すため，以下を連想刺激文として提示した。「これまでに地域でボランティアとして日本語の先生をし，とまどったこと，面白かったこと，難しかったこと，楽しかったことなどはありますか。また，どんな人が，地域のボランティア教室にとって「良い日本語の先生」だと思いますか。」

手続き：内藤（2002）の PAC 分析の実施方法に従い，データ収集及び分析を行った。今回は地理的制約のため，Zoom を使用したオンライン面談を行った。一回目はまず，連想刺激文の提示，読み上げをし，連想刺激からの自由連想文（語）入力，各連想項目についての重要度と±イメージの入力，連想項目間の類似度評定を約 40 分かけて行った。その後，調査者が類似度距離行列によるクラスター分析（ウォード法）を行い，デンドログラムを作成した。二回目の面談は，デンドログラムを共有画面に映し，クラスター解釈を行った。まずは調査協力者に各クラスターについてのイメージを聞き，各クラスターの命名，そして各クラスター間の関係，各連想項目についての説明をしてもらい，最後に，各連想項目の±の評価の変更の有無の確認を行った。所要時間は約 2 時間であった。倫理的配慮については，協力者に研究目的，随時中断が可能であること，記録・結果公表においての匿名性の確保を口頭と書面で確認し，同意書を得た。なお，本研究は筆者所属の大学の研究倫理委員会の承認を得ている。

使用分析ソフト：データ収集には PAC-Assist2（土田, 2022)を用い，クラスター分析には HAD を用いた。

4 結果

P のデンドログラムを図 1 に示す。クラスターは大きくは 2 つ，細かくは 4 つに分かれた。各連想語後の数字は重要度の順番，＋－記号は連想語への評価である。

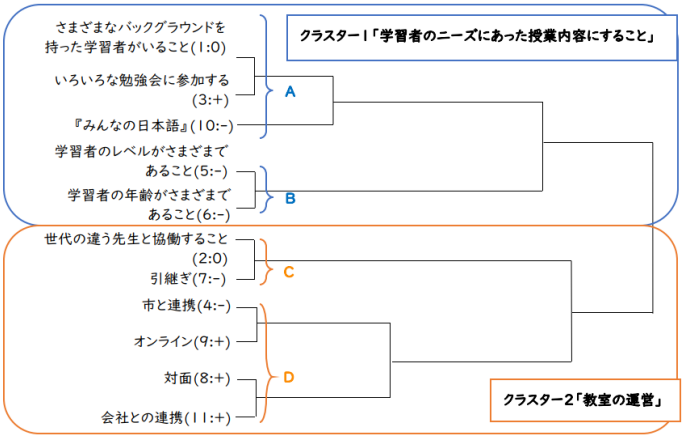


図 1　P のデンドログラム

【クラスター1】

クラスター1 は，学習者のニーズにあった授業内容にすることが必要だということでまとまっている。P は，熱心なボランティアは自主的に勉強・研究を行い，学習者の多様な背景やニーズに合った教材や活動を考案し，その使用を運営側に提案するが，結局それは認められず，どの学習者に対しても『みんなの日本語』を使わなければならなくなるのは疑問だと述べた。当該教科書は 2 巻からなり，1 冊 100～150 時間をかけて徐々に初級文型を積み上げる。この点，一般的に 1 週間に 1 回，1～2 時間程度のみの地域日本語教育にはなじまないが，世界で最も使用される教科書で，ある程度確立した教授法や充実した副教材などから，慣習的に地域日本語教育で用いられている場合も多い。しかし，現在ではインターネット上に無料で地域日本語教育向けの教材が公開されるなど，生活者の日本語教材は充実してきている。

A の「さまざまな背景を持った学習者がいること」については，「難しいという点では－だが，それは地域日本語教育の特徴であり，それを活かすことができれば異文化理解のために役立つという意味において＋」ということで，±ゼロ評価をつけている。その一方で，B では，「レベルの違いがあるので，プレースメントがうまくいかないと，受講者があっち行ったりこっち行ったりになってしまう」，そして年齢の違いは「年上の方を教える時に怖い時があった」と

述べ，学習者のレベルと年齢がさまざまであることについてはー評価がついている。

【クラスター2】

クラスター2は教室の運営面についてである。

Cでは，ボランティアの世代が，日本語教育を学んでいる学生，30～40代の中堅，年配の3つに分かれ，熱心さや考え方にも違いがあることや，ICTスキルが違い，指導方法や好む引継ぎの方法や内容が異なることが説明された。しかし，この違いは「大変なこともあるけれど，外から見ると，学び合いの機会になっている」ともPは述べていた。一方，Dは，実施に関してのボランティア以外の団体の関わりについてである。まず，運営者である市の選択がある。Pは，コロナ禍でのオンライン授業の開始や収束後の中止の決定において，市との連携が難しいことを指摘した。天候条件や受講者の忙しさに対応するため，ボランティアたちは現在もオンライン授業の継続を市に訴えているが，一度オンライン授業が終了して以降，「『検討の材料とさせていただきます』と言われ続けている」とのことで，まだ再開は叶っていない。そして，対面教室での技能実習生受け入れ企業の役割にも言及した。Pは，当該教室では，受講者の3割が技能実習生だが，企業によって教室への自家用車での送迎などの協力があり，それが受講者の継続的参加とも関係するだろうと述べた。

また，「見学に来てくれた会社の人が『こんなに良い教室ならきちんと通わせないと』と言ってくれたのは嬉しかった」との発言からは，ボランティアと技能実習生受け入れ企業との交流がボランティアのモチベーションを向上させるとともに，受け入れ企業の技能実習生の支援のモチベーションも向上させることがうかがえる。

【クラスター1とクラスター2の関係】

どちらかがより重要ということではなく，両方とも地域日本語教室には欠かせない。しかし，Pは「どれだけ上半分（クラスター1：授業内容）を良くしようと思っても，下半分（クラスター2：運営）に通じない場合もある」と述べる。

5 総合考察

今回Pが感じている問題点の所在が，学習者に関することと運営に関することの2点に明確に分かれていることがわかった。

まず，学習者に関する要素について検討する。地域日本語教室では，学習者の多様な日本語レベルや年齢に対応するために，的確なプレースメントが求められる。そして，教室においては，学習者の背景の多様性を活かし，学習者に一方的に学ぶことを求めるのではなく，ボランティアも含めた教室参加者が互いに理解し合う活動につなげることもできる。また，学習者の日本語学習のニーズを満たし，社会参加のために必要な支援をするために，学習者，教室，地域の各特性に適した教材や活動を選定する必要もある。しかし，現実には，Pが関わる教室のように，それらの特性を活かすことなく，同じ教科書が画一的に使われている場合も多い。ボランティアといえども，熱心な者は勉強会などで学ぶが，より良い教室にしようと多様性への対応を学べば学ぶほど，その画一的教え方に疑問を持つ。よって，クラスター1からわかる課題は，プレースメントの難しさと，画一的な教え方，特に教科書からの脱却であろう。

次に，運営面に関することである。こちらは，ボランティアの努力や行動のみでは変えられない要素を含む。運営者の理解，技能実習生がいる場合は受け入れ企業の協力が不可欠である。また，ボランティアにもさまざまな背景があり，その多様性が学び合いへの可能性になると同時に課題にもなる。一般的に，若い世代はオンライン教材の使用や，教材作成や引継ぎなどでのICTの活用にも慣れている。一方，ベテラン世代はその経験の豊富さからさまざまな学習者への対応に慣れていることが多く，また，地域日本語教室で必要な地域情報にも詳しいことが多い。さらに，Pは年上の学習者を教えるのが怖かったと述べていたが，ボランティアの年齢層の幅広さから，学習者にとって適任のボランティアの割り当ても可能であろう。世代による価値観や慣習の違いが対立を招くのではなく，長所を学び取り入れることで互いに成長できるような仕組みがあることが望ましい。

加えて，地域日本語教室では，学習者の就業・生活状況や教室までの交通手段などの異なりが大きいことから，教室の形態に柔軟に対応できる組織体制であるかも課題であるようだ。

以上のような課題については，村田（2023）のイ

ンタビュー結果にも，本調査の結果と同じく，『みんなの日本語』を常に使う必要があることや，ボランティア間の運営が非民主的であることが問題として提起されており，他の地域の日本語教室にも共通の課題である。

これらの要素から，地域日本語教室には多くの特性と課題が存在することがわかる。学習者の多様性への対応，教材の選定，ボランティア間や教室とその他の機関の連携の適正化と強化などが，教室の成果に影響を及ぼす要因である。今回のケースでは，学習者への適切な対応，ボランティア間・市・技能実習生受け入れ企業との協力体制を築くことで，より質の高い地域の日本語学習環境の構築が期待される。

6 今後の展望

今回の P の PAC 分析からわかった課題の改善策としては，以下のような提案が行える。まず，各教室の地域特性，学習者のニーズに合わせた教材の選定が必要である。そして，立場の違う人々の協力体制のため，運営者，ボランティア，技能実習生がいれば受け入れ企業の間で，またボランティアの異なる世代間での勉強会や交流会の開催が考えられる。円滑な運営のために引継ぎ等でオンラインツールを活用することもできるだろう。教室の形態に関しては，ポストコロナにおいても，オンライン，対面授業両方の長所短所を考慮しながら各教室の状況によって使い分けられると，学習者，ボランティア両者にとって気軽に参加しやすくなるはずだ。

P は最後に「インタビューを受けてよかったです。自分の中でもやもや考えている問題が整理された感じがしました。」と感想を述べた。このことから，PAC 分析でのインタビュー自体がボランティア自身のエンパワメントにもつながると考えられる。PAC 分析によるボランティアへのインタビューに可能性，希望を感じた。

今後，異なる地域でのインタビューも行い，地域日本語教室が共通して抱える課題をあぶり出し，改善策を提案，実行していきたい。また，今回は地域日本語教育の改善すべき点のみを論ずることとなったが，ボランティアが地域日本語教育に関わるのは「自己成長性」（小島，2014）や，その他の動機があるからである。次回はこのボランティアの魅力も明らかにし，市民にアピールすることで多文化共生を担う人材の確保につなげていきたいと考える。

引用文献

小島佳子（2014）「日本語母語話者が地域日本語教室に参加する意義―日本語ボランティアの活動参加継続につながる動機付け―」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第 3 号 pp. 101-110

土田義郎（2022）PAC 分析支援ツール PAC-Assist について. pp.17-28, PAC 分析学会（編）PAC 分析：支援ツールでここまでできる［PAC 分析研究・実践集 3］ナカニシヤ出版

内藤哲雄（2002）PAC 分析実施法入門［改訂版］ナカニシヤ出版

文化庁（2022）「地域における日本語教育の在り方について（報告）」 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93798801_01.pdf

萬波絵里（2019）「市民性形成をめざす地域日本語教育の学習活動におけるファシリテーターの発話機能―成員カテゴリーの変化に着目した会話分析から―」『言語文化教育研究』第 17 巻 pp. 88-109

村田竜樹（2023）「日本語支援ボランティアの「教える」活動はどのように形成されるのか―当事者のライフストーリーからの考察―『名古屋大学人文学フォーラム』第 6 号 pp. 229-244

山田泉（2018）「「多文化共生社会」再考」松尾慎編著『多文化共生―人が変わる，社会を変える』凡人社

公的サービスとして実施されているある地域日本語教室の課題－日本語支援ボランティアの語りより－

Challenges in a community Japanese language class as a public service - Insights from a Japanese language volunteer’s narrative -

【執筆者】

今城淳　Jun IMAKI　（山梨学院大学）

古田梨乃　Rino FURUTA　（新潟大学）

【要旨】

多文化共生の重要な役割を担っている地域日本語教室の日本語支援ボランティアに対し，課題の傾向を探るためにPAC分析を行った。その結果，被検者の考える教室の問題点は学習者と運営に関することの2つに明確に分かれた。地域日本語教室がボランティアにとって継続的に参加したい魅力的な場となるためには，ボランティアの多様な背景を活かしながら，学習者プレースメント，教材選定，教室実施形態などに関し，柔軟に学習者の多様な背景やニーズに対応できる組織体制であることが望まれることがわかった。

A PAC Analysis was conducted to explore the challenges faced by volunteers providing Japanese language support in community-based Japanese language classes, which currently play a crucial role in a multicultural coexistence society. The results revealed two distinct areas of concern: issues related to learners and operations. Our findings indicate that to make these classes more appealing for volunteers to sustain their participation, it is essential to establish an organizational structure that flexibly accommodates diverse backgrounds and needs of learners. This involves addressing learner placement, material selection, and class implementation while harnessing the diverse backgrounds of volunteers.

【投稿受理日】　2023 年 9 月 13 日

【掲載決定日】　2024 年 2 月 7 日

第16回室蘭大会抄録

ホームステイ交流に関する認識のPAC分析
－日本人ホストの受け入れ経験による比較－

愛知県立大学大学院国際文化研究科　木戸志緒子

key words：異文化交流・ホームステイ・PAC分析

1　はじめに

1980 年代後半から地域の国際化が推進され、2006 年から多文化共生推進プランとして「住民の異文化理解力の向上」が挙げられている。具体的な施策では、「多文化共生をテーマにした交流イベントの開催」が示されているが「その場限りの『国際交流』(ハタノ 2006:64)として「安易な『異文化理解』」(植田 2006: 52)に終わっているという指摘がある。2008 年に文部科学省が策定した「留学生 30 万人計画」は 2020 年に達成 (2019 年 312,214 人)され、留学生の社会的、心理的異文化適応のために、日本人学生や地域の人々との交流が重要(横田, 白土2004)であるが、両者の関係が進展しづらいと指摘されている。

留学生が地域の人々と異文化接触する機会としてホームステイ交流がある。留学生に関しては、日本語教育の分野でその有効性が報告されている(鹿浦 2007 ほか)。受け入れホストに関しては、アカデミックな観点からの研究例は少なく、体験談や経験則の報告が中心となっている。その中では、今まで当たり前に思っていた日本文化を改めて見つめ直し、価値観が広がる (三間 2003)ことや子供の反応を通して国際的な交流という自分達の文化的実践について認識が促進された(鈴木 2000)という報告がある。デメリットとしては、異文化接触の「量」が増えても「質」の深化がなければ、「自らコミュニケーションを行いたい」という基本的な　動機に結びつかない(三間 2003)、相性がうまくいく場合はよい結果を生むが、コミュニケーションがうまくいかないと日本の印象、留学生の印象を悪くしてしまう(鹿浦, 武田 2000)。さらにホームステイ終了後のアンケートでは、異文化理解のためによかったという回答が意外と少なく(鈴木 2000)一度きりの継続性のない体験になってしまう可能性が高い(廣田, 岡 2009)ことが指摘されており、調査対象者については、受け入れるホストの世帯を構成する成員が一律に受け入れ家庭として扱われる (奥西、田中 2008、鹿浦 2007)傾向がある。

本論では、ホームステイを受け入れる日本人ホストが異文化交流にどのような認識を持っているか、個人別態度構造分析(以下、PAC 分析)を行い、異文化交流に対する姿勢、ホームステイ観を調査した。調査対象は受け入れ経験が数回のホストと 20 年以上にわたり多数の受け入れ経験をもつホストとし、ホームステイ交流の経験による認識の比較を行い、家庭に招き入れて交流することの意義および課題を明らかにすることを目的とした。

2　方法

調査期間：2019 年 8 月～2022 年 8 月
調査方法：
①協力者 A、B、C は対面で 60 分～90 分
②協力者 D、E、F はオンラインで第一回は類似度比較まで 60 分、第 2 回は作成済みのデンドログラムを基にして聞き取りを 90 分実施。事前に協力者に Zoom ウェビナーの URL を伝えておき、調査日の予定時間に調査者、協力者共にそれぞれの自宅の個室からアクセスした。研究説明および倫理的配慮に関するワードファイル、PAC-assist2 の入力画面は共有機能を利用し同じ画面を両者が見られるようにした。調査内容を協力者の承諾を得て、ウェビナーの機能を使って録画し、後日テープ起こしをした。

倫理的配慮については、以下のプロセスを経て詳細な説明と手続きを踏んだ。調査開始前に協力者に研究目的および 60~90 分の調査中、中止・中断はいつでもできること、調査中の記録・調査後の結果の公表においてプライバシーを保護することを説明しながら確認し同意書を取り交わした。D、E、F については、ウェビナーの共有画面を使用し、協力者の注釈を有効化し、手書き入力機能で同意項目にチェックを入力してもらった後、協力者、調査者の両者が署名をし、その場でそれぞれのパソコンあるいは携帯に保存した。

PAC 分析の手続きとしてまず、あなたは「外国の人をホームステイとして自分の家で受け入れること」について、どのようなことを感じたり考えたりしますか。今までホームステイをしたことのある人や、自分の経験したことで印象に残っているのはどのようなことですか。頭に浮かんできたイメージや言葉を挙げて下さい」という連想刺激文を調査者がゆっくり読み上げた。次に、協力者に連想語(文)、重要度順を言ってもらい、調査者が PAC-assist2 に入力し、類似度比較の入力は、協力者に確認しながら調査者がカーソルを動かし行った。全ての解釈が終わった後に各連想項目単独のイメージを＋、0、－で言ってもらった。分析ソフトは、PAC-assist2、統計ソフト R を使用した。

協力者は愛知県 X 市在住でホームステイ受け入れ経験のある日本人 6 名である。協力者の詳細を表 1 に示す。

3 結果

表1. 協力者の詳細

	年齢	性別	受け入れ経験	受け入れ時の家族構成
A	57	女	1回	姑・夫・本人 娘・息子
B	53	女	1回	夫・本人 娘・息子
C	54	女	5回	夫・本人 娘・息子
D	55	女	30回以上／20年	姑・夫 本人・息子
E	60	女	100人以上／30年	夫・本人 娘2人
F	60	女	20回以上／20年	夫・本人 娘2人・息子

以下は協力者6名のデンドログラムと発言の要点である。クラスターはCL、協力者の発話は「 」、図中デンドログラムの右の数値は重要度順、( )内の符号は単独のイメージを示す。

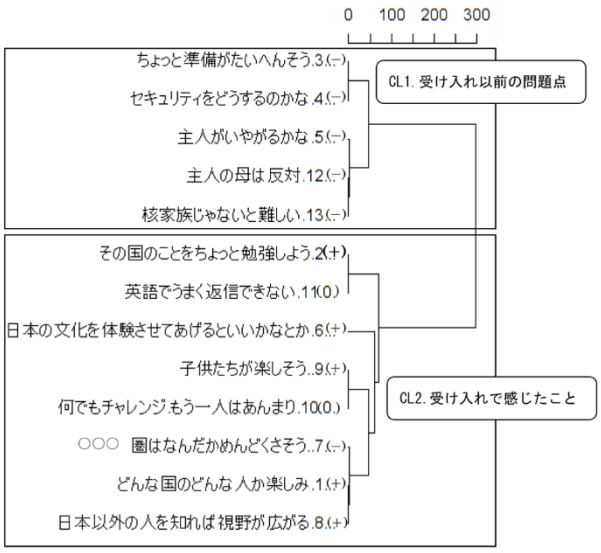


図1. 協力者Aのデンドログラム

Aは CL1【受け入れ以前の問題点】と CL2【受け入れで感じたこと】で準備段階の不安が大きく、受け入れ後はプラスイメージが優位だが、受け入れ以前はすべてネガティブである。語りでは、姑の反対が強く「核家族じゃないと」難しく「思うようにいかない」、「何度も話はあったけど」受け入れができなかったと悔やむ発言が多くみられた。

Bは、CL2【お客様なのか子どもなのかの違い】について、部屋が「個室という感覚」のゲストに対しBは「子供部屋」の感覚で世話をして、日本語や日本の習慣を教えこもうとしたためゲストが部屋にこもってしまった。Bはハレの日と捉え「ホストとしての使命感というか、気負い」があったと認め、CL1【体験しなければ得られなかった感覚】でゲストとのトラブルを経て、ゲストが求めていたCL3【憧れの日本文化】を楽しんでもらうことが最も重要だということに気づきホームステイ観が変容したと語った。

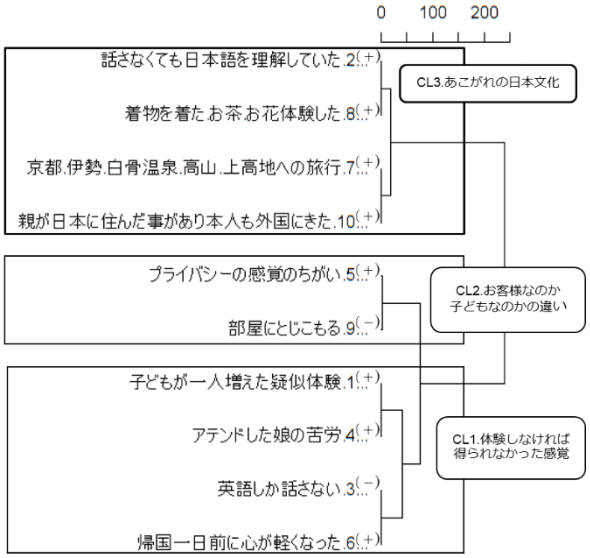


図2. 協力者Bのデンドログラム

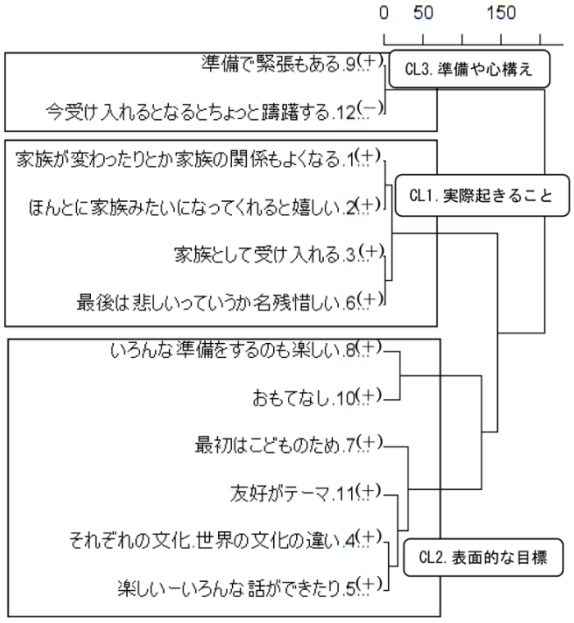


図3. 協力者Cのデンドログラム

Cは、12項目の内11項目がプラスイメージで受け入れを楽しいと思っているが、友好というテーマはCL2【表面的な目標】で、CL1【実際起きること】の中で家族の変化が最も重要であり「家族の関係が良くなること」を期待していた。

D は、CL1【家族として受け入れるスタンス】で環境作りを「家族全員で頑張る」ことを重視していた。「自然体で受け入れられる」が「長いとイベントではなく生活になる」ため、ゲストが「日本文化を感じているか」という不安と食事作りの不安があった。CL2【ホームステイが成功するために】は、

最初に家族内でのルールを知らせて困ったときははっきり言うことが必要だと語った。

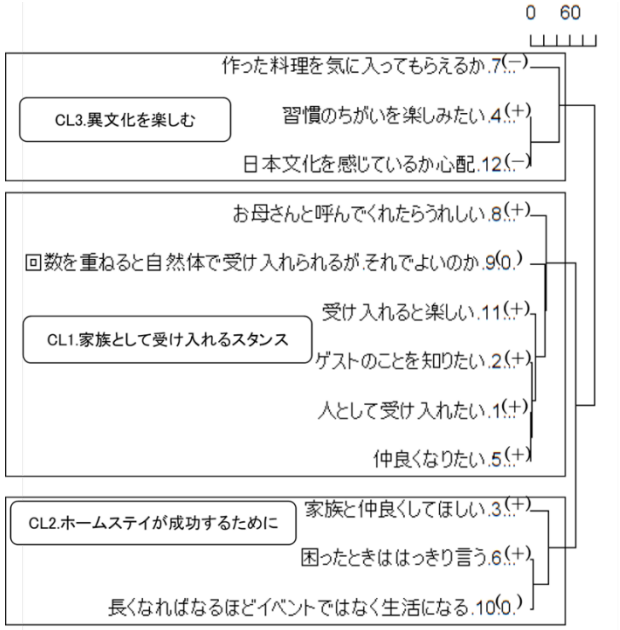


図4. 協力者Dのデンドログラム

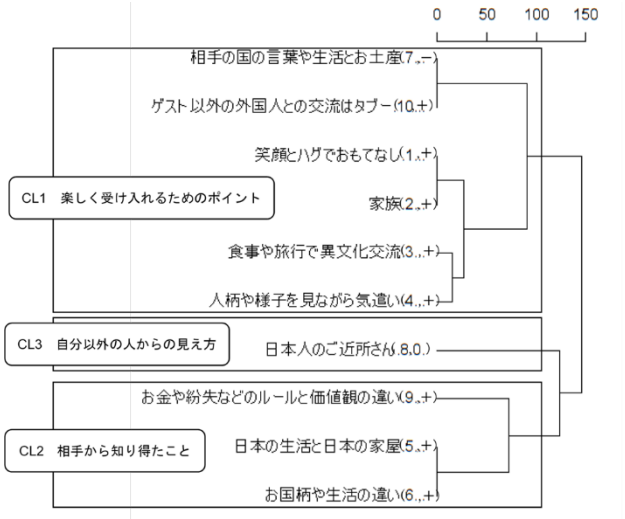


図5. 協力者 E のデンドログラム

E は、CL1【楽しく受け入れるためのポイント】で「笑顔とハグで緊張したゲストの気持ちが解けていく」経験を重要度 1 位に挙げた。滞在中に在住外国人から悪い誘いや影響を受けてホストとの人間関係に弊害が出たため「ゲスト以外の外国人との交流はタブー」と考え、盗難の被害も語った。E は、トラブルも CL2【相手から知り得たこと】と考え、価値観の違いを受け入れ、家のルールを伝えて改善していった。また、近所の人から「黒人」に対する「差別的な発言を聞きショックを受けた」ことで CL3【自分以外の人からの見え方】に気づいたが「受け入れたい気持ちが大切」だと考えて続けた。

Fは、CL1【家族との触れ合い】が一番重要で、言葉は交流の弊害になると思っていたが、「自分で壁を作っていたから」だと気づいた。CL2【ゲストからもらった思い出】は「形のない宝物」であり 世界情勢が悪いときでも市民レベルでは温かい交流ができると考えていた。CL3【禍転じて福と為す】では、ゲストが自転車事故にあったときのネガティブなイメージが現在も残るが、滞在中にゲストが自分から手伝うようになり「成長がみられた」ことはプラスとした。

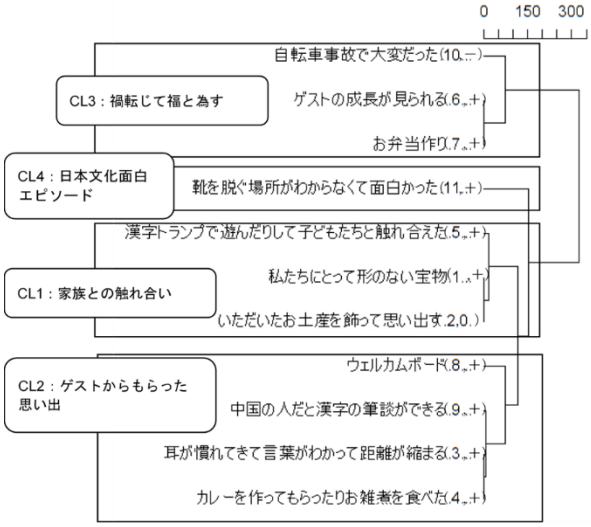


図 6. 協力者 F のデンドログラム

4 総合考察

6 名の結果の小括を表 2、表 3 に示す。

表 2. 受け入れ経験の少ない A、B、C の小括

	A	B	C
非日常性	準備、セキュリティに対する心配が大きい	日本の良いところを見てほしいハレの日	家族の関係に変化が起こる
ゲストに対する姿勢	家族ではなくお客	我が子と同じように接したい	受け入れで良い影響を期待
異文化交流に対する姿勢	ステレオタイプが強い傾向	自文化を強要する傾向	言葉が通じなくても理解できる
ホームステイ観	反対する姑がいるので核家族でないと難しい	ゲストの要望を尊重することが重要だと気づいた	家族内で新しい関係が構築されることを期待する

ホームステイの非日常性

ホームステイの受け入れは、日常生活の場で行われるが、セキュリティ、食事、おもてなしなど経験の少ないホストにとって特別な「ハレ」の日と捉える傾向がある。交流の弊害として過剰なおもてなしの意識、反対する家族、自身のステレオタイプ、自文化中心の日本文化の強要などが考えられる。

自然体で受け入れるための工夫

前述の非日常性のある状況の中でいかに自然体で受け入れるかということに関して、経験の多いホス

トは、非言語コミュニケーションを利用したり、各家庭におけるルールを早期に伝えたりする。このような経験をトラブルの防止や解決に役立てることで、長年にわたり多数のゲストを受け入れることが可能となると推測できる。

交流の主体

A～C の結果を見ると、周囲の環境や自分がイメージした「ホームステイ観」が交流の壁になったり、異文化交流の目的として謳われる「友好」は表面的な目標で、家族の変化を重要視したりしている。受け入れ経験の少ないホストは、交流の主眼が自分自身や家族に向いている傾向があるといえる。

一方、多くの経験があるホストは、交流の主眼がゲストにより多く向けられることにより、ゲストと自分や家族との関係を客観的に見ており、日本文化をゲストが体験するだけでなく、相互の文化交流が実現する可能性が高い。

表 3.　受け入れ経験の多い D、E、F の小括

	D	E	F
非日常性	日本文化を感じるか。食事作りの不安	人柄や様子を見ながら気遣う	ゲストとの思い出が形のない宝物になる
ゲストに対する姿勢	人として家族として受け入れるが、自然体で良いかは疑問	笑顔とハグは緊張を解くのに有効でありもてなしとなる	言葉が話せなくても交流が可能である
異文化交流に対する姿勢	受け入れた人がたまたま異文化を持った人だったと考える	両親が異文化交流に積極的で、自分も将来やりたいと考えていた	世界情勢が悪いときでも市民レベルでは温かい交流ができる
ホームステイ観	同じ時間を共有し相互に楽しむために家族全員で環境を作る	近隣の偏見を気にせずに自分の受け入れたい気持ちを大切にする	子どもの成長と共にできる範囲でやってきたことが今につながっている

第三者の問題

Dが挙げた第三者の２つの問題について、在留外国人からの誘いがゲストとの関係づくりの弊害になった問題に対しては、ゲストとの対話を工夫したり外部の友人も家に呼ぶように声をかけたりすることで改善が見られ、自分としては勉強になったと考えプラスイメージとなった。また、近隣住民の差別発言については、気にせずに自分の気持ちを大切にすると述べている。このような姿勢がホームステイ交流の課題を解決するのに有効であると考えられる。

おわりに

本論では、ホームステイを受け入れるホストが異文化交流に対する姿勢、ホームステイ観についてどのような認識を持っているかPAC分析を行った。

受け入れ経験の異なるホストを比較した結果、「日本文化を見つめ直し価値観が広がる」(三間2003)「子どもと共に経験することの意義がある」(鈴木2000)という点は本調査でも共通していた。自文化中心のホームステイ観が変容した例や「受け入れた人がたまたま異文化を持った人だったと考える」、「子どもの成長と共にできる範囲でやってきたことが今につながっている」という語りはホームステイ交流の意義を示唆するものであろう。

一方、非日常性のある状況下でいかに自然体で過ごすかという点が、受け入れホストたちの共通の課題であることが分かった。個々人の「ホームステイ観」の多義性によってホームステイの結果は左右されると考えられるが、経験の多いホストが工夫していたように、ゲストに主眼を置いて食事やセキュリティを含む環境作りや人間関係を構築することによって、ホストが自然体でゲストと時間を共有できるようになると推測できる。ホストは、ホームステイの受け入れを表面的で一時的なハレのイベントとしてだけでなく、第三者の問題を含むトラブルを解決しながら異文化接触の質が深化(三間 2003)する経験を重ねていくと考えられる。

文献

植田晃次, 2006, 「『ことばの魔術』の落とし穴」, 『「共生」の内実』, 東京: 三元社: 29-53.

奥西有理・田中共子, 2008, 「ホストの異文化接触に関する研究課題の展望」, 『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』26: 76-88.

三間美奈子, 2003, 「日本語教育におけるホームステイの有効性: 長野市の事例をからめて」.

鹿浦佳子, 2007, 「ホームステイにおける日本語学習の効用」, 『関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集』17: 61-112.

鹿浦佳子, 武田千恵子, 2000, 「ホームステイの功罪とホームステイプログラムへの提言」, 関西外国語大学留学生別科日本語教育論集 10, 33-50.

鈴木潤吉, 2000, 「地域の国際交流での学びとは?」, 『僻地教育研究』55: 115-124.

内藤哲雄, 2002, 『PAC 分析実施法入門―「個」を科学する新技法への招待(改訂版)』, 京都: ナカニシヤ出版.

ハタノ・リリアン・テルミ, 2006, 「在日ブラジル人を取り巻く『多文化共生』の諸問題」, 『「共生」の内実』, 東京: 三元社: 55-80.

廣田陽子, 岡益巳, 2009, 「週末型ホームステイ実施方法の改善に向けて」, 岡山大学経済学会雑誌, 41(3), 1-17.

横田雅弘, 白土悟, 2004, 『留学生アドバイジング』, 京都: ナカニシヤ出版.

(KIDO Shioko)

第13回室蘭大会抄録

独居高齢者の骨折治療における多機能補完リハビリテーション
―日常生活適応志向、治療意欲高揚、生きがい、自己実現についての PAC 分析―

○佐藤　弘一郎（南東北福島病院）、　内藤　哲雄（明治学院大学　国際平和研究所）

key words：高齢者、転倒骨折、多機能補完リハビリテーション

1　はじめに

本研究では、高齢者の転倒骨折の治療法の方向づけについて提言するとともに、それらが高齢者の治療意欲や生活の質に及ぼす影響を、独居高齢者の体験を通じて明らかにしようとするものである。通常の治療として行っているリハビリテーションは大きく２つに分けられる。周術期リハビリテーション療法と、脊髄損傷など機能消失後の多機能補完リハビリテーションである。この補完的リハビリテーションのアプローチが運動器の機能を補完するだけでなく、高齢者の生活の質を豊かにすることができるのか。退院後に単身生活を予定する高齢骨折者の「リハビリテーション治療目的を日常生活行動に即したものにする視点への転換」が、患者さんの治療動機づけや日常生活への意識、生きがいや自己実現に及ぼす影響について、PAC 分析(内藤,2002)により事例分析することを目的とした。

2　方法

被検者：転倒骨折にて南東北福島病院整形外科で入院治療を受けた以下の 3 名。

A.　腰椎圧迫骨折で入院した退院時 90 歳の女性。
B.　大腿骨頚部骨折で入院した退院時 91 歳の女性。
C.　胸椎圧迫骨折で入院した退院時 95 歳の男性。

提示刺激：テーブルに手を置いて重心を前に移動して立ち上がる、廊下や階段で手すりをつかみながら歩く、病室で伝い歩きをする、階段などで倒れそうなときに壁との摩擦を使えるように壁に身体を寄せて歩く、杖などを使ってゆっくり座るなど、他の運動機能で補助する訓練を受けたことで、移動や運動することについてどんな風に感じ方が変わってきましたか。また、病院内や病室での過ごし方にどんな変化が生じてきましたか。治療全体についての気持ちがどんな風に変わってきましたか。医師や他の医療スタッフに対して、どんな気持ちの変化が生じてきましたか。入院中や退院後に家族に対してどんな風に関わりたいと思うようになりましたか。

手続き：自由連想を用いてイメージを探索する PAC 分析法の概略を説明し、回答をしたくないときは拒否できること、調査そのものの中止をいつでも要求できること、調査協力を拒否しても、その後の治療に何らの不利益がないこと。調査データは厳重に管理し、個人のプライバシーに配慮するとともに、学会大会や論文での発表等の研究目的以外には用いないことを伝え、了解を得た。

使用分析ソフト： HALWIN を使用した。

3　結果

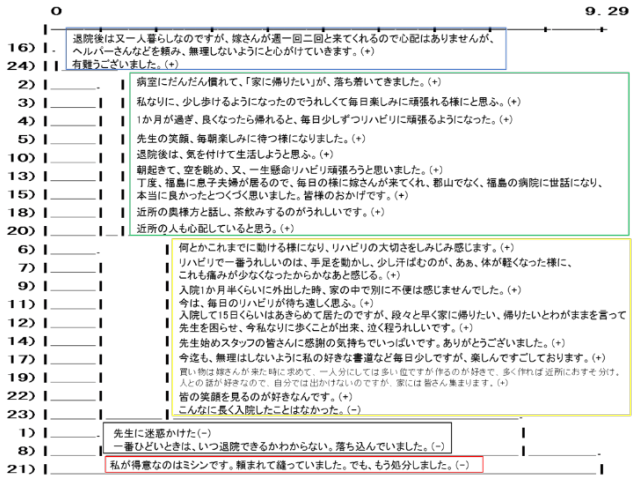


Fig. 1　被検者 A のデンドログラム

＜被検者Ａによるクラスターのイメージと解釈＞

クラスター1：心の中では、自分はできると思っているのですが、ヘルパーさんを頼むのも決まっていないのですよ。外出した時に自分でできると思ったのです。台所に座って、食事ができる。大丈夫だって思ったのです。自宅に来て心配ないのは当たり前。台所に来て、このくらいならできるって自分では頭の中ではそう思った。前ほど、近所の人たちに作るほどしなくていいし。台所に立てて有難うございました。これは、感謝です。

クラスター2：自分の気持ちそのまま。リハビリが一番。朝起きて、太陽の光を浴びて、頑張ろうっていうのは、自分の気持ちです。ここに来て、良かったです。これが一番。福島に来たっていうのが。近所の人が心配しているっていうのは、当たり前です。今度、転んだら、一番ひどいのは、自分ですから。家に帰って、自分なりにリハビリの大切さを知った。習ったことを家に帰っても自分でしようと思っていました。退院後は気を付けて生活しようと思います。家にいるとこんなに読書しないですが、外出した時に５～６冊持ってきました。読み始めると面白い。ミシンの代わりです。

クラスター3：こんなに痛みなく動けるわけなのだから。痛みが取れたからなのかな。外出した時は、「これはダメ・不便だ。」とは、感じませんでした。外出から帰ってきて、ここ（病室）はいいなあと感じました。きちんと治しておかないと、何のために入院したのかわかりません。退院が待ち遠しいです。リハビリをちゃんとしなければいけません。又、あちこち痛くなって救急車に乗るようではいけないから。みんなに心配かけるから。「ありがとう。」本当の気持ちです。書道も半紙ね。教科書

もあるのです。筆は良いです。というのも、ミシンがないから。皆さんの笑顔を見たいから。

クラスター4：病院に来て、コルセット作って、ここの病室で過ごしました。何としても郡山に帰りたくて。涙を流して病室のベッドで寝て過ごしました。気持ちが落ち着かなかった。息子夫婦が心配して毎日来ています。「毎日来なくていいのに。」と言っても毎日来てくれた。ありがたかった。だんだん落ち着いてきました。看護婦さんに「A さん、中途半端に治って、退院するより、ちゃんと良くなってから退院したほうが、A さんも先生も私たちにとってもお互いに良いでしょう。」って言われて。そして、注射することになって。褒められました。A さんは勉強しているからできるのだって。糖尿病と同じといわれて、ならば、自分でもできると思いました。

クラスター5：ミシンがなくなってから、読書になったのです。45 年もミシンを脇に置いて生活していました。洋裁で友達も来るようになりました。限界だったのです。今あったらやるものなぁ。ミシンが家の中にあると、お母さんは必ずやると言われ、「じゃあ、いい、処分して。」って言ったのです。その時は、良かったと思った。その後、寂しさが・・・。新しいのを買うって言われましたけど、いらないって。45 年も使っていると。もう終わり。涙が出るのです。ミシンの話は。

クラスター間の比較：

≪クラスター1 と 2 の比較≫

リハビリをやったから歩けるようになった。頑張ったから歩けるようになった。近所の人との雑談があるから。近所の人は心配していると思う。

≪クラスター1 と 3 の比較≫

体は軽くなるし、運動するのは良いです。一人でもリハビリできる。習ったものを。脚を挙げたり伸ばしたり。ありがとう。感謝の気持ちでいっぱいです。詰所の前でお辞儀をします。

≪クラスター1 と 5 の比較≫

ミシンに対してありがとうです。45 年も使って、これがなかったら私は何をしていただろう？　お父さんの給料だけで。何をしていただろう？　いい思い出も悪い思い出もあります。上司の奥様に何かを縫うと、部下の奥様達から「あなたは、上司の方にしか縫わないから」って嫌味を言われた。よその人に縫えなくなった。家族用にだけ縫っていた。

≪クラスター2 と 3 の比較≫

リハビリを頑張ったからクラスター3 がある。汗かくくらい。体が軽くなった。脚も肩も。杖を使わなくても歩ける。歩き方が良くなった。家では日本茶を飲んでいる。一杯では嫌。お茶を汲みに行く。表に行くのが楽しみ。10 分くらいです。今日も行った。1 日 2 回行く。はじめはドキドキしていた。血圧は上がらない。慣れ。体の軽さ。人間は歩かないとダメ。

≪クラスター3 と 5 の比較≫

クラスター3 が優先。ミシンがないのですから。リハビリは実際にできるのですから。ミシンの代わりに書道があります。般若心経を額に入れて会津に送ったのです。そうしたら、お米が届きました。般若心経は何人かに送りました。主人が亡くなってから書道を始めました。書道はミシンの代わり。

【A についての考察】クラスター1 は、「台所に立てて」「台所に座って食事ができる」の喜びが示すように、日常生活能力の回復の喜びと安心、安堵感がある。**＜補完的リハビリテーションによる日常生活能力回復の喜びと安心感＞**と命名できよう。

クラスター2 は、独居生活を続けるための積極的な姿勢がうかがえる。生活の中での楽しみを感じており、**＜補完的リハビリテーションの訓練への慣れと効果の実感による動機づけ増進＞**と命名できよう。

クラスター3 は退院後のソーシャルサポートが充実していることを示している。**＜ADL の回復とソーシャルサポートが充実した生活＞**と命名できよう。

クラスター4 は、現時点では喪失感からの回復と再復活への転機を実感している。**＜再復活への転換時期＞**と命名できよう。

クラスター5 は内職で生活の糧として社会参加し、働きがい、生きがいを感じていたミシン。体力的に限界を感じ、家族も心配するので、ミシンを処分し、書道と読書への趣味と生きがいを転換した。大切なものを失っても新たにできることを見出している。**＜新たな趣味を生きがいへ＞**と命名できよう。

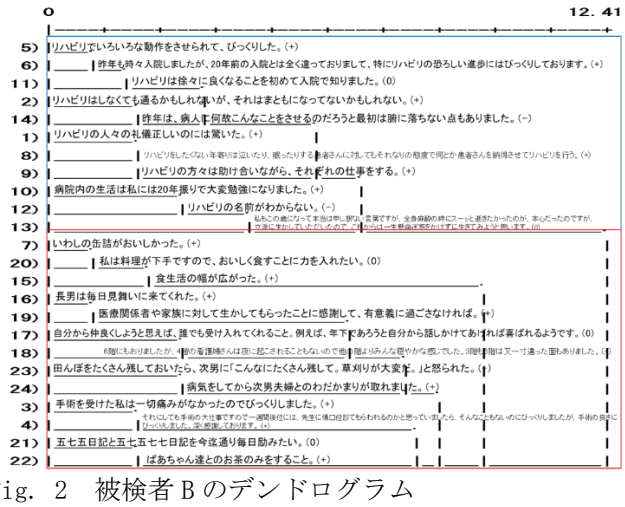


Fig. 2　被検者 B のデンドログラム

＜被検者 B によるクラスターのイメージと解釈＞

クラスター1：全体がリハビリの関係ですね。人生終わっても良かったっていう感じもしたのだけど、医療のおかげで第二の人生を生き延びた！医療とリハビリの進歩にはびっくりしている。生かしてもらったから。第二の人生は一生懸命生きようと思います。医療の進歩が一番！

クラスター2：私が中心になって、私の周りのことが書かれている。これからの自分のこと。病院内の雰囲気や家族との雰囲気悪かったのが良くなった。長男は寂しがって、母親に長生きしてほしいと思っている。手術をしてもらったのに全然痛くなかったのだ。これからの生き様を少しでも立派に生きたいと思っている。五七五日記は昨日作った。

≪クラスター1 と 2 の比較≫

1 はリハビリが中心。方法と結果です。実行しての方法です。リハビリの全体で、実行後のこと。良く

なった状態。リハビリの方々の仕事に対しての態度。自分が経験したこと。これからの心構え。病院内での生活っていうのかなぁ？　１は本当にリハビリ中心の結果とか、リハビリの在り方。2 は全体的に私中心。家でもそうだし、食事もそうだし。あとは、先生に対する想い。息子達への想い。自分の食事の考え。１は、病院内のこと。2 は家庭のこと。

全　体

私は一人暮らしで、農家なのね。息子夫婦は近くに暮らしているのだけど。そこに孫がいてね。色々相談に私のところに来ていたの。そういうことがあったから、息子夫婦は私のことをあまりよく思っていなかったみたい。それが、病気してから、見舞いに来るようになった。病気をしてから、わだかまりが取れたみたい。長男は毎日見舞いに来てくれた。次男が、退職して、百姓やって、私は年金生活になったの。80 歳で夫は亡くなった。それまでは、私も車の運転をしていたのだけど、辞めたから、外に出かけられないの。だから、近くのばあちゃん達とお茶飲みして。たくさんはいないの。3 人くらい。毎日は会わない。でも、地域の情報、誰が入院したとか、亡くなったとかそこで情報収集するから、よく知っているよ。

【B についての考察】

被検者 B は、リハビリテーショを実体験することで、それまで漠然としていた小さな一つ一つの訓練の意味が理解できるようになった。そして、小さな積み重ねが束になり、力となり、求めていた結果に結びつくことが体験を通して明らかとなり、それが、日常生活の喜びに結びついている様子がうかがえる。そして、入院生活を送ったことで、今まで、「五七五日記」や「ばあちゃん達とのお茶のみ」が、自分の生活を豊かにするものだったということに気付いた。

長男が毎日見舞いに来てくれた。この毎日の見舞いという小さなことの積み重ねがここにも表れている。次男に「草刈りが大変だ」と怒られたのは、被検者Ｂが入院したことで、今まで被検者Ｂがしていた草むしりを次男がしなければならなくなり、そのとき次男は、「ばあちゃん、今まで草むしりをこんなに頑張っていたのだ。」ということが分かったのではないだろうか。わだかまりが解消された経緯と推測される。

そして、自分自身の日常生活も改善しようとしている。料理は苦手だが、いわしの缶詰を使うことで、食の幅を広げ、豊かにしていこうという気持ちが現れている。また、病棟ナースや療法士たちへの感謝を語っており、スタッフとの人間関係が積極的になっている様子がうかがえる。

クラスター1 は、スタッフのチーム医療の効果を実感しながらも、治療の目的や方法について知りたがっている。その治療目的や方法を患者さんが理解することで、患者さんがリハビリへ主体的に動機づけられることになる。クラスター1 は**＜リハビリによる治療説明の充実と患者さんの主体的参加＞**。患者さんも含めての広義のチーム医療が求められる。

クラスター2 は、「いわしの缶詰がおいしかった。」「食生活の幅が広がった」から、栄養指導が隠れた教育カリキュラムとして影響しており、食生活をはじめとして QOL 向上への模倣効果も考えられる。また、入院をきっかけとして、家族関係の交流に変化が生じている。ちょっとした声掛けから人と仲良くなり、さらに別の人と結びつくことで仲間意識が広がり、喜びにつながっている。自分より若い人から教わることもあり、高齢になっても今までのやり方にこだわることなく、新しい試みをやってみようという気持ちになっている。それがこれから私はこのように生きていこうとするエネルギーになっている。このクラスターは**〈日常生活の充実とこれからの生き様〉**とまとめることができよう。

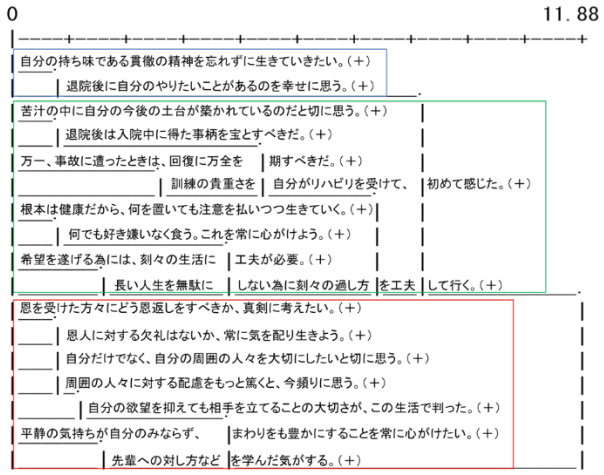


Fig. 3　被検者 C のデンドログラム

＜被検者 C によるクラスターのイメージと解釈＞

クラスター1：　私には一つに見えますね。それは、書道です。代用教員として務めた小学校の宿直室で半紙にきれいな字が書かれているのを見つけました。教頭の T 先生が書かれたものだと知りました。ある日、用務員さんに「あの人が T 先生ですよ。」と教えられた。私は走り出し、「T 先生、先生の素晴らしい字を見ました。」「書道が好きなら、私が教えましょう。」書道の授業が終わったら、宿直室で練習しました。「うまいじゃないか。有望だ。僕にはもう教えられない。僕の先生が仙台にいらっしゃる。今度紹介しよう。」書道の先生で K 先生。当時私は、15 歳。19 歳までお世話になりました。「あんたに赤紙が来たよ。」と。召集され佐世保へ。佐世保から船 3 隻に分かれて、朝鮮半島に上陸しました。真ん中の 1 隻が沈没したと後で聞きました。1000 人のうち、上陸できたのが２/３。西へ移動し、香港・広東へ移動し、途中の山の中で、どうやら日本は戦争に負けたらしいと伝え聞き、朝鮮海峡を渡り、日本に帰ることが出来た。

帰国後、学校は６－３制になった。鹿島に大きな醸造家の M 家があり、ある日、奥様に「あなたは、教え方は上手だが、旧制学校の卒業生だ。これから、新制中学の卒業生が出てきたら、働くところが無くなる。この子に教えさせるから、上を目指して勉強しなさい。」1 年勉強しました。その私に勉強を教えてくれた人の兄貴に東北学院へ連れていか

れ、東北学院の夜間に通った。東北大学に新制大学ができる。教育学部だ。ということで、師範学校に行くような人たちが皆東北大学へ行った。我々のような帰還兵が受験した。私が書道と同じくらい好きな音楽を受けたら、受かってしまった。音楽で教師をした。東北大の教育学部に編入したが、自分が求めたものとは違った。そして、文学部へ編入した。西洋史学を学んだ。もう、かなり歳をとっていた。

クラスター2：言葉は違うが、同じことですね。リハビリでは教えられる立場になった。教え方を学びました。若い人達だが、実に巧妙。機会があったら褒めてあげてください。筋肉が凝っているところを捕まえて静かにほぐしてくれます。感激があります。私と書道は切り離せない。娘と妻がどのくらい理解しているのか。3年前になります。ふたりで「書道教室はおしまい。」と宣言し、私は泣く泣く閉めました。私としては本望を遂げたい。施設に入るのはいい。でも、書道ができないということは受け入れられない。

【Cについての考察】

Cは小学校卒で代用教員に採用されて書道と出会い、高校の教員定年後も書道の教師を続けてきた。兵役や多くの困難を克服して、東北大学文学部への編入卒業後、高等学校の教員となり、定年を迎えた。克己心が強く、努力を傾注する生き方を送っている。**クラスター1**での語りは、書道の出会いから日中戦争敗戦を経て戦後の教員生活の再構築までである。その過程で獲得した「自分の持ち味である貫徹の精神を忘れずに生きていきたい。」高齢者の場合には特にそうであろうが、その人自身の人生スキーマの観点からリハビリをどのように理解しているのかを検討することの意味を示唆している。そこで、**クラスター1**は**＜人生スキーマとリハビリの位置づけ＞**と解釈することができよう。**クラスター2**は彼の人生経験から築かれた強力なスキーマと問題解決法の視点から、自身のリハビリの訓練を捉えている。このクラスターは、**＜自身の人生体験での問題解決スキーマからのリハビリ訓練の意味づけ＞**として解釈することができよう。**クラスター3**は、連想反応で、今後の生き方についてである。周りの人々の支援に感謝し、恩義を忘れない価値観と行動規範が意識化されやすいことを示している。Cは、書道の師匠やお世話になった知人、親戚、上司に感謝している。今の自分があるのは他者の力があったことを認識している。リハビリテーション療法を通じて、協力者との関りが人生の中で大切であることを意識している。しかし、最も身近である妻や娘に対しては感謝の言葉が見当たらない。身内には葛藤が生まれている。

4　総合考察

SOC理論（Paul, 2005）では、目標の選択は、**自らによる選択**と**喪失による選択**の2つに分かれるとしている。前者は若者が将来に備えて行う高い目標で、後者はこれまで掲げていた目標を達成することが困難になった時に、目標を変更し、目標の水準を下げることを意味し、高齢者に当てはまりやすい（佐藤, 2016）。

さて、現代医学は治療医学で、その目標は完全治癒である。しかし、すべての傷病で完全治癒を達成することは困難である。リハビリテーション医学では、たとえ治らなくても、家庭や職場に復帰できるまで良くすることが可能だ（上田, 2018）。まさに筆者らが本研究で主張する多機能補完リハビリテーションの達成目標である。

ところで、被検者Bではクラスター1の命名を**＜治療説明の充実と患者さんの主体的参加＞**としたように、患者さん主体の動機づけを高めるインフォームドコンセントが望まれることを示唆している。多機能補完リハビリテーションの発想に基づき、患者さんに目的や方法を分かりやすく説明していくことが求められる。ケアマネージャーが、被介護者の要介護度に沿って介護計画を修正、立案していくように、次々と機能が低下する中での治療プログラムを修正、設計していくチーム医療の構築が求められる。療法士や介護職との連携も考えられる。

本研究の被検者3名から心の支えとして大切にしているものが明らかにされた。被検者Aはミシンから書道と読書への転換、Bは近所の仲間との交流であり、Cは書道である。もう一つ、3人に共通していることは今生きていることに対して感謝の気持ちが強いということである。それぞれの表現は違うが、感謝の気持ちを口にしている。最も大切な共通点は、連想反応後、被検者たちが自分の考えを口にすることで、今後の自分の生き方をはっきり認識し、自信を持ってリハビリテーションに取り組み、加速度的に日常生活能力が改善したことである。被検者を適切に選べば、意欲を引き出す目的として**臨床応用できる可能性**を示した。一方で、PAC分析が被検者の深層心理を確かに揺さぶったことを示し、内藤(2002)が指摘するようにPAC分析では被検者を選ばないと危険である。

文献

内藤哲雄（2002）　第Ⅲ部実施の実際例，　PAC分析実施入門：「個」を科学する新技法への招待（改訂版），　ナカニシヤ出版，　61-79.

Paul B. Baltes（2005）A Psychological Model to Age Successfully Selective Optimization with Compensation.　Baltes_Rio_Gerontology.pdf (margret-baltes-stiftung.de)

佐藤眞一、権藤恭之（2016）　Ⅳ基礎理論②心理学的加齢論　2選択的最適化補償理論（ＳＯＣ理論），　よくわかる高齢者心理学，　ミネルヴァ書房，　34-35.

上田 敏（2018）　第2章　リハビリテーション医学とは何か　「復権の医学」としてのリハビリテーション，　リハビリテーションの思想　第2版　人間復権の医療を求めて，　医学書院，　65-67.

（Koichiro　Sato, Tetsuo Naito）

第 16 回室蘭大会抄録

子育てと農業のコラボに対する参加者評価の分析
－NPO 法人 A を事例に－

○長沢咲希（秋田県立大学大学院）・上田賢悦（秋田県立大学）
清野誠喜（昭和女子大学）・滝口沙也加 （宮城大学）

key words：育児期女性、子育て、農業コラボワーク

1　研究の背景

育児期女性が子育てと仕事を両立させる仕組みが、飲食店や工場、そして農業生産現場で展開している。この仕組みは、NPO 法人 A がシステム化したものであり、複数の法人支部においても実施されている。具体的には、NPO 法人 A が企業から仕事を受注し、その仕事を完成させる「コラボ」に参加する育児期女性を募集する。その後、参加者を就労先で働く仕事班、参加者の子供の託児を行う託児班、欠員が出た場合に交代要員となる待機班に分け、それぞれが助け合うことで無理のない働き方を可能にする。そして、受注先からの賃金は参加者全員に分配する。

飯場・山端（2019）は、農業生産現場が就労先となる「コラボ」（以下、農業コラボワーク）を事例に、参加者への事後アンケートから満足度や農業への就業意欲の有無を確認し、農業コラボワークが育児期女性の農業就業を促進する可能性について検討を行っている。

しかし、子育てと仕事を両立させる仕組みである「コラボ」の評価を考えるためには、なぜ満足したのか、なぜ就業意欲を持つに至ったのかという参加者個々の評価の背景を探索する必要があると考える。

2　目的と方法

本調査は、NPO 法人 A の X 県支部が実施した農業コラボワークに対する参加者評価の背景を、子育てや家庭生活、キャリア、自己実現、農業観等の視点から明らかにすることを目的とする。そのため，調査協力者が自らの内界をどこまで深く探索し，語り等の形に表出できるか，すなわち，自らの評価プロセスを外化できるかが重要となる．そこで，調査協力者が自らの内界を深く探索し，個人が物事に対して無意識的に感じている態度構造を明らかにする手法として，内藤（2002）が開発した PAC 分析を採用する．

PAC 分析の具体的な手順としては、①当該テーマに対する自由連想、②連想項目間の類似度評定と非類似度評定によるクラスター分析、③調査協力者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告と調査者による総合的解釈の３つのステップで実施した。

手続き①では、刺激文を表１に示す通り提示しながら口頭で読み上げて教示を行い、調査協力者に思い浮かんだイメージやキーワードを発言してもらう。調査者がそれをひとつずつ書きとめ、連想語として調査協力者に提示し、不足が無いかを確認する。そして、連想項目に対して調査協力者から自身にとって重要だと感じられる順位を回答してもらう。

表１　調査協力者に提示した刺激文

あなたは、コラボワークに対してどのような感想をお持ちですか。コラボワークを通じて仕事をしてみて、イメージと違ったことや、大変だったことはありましたか。また、反対に良かった点や、喜びを感じられた点はありましたか。コラボワークを通じて働いたなかで、特に印象に残っているのはどのようなことですか。 ご家庭との関わりや、子育てとの関わりについてもイメージしながら、思い浮かんだ言葉やキーワードを順次お答えください。

手続き②では、調査協力者に連想語同士の類似度を 7 段階尺度での一対比較（反復なし）により評定してもらった後、調査者が連想語間の非類似度行列を作成し、クラスター分析（ウォード法）によりデンドログラムを析出した。非類似度行列の作成には「PAC 分析支援ツール PAC アシスト」（金沢工業大学・土田義郎教授）、クラスター分析には「HALBAU」（(株)ハルボウ研究所）を用いた。

手続き③では、析出されたデンドログラムを基に、調査協力者に各クラスターとデンドログラム全体のイメージ、連想項目単独での評価等についての質問を行い、調査者が総合的解釈を行った。

調査協力者は、農業コラボワーク参加者で、結婚もしくは出産を機に前職を退職した 30 代から 50 代までの 4 名の育児期女性である。

3　結果

（1）　A氏

クラスターⅠは、「障害児を育児していても働ける」から「子育ての環境は別世界」までの7項目で構成されている（図 1）。“障がい児を育てながら、…できる働き方かなって思ったんですよね。” “ちゃんと喋るって楽しいなって思って” “みんな子育てしているから、大変だよねみたいな。そういう中にいれるところとか、気楽さもすごいあって。”等と発言していることから、＜孤独な環境からの解放と子育てに対する共感の場＞と命名した。

クラスターⅡは、「子供を連れて行くのは大変」と「子供も農業体験」の２項目で構成されている。“やっぱり外に連れて行ってあげたいってすごく思って、…連れて行ってあげたらこんなに楽しめるんだと。”と発言し、子供も家から外に出て楽しんでいるシーンをイメージしていることから、＜自分も子供も解放される喜び＞と解釈できる。

クラスターⅢは、「農作業の体力的きつさ」と「トイレ環境」の2項目で構成されている。“やっぱり農業って大変だなっていうのが一番です。” “これとこれこうやった方が要領いいなとか考えるのも好きなんですよ。多分これって主婦脳だと思うんですけど、主婦業もそうで、冷蔵庫見てあるもので作るみたいな。…農業のそういうところもすごく好きだなって思います。”のように、農作業に対して肉体疲労を感じつつも、自分の中で作業効率の向上を考えながら働いていることから、＜農作業での働きやすさの探索＞と名付けることができよう。

次に連想語とクラスターの併合関係を見ると、クラスターⅠの連想項目が最終的に結節する象徴的な連想項目の「子育ての環境は別世界」が、クラスターⅡの象徴的な連想項目の「子供も農業体験」に結節している。そして、農業の仕事に対して主婦業と重ね合わせて評価したクラスターⅢの「トイレ環境」が並行しながら結節している。つまり、クラスターⅠにみられる農業コラボワークに対する評価は、子育てという家庭内の閉ざされた環境から、自分と同様に家庭にとどまり続けることの多かった子供達も解放される変化を与えてくれたという思いからだと解釈できる。加えて、農業という肉体労働に対する否定的なイメージがありながらも、家事や育児等と共通点を見つけられたことで農業コラボワークを好意的に評価できたと思われる。

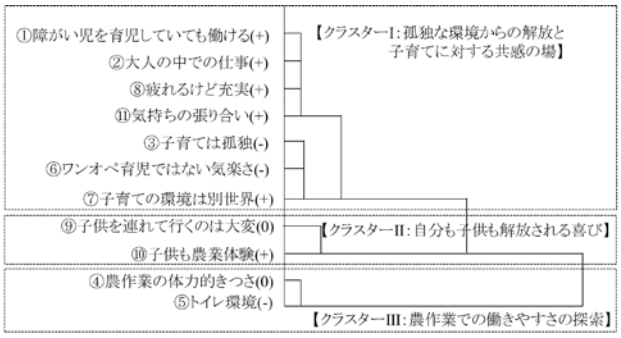


図１　調査協力者Ａのデンドログラム

（2）B氏

クラスターⅠは、「ちょっとでも子育てから離れられる」から「子供を預ける罪悪感がない」までの４項目で構成されている（図 2）。“結局は常に子供がいる。だから一人っていうか、自由がない。” “コラボワークに行ったから（母親たちと）出会えて…どっちかというと気分としてはしゃべりに行っている感覚です。”と発言し、コラボワークへの参加によって子育ての場から解放され、自由な時間を得たことをイメージしており、＜子育てに縛られない時間＞と命名した。

クラスターⅡは、「他の子とのコミュニケーション」と「他人の子を預かる大変さ」の２項目で構成されている。“子供は言うこと聞かないってことですかね。思う通りにはならないってことですね。”と発言しており、 コラボワークの経験から子育ての大変さを改めて感じている。以上から、＜他の子の子育て経験＞と解釈することができる。

クラスターⅢは、「有償ボランティア」と「お互い助け合い」の２項目で構成されている。このクラスターでは、コラボワークが母親たちの協力によって成立すること、特定の人に負担が偏らず平等である仕組みであることに言及していることから、＜互いに補い合う仕組み＞と解釈する。

クラスターⅣは、「働くためのワンクッション」から「農業は大変」までの４項目で構成される。“外で天気いい中、みんなでしゃべりながら草取ってたりとか、…なんかせかせかしてないというか。達成感は農業もすごくあると思うので。” と発言していることから、＜農業コラボワークの価値＞と命名した。

以上から、Ｂはコラボワークに参加することで、自分主体の場所ができたことを評価した。また、一時

的に子育てから解放されながらも、自分の子ども以外との交流から子育ての大変さを再認識する機会を得ていた。さらに B は、そのような農業コラボワークの仕組みを評価しており、農業に対しては体力面での大変さを感じながらも、この仕組みを通して得られる農業の価値を評価した。

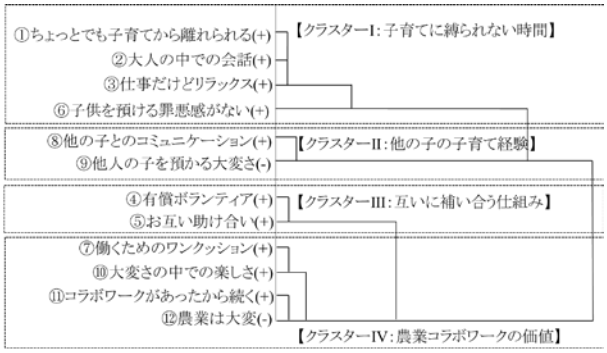


図２　調査協力者Ｂのデンドログラム

（３）Ｃ氏

クラスターＩは、「子どもと離れる時間」から「気兼ねなく相談できる」までの６項目で構成されている（図3）。“私もお話ができてとても楽しかったので。”“自分が見なきゃいけないって思い過ぎてた。もっと頼っていいのかなってことなのかな。”と発言しており、＜頼ることができる場所＞と命名した。

クラスターⅡは、「達成感を感じる」と「仕事を再開するきっかけになる」の２項目で構成されている。“達成感、やりきったみたいな、…仕事を久々にやったら楽しいな、もっと仕事したいって思いましたね。”発言していることから、＜思い出される仕事の楽しさ＞と解釈した。

クラスターⅢは、「すぐにフルタイムは大変」の１項目である。このクラスターでは、好きな仕事であっても体力的・時間的に復帰困難である現実をイメージしており、＜仕事復帰の困難さ＞と名付けることができよう。

クラスターⅣは、「ネギはこれだけ手間がかかると知った」と「農業は大変だというイメージ」の２項目で構成されている。Cは、農業は手間がかる仕事であり大変だというイメージを持っていたが、実際に作業してみると単純で取りかかりやすい作業であったと発言している。このことより、＜農作業の取りかかり易さ＞と命名した。

クラスターの併合関係を見ると、クラスターＩが最終的に結節する象徴的な連想項目「気兼ねなく相談ができる」が、クラスターⅡの「仕事を再開する切っ掛けになる」に結節し、それらはクラスターⅢの「すぐにフルタイムは大変」に結節している。さらに、それに並行してクラスターⅣの「農業は大変だというイメージ」と結節している。つまり C は、子育て、自己実現、農作業という３つの視点から農業コラボワークを評価していると言える。子育てという視点からの評価が働くことで得られる達成感や復職への検討という自己実現からの評価につながるが、フルタイム勤務として復職を希望するまでには至らなかったといえる。一方で、農業作業という視点からの評価は、短時間での単純作業の中心の農業コラボワークに参加する際の障壁の低さを感じたからだと言える。

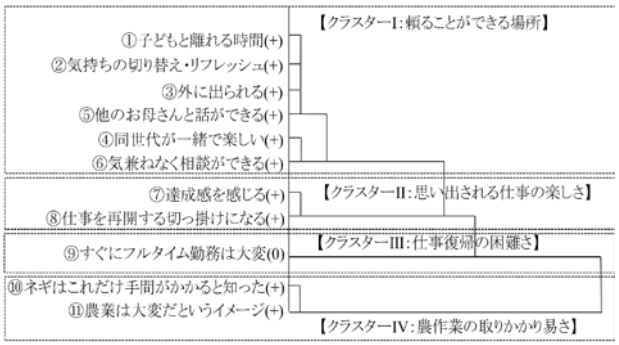


図３　調査協力者Ｃのデンドログラム

（４）Ｄ氏

クラスターＩは、「楽しく農作業ができる環境」から「土に触れること」までの７項目で構成されている（図 4）。“ただ汗かいて疲れるとかじゃなくてお話してスッキリするとか。” と発言しており、＜農作業によるリフレッシュの時間＞と命名した。

クラスターⅡは、「小さな子供を育てる同じ境遇のお母さん」と「子育ての情報交換」の２項目で構成されている。“短い時間で自分の子と触れてもらえることによって、共感してもらえたかなっていう。”と発言し、子供を預けたことで、自分の子育てについて共感してくれた母親たちについて言及していることから＜子育てへの共感者＞と命名した。

クラスターⅢは、「ずっと家で悶々としていた」と「安心できる時間」の２項目で構成されている。“ずっと家で悶々としていたっていうのは、ストレスたまっているっていうことですから。…そういうのはない、フリーの状態というか、すっきりした状態というか、どっちかというと安心できる感じ。”と発言から、＜ストレスの続く時間からの解放＞と

名付けることができよう。

以上から、Dはコラボワークを、母親たちとの会話や体を動かすことによるリフレッシュの時間と評価しており、さらにその母親たちと子育ての共感を得られることも評価している。その評価の理由として、今までストレスを感じていた子育ての時間から解放され、安心やリラックスのようなプラス感情を持てる時間を得られたことだと考えられる。

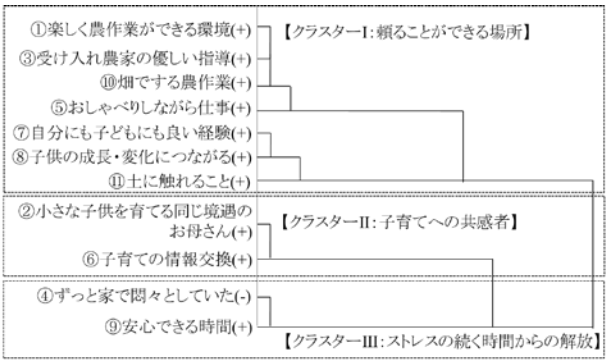


図４　調査協力者Ｄのデンドログラム

4　総合考察

以上の PAC 分析による結果を、シャイン（1978）が示す自己、仕事、家庭への掛かり合いを分析するためのモデルに依拠し、考察する。シャインは、人の生きている領域を「生物学的・社会学的（自己発達のための）環境」「仕事・キャリアの環境」「家庭、家族関係の環境」に分け、それら３つの領域が相互に影響し合い人が存在していると述べている。

農業コラボワークに参加することによって、「家庭・家族関係の環境」にある困難やストレスから解放され、母親たちと会話を楽しむ等の「自己発達のための環境」や、仕事で達成感を感じる等の「仕事・キャリアの環境」に存在できる事が、農業コラボワークに対する高い評価につながったと考えられる。加えて、農業コラボワークは農作業現場という「仕事・キャリアの環境」と「家庭、家族関係の環境」が重複していることで、子供が外の環境に出ることができる経験になったことや、農作業中の会話の中で子育ての情報交換ができた点で高い評価を得ていた。

また、コラボワークは短時間勤務であり、かつコラボワークで行った農作業は特別なスキルを必要としない作業であるため、育児期女性が「仕事・キャリアの環境」に入り易かった点も評価されている。

以上を踏まえると、農業コラボワークは、「生物学的・社会学的（自己発達のための）環境」、「仕事・キャリアの環境」、「家庭、家族関係の環境」の３つの領域が重複するところに存在する場であると考えられる。そのため、「家庭、家族関係の環境」でのストレスに悩み、自分の時間を失っていた育児期女性にとって、その環境から抜け出し、開放的な環境で同じ悩みを持つ母親たち交流することができる農業コラボワークの仕組みが評価されたといえる。

４名の調査協力者は、コラボワーク参加後に連携企業である農家でパート従業員として勤務している。また、コラボワークが社会復帰のきっかけの１つになった事例もあることから、今後も調査を続けることで育児期女性のキャリアへの影響を明らかにすることができると考えられる。

引用・参考文献

飯場聡子・山端直人（2019）「農業就業体験を通じた育児期女性の農業就業の可能性－三重県における農業就業体験参加者の事例分析より－」『農村生活研究』62(2)：44 - 52.

内藤哲雄（2002）『 PAC 分析実施法入門[改訂版]－「個」を科学する新技法への招待』 ナカニシヤ出版.

Schein, E. H. (1978). Career dynamics: Matching individual and organizational needs. Addison-Wesley, Reading, MA. （『キャリア・ダイナミクス』二村 敏子・ 三善勝代 訳，白桃書房，1991）.

渡辺三枝子（2018）『新版 キャリアの心理学【第 2 版】－キャリア支援への発達的アプローチ－』ナカニシヤ出版.

(Saki Nagasawa)

第16回室蘭大会抄録

多文化環境における日本人学生の国際化
―意識変容の研究に向けての予備調査の結果から―

今城淳、岡部真理子（山梨学院大学国際リベラルアーツ学部）

Key words: 国際化、異文化接触、多文化環境、グローバル人材

1 はじめに

1.1. 調査の目的

本研究では、多文化環境において日本人学生がどのように国際的な視座を獲得していくかを探ることを大きな目的とする。4 年間の大学生活の中で同じ学生に対して数回の調査を行うことで個々の学生の変化を探り、変化を引き起こした環境または出来事を捉える。

本報告では､その縦断的調査の第 1 段階の PAC 分析の結果から、学生の国際化・国際的な意識に影響を与えた要因と考えられるものを紹介したい。

1.2. 調査の背景

グローバル人材とは

2012 年に発表された「グローバル人材育成戦略」（グローバル人材育成推進会議）では、グローバル人材に必要な要素として次のものが挙げられている。

要素 I : 語学力・コミュニケーション能力

要素 II: 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素 III: 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

本報告では、調査協力者がグローバル人材として上のどの要素を身に着けているか、また、Bennette の異文化感受性発達モデル(DMIS) (Bennette 2011, 山本 2014) のどの発達段階にいるのかを用いて、二人の調査協力者を比較していきたい。

調査対象者在籍学部の説明

アカデミック英語課程（以下 EAE）と、分野横断型の教育を英語で行うリベラルアーツ課程で構成される。1 年次の国際寮での寮生活、卒業までの 1 年間の海外留学が必須となっている。

英語圏の国からだけでなく、約 40 か国からの留学生を受け入れており、学部全体の多文化環境を実現している。学生全体の 3 分の 2 が留学生で、教員も同じく 3 分の 2 が外国籍である(2022 年春学期)。これらの環境により、授業でも寮生活でも、日本にいながら海外留学にかなり近い状態を経験することができる。

2 方法

2.1. 調査協力者

20XX 年 4 月から 8 月にかけて 9 名の学生に調査を行った。本報告では、この 9 名のうち学生 A と学生 B について分析する。

学生A:調査時点で3年次の1学期半ばの女子学生。3 学期間 EAE を履修した後リベラルアーツ課程に進み、2 学期目。1 年次から寮に住んでいる。海外経験はない。

学生B:調査時点で3年次の1学期半ばの男子学生。EAE を免除され、1 年次の 1 学期目からリベラルアーツ課程に進む。現在リベラルアーツ課程 5 学期目。1 年次のみ寮に住んでいた。海外経験はない。

2.2. 調査手順

連想刺激文は下のものを使用し、PAC 分析の手法を用いてデータ収集を行った。

> 連想刺激文
> これまでに外国人と接したときに、面白いと思ったことや、戸惑ったこと、難しいと思ったことはありますか。また、どんな人を「国際的」だと感じますか。あなたがこれまで「国際的」だと感じた人がいれば、その人はどのような人でしたか。「国際的」な人にはどのような資質が備わっていると思いますか。「国際的」な人になるためには、何が必要だと思いますか。

データ収集には PAC 分析支援ツール PAC-Assist2（土田 2021）を用い、統計分析には HAD を使用し、あわせて統計ソフトの HALBOU7 で検証を行った。

3 結果

3.1. 学生Aのクラスター構造と解釈

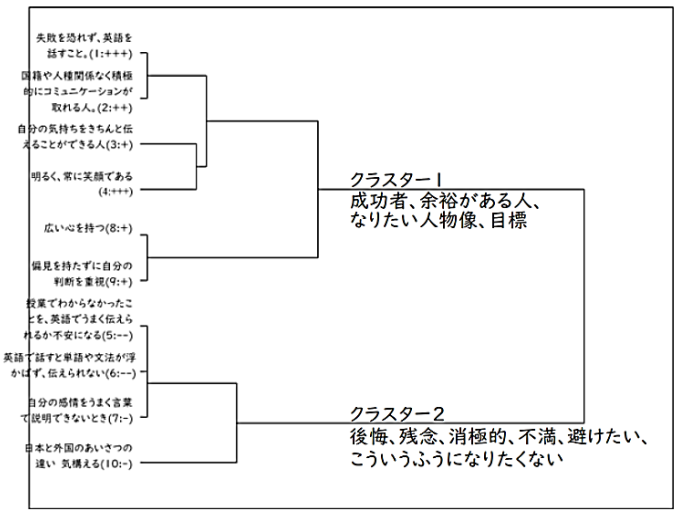


図1：学生Aのデンドログラム

クラスター1：＜成功者、余裕がある人、なりたい人物像、目標＞（6項目ともプラス評価）

「成功する人」がキーワード。仕事に満足し、生きがいを感じているような人、自分がついていきたいと思えるような人のことで、特定の人を連想していた。

クラスター2：＜後悔、残念、消極的、不満、避けたい、なりたくない＞（4項目ともマイナス評価）

自分の経験が多い。連想語すべてがマイナスのイメージ。満足できていない人、後悔が大きい人、納得のいく人生を歩めていない人、常にストレスを抱えている人、常に自分との葛藤をしている人、など、マイナスのイメージでくくられている。自分の英語に関連する連想語が多く、自分の英語力についてのストレスを感じているようである。

クラスター1と2の関係

対極、区切られている感じ。クラスター1は自分が見てきてすごいと思った人、クラスター2は自分の経験。

クラスター2で自分の現在の様子に失望しつつ、クラスター1のような人が社会で成功するのだろうと見ている感じだが、クラスター1を目指して自分も頑張るというわけではない。「成功する人」と自分の差を意識しているものの、それをどうにかしようという積極的な動きは見られない。

学生Aの総合解釈

「失敗を恐れず、英語を話すこと」ができる成功者（国際的な人）と、文法的な正確さを気にして恥ずかしさから発言をためらう自分との対比が明らかになっている。

英語の正確さ以外のもの（例えば文化やマインドセットなどの違い）が目に入ってこない状態にあるようだ。外国人留学生は多国籍であるが、外国人留学生をすべてネイティブと捉え、英語ができない自分との対比となっている。

学生Aにとって現在の目的は「英語を学ぶこと」で、英語で何かを勉強すること、英語をツールとして使うリベラルアーツ課程に違和感があるようだ。

3.2. 学生Bのクラスター構造と解釈

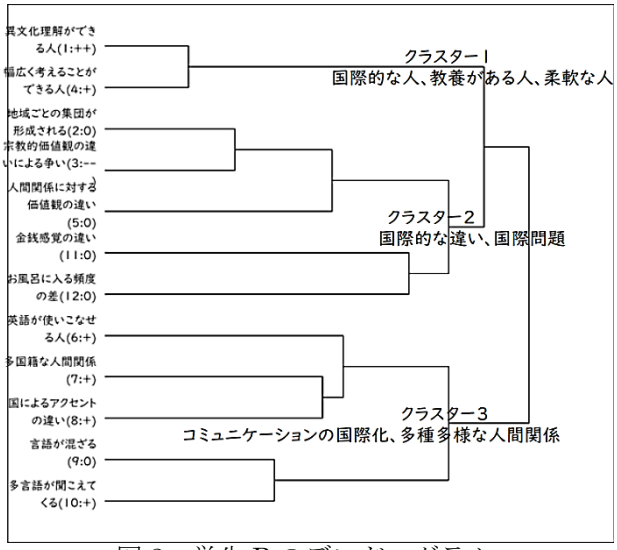


図2：学生Bのデンドログラム

クラスター1：＜国際的な人、教養がある人、柔軟な人＞　（2項目ともプラス評価）

クラスター1は、「国際的な人」をイメージした時に出てきたもの二つがまとまっている。この時のイメージする「国際的な人」は、異文化を理解・許容でき、幅広い学問的なことを考えられる人だと述べている。ここでいう学問における幅広さとは、学力そのものというよりも、幅広く考えようと思うこと、幅広い視点を持つこと、文化のみならず社会問題なども考えられることだと述べていた。

この「国際的な人」をイメージする時には、特定の人をイメージしていたわけではない。

クラスター2：＜国際的な違い、国際問題＞
（5 項目中マイナス評価 1、ゼロ評価 4）

クラスター2 は、入学してから学生 B 自身が経験したこと、学んだことのまとまりである。連想語の「宗教的価値観の違い」は、インタビューの際に、特に宗教を基とするものとは限らず、文化の教えのことだと数回述べていた。

国際的な環境になると、地域ごと、人種ごとでグループを形成するようになり、各文化の価値観が現れる。そして、時にはそれが問題になることもある。このような経験を通して、自分の中の日本的価値観にも気づくと述べていた。

クラスター3：＜コミュニケーションの国際化、多種多様な人間関係＞（5 項目中プラス評価 4、ゼロ評価 1）

クラスター3 は、コミュニケーションに焦点を当てたもののまとまりである。大学で多国籍の教員や学生と接した経験から「英語が使いこなせる」というのは、正しい文法やアクセントではなく、意思疎通ができることだと述べている。

そして、このような多国籍な環境であるからこそ、共通語である英語を使いこなせるようになり、また、「多国籍な人間関係」がなければ国際的だとは言えない。普段から多言語に囲まれ、会話の参加メンバーによって言語が混ざるような言語環境が自分の学部にはあると述べ、学生 B はその環境を良いものだと考えている。

各クラスター間の関係

クラスター1 は、このような人が国際的な環境の中でうまくやっていけるだろうという理想であり、クラスター2 は自分の経験、現実である。もともとクラスター1 のイメージを持っていたが、大学での経験を通し理想像がより明確になり、そのイメージが強化された。

クラスター2 の問題、例えば地域的な集団形成がなされると、多国籍な人間関係が構築されなくなる。クラスター2 の問題を解決する手段が、クラスター3 のコミュニケーションである。

「国際的な人」という大きなくくりの中の、人間性に焦点を当てたものがクラスター1 であり、コミュニケーションに焦点を当てたものがクラスター3 である。

学生 B の総合解釈

異文化を理解・許容でき、幅広く考えられるような国際的な素質（クラスター1）を持っている人間が、地域ごとの集団の文化的な教えによる、個々の人間にはどうしようもできないような問題（クラスター2）に直面した場合に、それを理解し解決しようとするために言語的コミュニケーション（クラスター3）を使うという関係がある。すべての連想語において、多文化・多言語環境にいる自分についてしっかりと認識しているように感じられた。また、異文化との接触の中で価値観の違いを経験することによって、自分の中の日本的価値観にも気づいている。

クラスター1 とクラスター2 には「国際的」、クラスター3 では「国際化」ということばが使われている。国際的というのは、「今がこうだ」という状態であるが、国際化というのは、一人一人ができることであり、そして、その「国際化」を通じて新たな「国際的」というイメージを作り出すと学生Bは述べる。クラスター2 の「違い」や「差」も、自分のための経験になっていることを認識しているためか、マイナス評価はつけられていない。このようなことから、学生 B には、自分が積極的に国際的になっていこうという主体性・積極性が感じられた。

4 総合考察

4.1. グローバル人材・異文化感受性発達モデルとの照合

PAC 分析の結果から、二人の学生がどの程度グローバル人材としての要素を持っているか、異文化感受性発達モデルのどの段階にいるかを検証したい。

グローバル人材要素については、学生 A は英語で授業を受けている中で、自分の英語力についてストレスを感じているようで、要素 I の語学力・コミュニケーション能力の獲得途上にあるように思える。要素 II・III については、解釈中に言及はなかった。

一方、学生 B は自分が積極的に変わり、国際的になっていこうという視点で一見ネガティブな経験も見ていることから、要素 II の主体性・積極性も獲得している。そして、学生 B は留学生との相違にもマイナス評価はつけず、さらにそこから、自分の中の日本的価値観にも気づくと述べており、要素 III も

獲得し始めていることがわかる。

異文化感受性発達モデルとの関係を見てみると、学生Aは多文化環境にいるにもかかわらず違いが見えていない段階で、自己中心的段階のかなり初期の成長段階にいると考えられる。これに対して、学生Bは価値観の違いや複雑さを認識することで自分自身の文化も客観的に捉えており、コミュニケーションによって問題解決を図ろうとしている。よって学生Bは文化相対的段階のいずれかの過程にいると考えられる。

4.2. 学生の差異の原因の考察

この違いは、デンドログラムのクラスター構造の違いにも表れている。学生A、学生Bともに「理想」(クラスター1)と、「現実」(クラスター2)が存在したが、「現実」として認識している内容が異なっていた。また、学生Bには「問題を解決する手段としてのコミュニケーション」としてのクラスター3があった。

これらの違いには次の三つの点が影響しているのではないかと考える。

①学ぶ目的、英語に対する考え方

学生Aにとっては目的は英語を学ぶこと止まりだが、学生Bにとっての目的はコミュニケーションで、英語は問題の解決策としての情報を得る道具、多国籍・多言語の中の共通語である。

②自分の置かれている立場の認識

学生Aは「外国人」の中の個々の違いが見えておらず、自分と「外国人」の対比だが、学生Bは個々の違いが見えており、多文化環境の中の自分が見えている。

③国際寮＆リベラルアーツ課程での経験量

学生Bと学生Aはリベラルアーツ課程で学んだ期間に大きな差が存在する。また、ここ2年半のコロナ感染症の影響で国際寮に入っていた留学生数は激減しており、男子寮と女子寮で留学生と生活する機会が異なっていた可能性がある。

5 おわりに

PAC分析により、異なった意識構造を持つ二人の学生を紹介した。

意識構造が異なることは当然のことであるが、その違いから国際的な視座獲得状況の段階の違い、さらにその要因となる可能性のあるものが見えてきた。学ぶ目的や英語に対する考え方、自分が置かれている立場の認識、国際寮やリベラルアーツ課程での経験量などが影響を与えていることが考えられる。

今回のPAC分析では、二人の学生の3年次半ばの状態が明らかになった。しかし、今後影響を与えうる要因が変化することにより、二人の学生の意識構造も変化していくだろう。

現時点では英語を学ぶこと、英語を正しく使うことに終始している学生Aであったが、今後リベラルアーツ課程での経験や海外留学の経験などを経て、新たな視点を獲得することで劇的な飛躍をとげる可能性もある。ある分野での留学生と自分との知識量の差を認識して、それを「恥」「思い知らされた」と捉える段階から、新たな自分の可能性、新たな学びの機会と視点を変えていくことで、学生Aはどのように変化していくか。また、変化が起こるのならば何がきっかけになるのか。

学生Bは今回の調査時点ですでにグローバル人材として必要な要素をかなり獲得しているようであったが、それが留学という新たなステージを経験し、どのようにさらなる飛躍を見せるのか。

今回報告した学生たちの今後の変化を継続的な調査で注視していきたい。

参考文献

グローバル人材育成推進会議（2012）.「グローバル人材育成戦略 （グローバル人材育成推進会議審議まとめ）」 https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/policy04/pdf/20120604/shiryo2.pdf （閲覧日：2022年10月31日）

土田義郎(2016). 「PAC-Assist2」 http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm （閲覧日：2022年10月31日）

山本志都(2014).「文化的差異の経験の認知：異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述」『多文化関係学』,11(3),pp.67-86.

Benett, M. J. (2011). “A developmental model of intercultural sensitivity”. The Intercultural Development Research Institute. http://www.idrinstitute.org/allegati/IDRI_t_Pubblicazioni/47/FILE_Documento_Bennett_DMIS_12pp_quotes_rev_2011.pdf (閲覧日：2022年10月31日)

(IMAKI Jun, OKABE Mariko)

第16回室蘭大会抄録

教員免許更新制の PAC 分析

― 制度が個人に与えた影響を個別のイメージから検討する ―

今野博信（室蘭工業大学）

key words：教員の資質　学校を忌避する子ども　教育の公共性

１　はじめに

2009 年から 2022 年までの 13 年間，幼稚園から高校までの教員は，各自が所有する免許状の有効期限内に講習を受ける必要があった。10 年間と定められた教員免許状を更新するためであった。講習では分野を指定され，それぞれ既定の時間数を受講し確認テストに合格が求められた。講習の総時間数は 30 時間で，その費用は受講する教員が負担する制度であった。

この免許更新制では，教員の資質向上が目指されていたので，受講を済ませた教員が増えるのに合わせて，学校の教育環境が好転し，さらには子ども達に関わる諸問題が解決に向かってもおかしくなかった。しかしそうであったのか。この制度が残した結果の検証は，重要であり必要なことである。実際に各領域から検討がなされている。

しかし一方で，その制度の下で実際に更新講習を受けた教員自身は，どのような印象をもったのかについても，記録し検討すべきである。教員としての資質を高める必要がある，と見なされた一人一人の教員に，この更新制度はどのように影響したのかを聞き取り，比較し，検討することを積み重ね，より良い教育環境の整備に結びつけていく必要があるからである。

この研究では，教員免許更新制について各個人がいだく印象を聞き取り，そこに表れた共通する要素と個別の特徴を探り記録することを目的とした。実際に更新講習を受講した教員に加えて，更新講習未受講の若手教員や教職課程履修中の学生にも印象を聞き取り，外部的な立ち位置から描かれる印象についても論じられるように対象を広げることにした。

２　方法と結果

調査協力者は 4 名。内訳は，公立小学校教諭の 2 名は共に男性で 50 代，公立中学校教諭 1 名は 20 代の女性，男子大学生は教職課程履修中の 20 代であった。個別の PAC 分析に先立ち，免許更新制についてのまとめスライドを PC 画面に示し，共通の知識を得てから PAC 分析に進んだ。所要の時間は約 2 時間から 3 時間であった。

免許更新制のまとめスライドは，次の内容で構成されていた。

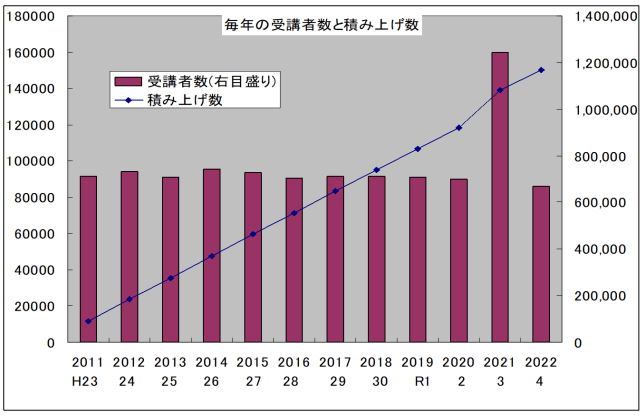


Fig.1　免許状更新講習受講者数

この，更新講習受講者数の増加(積み上げ数＝折れ線グラフ)に関連して，どのような学校関連の指標が変化したかを示した。

①教師の懲戒処分数
②精神疾患による教師の休職
③副校長，主幹教諭，指導教諭の増加数

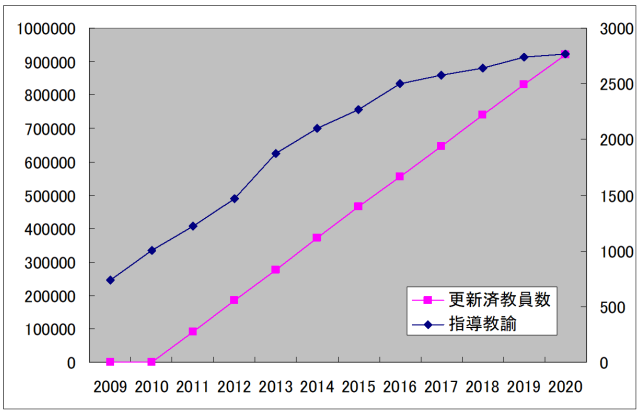


Fig.2　指導教諭の増加と受講者増加は正の相関

④不適切教員の数
⑤組合加入の教員数
⑥いじめの発見数（小中高）
⑦児童生徒の不登校数（小中）
⑧児童生徒の自殺（小中高）

⑨親が子どもに就かせたい職業（小１）

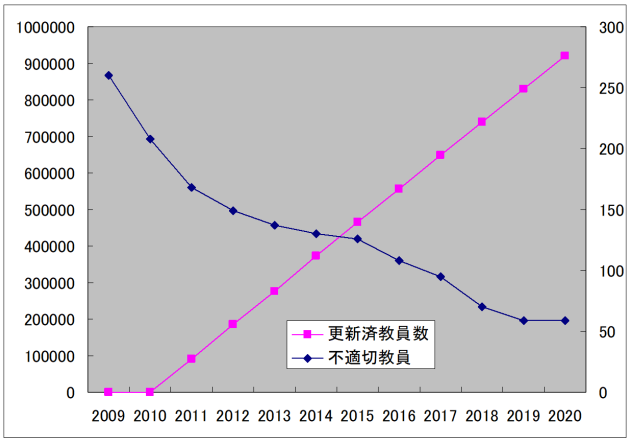


Fig.3 不適切教員とは逆相関

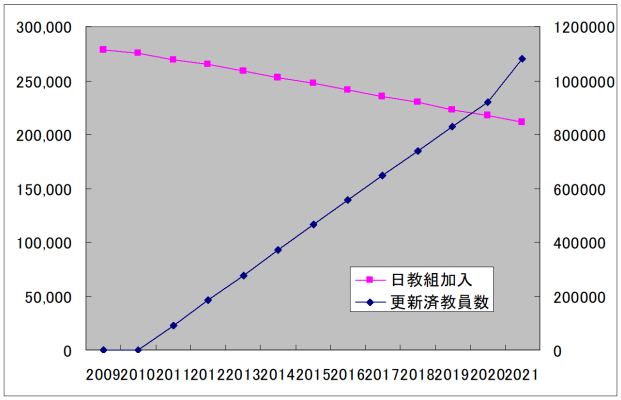


Fig.4 日教組加入教員数と逆相関

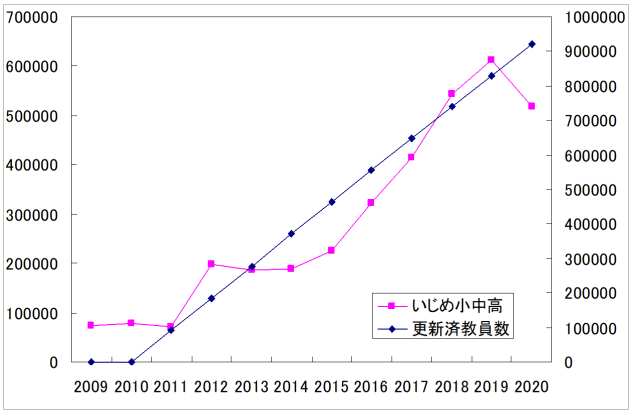


Fig.5 いじめ発見数増加と正の相関

更新講習を受講した教員数の増加と正の相関が見られたのは，③指導教諭の増加，⑥いじめの発見数の増加，⑦不登校の増加，⑧子どもの自殺増加であった。負の相関が見られたのは，④不適切教員の減少，⑤組合加入数の減少，⑨親が子どもに就かせたい職業であった。これらの指標に用いたデータは，公開されている文部科学省などのホームページからの数値である。ただし，⑨の親が子どもに就かせたい職業だけは，民間企業が集めたデータである。

増減に関連が見られた指標のなかで，学校全体や職業としての教員に関わるのが，③指導教諭の増加，④不適切教員の減少，⑤組合加入数の減少であり，子どもの実態に直接関わるのが，⑥いじめの発見数の増加，⑦不登校の増加，⑧子どもの自殺増加であった。

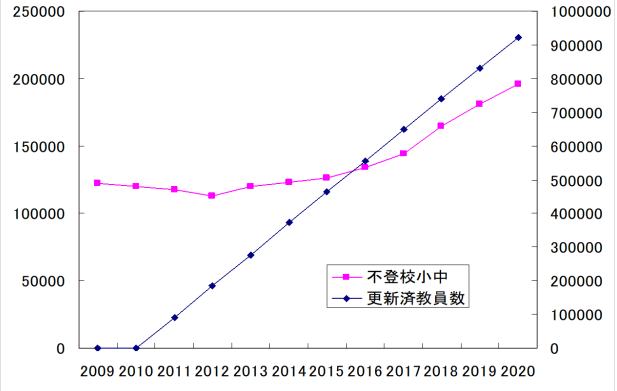


Fig.6 不登校数増加と正の相関

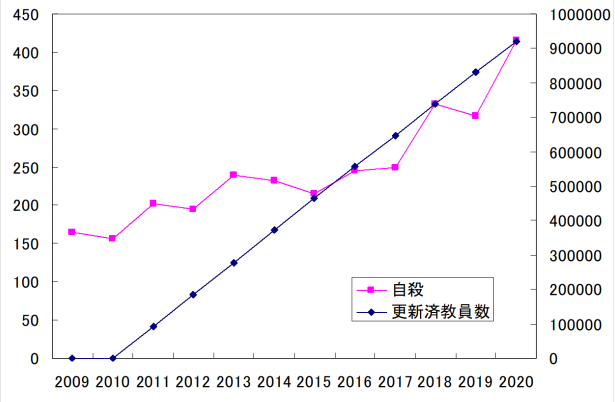


Fig.7 子どもの自殺増加と正の相関

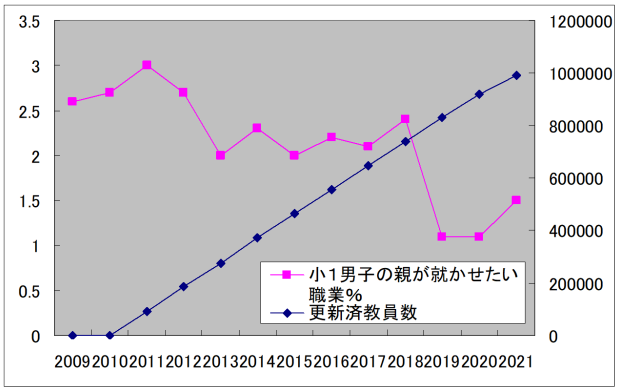


Fig.8 子どもに就かせたい職業とは逆相関

調査協力者 4 名を，A(50 代男性教諭)・B(50 代男性教諭)・C(20 代女性教諭)・D(20 代男子学生)と名付けて，以下に結果としてのデンドログラムを示した。

想起した項目の数を調査協力者ごとに，想起時と統合過程時に分けて，Table1 にまとめた。A は 11 項目を想起し，B は 13 項目，C は 11 項目，D は 11 項目をそれぞれ想起した。特徴的だったのは，

B における△評定が，想起段階でも統合過程でも共に 0 だったことと，どちらの段階でも B のマイナス評定がプラス評定の倍以上になっていたことであった。

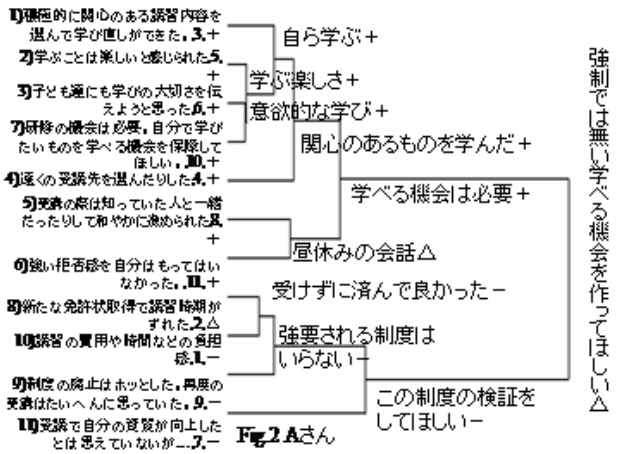


Fig.9 Aさんのデンドログラム

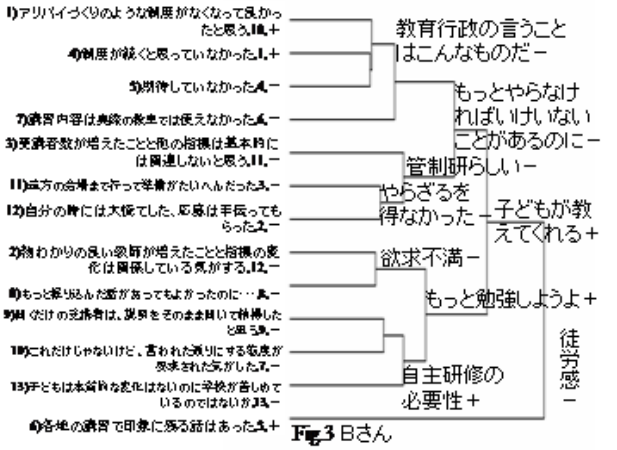


Fig.10 Bさんのデンドログラム

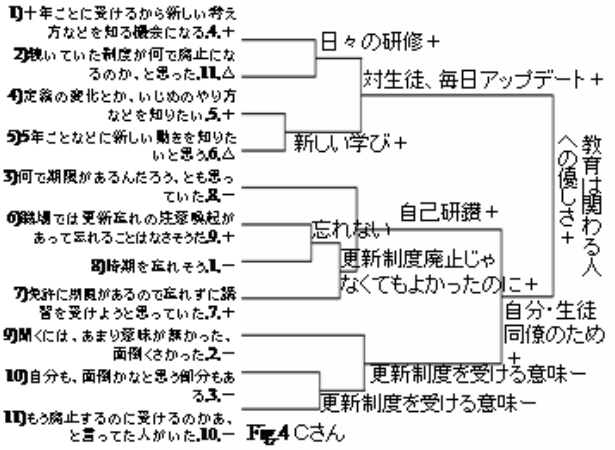


Fig.11 Cさんのデンドログラム

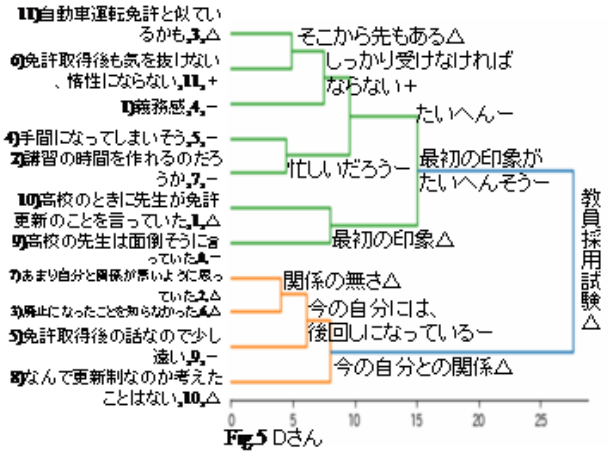


Fig.12 Dさんのデンドログラム

Table 1 想起項目と統合過程の正負判定

	想起項目			統合過程			合計		
	＋	−	△	＋	−	△	＋	−	△
A	7	3	1	5	3	2	12	6	3
B	3	10	0	3	6	0	6	16	0
C	4	5	2	7	2	0	11	7	2
D	1	5	5	1	4	5	2	9	10

A と B の二人は 50 代の教師で，C と D は 20 代の若手教師と学生であった。年代間の差について正負と△の数を合算した数を用いて χ^2 検定すると，5%水準で有意となった(χ^2=(2)=7.11,p<.05)。残差分析からは，50 代の二人は△評定が少なく，逆に 20 代の二人には△評定が見られた。プラスでもマイナスでもない△評定の多さは，内藤(2002))による回避度(情緒が喚起して苦痛が生じるのを避ける，「解離」や「自己疎隔感」の強さの指標)を高める結果に通じる。20 代の二人には評定に迷いが生じていた可能性が高い。

協力者ごとのデンドログラムと，統合過程や全体的な感想として聞き取ったコメントの要約を以下に示す。とくに注目するのは，最終統合としての命名と正負評定，クラスターの命名理由，協力者間で共通する感想である。

Aさんの結果：

最終統合を，「強制では無い学べる機会を作ってほしい」と命名し，△評定とした。更新制に対するイメージは，ポジティブな評定が多かったが，最終統合はプラスではなかった。命名内容からは，「強制性」に対する違和感がイメージに影響していることが分かる。また自身のイメージは，他の人から共感を得られる内容とは思えないと述べた。理由として，「研修などへの好き嫌いもあるので」とコメントした。この限定的な認識は，職員室などで各自が受講した更新講習の内容を語り合うこ

とがなかったので，制度の印象も当人に限った内容と思うしかない状況を示している。

Ｂさんの結果：

想起項目でも統合過程でもBさんはマイナス評定が多く，プラス評定の2倍以上となっていた。さらに△評定がないので，そのマイナスのイメージは迷いやためらいがなく断定的に描かれたと見なせる。プラス評定されたのは，受講した中に好感をもてる内容があったことと，更新制度の廃止を好意的に受け止めた内容であった。さらに最終統合は「徒労感」であり，マイナス評定であった。他の同僚に関する言及があるのは特徴的で，各自が受講した内容について「なぜ話さないのか。関心がない。話したところで，相手はおもしろがってくれないだろう，などと思ってしまう」と述べている。教師同士が互いの受講体験を共有し合おうとしないことに，この更新講習の特異な位置づけが見て取れる。

Ｃさんの結果：

20代後半の女性教諭であるCさんは，更新時期前に更新制廃止になり講習は受けていない。自分で講習内容を想像したり，職場で先輩教諭の話を聞いたりして描いたイメージだと断ってから調査に応じた。想起項目には，新しい知識や教育の最新動向を知り得る場として，更新講習に期待するポジティブな表現が見られた。また，職員室などで聞いた講習体験者の感想からイメージを喚起していた。そのことは期待感を抱かせもすれば，自分の期待を自分で諌める場合もあった。このイメージの定まらなさの理由には，更新講習後の体験を教師同士が語り合っていないという事実が大きく関わっていると想像できる。

Ｄさんの結果：

教職課程を履修中の学生Dさんは，更新制の意味や大まかな内容を知っていたものの具体的なイメージは描きにくいようであった。しかし，11の想起項目数は他の協力者と同等であった。マイナスの評定が多く，さらに△評定が最も多いという特徴が見られた。また，学生同士で更新制が話題になることはないと話し，学生なら誰でも自分と同じような項目を想起するだろうと述べた。

３　総合考察

教員の免許更新制の下で，小中高の教員は十年ごとの講習参加が義務づけられたが，その受講体験は教員間で話題にされることがほとんどない事実が示された。この「話題にされないこと」のせいで未受講の若い世代の教員は，自分なりに理想化した講習に期待する場合も，受講体験者がつぶやく負担感や皮相な講習内容などから期待をしぼませる場合も，どちらの場合であっても具体的なイメージを描けない状況にあった。

本来教育に携わる仕事には，公的な要素が基層となっている(教育基本法第6条など)と考えられて来たが，この免許更新制は教員の個人的な利得や都合を強調した面があった。その影響は，教員間に共有されるべき教育の公的性格を職場内で後景化させた可能性がある。例えば，受講後に身に付けた内容が子ども達に還元されることがあれば公的作用と見なせるが，そうした成果があったと協力者から聞くことはなかった。それは，講習内容と学校ニーズとのずれといった問題ではなく，更新講習が教師にとって利己的な価値をもつと性格づけられたことから，受講の成果は個人内に留まらざるを得なくなったと考えられる。

これらのことは，教師が孤立状態に置かれている可能性を示すものと考えられる。B教諭はさらに，定年退職後に再雇用(再任用)で自分が学校に残ることはないと強い口調で言い切った。B教諭はPAC分析の前に見たスライドに対して「物わかりの良い教師が増えたことと指標の変化は関係している気がする」との項目を想起した。この場合の「物わかりの良さ」は良い意味ではなく，主体性に欠けた教師に向けた評である。主体的な選択としてB教諭は再雇用を拒否している。

一方で若い世代の教師（や学生）は，講習への期待を感じていた。更新制が廃止になったことで新しい学びの場を求める機運も見られる。ところで，教師が学ぶ場とはどこであろうか。若い世代では講習会などを考えているようだが，二十代後半のA教諭が，「生徒との接し方など具体的な方法は，研修などでは身に付けられないだろう。日頃の生活の中で身に付けていくことになる」と感想を述べている。更新制廃止後に，ベテラン教師を学校から遠ざけずに，職場内で教師同士が教え合う関係が復活する可能性がある。

更新制度下でも，教師は学びの場と見なせばそこでの学びに謙虚であった。今後，教師の学びをより活性化させる自主的な研修が保障されれば，教育は再び躍動を取り戻すことができるであろう。それは，教職を志望する次の世代への強いメッセージにもなるはずである。　(Hironobu KONNO)

PAC分析研究 第7巻
PAC分析学会2023年度大会

Pac Helper Text(PHT)と他のソフトによる樹形図表現の比較

今 野 博 信
（室蘭工業大学）

key words：ソフトによる出力表現, Pac Helper Text, Python

はじめに

個別で質的な心理反応の記述に際し，量的処理を介在させることに PAC 分析の独創性が表れている。とくに樹形図(dendrogram)で示された想起項目間の関係は，調査協力者と調査者間に共通理解の場を提供する。このことは個人が抱える心の問題を，他者了解的に協同して論じられるような可視化とも考えられる。

しかしこの量的な処理については，これまでも作図結果が一意に決定されないという点からの問題提起があった(教育心理学会 50 回大会のシンポジウムなど)。統計ソフトウェアによって樹形図の形状が異なることが PAC 分析に与える影響点に関し，小澤・丸山(2009)では二種類の統計ソフトを用いて調査協力者の反応を比較している。その結果では「デンドログラム上の連想語の並び順が少なからず調査協力者の内面探索に関与した可能性が観察された」と述べられている。

一方で，樹形図の役割が調査研究の結論を導く直接の根拠ではなく，項目同士の統合の意味づけを調査協力者から聞き取る切っ掛けであるという理解は定着している。小澤・丸山(2009)でも「PAC 分析は統計処理のみが重要なわけではなく，インタビューの技術やその後の分析・解釈のプロセスにおいても研究者が真摯に向き合う」ことの重要さが強調されている。

こうした状況を考えるのに，暗がりの対象物に白熱電球の光を当てるか，LED の光を当てるかのたとえが有効である。対象の概観はどんな光でも分かるが，細部を調べるには光源の性質を理解しておく必要がある。直進性の高い LED 光がつくる陰は電球に比べて暗くコントラストが大きくなる。光源(量的処理法)ごとの性質について予め知識をもつことは，目的とする対象の深い理解にとってきわめて重要である。

本稿では，筆者の開発した Python コードによる PAC Helper Text での樹形図と，他のソフトによる樹形図とを比較し，それぞれの特徴を示すことを目的とした。ソフトに読み込ませるデータには，同値が少なくソフト間での差が表れにくいものと，同値が多くソフトのアルゴリズムの影響が表れやすいものを用意し，重層的な比較を目指した。実際の調査研究の条件に合わせてソフト選択をする検討素材となるように意識した。こうした各処理法の特徴理解の上で，よりよく PAC 分析が広範な領域で実施されていくことに期待している。

方法

共通データ：距離行列 1 (同値が少ない)
距離行列 2 (同値が多い)

クラスター分析を実施するソフト：
ソフト 1　PAC Helper Text (PHT)
ソフト 2　HAD 16
ソフト 3　HALWIN Ver.6.24
ソフト 4　SPSS 29.0.1.0(171)
参考(サイト)　reLap

手続き：二種類のデータから樹形図を作図し，特徴を記録する

各ソフトでは，距離行列からクラスター分析をして，デンドログラムを出力させる

クラスター分析の設定は，ユークリッド距離で計算し，ward 法を用い，可能な場合はラベルによる出力をする

出力結果までを比較するので，作図後の聞き取りは実施していない

データ構成：
項目数は 8，項目間で仮定した距離は次図。

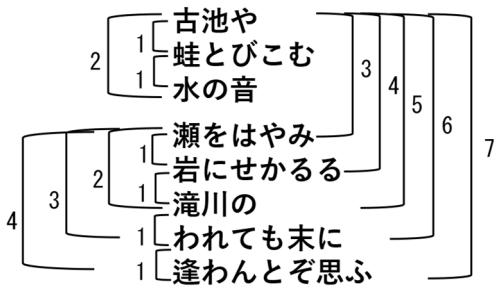


図1　項目と項目間の仮定距離

表１　距離行列１（同値が少ない）

	古池や	蛙とびこむ	水の音	瀬をはやみ	岩にせかるる	滝川の	われても末に	逢わんとぞ思ふ
古池や	0	1	2	3	4	5	6	7
蛙とびこむ	1	0	1	3	4	5	6	7
水の音	2	1	0	3	4	5	6	7
瀬をはやみ	3	3	3	0	1	2	3	4
岩にせかるる	4	4	4	1	0	1	2	3
滝川の	5	5	5	2	1	0	1	2
われても末に	6	6	6	3	2	1	0	1
逢わんとぞ思ふ	7	7	7	4	3	2	1	0

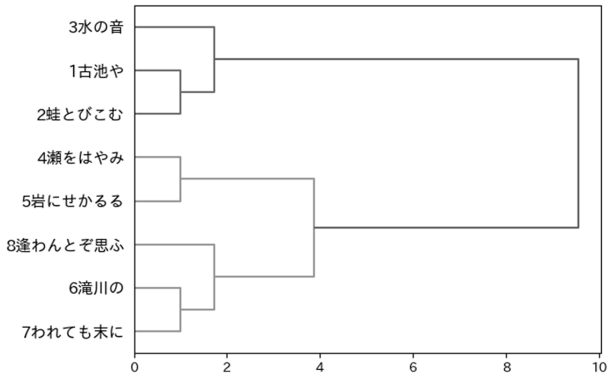
表２　距離行列２（同値が多い：イタリック）

	古池や	蛙とびこむ	水の音	瀬をはやみ	岩にせかるる	滝川の	われても末に	逢わんとぞ思ふ
古池や	0	1	2	*1*	4	*1*	6	7
蛙とびこむ	1	0	1	3	4	5	6	7
水の音	2	1	0	*1*	4	*1*	6	7
瀬をはやみ	*1*	3	*1*	0	1	2	3	4
岩にせかるる	4	4	4	1	0	1	2	3
滝川の	*1*	5	*1*	2	1	0	1	2
われても末に	6	6	6	3	2	1	0	1
逢わんとぞ思ふ	7	7	7	4	3	2	1	0

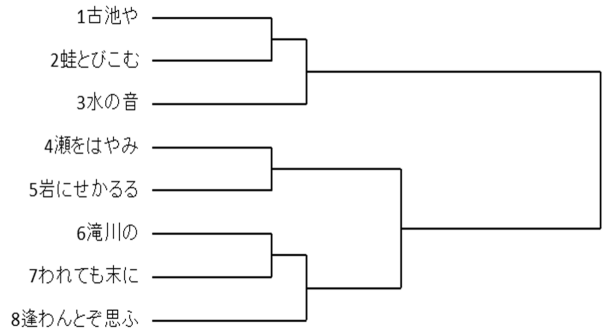
結果

距離行列１による樹形図

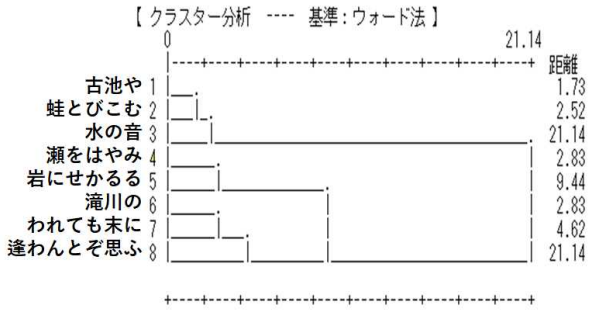
① PAC Helper Text



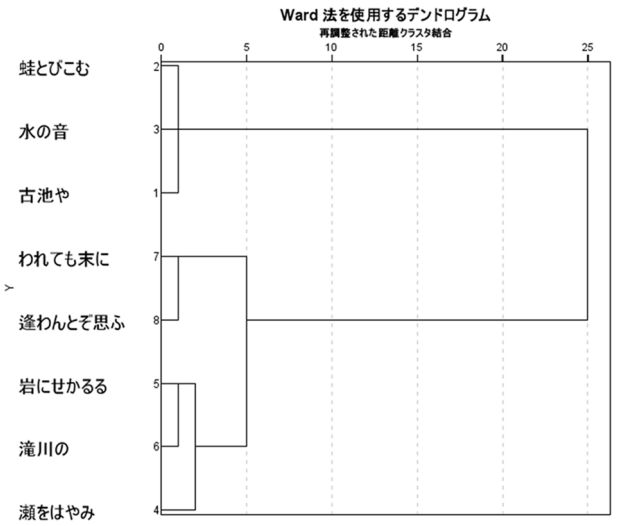
② HAD



③ HALWIN



④ SPSS



データとして読み込んだ距離行列１は，隣同士の距離は１として，最も離れた項目間(「古池や」と「逢わんとぞ思ふ」)の距離は７で構成されている。その他の項目間はそれぞれの間にある項目を数えて距離とし，俳句と和歌の間に一項目分の距離をおいた。このことで，俳句と和歌をまたぐ項目同士の距離は，この１を加えて数えることとした。また，各項目に付された数字は重要度順を示している。

どのソフトによる樹形図でも，俳句と和歌は明確に区別されて異なるクラスターに分類されていた。統合の過程を詳しく見ると，重要度の順番(句の並び順)と項目の並び順にはソフトによる差が見られた。

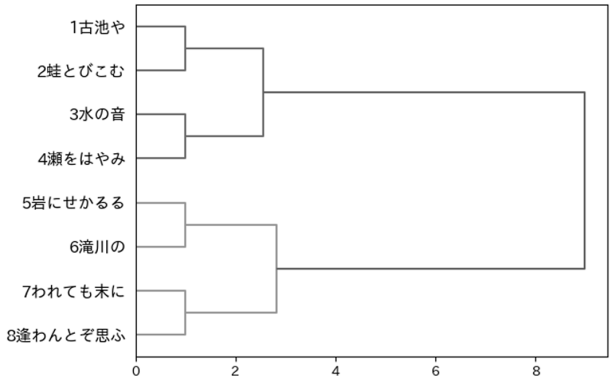
重要度の順(句の順)が上からそのまま並んだのは，HAD と HALWIN であった。また項目同士の統合過程で，１と２の統合後に３が統合する順番(他にも４と５，６と７と８)は，PHT でも共通していた。SPSS による樹形図では，統合された俳句クラスターと和歌クラスターの項目構成は他のソフトと共通していたが，クラスター内で項目同士が統合していく順番は他と共通していなかった(４と５と６，７と８)。

樹形図に併記される統合距離の目盛りは，その利用法が確立しているわけではないが，今回のような比較には検討が必要になる。この目盛りについては，ソフト間で共通する関係は見られなかった。最終統合の距離では，最も近い数値では 10 であり(PHT)，最も遠い距離は 25 であった(SPSS)。また，HAD ではこの目盛り自体が表示されていなかった。ただし，統合の距離の相対的な位置関係(順番)は共通していた。具体的には，１と２，４と５，６と７の組が近い位

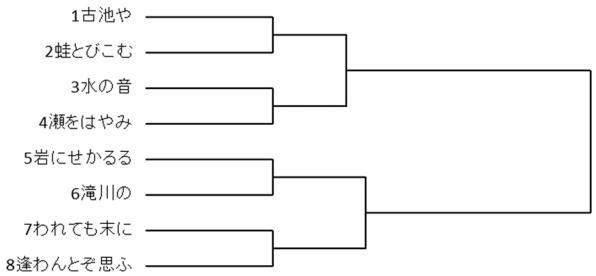
置で統合されていた。HALWIN では 1 と 2 の統合だけがとくに近かった。SPSS の俳句クラスターの統合は，1 と 2 と 3 がまとまっていた。

距離行列 2 による樹形図

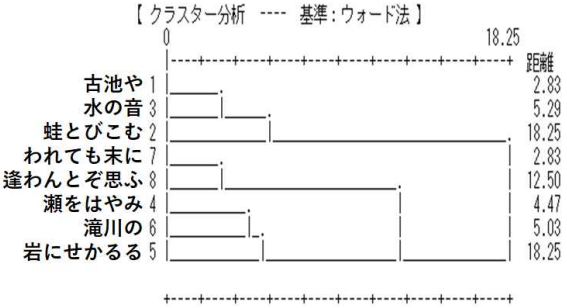
⑤ PAC Helper Text



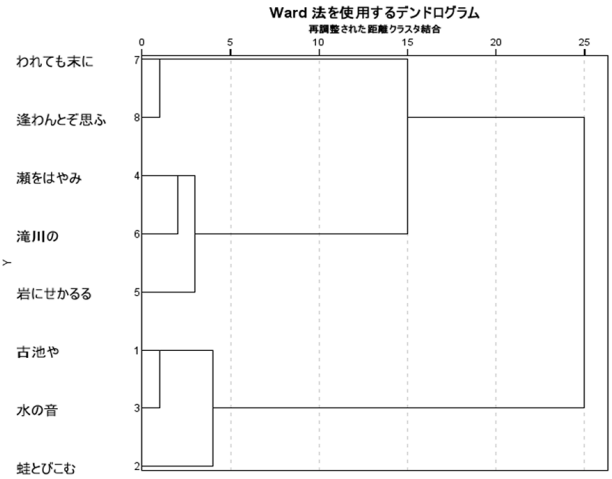
⑥ HAD



⑦ HALWIN



⑧ SPSS



同値の多い距離行列 2 のデータによる樹形図では，ソフトごとの作図に違いが見られた。ソフト間での違いと，同じソフトにおけるデータ間(距離行列 1 と 2)の違いが見られた。

俳句クラスターと和歌クラスター内での統合に，PHT と HAD で乱れが見られた。具体的には「3 水の音」と「4 瀬をはやみ」が，俳句と和歌のカテゴリーを越えて統合された。両ソフトでは他にも，1 と 2，3 と 4，5 と 6，7 と 8 が同程度の距離で統合されており，この二種類の共通性が推測された。さらに二段目で統合する組み合わせ(1,2,3,4 と 5,6,7,8)でも，PHT と HAD は共通し，統合する距離がわずかにずれている点でも似ていた。

HALWIN と SPSS の樹形図では，俳句クラスターと和歌クラスターの統合はそれぞれ独立して維持されていた。具体的に俳句クラスターで見ると，1 と 3 がまず統合し，そこへ 2 が統合する順番になっていた。つぎに和歌クラスターを見ると，まず 7 と 8 が統合し，4 と 6 の統合後に 5 が統合していた。こうした順番は，これら二種類のソフト間で共通していた。統合距離では，最終統合が 18.25(HALWIN)と 25(SPSS)と示され，違いが見られた。

総合考察

読み込むデータが同値の少ないものから多いものに変わっても，HALWIN と SPSS では俳句クラスターと和歌クラスターが分離されて表現されていた。このことは，この二つのソフトの統計処理過程で，データの読み込み順をより重視している可能性が考えられる。同値データの扱いに関して，作図に直結させるのではなくデータ読み込み順(多くの場合は重要度順)を反映させた表現を優先させているようである。

このことを実際の調査場面に当てはめて考えると，例えば調査協力者による類似度評定でばらつきが大きく一定の傾向を見出しにくいデータが得られた場合でも，HALWIN と SPSS では一貫した表現で安定的な樹形図が描かれ得ると期待できる。基本的には，重要度の順に統計処理が進む可能性が高いからである。

一方で PHT と HAD の樹形図では，同値が増えたという変化が実際の作図に目に見える形で反映された。調査協力者の類似度評定に揺れがあれば，それを捉えてその揺れがそのまま作図上の表現に現れたと考えられる。これは個人の

内面の微細で躊躇いがちな変化を受け止めようとする際には，重要な特徴といえる。

ところで，調査・研究のインタビュー場面を想定して考えると，調査者が設定したテーマに対する調査協力者の反応を確信的に予測することは困難である。例えば協力者の回答が大きな揺れを含み当人も方向性を見いだせない内容となる予測があれば，多少の揺れを吸収し得るソフトとして HALWIN や SPSS を用いることを考えてもよいが，実際にはそうした予測が成り立たないので現実的な対応とはいえない。

調査者による利用ソフトの選択で重要視されるのは，多くの場合使いやすさや使い慣れた感覚と考えられる。そのことは，量的処理内容の違いを軽視しているからではなく，処理結果つまりは樹形図の読みやすさを重視しているからと想像できる。そのことが大事な意味をもつのはつまり，調査協力者に樹形図を示し説明する際の調査者自身の納得の度合い(あるいはフィット感)が，とても重要だからである。

そうであっても，ソフトごとの特徴把握は重要であり，そうした違いを理解した上に実際の調査が実施されるべきであろう。今回の比較では二種類のデータしか用いていないので，ソフト間の差異を調べ尽くしたとはとうてい言えない状況である。今後も定期的に最新の改訂版を用いて継続した比較が行われれば，各研究者にとって有益な情報がもたらされることは確かである。

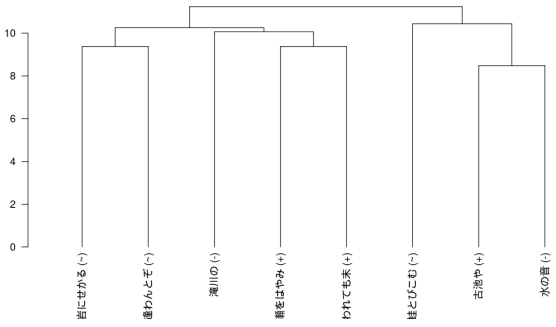
最後に付け加えるべき情報として，インターネット上で PAC 分析を実施するサイトで比較した結果の報告である。最近の傾向として特定ソフトを個人のコンピュータに導入(インストール)して利用するよりも，ネット上で処理する使い方が定着しつつある。いわゆるサーバーサイドでの処理である(PHT の Colab 利用もサーバーサイド)。この利点はいつでも最新版を使えることと，個人でメンテナンスする必要がない気軽さである。

reLarp というサイトでは，PAC 分析をネット上で実施できる環境を提供している。事前の利用登録などの手続きは必要なく，すぐに回答を記入して結果を得ることが可能である。使用する言語も英語・ドイツ語・日本語から選ぶことができる。サイトのＵＲＬは下記の通り。

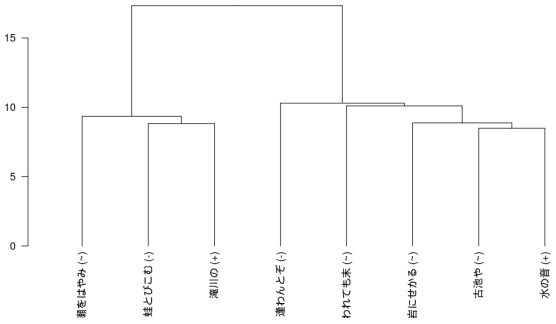
https://b-ok.shinyapps.io/reLarp/

今回の比較と同じデータを用いてサイト上で PAC 分析をおこなった結果の樹形図を示す。距離行列 1 と距離行列 2 の二つのデータから得られた樹形図である。

距離行列 1



距離行列 2



同値が少ない距離行列 1 のデータでは，他のソフトによる樹形図と類似していた。すなわち俳句クラスターと和歌クラスターそれぞれで独立した統合が見られた。ただし，統合の順番は他のソフトと違っていた。

同値が多い距離行列 2 の樹形図は，俳句と和歌が混じり合っており，その混じり合う順番についてもどんな基準があるのか推定が難しい結果となっていた。パラメータの設定ができない仕様なので，限定的な利用となりそうであるが気軽に使用できる利点は大きい。

PAC 分析での樹形図作成は下ごしらえと言える。準備があって協力者からの聞き取りが成り立つ。聞き取りは作図結果に直接依存する過程でなく別な技能が必要とされるが，調査者自身が納得してソフトを用いることで協力者からの深い反応を引き出せる可能性は高まる。道具を大事にしない料理人がいないように，研究者もソフト使用に関心をもつ必要があろう。

文献

小澤伊久美・丸山千歌 2009, PAC 分析における好ましい統計処理とは ソフトウェアによってデンドログラムが相違する問題への対処のために，日本語教育研究第 6 号, 25-46

（Hironobu KONNO）

1−2

日本の小学校で外国出身の保護者が抱く違和感と不適応
—スリランカ人女性保護者の内面を探るPAC分析を通して—

S. M. D. T. ランブクピティヤ
（久留米大学）
key words：学校文化、保護者、違和感

はじめに

日本の学校に児童を通わせている外国人保護者（以下、FG）から、学校現場で様々な問題に直面しているという悲鳴が上がっている。それは、日本の学校で当たり前とされていることが、FG が経験している母国の学校では当たり前ではないか、稀なこととされていることもあるからである。つまり、FG が日本の学校文化を十分に理解していないことが一因となり、このような問題が発生していると考えられる。

ここでまず疑問となるのは、日本の学校文化とは何かということである。旗浦（2012、p.96）によると、日本の学校文化は、日本人の教職員、保護者、生徒が当たり前としている全てのことを指している。つまり、「学校を取り巻くコミュニティの人間観や子ども観、発達観、教育観、よき人生のイメージなどの文化的要因体系」がこれに含まれる。その具体例として、教師と保護者の関わり方、先生による生徒への褒め方、叱り方、などが挙げられている。

一方、松永（2016、p.18）は、「ある国・地域に生まれ育ったものが、長期記憶として獲得する、その国・地域で生活していく上で必要な様々な地域・情報」があると述べている。したがって、その国・地域で生まれ育っていない外国人にとっては、これらの情報は理解しにくいのであろう。これらの情報は目に見えない暗黙裡にあり、その地域に生まれ育った人々も無意識に獲得していることが多いとされる。同様のことが日本の学校にも当てはまるのである。日本の学校には目に見えない文化スキーマが存在しており、日本で生まれ育っておらず、なおかつ日本の学校を体験していない FG にとっては、理解しがたく違和感を抱かせるのである。そのため、日本の学校で FG が感じる違和感や適応困難さを明らかにし、彼らが良好な学校生活を送るために対策を検討することが必要である。それにより、日本の学校におけるグローバル化が進行し、日本人保護者にとっても FG にとっても快適な学校環境が実現されると考えられる。

しかし、日本の学校と関わっている FG を対象とした研究は少なく、対象としている研究も子供の教育についての意識（田巻ほか 2006）、子供の教育への不安（青木ほか 2014）、学校便りにおける語彙の理解（李 2017）などにしか着目していない。ランブクピティヤ（2022b）は、スリランカ人保護者の視点から、日本とスリランカの小学校に見られる文化的な相違点を調べているが、それらの相違点に対して、日本の学校で彼らが感じる違和感や不適応までは明確にしていない。

今後この課題を解決し、FG 及び日本の学校関係者（学校の教職員、日本人保護者および生徒）が相互理解を深め、さらに FG が日本の学校に適応できるような対策や支援を検討する必要がある。そのため、本研究では、日本の小学校でスリランカ人保護者が感じる違和感と不適応を検討することにした。

方法

被検者：シンハラ語を母語とするスリランカ出身の女性保護者 1 名（40 代前半）。調査当時、彼女は日本の公立小学校 4 年生児の母親だった。彼女は留学のため日本の国立大学の理学修士課程に入学し、その後、理系の博士号を取得していた。調査当時は就労ビザを持ち、民間企業が運営する英語スクールの正社員として講師を務めながら他の講師のマネージャ役も果たしていた。大学院でも英語を媒介語としたコースに所属していたため、日本語学習については独学が多く、地域ボランティア日本語教室でも来日間もない頃半年程度学習した経験があった。調査時には、日本在住期間は 15 年だった。

提示刺激：被検者が日本の小学校で感じる違和感を把握できるように、また、正確な情報が伝達できるように、シンハラ語、英語、日本語（フリガナ付き）という 3 言語で、図 1 のような刺激文を作成した。検査者と被検者はともに、スリランカ出身でシンハラ語母語話者だったため、調査に関する説明や指示を含む、全ての会話をシンハラ語で行った。

あなたは、日本の小学校にお子さんを通わせている／いたため、学校における様々な場面や状況（学校説明会、入学式、授業参観、懇談会、運動会など）と関わっています／いました。その際、お子さんの教育や学校生活のことで、日本人の担任の先生、学校の他の日本人の先生方、日本人の職員、日本人の保護者、さらにお子さんの友達（他の生徒）と関わり合い、コミュニケーションを取っています／いました。お子さんの学校生活や教育に関することで、これらの方々と連絡やコミュニケーションを取り合い、付き合っていく中、また学校・学校の行事やイベントと関わっていく中、不自然だと感じたり、違和感が生じたりすることがあります／ありましたか。どのような場面や状況において、そのように感じる／感じたと思いますか?また、不自然な感じや、違和感を懐いたとき、どんなことが頭に浮かんできて、どのようにしたいと感じたり思ったりします／しましたか? そして、それらを解消するためには、どのようにしたら良いと感じます／感じましたか?頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。

図 1　スリランカ人保護者が日本の小学校で感じる違和感を把握するための刺激文（日本語版）

使用分析ソフト：HALWIN

調査期間と調査場所：2022 年 1 月 19 日～同年の 1 月 29 日までの期間内で 6 回にわたって調査を行ったが、本稿では、その一部のデータのみを使用している。調査場所は、被検者の自宅及びオンライン上であった。

結果

統計ソフトが算出した日本の小学校で被検者が感じる違和感（連想反応項目）が反映されたデンドログラムは図 2 である。

＜被検者のイメージと解釈の省略版＞

クラスター1：やるべきことの量が多い。これら全てが言語の壁と絡まっている。すると思い通りにやりたいことができないので、それがストレスの原因となる。例えば、締め切りが過ぎている、学校からクレームがある。これら全てが日本の生活が嫌になることにつながる。70%も日本語の壁と関係する。スケジュールを読んでも理解できない。誰かに電話して聞かないといけない。子供に教えられない。全部（主人のサポートなしで）一人でやらないといけない。締め切り等がすんなり頭に入らない。覚えられない。後であの人に聞くとし、後回しにする。忘れる。学校からのお便りも多い。イベントなどの日時が過ぎてしまう。締め切りが過ぎてしまう。細かすぎて朝学校のために用意しなければいけないものも多い。学校に行ったら、あれこれがなく忘れ物。こちらの習慣も分からない。全部一から我々が勉強しなければいけない。聞ける人もいない。

クラスター2：子供は最終的にどこにいくんだろう？我々がいないと、この子達はどうなるんだろう？親戚も誰もいないし。グローバル人材になって一人で生活できて、人生を上手く歩めるのか？子供のこと、彼らの将来のことをいつも思う。それが不安に感じる。

だから外国人が住みやすいように、開かれた日本になるようにもう少し何かをしないといけない。他の国（オーストラリア、英国など）にない日本の問題は言語と絡まってくる。日本の親は、彼らの伝統的な制度なので、親から、親の親から聞いて、歴史的なことや経験をもとにできたセンス（感）を持っている。これらって、どこかに書いてあるものでもないので、我々は知らない。（日本の学校）、宿題が多い。宿題をたくさんさせて能力を上げられると思っているが、他の方法はないか、子供を評価できる他の方法はないかを考えない。伝統的な設定や枠の中だけで練習ばっかりさせられ、自由な発想に場がない。日本の保護者にも創造力クリエーティビティがない。他の国と比べると、日本は教育内容の量も多く、重すぎると思う。日本の伝統的な教育制度は変えるべき。もう少し子供達に自由が必要だと思う。

クラスター3：会議を忘れている。書いてあっても携帯を見忘れる。頭を整理できる時間がない。仕事の量が多い。責任も多い。この頃、教会、子供会、塾、学校からお便りが多い。主人を行かせても意味がない。「丁寧ではない話し方」とは、お支払いの件で、私が保育園に行ったら、皆の前で先生に怒られた。私が悪いけど、私にもそうなってしまったことに正当な理由がたく

さんある。けど我々の問題や悩みを言えない。　彼ら

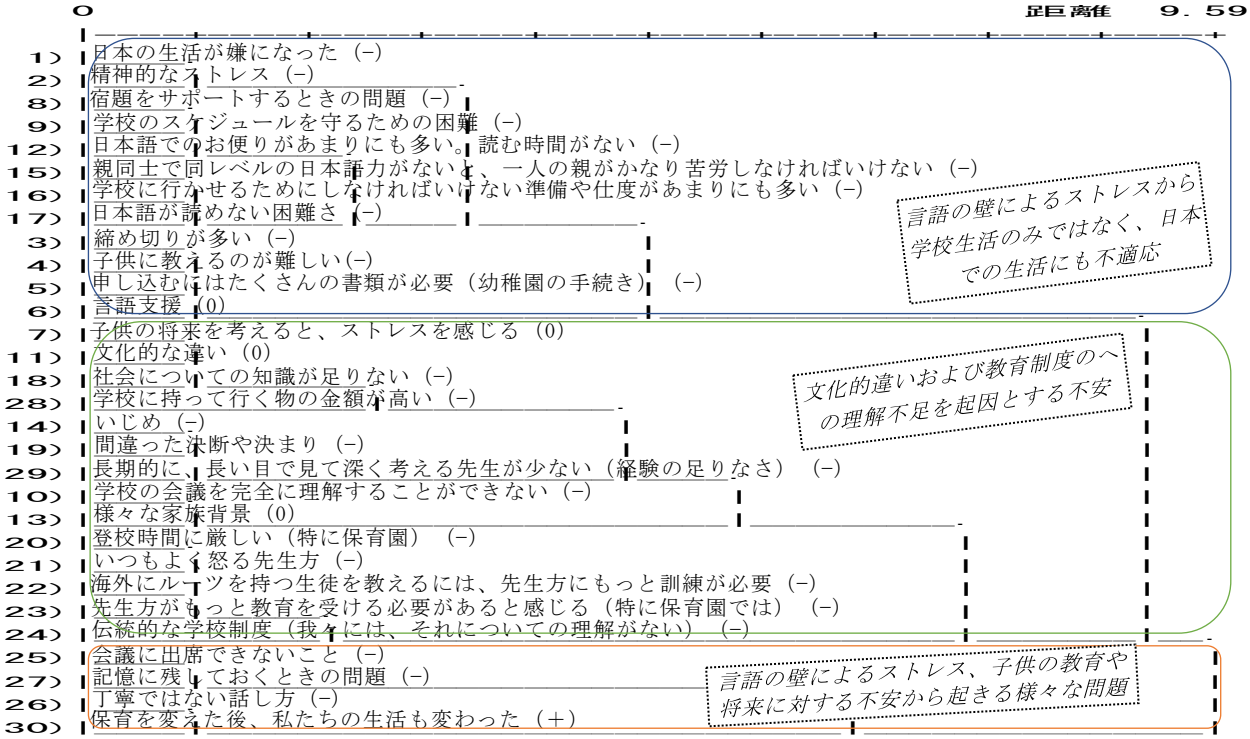


図 2　日本の学校文化に対するスリランカ人保護者の違和感を示すデンドログラム

（先生方）には我々外国人保護者の日本での大変さが理解できない。スリランカと比べると、日本の話し方はとても丁寧。我々も日本の丁寧な話し方に慣れているので、日本人がそうではなくなると、耐えられなくなる。

総合考察

クラスター1 から被検者の違和感は、日本語への不慣れや理解の困難さ、いわゆる言語の壁と密接に関連しており、子供の学校のイベントや締め切り、学校への持ち物に関する理解不足、学校からのお便りや情報が過多で、それに追いつく時間がないなど、多くの問題の根本にあることがわかる。また、仕事を持ちつつ家庭と子供の学業を管理する必要があるため、被検者は多くの負担を背負っていることも理解できる。したがって、これらの要因が被検者の生活を複雑にし、日本の学校への適応を困難していると考えられる。

クラスター2 から被検者は、保育園に対する不満があり、具体的には先生方の教育の質が低いこと、若すぎて経験不足であること、コミュニケーションスキルが不十分であることに疑問を持っていることがわかる。さらに、被検者は日本の教育制度が宿題や評価において過度な重圧をかけすぎていると考え、宿題の量や伝統的な学習アプローチに対する疑念を抱いており、その結果、生徒の創造力や自由な発想に余地がないと指摘している。このような日本の小学校で感じる違和感、教育の質、教育制度の重圧、自分の言語の問題、それに対するサポートの不足などが複合的に影響し、被検者のストレスを増加させ、子供の学業および将来に対する不安を引き起こしていると言える。

クラスター3 において被検者は会議への出席を忘れること、情報を記録するスキルの不足、日本人教職員の丁寧ではないコミュニケーションによるストレスなどを報告し、また、仕事と家庭を両立させることが難しいと語っている。これらのことから、FG が日本の小学校で感じる違和感は、コミュニケーションと情報の管理、子供の教育と自身の職業の調整、子供の教育目標の設定、そして日本の言語と敬意の文化に起因していると言えよう。

上述したデンドログラム、被検者のインタビューデータをもとに、クラスター1 を「言語の壁によるストレスから学校生活のみではなく、日本での生活にも不適応」、クラスター2 は「文化的違いおよび教育制度のへの理解不足を起因とする不安」、クラスター3 は「言語の壁、日本の学校文化や制度の違いによって起きる問題」

と命名できよう。

全てのクラスターを総合的に考慮すると、スリランカ人保護者が日本の学校で感じる違和感や適応困難には、日本語の壁が大きな起因として示唆される。したがって、FG にとって日本語のサポートが不可欠であることは言うまでもない。学校および地域社会での多文化共生を促進するにはそれだけでは不十分である。日本人教職員、保護者、地域住民も自身の意識を変え、他言語の教育に積極的に取り組む必要がある。少なくとも日本の英語教育を見直し、日本語母語話者が必要に応じて日常会話レベルの片言での英語でも話せるようになる必要がある。これは FG や地域住民の外国人を支援するためではなく、彼らを理解し、地域で共に安心した日常生活を送るためである。つまり、自分たちの安全と安心した生活の確保のためである。

一方で、在住外国人の言語問題を解決するには、日本における従来の言語政策の改革も必要であろう。既に「やさしい日本語」という概念ができており、そのおかげで外国人のみではなく、障害を持つ人々、高齢者、子供、重い病気を患った患者なども助かっている。誰も取り残さない社会を実現するには、全ての人が無理なく使用できる言語が必要であろう。日本語の敬語が難しいというのは留学生を含む外国人によく言われることである。本研究の被検者も、日本語の敬語と関連することで違和感と不適応を経験していると言及している。敬語の使用によって、あえて差別化を図る場合や敬語を使用しないことで見下されるなど、様々な事態が発生することがある。外国人が増加する日本社会において、敬語教育とその政策を見直すべき時期が訪れているかもしれない。さらに、言語政策を検討する際には、日常漢字の数やそれらの簡略化された書き方などの検討も必要であろう。

FG へのサポートとして、学校文化や教育制度に関連する研修が必要だと考えられる。ただし、これは一方向的に FG だけを対象にするのではなく、同様に日本人教職員や保護者にも他の文化を理解するための研修が必要である。双方向の研修やプログラムが実現できれば、互いの理解が深まり、結果的に学校のいじめ対策にも寄与するのである。

社会は情報が豊かに存在する時代になっているが、FG にとって情報不足で困難を感じることも少なくない。学校関連の情報を提供することは重要であるが、そのためには従来のお便りだけではなく、現代に合った色々な方法を利用する必要があると考えられる。当然ながら、従来のお便りにも振り仮名を振る以外の工夫も必要である。

FG と学校（教職員、日本人保護者）との協力は、保護者の違和感や適応困難を軽減するだけでなく、子供たちの幸福な学習環境を確立するうえで不可欠である。そのためには、上述したように、FG だけではなく、日本人教職員や保護者も対象とした様々な形での支援やサポートが求められている。

文献

青木麻衣子・遠山樹彦（2014）「留学生の子どもが抱える教育上の困難を考える：留学生受け入れ推進施策とその環境整備をめぐって」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』121 号、pp.91-106.

田巻松雄・坂本文子（2006）「栃木県における外国人児童生徒の教育環境:ブラジル・ペルー人保護者の意識と態度」『宇都宮大学国際学部研究論集』22 号、pp.87-96.

旗浦康子（2012）「『異文化間教育』研究という営為について 2、3 の考察―パラダイムと文化概念をめぐって―」『異文化間教育』36 号、pp.89-104.

松永典子（2016）「日本の学校における文化スキーマについての考察―日本語指導担当教員、帰国・外国人児童生徒の保護者、留学生ボランティアへの聞き取りから―」『多文化関係学会第 15 回年次大会』、pp.91-106.

ランブクピティヤ，S. M. D. T.（2022a）「外国人保護者が捉える日本の学校文化―相互理解と母語・母文化保持の観点から―」松永典子編『学校と子ども、保護者をめぐる 多文化・多様性理解ハンドブック 」、金木犀舎、pp.53-85.

ランブクピティヤ，S. M. D. T.（2022b）「日本とスリランカにおける学校文化の相違点―PAC 分析によるスリランカ人女性保護者の内面を通して―」『久留米大学外国語教育研究所紀要』30 号、pp.1-27.

（S. M. D. T. RAMBUKPITIYA）

1−3

海外ルーツ大学生が語る日本社会での自らの立ち位置

志賀玲子
（明海大学）

key words：海外ルーツ　大学生　ヘゲモニー

1　はじめに

在留外国人は、コロナ禍の影響で一時期減少に転じたものの、2022 年末には 2019 年末の人数を超え 3,075,213 人となった。そのうち最多在留資格は 28.1%を占める永住者である。この事実からは、その周辺に帰化を選択する人々の存在も連想できる。更に、「日本語指導が必要な外国籍の児童生徒」だけでなく「日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒」の増加（文部科学省 2022）から、言語習得状況が必ずしも国籍とは一致せず、国籍と言葉と文化の関係が複雑化していることも明らかである。村岡（2019）は、外国にルーツをもつ人々の語りをもとに言語問題を考察し、多言語社会の多様性に対応した言語政策について論じている。その際、在留する「非日本人」は日本語使用に限っても実態は様々であるため、人々の多様性について考え重視する必要があると述べている。

是川（2018）は、外国籍以外に帰化人口や国際児人口も含む「移民的背景を持つ人口」の日本での推計値を、2015 年現在は約 333 万人（総人口に占める割合 2.6%）としている。出入国管理庁「在留外国人統計」によると 2015 年 12 月時点の在留外国人は約 223 万人であり、上記の「移民的背景を持つ人口」はその約 1.5 倍に当たる。可視化されない多様な人々の存在がここに認められる。「移民的背景を持つ人口」は、2040 年に約 727 万人（同 6.5%）、2065 年に約 1076 万人（同 12.0%）となるであろうことも予測されている。こうした現状から、「留学生」の枠に入らない多様な背景をもつ海外ルーツの大学生が可視化されない状態で存在していることが容易に想像できる。大学もその状況を踏まえ、受け入れ態勢について議論する時期にきている。その際、海外ルーツの大学生の視点も捉える必要があるが、研究は十分ではない。そこで本研究では、「留学生」ではない海外ルーツ大学生を対象とし、日本社会での立ち位置をどう捉えているかの一端を明らかにすべく、PAC 分析を使い調査を行った。

2　先行研究および分析の概念

海外ルーツの大学生が日本社会における自らの位置をどう捉えているかということは、マイノリティとしての存在の在り方と関係がある。志賀（2022）では、日本生まれ日本育ちの海外ルーツの大学生が、自らのことを「マジョリティに紛れたマイノリティ」と称し、非日本人であることを知られないようにするため自分自身を抑えつつ「マジョリティ」と接していた様子が明らかにされている。また、子どもたちを受け入れる際の懸念事項について、ハタノ（2006）は、「本来学習者をエンパワーするための日本語」が「同化の道具」として教えられている可能性を指摘している。海外ルーツの子どもたちが日本社会で過ごすにあたり日本語習得の必要性は認める一方で、「日本人らしく振る舞う」ことが強要されたり、「ネイティブ」のような日本語を求められる結果「不完全な日本語」話者だとの扱いを受け続けたりすることによる子どもの成長への弊害について警鐘を鳴らしている。

坂本（2021）は、多文化共生を実現させるために「日本人の意識改革」が必要だと主張する。また、自由主義は社会の中で様々な不条理をも生じさせていると指摘し、なぜ人々が反発しないのかという問いをたて、「抑圧されている人々もマジョリティの考えを肯定してしまっているからだ。これをヘゲモニー（覇権）」と言う」と述べている。続けて、日本人は英語習得に関して英語母語話者に対して自らの発音が英語話者ではないからという理由で卑下する傾向にあり、そうした日本人に対して「英語イデオロギーから生じるヘゲモニーを払拭しよう」という啓蒙的な図書が存在することを指摘したうえで、「日本人は被抑圧者だけでなく、日本において抑圧者になり得る」と訴えている。

ヘゲモニーという言葉は、坂本（2021）では上記のように端的に述べられているが、実は様々な使われ方をしている用語でもある。コトバンクで「ヘゲモニー」を調べると、精選版日

本国語大辞典においては「指導的、支配的な立場。また、その権力。主導権」と説明されている。梶岡（2002）は、教育の場で「主導権」と訳されて使われていた「ヘゲモニー」について、アントニオ・グラムシのヘゲモニー論に立ち返ることにより別の視点を提示している。グラムシの国家論において、国家の大衆に対する働きかけは強制的なものだけではなく指導によって獲得された集団的同意からも捉えられていると言う。ヘゲモニーとは、「市民社会における人々の同意」であり、支配のためには欠かせないものであり、それは、市民の中に強く根付く。形野（1988）は、グラムシのヘゲモニー概念について、「統治階級は、国家権力を握ることによってその支配を維持しているだけではなく、人民大衆を政治的、思想的にその支配下におくための諸装置を巨大な規模で発達させ、人民の合意を組織することによってその支配をささえている」（形野 1988）ものだと述べている。そしてヘゲモニーの成立は知的・道徳的統一の形成ともとらえられており、さまざまな集団に属する大衆は、意識的・無意識的に自らの世界観をつくりあげ、ヘゲモニーに順応していくと言う。糟谷（2000）はヘゲモニーは「事前に存在する『同意』によってささえられるのではなく、『同意』をたえず組織化することによって成立する権力作用」なのだと言う。本論文ではヘゲモニーを、「あらゆる歴史的、文化的、政治的環境が影響して社会に作られていく同意であり、マジョリティだけでなくマイノリティも意識的・無意識的に受け入れているもの」と定義し、考察の際その概念を利用することとする。

3 方法

調査協力者：首都圏にある大学の中国人学部生Yさん。日本にて出生、小学校入学時に帰国、以降中国で教育を受け、高校生のとき再来日した。大学進学を果たし現在に至る。

実施の詳細：時期は2023年6月、調査時間は約1時間40分である。調査の様子は録音され、音声は文字化され分析データとなった。調査は内藤（2002）に従い、PAC分析を用いた。

提示刺激文：「日本の社会とあなたとの関係を考えてください。日本社会とあなたはどういう関係ですか。日本社会はあなたにとってどんなものですか。頭に浮かんできたイメージや言葉などを思いついた順に書いてください。」

配慮：調査の中止や回答の拒否がいつでも可能なこと、個人が特定される文言等は公開しないこと等を文書で示しながら口頭でも説明した。研究結果の公開についての同意書を提示しながら説明、撤回が可能なことも伝え、同意を得たうえで調査が行われた。

使用分析ソフト：SPSS Ver.29

4 結果

Yさんのデンドログラムを図1に示す。連想項目は11であった。連想項目の左にある①～⑪の数字は連想順、連想項目の右「＋・－」は、イメージ「良い・悪い」を表す。「どちらでもない」との答えは、本調査では出てこなかった。さらにその右、デンドログラムの左に示された1～11の数字は重要度順を表す。クラスターは3つとなり、デンドログラム上で上に位置するクラスターから順に、CLⅠ、CLⅡ、CLⅢとする。

CLⅠは、「日本社会をもっと知りたい」～「発音が日本人らしいと受け入れやすい」の7項目で、「日本社会に対しての考え方」と命名された。

「日本社会をもっと知りたい」について、「やっぱり自分は今後日本で暮らしたいので、日本社会を、もっと知りたいなあっという感じで。で、日本でもっと暮らしていきたいっていう感じ」だと述べた。

「中国と日本の社会の違いについて知りたい」というのは「自分は中国で長い時間いて、多分中国の社会文化になんか、なんていうか、中国の社会文化に、影響されて、もし今後えっと日本社会にいたいなら、やっぱりその違いを、その違いを知らなければならないという感じ」だと言う。中国に帰る気持ちはないかと尋ねると「今は帰る気持ちはない」と答えた。理由としては、「病気のせいで。日本の医療設備とか、まあ、病院で中国より先進な薬が出て、で、その薬を飲んでいますので。で、中国に戻ったらその薬はないので。」と、持病を抱えているための現実的な対応でもあると答えた。

「外国人にとって日本社会は生きやすい社会か」というのは、「やはり私は日本にとっては外国人なので、なんというか、自分にとって日本社会は生きやすい社会かどうか知りたいっていう気持ち」で、未だに疑問形であり、知りたいことだと言う。「まだそこに、確信がない。どうかな～って感じ？」と述べた。

「やさしそうだが案外きびしい社会」について、「日本の職場とか、仕事の環境とか、やっぱり、何というか・・・なんか、仕事のミスは

許されない環境、みたいな」と言う。ここで調査者がその話は誰かから聞いた話なのかと問うと、「テレビで。いろいろ見て・・・そういう感じ」だと述べ、自らの経験や身近にいる人から聞いた話ではなく、あくまでテレビ等での情報からつかんだイメージだと説明した。

「憧れの存在」は、「日本は私のある意味で自分の故郷みたいなところで、やっぱり近づきたいなあっていう感じがありますので」と述べた。「近づきたい」ということばには、まだ遠く感じている潜在的な意識が反映されていると考えられる。

「やさしい社会」というのは、「全体にいうと日本はやさしい社会かなあと。敬語もあるし、人に対しての態度も、優しいし」と説明した。優しいということについての説明を求めると、「いろいろな設備とか、人に対してやっぱり配慮がある」と言う。例えば、バス等で車椅子の方用のスペースがあることやバスの乗降がしやすいこと、また、電車で駅員が用意するスロープのことを話した。このようにYさんは公共の場での配慮について私見を述べたが、実際に日本の人と接しているときに優しさを感じることはないかと問うと、「人と接するとき・・・うーん」と考えこみ、言葉は続かなかった。公共の場での優しさについてすぐに語れる一方で具体的な個人的やりとりについて思い出せないのは、日本社会の表面的な優しさについて意図せず言い表しているのかもしれない。

「発音が日本人らしいと受け入れやすい」ということについては次のように語った。「発音が日本人らしいねという感じで褒められたことがありますが、なんか、発音が日本人らしいと日本人に認められるかなと思いました」と述べ、流暢な発音により受け入れられやすい状況になると言った。Yさんは幼少時を日本で過ごしたこともあり、日本語母語話者に近い話し方をする。そのため受け入れられやすい側面があるということを実感しているようである。

CLⅡは「受け入れられるかられないかが不安」「不安」の二つで「不安」と命名された。

不安というのは、「自分が日本社会にいて、日本人の方に受け入れられるか、受け入れられないかという不安」だと言う。特に文化的な違いに遭遇したときの思い出を語った。学校で自分だけ知らないという場面に遭遇し、「恥ずかしい」と思ったと言う。また、「自分は日本人らしく、えっと・・・なんか、日本人らしく何事もしなければならないという感じで、ずっと不安になってパニック障害になったことがありました」と、辛い経験を語った。日本人のようにしなければならないと感じたことについて説明を求めた。「高校の時期で、そのとき全校で私１人 中国人なので。 全部日本人なので。もし私が別のことしたら、なんか、仲間はずれみたいなことになる」、「仲間はずれにならないように、周りの人と同じようにしなければという意識が強くなった」と述べ、自らのそうした体験を振り返り「頑張りました」と自己評価した。そして日本の高校での２年間について、同調圧力を「強く感じ」「つらかった」と語った。「不安」には、日本社会に対する不安と、持病についての不安も含まれると語った。

「受け入れられるか受け入られないかが心配」については、「日本社会のことですね。日本社会が私を受け入れられるか、られないかということが心配」だと言う。ここで、調査者が、日本側にどんなことを求めるか、日本側が何をしたら受け入れられているという実感がもてるか問うた。「そうですね。・・・日本は今でも多文化社会ですので、外国人を受け入れること・・・まあ、よくできている感じだと思います」と答える。とはいえ、不安を感じると言う。不安を払拭するにはどうしたらいいか問うと、「個人的には不安という感じなんですけど、やっぱりこれを消すことを・・これを消したいなら、やっぱり帰国」だと言う。日本が変わったとしても個人的な不安はなかなか消えないと思うかと問うと「はい、そう思います」と即答した。そして、日本社会の問題ではなく個人の問題であるときっぱりと言い切り、その不安が強くなるようだったら帰国せざるを得ないとも述べた。

CLⅢは、「異類」と「医療設備が先進で安心」の二つで、「日本社会によって生まれた個人的な考え」と命名された。

「異類」という言葉については「外国人として日本の社会に入るのはやはり時間がかかるかなあ～という感じ」だと語った。現在の正直な気持ちだと言う。「医療設備が先進で安心」については、自らの持病の治療に日本の医療環境が適していることを説明し、両親と共に再来日した大きな理由の一つがそれであると語った。

クラスター間の関係については、CLⅠからCLⅡが生まれたと説明した。CLⅢは独立している感じだと言う。

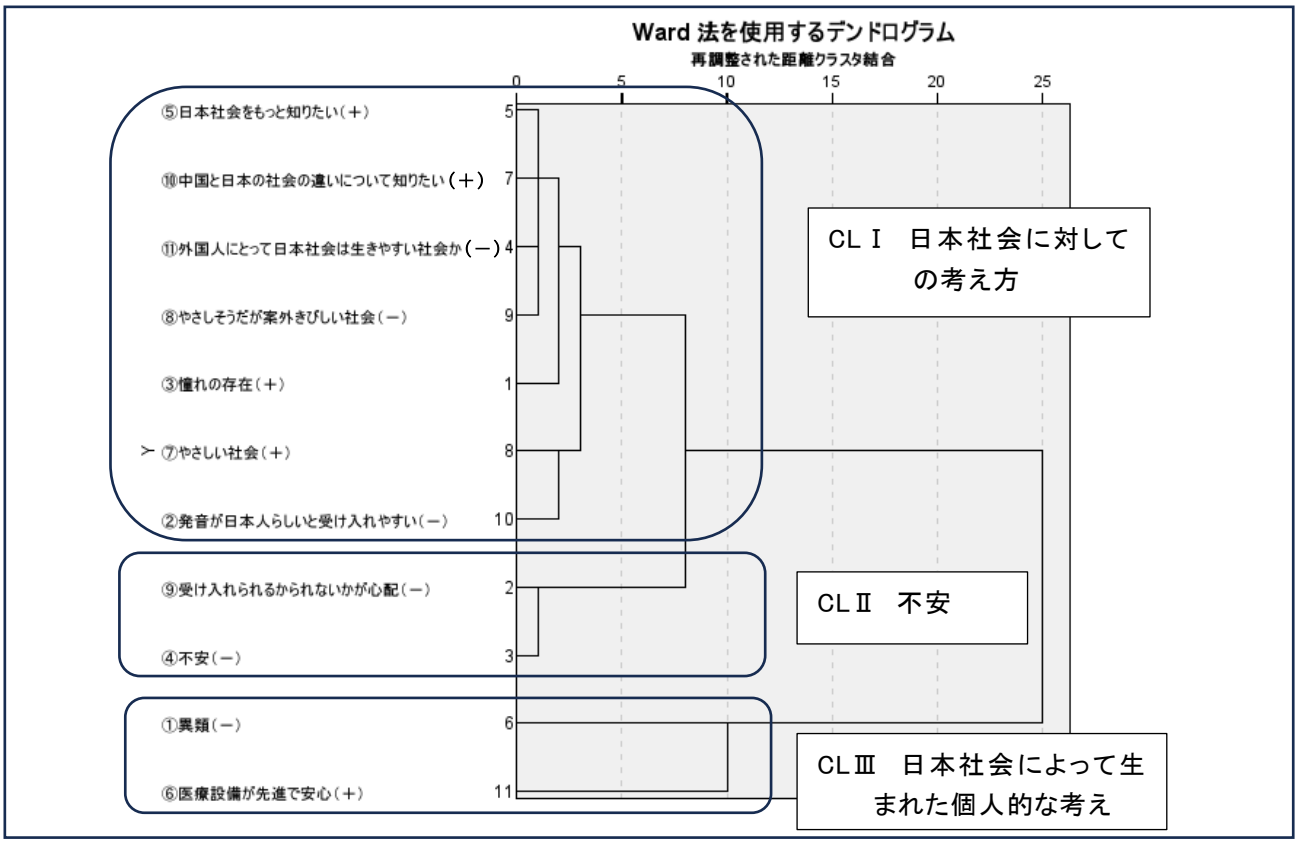


図１　デンドログラム

５　総合考察

Ｙさんは同調圧力を感じつつも、日本は多文化化が進んでいて公共の場での配慮がなされていると認識していることから日本側に問題はないと言う。日本社会に馴染むことが個人に求められ、馴染めない場合は帰国せざるを得ないと断言している。これが本心なのか、教育による思い込みなのかは現時点では判断できないが、ヘゲモニーについて考えざるを得ない。マイノリティ側も現状を甘んじて受け入れるどころか率先して受け入れている様子が観察できる。

「発音が日本人らしいと受け入れやすい」という項目は自らの体験としてはプラスに働いたもののマイナスイメージであった。「そうしないと誰かに受け入れられない。なんか、かわいそうな感じ」と言う。日本に溶け込むべきだと明言しつつ、ネイティブのようにならないといけないと思わされていることについて、受け入れ難い気持ちをもっていることがわかる。

海外ルーツ大学生の本心がヘゲモニーにより隠されている可能性を示唆する結果となった。

文献

梶岡寛之（2002）「教師と子どもの合意形成に関する一考察―A.グラムシのヘゲモニー論をてがかりに」『教育方法学研究』28，35-45.

形野清貴（1988）「ヘゲモニー論の射程」松田博編『グラムシを読む―現代社会像への接近―』法律文化社，1-34.

糟谷啓介（2000）「言語ヘゲモニー―<自発的同意>を組織する権力」三浦信孝・糟谷啓介編『言語帝国主義とは何か』藤原書店，276-292.

是川夕（2018）「日本における国際人口移動転換とその中長期的展望―日本特殊論を超えて―」『移民政策研究』10,移民政策学会,13-28.

坂本光代（2021）「多様化社会に向けての現状と課題」坂本光代編『多様性を再考する―マジョリティに向けた多文化教育』上智大学出版，1-7.

志賀玲子（2022）「海外にルーツをもつ大学生による自己の在り方の意味づけ―授業の振り返りを糸口とした語りより―」『一橋大学国際教育交流センター紀要』4,15-26.

内藤哲雄(2002)『PAC 分析実施法入門［改訂版］』ナカニシヤ出版.

村岡英裕(2019)「移動する人々の語りからみる言語問題―ボトムアップ・アプローチによる言語政策のために」『社会言語科学』22(1),91-106.

文部科学省（2022）「『「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和３年度）」

（Reiko SHIGA）

PAC分析研究 第7巻
PAC分析学会2023年度大会

日本語のライティング指導に関する日本語教師の意識

坪根由香里
（大阪観光大学）

key words：ライティング、日本語教師、日本語教員養成課程

はじめに

大学の日本語教員養成課程（以下、「養成課程」）では、「日本語教師【養成】の教育内容」（文化庁 2019）に基づき、日本語教師の資質・能力の育成を目指している。その中で日本語の 4 技能の指導も行われているが、4 技能の中でも特にライティング指導に関しては、養成課程においてあまり扱われない傾向があり、指導において教師が困難を覚える場合もある。こうした状況から、今後、養成課程においてライティング指導を取り入れることの検討が求められる。そのためには、日本語のライティング指導を行っている教師の意識を探ることが必要である。

第二言語としての日本語のライティング研究はこれまで広く行われているが、指導者側である教師を対象に調査した研究はまだ多くはない。布施（2020）は、日本語教師のライティング指導への不安について、教師 8 名に対する PAC 分析の結果から、授業設計に対する不安、指導方法に対する不安、学習者の技術習得に対する不安、学習者の能力や意識への配慮から生まれる不安、他の教師との比較から生まれる不安の 5 つを挙げている。鎌田他（2022）は日本語教員がライティング指導に感じる難しさを調べるためにアンケート調査を実施し、ライティング指導経験年数に分けて分析しているが、難しいと感じる上位項目には共通して、授業外にかかる時間、複眼的思考、論理的思考が含まれていることがわかったという。一方、坪根・鎌田（2022）は、養成課程の大学生 3 名を対象に PAC 分析を実施し、ライティング指導に対して感じる難しさについて調査している。その結果、3 名に共通して語られた難しさは、①評価、②添削・フィードバック、③テーマ選択、④作文における漢字使用に関するもので、内容・構成に対する言及がほとんど見られなかったことを明らかにしている。

このように、ライティング指導の実施側を対象とした研究に関しては、まだ多いとは言えず、ライティング指導の教育内容及び方法の検討のための基礎研究が不足している。また、上記研究は、ライティング指導の難しさや不安に焦点を当てており、教師がどのような意識を持ってライティング指導を行っているかという観点とは異なる。そこで本研究では、実際に第二言語としての日本語を教える教師がライティング指導においてどのような意識を持って取り組んでいるのかを、PAC 分析を用いて探索的に明らかにすることを目的とした。PAC 分析は本人にとって無意識であった思考を引き出すとされ、本研究が目指す探索的研究に合致した方法だと考え採用した。

方法

協力者：大学において常勤で日本語を教える教師 A（日本語教育歴 21 年）、大学において非常勤で日本語を教える教師 B（日本語教育歴 23 年）の 2 名である。両者とも日本語教育歴が 20 年以上あり、初級から上級までの全てのレベルで日本語のライティング指導の経験があることから、ライティング指導に必要な意識が幅広く抽出できると考えた。

提示刺激：あなたは、中級〜上級の留学生を対象とした「書く」授業でどんなことを意識して教えていますか。気をつけていること、心掛けていることなどを自由に書いてください。授業前から授業後までのどの時点のことでも構いません。
思い浮かんだイメージを表すことばを、思い浮かんだ順に番号をつけて、書いてください。

手続き：調査は、内藤（2002）に基づき、2020 年 8〜9 月に、教師 A はオンライン、教師 B は対面で実施した。協力依頼とともに、倫理的配慮について書面と口頭で示し、承諾を得た。連想刺激文の用紙を見せるとともに調査者が読み上げ、教師 A はコンピューター上でエクセルに、教師 B は用意した A4 の 16 分の 1 のサイズの紙に、思いつく限り連想語を記入した。類似度評定の結果をクラスター分析（距離、ウォード法）して得られたデンドログラムを協力者に示し、インタビューを実施した。

インタビュー時間は、教師 A が 1 時間 44 分、教師 B が 1 時間 42 分であった。

使用分析ソフト：HALBAU7

結果

1. 教師 A の結果

教師 A のデンドログラムは 4 つのクラスター（以下、CL）に分けられる（図 1）。CL1 は＜内化＞から＜自分のことば＞までの 6 項目で、「内省と自己表現」と名付けた。教師 A は CL1 について以下のように述べている。

> A：*学習者が情報を得て、自分の中で、何が問題かというのを、自己内省しつつ、それを自分のことばで、自分の考えをアウトプットする、出していく、表現する。*

また、教師 A は学習者に対して＜課題発見＞をすることも求めている。

> A：*自分で何について書きたい、何が問題だと思っているというところから書いてほしい。*

CL2 は＜発散思考＞から＜剽窃なし＞までの 8 項目で、「思考方法」と名付けた。教師 A はこの CL で、客観的なデータを集めて、それが本当かどうかをもう一度見て、客観的に判断し、集めた＜根拠＞から＜仮説＞を立てることの必要性を述べている。

> A：*自分の意見を述べるために必要な準備なので、根拠を集めたり、それが正しいかっていうのを見極めたりっていう作業ですかね。*
> A：*論理立てていくために、自分の意見とそのほかの（中略）引用とかを、ちゃんとしっかりと土台にして、自分の論を立てていくためのやっぱり作業ですかね。*

CL3 は＜引用の仕方＞＜参考文献の書き方＞＜接続詞＞の 3 項目で、「レポートの作法」と名付けた。教師 A 自身も「レポートのお作法」と名付け、「*大学の 1 年生で全部マスターしてほしい*」と述べているように、大学の初年次で学ぶアカデミック・ライティングに関するものでまとまっている。

CL4 は＜定義＞＜文法・表記＞の 2 項目で、「基礎的な日本語能力」と名付けた。教師 A はこの CL について、「*ほかの授業とか教養も専門も受けることができるような日本語能力*」で、「*レポートを書く以前の日本語能力*」と述べた。

教師 A で特徴的なものは、＜内化＞＜外化＞＜問いづくり＞＜発散思考＞＜収束思考＞である。教師 A は『たったひとつを変えるだけ：クラスも教師も自立する「質問づくり」』（ダン・

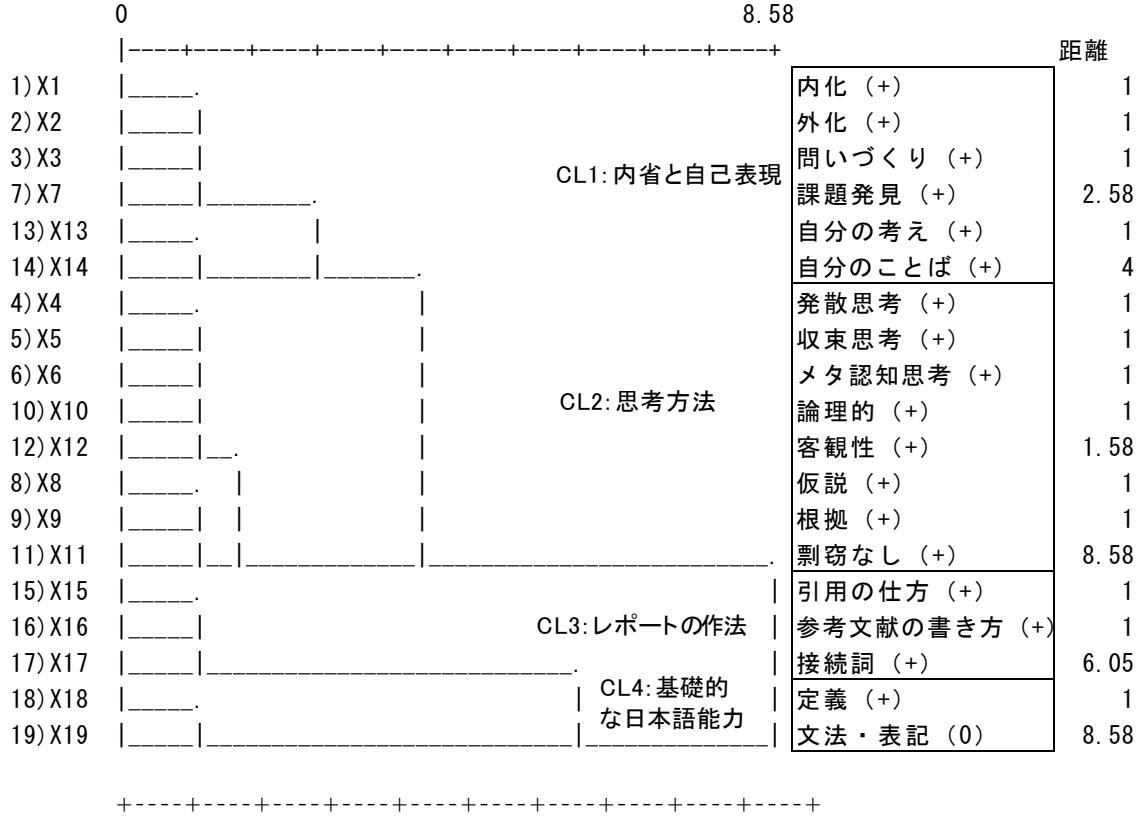


図 1　教師 A のデンドログラム

ロススタイン＋ルース・サンタナ著、吉田新一郎訳）からヒントを得て、そこで示された＜問いづくり＞のプロセスに基づいてクラス活動を実践しているという。また、資料や映像からのインプット活動（内化）、＜内化＞で取り入れたものを頭の中でまとめて他者に伝える＜外化＞の関係が＜発散思考＞＜収束思考＞につながり、それを繰り返すことで、自分の考えが深まっていくとしている。このように、教師 A は基本的な日本語能力やアカデミック・ライティングで求められる技能の他に、問いを立てることや思考の循環の重要性を意識していることがわかる。

2. 教師 B の結果

教師 B のデンドログラムは 3 つの CL に分けられる（図 2）。CL1 は＜「書く」準備（読む、話し合う、ドラフト）＞から＜言いたいことがきちんと書ける＞までの 5 項目で、「書きたいもののイメージ化」と名付けた。教師 B はこの CL について「*自分の書きたいことが何かっていうのを認識させるためのグループ*」とし、以下のように述べている。

> B：*いきなり書けと言っても、何を書いていいかわからないという学習者がとても多いから、実際にその書くというところまで持っていくための下準備の部分だと思ってます。なので、そのために、書くためには読まなければいけないし、書くためには話さなければいけないというのがあるので、その書くイメージをつくるためにグループワークであったりペアワークであったり、で必要であったら私から考えを聞いたり、*

教師 B は「*書くという作業は書くことが決まったらそんなに難しい作業ではない*」ため、準備が一番大事であり、与えられたテーマについて、論点を明確にし、書く内容のイメージを作らなくてはいけないと考えている。CL1 について教師 B は「*書くことを教えるときにまずイメージする重要度が高いもの*」と述べている。

CL2 は＜モデルの提示＞から＜コピー防止＞までの 4 項目で、「文の書き方、マナー」と名付けた。教師 B は、以下のように述べ、何を書いたらいいかわからない人のために、＜モデルの提示＞は効果的だと考えている。

> B：*何を書いていいかわからないっていう人たちも結構いるかなと思って、（中略）話の展開は参考にしてねっていう意味ではモデル文は有効かな。*

また、＜添削してわからなかったところの確認＞を口頭ですることを大切にしている。

> B：*ここに書いてあることがもう私には全くわからないんだけど、何を言いたいですかとか、そういうふうにして、人数が多くてもそのひとことふたことのやり取りというのは、結構書く授業の中で私が大事にしているところですね。*

＜コピー防止＞については、以下のように述べ、引用を重要だと考えている。

> B：*コピーに対する罪悪感があまりにもないので、（中略）自分が悪いことをしているということが多分わかっていないので、（中略）引用文というのには力を入れます。*

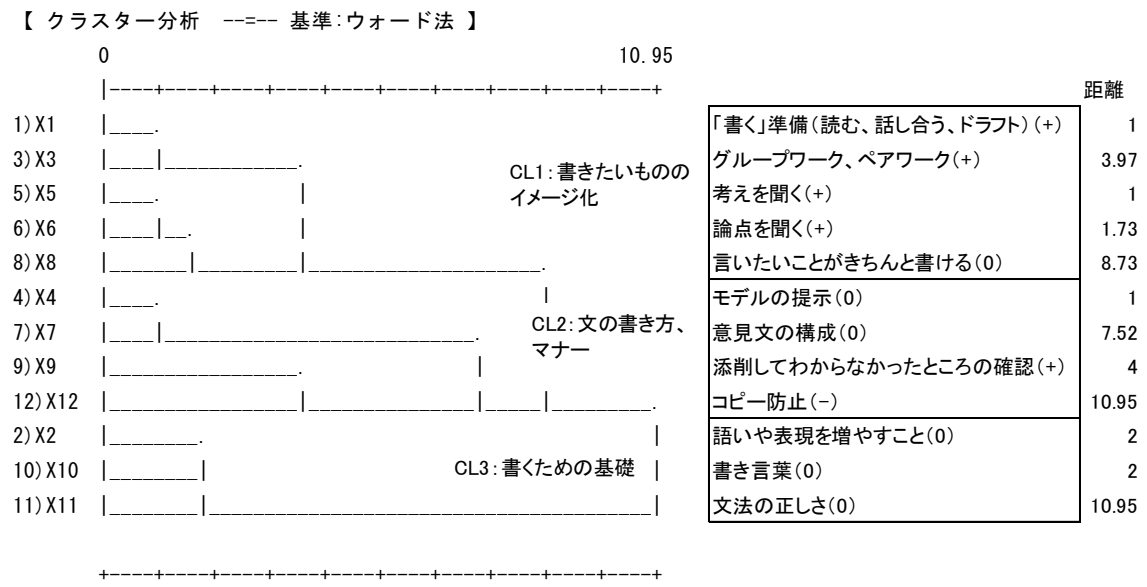


図 2　教師 B のデンドログラム

教師 B は CL2 について「身につけないといけないスキル的なもの」とまとめている。

CL3 は＜語いや表現を増やすこと＞＜書き言葉＞＜文法の正しさ＞の 3 項目で、「書くための基礎」と名付けた。教師 B はこの CL について以下のような理由から「基本」としている。

B：*書きたいことを書くためには、語彙とか表現は多ければ多いほうがいいので、(中略) 読解とかを通して言葉とか表現とか文法とか身に付けていくものが運用できるようになったら、自分の書きたいことも表現も増える。*

＜書き言葉＞については、「書くものによって、使う言葉を分けていかないといけない」と述べ、話し言葉との違いや書くものの硬さによる違いについて教える必要があるとしている。

教師 B は、読解などを通して語彙や表現、文法などの日本語の基礎を身につけた上で、書く前には読んだり話したりするグループワーク、ペアワークを通して、論点を明確にし、十分な準備をすることが重要だと考えている。また、モデル文を提示したり、引用の仕方を教えたりし、書いた後の間違いは口頭で確認することが必要だと考えていることがわかった。

総合考察

協力者 2 名から抽出されたライティング指導に対する意識は、【目的】【内容】【構成】【日本語】【形式】【クラス活動】【評価・フィードバック】【読み手】【教師の役割】にまとめられる。

まず、書く【目的】を明確にするといった目的意識は両者に見られた。

【内容】については、様々な観点から述べられており、ライティング指導において内容が重視されていることがわかった。両者から言及があったものは、書くための準備をすること、仮説作りと検証、根拠と解決策、書く内容の分類などの書く手順、自分の言葉で自分の考えを表現することであった。その他、教師 A からは、学習者自身による課題発見、客観性・論理性、定義などについても言及された。

【構成】についての語りは多くはないが、教師 B から最初と最後の呼応、問題提起に対する答え、モデル文の提示などが出された。

【日本語】については、文法が両者から出された他、教師 A からは接続詞、教師 B からは語彙・表現、文体について述べられた。

【形式】は、教師 A 、教師 B ともに大学で教えていることから、引用・参考文献について教えることが必要だと考えている。

【クラス活動】についても両者が言及し、書く前のイメージ作り、書いた後の作文のピアリーディングについて語られた。教師 A からは、クリティカルシンキングへの意識も見られた。

【評価・フィードバック】については、教師 A はルーブリックのような評価基準を提示すること、教師 B は添削で教師が理解できなかったところについて口頭で確認することを述べた。

【読み手】は両者とも意識し、読み手に伝わるようにすることが重要だとしている。そこからは、単に学習者の「書く」能力を向上させるということだけでなく、本来のコミュニケーションの一環としての「書く」という作業であることを想起させようという意識が認められる。

【教師の役割】では、両者に動機づけへの意識が認められた。加えて、教師 B は教師を学習の手助けをするサポート役として位置づけ、学習者の自律への意識がうかがえる。

本研究では、大学で日本語を教える教師 2 名から、ライティング指導に必要な意識を幅広く抽出することができた。特に、坪根・鎌田（2022）で養成課程の大学生からはほとんど言及がないとされた内容については、様々な観点から述べられており、本調査は、養成課程におけるライティング指導について検討する上で示唆を与えるものだと考える。今後は、養成課程で学んだ学生の進路の一つでもある日本語学校で教える教師に対する調査からも検討を加えるつもりである。

＊本研究は JSPS 科研費（20H01270）の取り組みの一部である。

文献

鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子・村岡貴子（2022）「日本語教員がライティング指導に感じる難しさ―指導経験年数に着目して―」『専門日本語教育研究』24、75-82

坪根由香里・鎌田美千子（2022）「大学の日本語教員養成課程で学ぶ大学生がライティング指導に感じる難しさ―PAC 分析の結果をもとに―」『大阪観光大学研究論集』22、33-42

布施悠子（2020）「ライティング指導不安尺度開発の試み」『2020 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』109-114

文化庁（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』文化庁

(Yukari TSUBONE)

2−1

新任小学校教師の学級への個人別態度構造と児童をとらえる視点

南 雅則
（びわこ学院大学）

key words：Key word ： 新任小学校教師 個人別態度構造（PAC）分析 教師用 RCRT

はじめに

近藤（1988）は，学校において教師が特定の目標に向かって児童を方向づけ訓練する過程を，Erikson（1977）の「儀式化」という概念を用いて「教師が児童に対して行う儀式化の過程」と呼んだ。「教師が何を伝えたいと思っているのか」，「どのような人間になってもらいたいと思っているのか」，「児童とどのような関係を作ろうとしているか」など，教師から児童への現実の儀式化の重要な側面を把握する手がかりとして新版教師用 RCRT（近藤，1994）が用いられ，実証的検討がなされてきた（松村・青葉，1999；松村・原田，2000 など）。それらによれば，子どもを見る教師の視点（モノサシ）はその背後にあると想定される（教師の）基本的な姿勢と似通っており，こうした基本的な姿勢には類似性や一貫性がみられる（松村・青葉，1999）ことが指摘されている。また，子どもの評価やその評価の基準となっているものと教師自身の指導観や価値観とは無関係ではないと考えられ，「教師による児童理解は教師の自己理解と表裏一体の関係（松村・原田，2000）」であるといえる。

しかし，教師が自身の学級や教師である自分自身をどのように理解しているのかということと，自分の学級の子どもをどのような視点でとらえているのかについてはこれまで明らかにされてこなかった。そこで，本研究では新任教師の自己理解と子どもをとらえる視点に注目し，教師と子どもの関係についての示唆を得ることを目的とした。具体的には，教師自身の自己理解のために内藤（1993）による PAC（Personal Attitude Construct：個人別態度構造）分析の方法を用いる。また，子どもを見る教師の視点の検討のために近藤（1995）による新版教師用 RCRT を用いることとした。

方法

（1）研究協力者　A 県内の公立小学校に勤務している新任の男性教師。小学 5 年生の学級担任である。

（2）調査時期　調査は研究協力者が小学校教師として勤務を始めてから約 4 ヶ月がたった 202X 年 8 月に実施された。

（3）調査内容　①PAC 分析（内藤，1993）　と ②教師用 RCRT・新版（近藤，1994）

調査は①と②の順で途中に休憩をはさんで実施された。調査の 2 日後に実施者とのコンサルテーションを行った。

（4）PAC 分析の教示と評定尺度

「あなたは，今年の 4 月から小学校の先生になりましたが，そのときにどのような先生になろうと思いましたか。また，自分のクラスをどのようなクラスにしたいと思いましたか。それはどのような理由でしょうか。今学期を自利かえって，自分のクラスはどのようなクラスになっていくと思いますか。頭に浮かんできたキーワードやイメージを，思い浮かんだ順にカードに記入してください。」と印刷された文章を呈示するとともに，口頭で読み上げて教示を行った。類似度の評定は研究協力者自身にそれぞれのキーワードやイメージの組み合わせが，言葉の意味ではなく，直感的イメージの上でどの程度似ているかを「非常に近い」（1 点）から「最も遠い」（7 点）の 7 件法で求めた。

（5）教師用 RCRT の手続き

担任する学級の児童名を想起順に調査票に記入したのち，似ているもの同士，ウマが合う子と合わない子などのペアを作り，それぞれに共通して見られる特徴を記入させた。その後，その特徴について学級の児童全員についての評定を求めた。

結果

（1）PAC 分析の結果

研究協力者によって回答された類似度評定から作成された類似度距離行列に基づき，統計解析ソフト「HALBAU7」を使用してウォード法に

よるクラスター分析を行った（Figure1）。
クラスター数の決定については内藤（1993, 1997）に倣い，3 つの解釈可能なクラスターが抽出された。研究協力者にそれぞれのクラスターとクラスター間の類似点や相違点について解釈を求めた。以下の斜字体部分は研究協力者自身による解釈の一部である。

【CL1】*子ども自分の居場所を学級内に感じているのかっていうところがすごく大きいのかなと思います。こういうことをやっぱりちゃんとできていれば，おのずと疎外感を感じる子どもはいなくなってくるんじゃないかなと思いますし，それが子どもこのプラスに対する居場所というか，安心感に繋がるんじゃないとかなと思って。ここは特に学級経営の中で力入れなあかんなと思っているところですし，一番僕自身こだわりは強いというか。そういうのをやっていく上で基盤となる一番大切なところかな。*

【CL2】*なかなか経験がないのでその分準備したりとか，若いっていうのも自分の持っている武器かなと思うので子どもに近い感覚で，そういうところを活かしながら一緒に作り上げていくっていうか。一方的に教えるっていうような感じにならないように。子どもたちが好きなことや得意なことから頑張っていって，その姿を認めてあげる。自信持ってほしいとか，可能性伸ばすのも最初は好きなところを引き出していくっていうか。それするためには日ごろから子どもたちをしっかり見とかんとできないし，やっぱり日ごろからコミュニケーションをしっかりとってないと。*

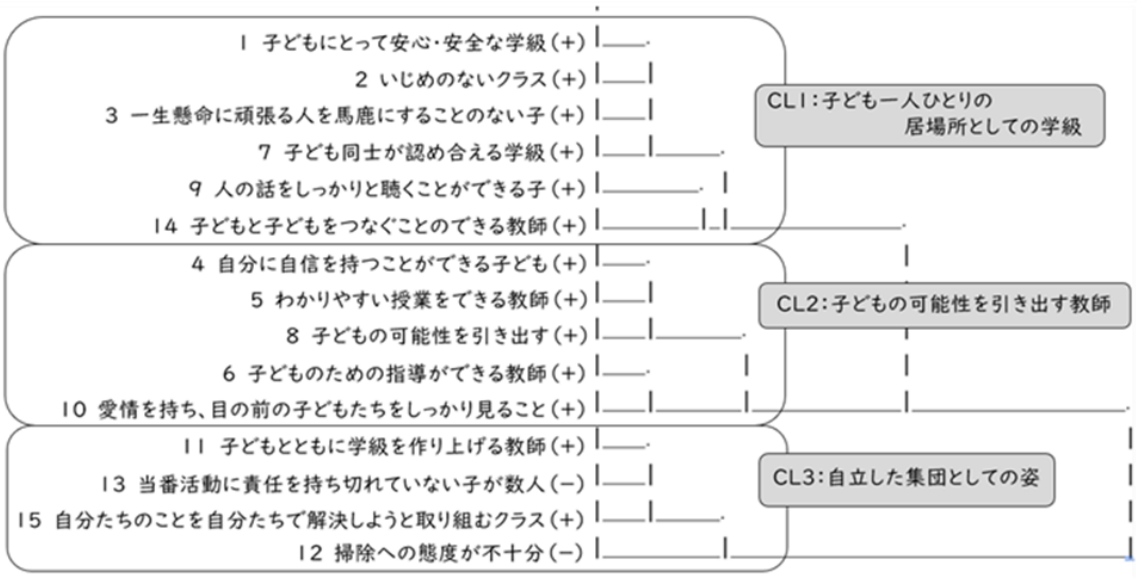
10 と 6 ができているからこそ，わかりやすい授業ができていると思うので。それができているから 4 と 8 ができると思っているので。

【CL3】*このマイナス（13 と 12）を自分の中でプラスに変換して考えると。「当番活動に責任を持てている」とか「掃除への態度が十分に育っている」っていうのに置き換えると（この 4 つは）近いところかな。当番活動にしても掃除にしても何のためにするのかっていうのか，教師のためにしているわけでもなければ，自分たちが使っている校舎や教室，使っている自分たちこそが掃除するっていう考えでやってほしいし，こっちが言うからやってるとかでなしに。1 学期掃除への態度が不十分で自分もそう思っていたので 2 学期以降子どもたちと一緒に考えていきたいなぁと。*

この CL1，CL2，CL3 の順番で発展していくんじゃないかと思っていて。まず居場所を作って安心できるところじゃないといけないし，それができているんやったら次は子どもたちが自分たちで良さを見つけさせてあげたりとか，自信着けさせていってあげる，可能性引き出していってあげるっていうこと。でも 1 学期からできるとは思ってないので，子どもたちも感じてるので。2 学期，3 学期，それをもとにやっていけたらいいかなぁと。1 年かけてそういう姿を作れればいいのかなぁと思ってます。

【CL の比較】（CL1 と CL2 は）*自分の中で重要度が違うかな。一番基盤になるのが CL1 だと思っているので。学級云々とかではなくて人として大事にしてほしいところなので，指導の仕方*

Figure1　研究協力者のデンドログラム



も明らかにここだけは違うと思いますね。人として大事なところなので無茶苦茶怒るし，自分の中で大事にしているところなので。CL2 は子どもによっていろいろだよねって言えるところ。あなたは〇〇だよね，あなたは□□だよねって，その子その子で違うのを認めて引き上げていくところ。

（CL1 と CL2 と CL3 は）*点と線と面みたいなイメージで。CL1 は個人として絶対持っていてほしいところなんですね。CL2 はお互い関わり合っていいところとか見つけていってほしい。CL3 は学級全体のことなので，クラス全体でやっていくことやから。順々に広がっていく感じ。*

以上の研究協力者の解釈をふまえ，CL1 を「子ども一人ひとりの居場所としての学級」，CL2 を「子どもの可能性を引き出す教師」，CL3 を「自立した学級」とそれぞれ命名した。

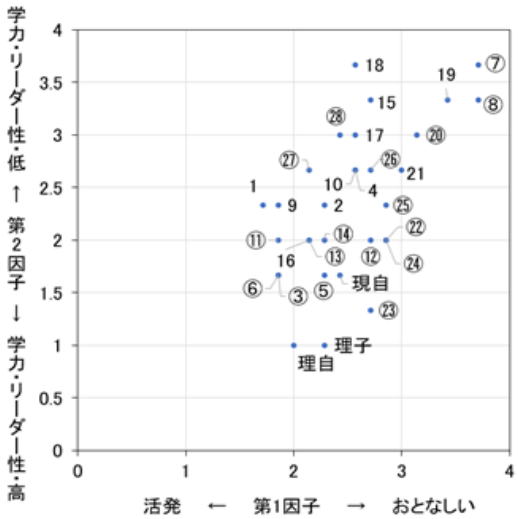
（2）RCRT の結果

近藤（1994）の手続きに倣い，研究協力者の教師用 RCRT の因子分析を行ったところ，子どもをとらえる視点として 2 つの因子が抽出された（Table1）。コンサルテーションの結果，第 1 因子を明るく活発な様子である「活発さ」，第 2 因子を学力がありリーダーシップがとれる「学力・リーダー性」と命名した。続いて，第 1 因子と第 2 因子の得点によって児童を Figure2 にプロットした（数字は想起順，〇数字は女児）。その結果，女児は学力がありリーダーシップがとれる児童がいるが男児には少ないことや，全体的におとなしい学級であると認知していることが示唆された。また，「ウマが合う子」は認知図上で左側，「ウマが合わない子」は右側にプロットされており，「活発さ」によって決定されていることが示唆された。さらに，認知図上で右上にプロットされた 19，⑦，⑧の児童は注意散漫，ルーズ，得手不得手がはっきりしているという特徴を持つ児童であることが語られた。

Table1　教師用 RCRT 因子分析結果

項目	Factor1	Factor2
真面目-やんちゃ	**.948**	.080
元気-寡黙	**-.920**	-.192
責任感-自由	**.893**	-.202
集中力-散漫	**.797**	-.471
よくしゃべる-無口	**-.772**	-.488
活発-控えめ	**-.735**	-.322
朗らか-暗い	**-.716**	-.438
リーダーシップ-非協力的	-.005	**-.945**
学力高い-少し遅れる	.023	**-.845**
積極性-消極的	.356	**.679**

Figure2 第 1 因子と第 2 因子による認知図



総合考察

PAC 分析の結果，研究協力者は学級経営について，CL1 を基盤として，CL2 に示されたように 1 人 1 人の可能性を引き出し，CL3 で自立した集団の姿をイメージしていたことが示唆された。しかし，そうした学級経営を階層的な構造ととらえる一方で，CL1 は子どもにとっての学級の姿，CL2 が教師にとっての学級の姿，CL3 は子どもと教師がともに作り上げる学級の姿を示しているようにも考えられる。また，RCRT の認知図で示された理想の子ども（理子）の位置に注目すると，特に活発でなくても学力があり，リーダー性のある子どもを評価していることが推測された。

以上のことから，研究協力者が学級経営を考えていく中で，子どもたちに「学力・リーダー性」を望んでいることが示唆された。

文献

近藤邦夫　1988　教師-児童関係と児童の適応--教師の儀式化の観点から　東京大学教育学部紀要，28，103-142.

近藤邦夫　1994　教師と子どもの関係づくり：学校の臨床心理学　東京大学出版会

内藤哲雄　1993　個人別態度構造の分析について　人文科学論集（信州大学人文学部），27，43-　69.

内藤哲雄　1997　PAC 分析の適用範囲と実施法　人文科学論集〈人間情報学科編〉（信州大学人文学部），31，51-87.

(MINAMI　Masanori)

2−2

僧侶となった青年は修行の経験をどのように振り返るのか

ー真言密教における四度加行に注目してー

佐々木聡・北川真寛（高野山大学）

key words：密教，青年，宗教心理学

1 はじめに

青年のアイデンティティに関する問題は，自他にまつわる様々なきっかけによって立ち上がってくるものであるが，それらのうち，世界中の多くの文化圏で青年がアイデンティティの問題に取り組むきっかけになるのが，宗教である（杉村，2023）。日本人を対象にした研究においても，Sugimura ほか（2019）は，信仰の有無に関わらず，アイデンティティと宗教的信念に関連があることを示し，日本人青年が自身のアイデンティティの問題に取り組む際に，宗教的信念の問題に出会う傾向があると述べている。

また，個人の宗教への関与の程度を示す概念として「宗教性」が挙げられる。松島（2023）は，キリスト教における宗教性を「宗教にまつわる事柄について知り，信じ，感じ・体験し，行い，それらの影響を受ける」ことと定義している。

ところで，我が国における宗教心理学領域では質的研究が不足している（川島，2011）と指摘されており，現在においてもその状況が大きく改善されたとはいえない。そこで，本研究では，青年と宗教との関係について検討するため，PAC 分析（内藤，2002）を用いることにした。宗教という個人の内面に関わる経験のあり方を描き出すうえでは，個人の態度構造を分析することが有効に機能すると期待されたからである。

さて，これまでの宗教心理学の研究では，教団・教派といった「対象」の問題がさほど大きく取り上げられることはなかった。その理由の一つとして，一般化・普遍化を目指すという心理学的研究の方向性の問題があげられる（杉山，2004）。それに対して，松島（2023）は，一つの教団に研究対象を特定し，そこに関わる人の宗教性発達を明らかにすることができれば，他の教団，教派と比較することも可能になると主張している。その比較においては，たとえば，前述の宗教性の定義についてキリスト教以外の宗教に適用可能かというような，基本的なことも含めて検討が必要であろう。

本研究では，青年の宗教性発達やアイデンティティ形成に宗教的経験がどのような影響を及ぼすのか検討する上での基礎的な資料を得るために，青年の宗教的経験（経験そのものや自分自身に対する影響）への態度を，PAC 分析を用いて探索的に検討することにした。

そして，宗教心理学的なアプローチが十分には行われていない教団・教派として，仏教における真言密教（真言宗）を対象とすることにした。そこでの具体的な宗教的経験としては，「四度加行（しどけぎょう）」を取り上げる。四度加行は，真言宗の阿闍梨（あじゃり：修行を完了した僧侶，「先生・教授」の意）になる修行において不可欠とされる過程であり，その内容や 100 日に及ぶ実施期間から，青年へ及ぼす影響も大きいと予測される。

2 方法

調査時期：202X 年 7 月下旬から 8 月上旬。各研究協力者について，2 日に分けてインタビューを実施した。

研究協力者：真言宗の青年僧侶として四度加行を経験した以下の 2 名（Table 1）が研究協力者として本研究に参加した。

Table 1　研究協力者の情報

	年齢	性別	修行の時期
A	21	男性	202X-4年，202X-3年
B	21	男性	202X-1年，202X年

提示刺激：「あなたは，四度加行においてどのような経験をしましたか。そして，それはあなた自身のあり方や密教に対する考え方にどのような影響を与えたと思いますか。四度加行を終えて，あなたの考えや行動にどのような変化がありましたか。それらのことについて，あなたが思い浮かべるキーワードやイメージを，浮かん

だ順にカードに書いてください。」
手続き：内藤（2002）に従い，①自由連想，②連想項目間の類似度評定，③類似度距離行列とクラスター分析，④研究協力者による解釈・イメージの報告，⑤総合的解釈を実施した。
使用分析ソフト:クラスター分析(ウォード法)にHALBAU7を用いた。
倫理的配慮:研究協力者に対して,研究の目的,方法，研究協力に関する利益・不利益，プライバシーの保護，および研究協力の任意性について説明したうえで，研究への協力と結果の公表に関する同意を書面で得た。なお．本研究は高野山大学研究倫理委員会の承認を得て実施された。

3 結果

以下に各研究協力者の事例をそれぞれ示す。研究協力者の発話について，個人の特定につながる可能性がある語については一般的な語に置き換え，〔 〕でくくって表記している。また，密教の用語について，筆者が補足説明を（ ）内に記した箇所がある。

研究協力者 A（デンドログラムは Figure 1）
(1) 研究協力者 A による解釈
【クラスターごとの解釈】
CL1：「これは，〔修行道場〕内にいるときに教わったことですね。」「まあ，これ言ったら元も子もないのかもしれないですけど，僕も加行をやってみないと多分感じれられなかったことなので。」「あの環境がなければ，絶対に，その一，〔修行道場〕外でも大学でも習うことはなかったかなと。」
CL2：「これは，イメージというか，もう，言葉にして簡潔にすると「成長」という部分ですかね。」「高校で学んできたことを〔修行道場〕で，学んできたことに事相（実践）を加えて，…中略…それがこの先，生きていく上で，じゃあプロっていうものは何なんだろうっていうのが，その一，お坊さんにアマチュアはいないっていう話を〔先生〕にされて，加行をして灌頂（かんじょう：阿闍梨の位をつぐための儀式）した人は晴れてプロになるんだよと。」「〔修行道場〕で，今まで高校で学んできたことを，その，印にしろ，真言にしろ，心にしろ，事相としての形にするといったところですね。」
CL3:「やっぱり,端的に言うなら「環境」ですね。」

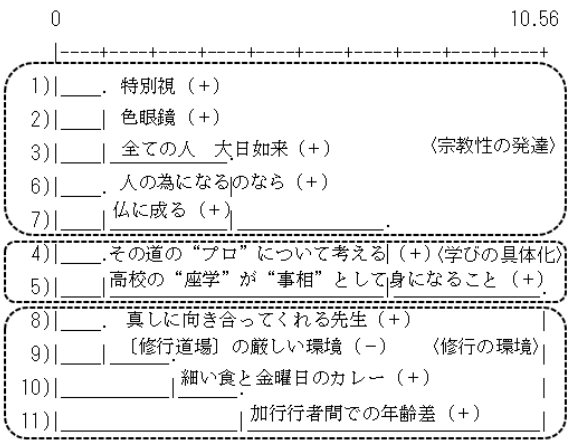


Figure 1 研究協力者 A のデンドログラム

「〔修行道場〕での環境は，その一，加行に入る前から多少想像し，想像はフワーッとしていたんですが，前評判というか，あの一，聞いていた話だと,少しでも風邪を引いて「先生できません」って言ったら病院に運ばれるぞみたいな,そういう，まさに行をするためだけにある施設といったふうにお聞きしており，まあ，実際入ってから，からも，行をする専門の施設だったんですけど，厳しい環境っていうのはもう，うーん，高校生だったから体力がなかったというのもあるんですが，うーん，うーん，何て言ったらいいんでしょうね。朝は早いし。」
【クラスター間の関係】
CL1 と CL2：「うーん。違うところで言えば，考え方についての影響なのか先生が教えてくれたことなのかってとこですかね。」「でも似ているというか，どちらも後になってから自分のためになったっていうのはあるんですが，それを言ってしまったら,もう,何もかもそうなので。」
CL1 と CL3：「まあ，違うというか，そもそもなんですけど,「環境」と「先生が教えてくれたこと」なんでジャンルが違うかなと。」
CL2 と CL3：「まあ，さっきとおんなじように環境と成長面のものでジャンルは違いますが，似通っている部分としては.〔修行道場〕ありきじゃないと学べなかったことぐらいですかね。」「環境ありきだとして，んー…，似ているというよりはこの環境が土台になっているようなイメージはあります。」
全体：「〔修行道場〕と周りの人ありきだったっていうことぐらいですかね。」「今はパッと思い付かないですが，今後生きていく中で出てくることはあるんじゃないかなと。」
(2) 研究協力者 A についての総合的解釈
CL1 は，「大日如来」「仏」などの密教に関す

る内容と,「人の為になるなら」というような生き方に関する内容が含まれており,〈宗教性の発達〉と命名した。

CL2 は,「プロ」や「事相」という具体的なことがらを想起させる内容が含まれており，また研究協力者 A が「成長」と語っていることから，〈学びの具体化〉と命名した。

CL3 は,「先生」や「食」,「環境」という内容が含まれており,〈修行の環境〉と命名した。

研究協力者 **B**（デンドログラムは Figure 2）

(1) 研究協力者 B による解釈

【クラスターごとの解釈】

CL1:「まあ，その，生活してて，まあ，協力とかありがたみとか感謝もそうですけど，当たり前みたいな感じがあるので，あー，言葉にするのはちょっと難しいんですけど，生活面での，その, あれですね, 加行でいうとこの, その一, 生活での，その一，多分，経験だと思います。」「まあ，やっぱり，このキーワード的には，何て言うんですかね, 僕が寮監に注意された。」「行く前までも，まあ，口に出すことは，まあ，その，ありがとうとか，その，感謝の気持ちを口に出すのは当たり前だったんですけど，その，心から思うみたいなことはやっぱり加行を出てから，ほんとに，何て言うんですかね。その，ありがたみの，その，うわべだけではなくて，その，心からの感謝みたいなのは生まれたと思います。」

CL2:（寺院の住職には，不適切なふるまいの見られる者もいるのではないかという研究協力者 B のイメージが語られた。）「僕の今後に考えさせられるっていうか，その一，こうはならないでおこうっていう反面教師みたいな感覚ではあります。」「まあ，こうはならないでおこうとは言ったんですけど，多分今の僕も堕落に近い感じはあるので，何か，人ごととはほんとに言えないですね。」

CL3:「苦労，空腹，理不尽の三つは，多分，もう，僕が加行で受けてきた全てだと思います。」「これがあるから他のつらいことが，何か，軽く見え，軽くっていうか，その，そうですね。もう，この三つがダントツにつらすぎて，それ以外のちょっとしたつらいことはそんなに苦でもなかったと。」

CL4:「えーと，これは僕の中では，その，加行が終わってからの負のイメージです。」「そうですね，人の生き方，性格の変化，言動は，何か

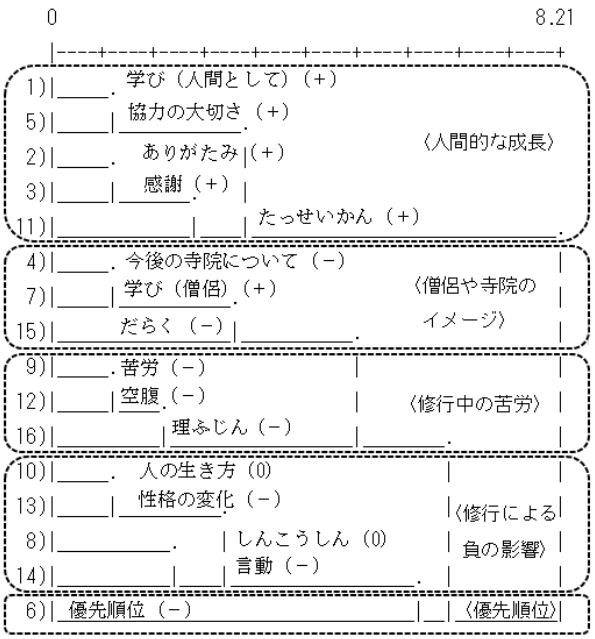


Figure 2　研究協力者 B のデンドログラム

ほんとに，加行が終わってから，その，堕落とは違う意味で何か悪い方に進んだような気がします。」「生き方, 生き方はちょっと分かんない。性格だというと，その，おおらかだったところがちょっととがってきたりだとか。」「加行のストレスが全部ここで解放されてるイメージがありますね。」

CL5:「言葉の意味合い的には, その, やっぱり, 優先してどうこうすべきなんですが，何か，僕の中ではただの，ふふっ，何て言うんですか，ただの戯れ言といいますか,「ああ，また言うてら」みたいな。」

【クラスター間の関係】

CL1 と CL2: ああー, まあ, ざっくりで言うと, ええ，やっぱ正と負すぎてちょっとなんかあれなんですけど，2 番（CL2）がお坊さんでは，ではないっていうかお坊さんがやるべきではなく，1 番（CL1）の方が，1 番の方がそうですね。お坊さんのあるべき姿といいますか。」

CL1 と CL3:「えーっと，3 番（CL3）があるから，その，1 番（CL1）のことが，その，できるようになった。そうです。3 番のおかげで，その，1 番が，1 番の大切さといいますか，重要性が明らかになりました。」

CL1 と CL4:「言葉は違っても，何か，似たようなことを言ってるような気はします。」「まあ，違いというのは，1（CL1）の方は加行内の，その, やってる最中に多分思い付いた中の言葉で，4 番（CL4）の方が出てから気付いた言葉だと思います。」

CL2 と CL3：「やっぱし，比較，や，難しいなあ。比較というか，まあ，一緒では，うーん。3 番（CL3）は，もう，実体験なんですけど，2 番（CL2）に関しては実体験はまだしてないですね。」

CL2 と CL4：「もうちょっと，3 番（CL3）の方と一緒なんですけど，やっぱり 4 番（CL4）は自分が起こったことを書いてるんですけど，やっぱ 2 番（CL2）はまだ実体験がない，ないです。あとはそうですね，4 番（CL4）の方を悪くして，その，悪くしてっていうか，そのー，その，どんどん悪い方に変化していったら，その，堕落につながって寺院がつぶれていくんではないかっていうつながりはあると思います。」

CL3 と CL4：「イメージで言うと 3（CL3）を耐えきったから，この，4 番（CL4）につながった感じはします。

CL3 と CL5：「1 人の寮監から言った言葉ですかね。が，共通点です。」

CL1 と CL5／CL2 と CL5／CL5 と CL5：特に関係性はないということが語られた。

(2) 研究協力者 B についての総合的解釈

CL1 は，「感謝」「協力」などの内容が含まれており，加行を経て人間として学んだことが現れているため，〈人間的な成長〉と命名した。

CL2 は，今後の寺院経営や僧侶の姿について語られており，〈僧侶や寺院のイメージ〉と命名した。

CL3 は，「苦労」「空腹」「理不尽」という話題であり，〈修行中の苦労〉と命名した。

CL4 は，加行後の「性格の変化」や「言動」について，「負のイメージ」が語られているため，〈修行による負の影響〉と命名した。

CL5 は，連想項目どおり〈優先順位〉と命名したが，研究協力者 B の語りによれば，CL3 に含まれても良い内容であると考えられた。

4 総合考察

研究協力者 A・B の修行経験に対する態度には，共通点と相違点が見られた。

共通点としては，修行を通じて人間的な，あるいは宗教的な成長があったという認識を持っていることである。また，修行中の環境が厳しいものであったという思いも共通している。

しかし，その厳しい修行の結果に対する捉え方は，A・B 両者で大きく異なっていた。A においては，修行を通じて宗教についての学びが具体化されたという，肯定的な態度が見られた。一方，B においては，修行のストレスが強調され，そのストレスの影響についての否定的な態度が見られた。

このような違いには，両者のもともとの宗教的背景やパーソナリティの違い，実際の修行での出来事の違いなどのほか，修行を終えてからの時間の経過の差も影響しているのではないだろうか。A については，インタビューの実施時点において修行から時間が経過しており，その時間の中での思考の整理や新たな経験が，修行の体験を肯定的に受け止めることにつながっている可能性がある。一方，B については，修行を終えてから日が浅いということで，否定的な記憶が優位になっている可能性もある。したがって，今後，時間の経過によって修行への態度がどう変化するのかを明らかにしていくことが必要であろう。

また，研究協力者 A・B ともに，「修行の経験を言語化することは難しい」ということを語っていた。この点について PAC 分析でどのようなアプローチが可能か，検討が必要である。

文献

川島大輔（2011）「宗教心理学における質的研究の方法論とその可能性」金児暁嗣（監修）『宗教心理学概論』ナカニシヤ出版

松島公望（2023）「キリスト教と宗教心理学ー心理学（データ）から見えてくる新たな地平」松島公望・大橋明・川島大輔（編著）『宗教が拓く心理学の新たな世界ーなぜ宗教・スピリチュアリティが必要なのか』福村出版

内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門改訂版』ナカニシヤ出版

杉村和美（2023）「青年期のアイデンティティと宗教心理学」松島公望・大橋明・川島大輔（編著）『宗教が拓く心理学の新たな世界ーなぜ宗教・スピリチュアリティが必要なのか』福村出版

Sugimura, K., Matsushima, K., Hihara, S., Takahashi, M., Crocetti, E.（2019）A Culturally Sensitive Approach to the Relationships between Identity Formation and Religious Beliefs in Youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 48, 668-679.

杉山幸子（2004）『新宗教とアイデンティティー回心と癒しの宗教社会心理学』新曜社

(SASAKI Satoshi, KITAGAWA Shinkan)

2−3

就職活動終了後の大学・大学院生における「キャリア」概念の探索

髙沼理恵
金沢大学融合研究域融合科学系
key words：人生設計，ライフ・キャリア・レインボー，運

はじめに

「キャリア」の定義は必ずしも明確ではない(渡辺&Herr, 2004)。Parsons に始まる職業選択の理論は、人の可変性を重視する職業的発達、キャリア発達へと重点が変化してきたという歴史的背景があり、それゆえ現在「キャリア」という概念には「職業キャリア」と「ライフキャリア」が共存している(菊池, 2020)。前者は組織心理学・経営心理学の分野でよく見られる定義で、職業や職務との関係を中心にしたもの、後者は Super(1980)が導入した「キャリアとは生涯過程を通して、ある人によって演じられる諸役割の組み合わせと連続」とする生涯発達の観点を重視する。

キャリア発達・職業決定は、青年期の自己概念にとって重要である。Erikson(1950)において職業決定はアイデンティティ確立を示すものであり、Super(1957)においては青年期に自己概念が明確化し、現実吟味を通じて興味・価値・能力が統合されつつ職業的意味への翻訳がなされ、職業的自己概念が形成されるものである。それゆえ、キャリア発達や自我発達の望ましい状態を研究者が想定し、尺度化する研究が盛んに行われてきた(レビューとして高橋, 2018; 増淵, 2019)。

一方、被験者となってきた青年期にある人々(主に大学生)が、そもそも「キャリア」という概念をどのようなものだと捉えているかという研究はほぼない。1999 年の中央教育審議会の答申で初めて「キャリア教育」という用語が登場し、就労観・職業観育成が謳われて以降様々に展開されたキャリア教育を経た青年期学生にはどのようなキャリア概念が形成されているかを探求することは、今後のキャリア教育や、厚生労働省が推奨する生涯におけるキャリア発達の支援に対する示唆を得られる可能性がある。

方法

被験者：地方国立大学所属の文系学部 4 年生(A 氏)、理系大学院修士課程 2 年生(B 氏)。いずれも男性で、就職活動後に比較的志望度の高い就職先に内定を得た。青年期発達段階を達成した目安として、就職内定者を対象とした。

提示刺激：「あなたはこれから大学を卒業し、キャリアを築いていこうとしています。あなたにとって、キャリアとはどのようなもので、どのような意味があり、どのようなイメージを持っていますか。単語でも文章でもかまいません。頭に浮かんできたものを付箋に書き出してください。」

手続き[1]：標準的な手順に則った。①刺激文に関する自由連想(目安は 20 個である旨を指示)、②各連想項目の重要度の順位付け、③各連想項目に対する感情的イメージの表明、④連想項目間の類似度評定(一対比較 1 回)、⑤類似度距離行列によるクラスター分析、⑥被験者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告(インタビュー)、⑦実験者による総合的解釈、という順番である。

使用分析ソフト：PAC Assist2(土田, 2017)、R 4.3.1
上記手続き④で、被験者は PAC Assist2 上で自由連想項目の類似度比較を実施し、対象化された非類似度行列を用いて R 4.3.1 にてデンドログラムを作成した。

結果[2]

次頁以降に図を示す。各自由連想項目の後部の数字は重要度順位を、その後ろの P／0／N はそれぞれ感情的イメージを表しており、P＝ポジティブ、0＝ニュートラル、N＝ネガティブである[3]。

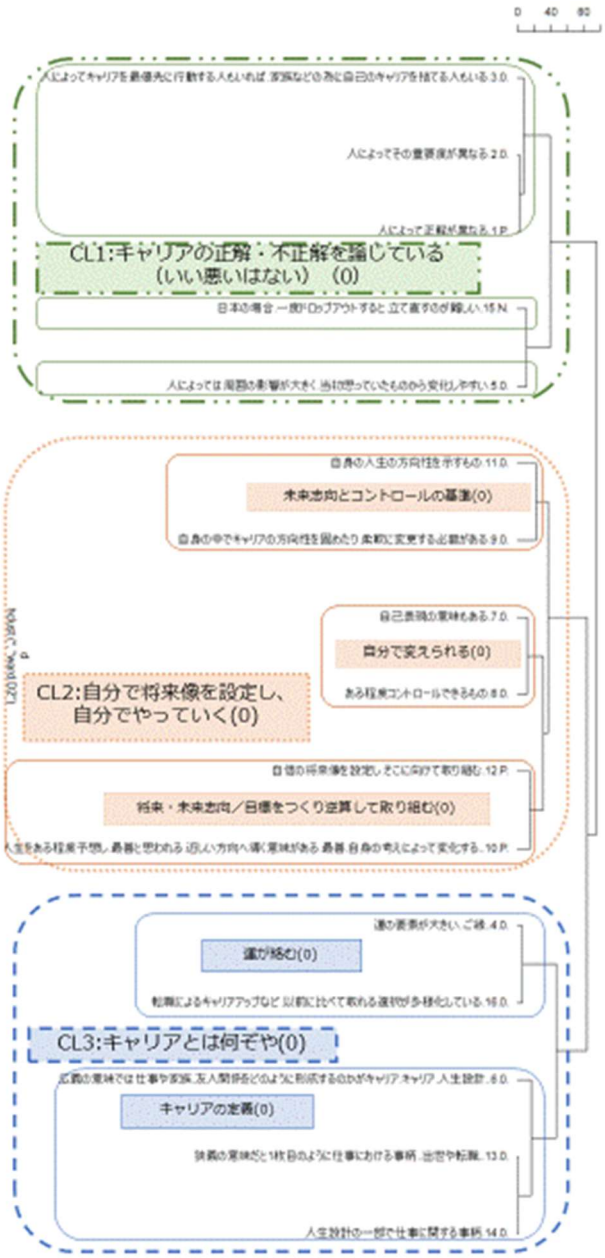
A 氏：16 個の自由連想項目を得た。想起順 1 位は＜人生設計の一部で仕事に関する事柄＞で、重要度では 14 位となった。代わりに、想起順 7 位の＜人によって正解が異なる＞が重要度 1 位となった。感情的イメージでは、(P)3 個、(0)12 個、(N) 1 個であった。最多であった(0)は「そういうもんだよ

[1] 本調査は、所属機関の倫理審査を経て、研究目的・協力内容・体調不良の際の対処・個人情報の取り扱い・研究成果の公表について記載した研究参加者説明資料を配布・説明し、同意書へのサインを得ている。
[2] 以下本文内の表記は＜自由連想項目名＞、≪グループ名≫、【クラスター名】、「被験者の発話」とする。
[3] 本来は＋、－、±で記載すべきだが、R で描いたデンドログラムの表記に出すことが叶わなかったため、便宜的に変更した。

ね」あるいは「いい面と悪い面を足すとゼロ」という判断基準であった。

クラスターは 3 つのクラスター(太い点線で囲ったもの)となり、各々のクラスターにグループ(細い実線で囲ったもの)があるような形となった。

図 1：文系学部 4 年生(A 氏)デンドログラム



【CL1：キャリアの正解・不正解を論じている(いい悪いはない)(0)】

≪重要度 1～3 の名がつかなかったブロック≫は、「キャリアって正解がない」「その人の人生」「人の価値観次第」「生き方を強要されると嫌」という語りに象徴される。また、「家族を持つかどうかも運」で、「そこで結果は一旦受け止めてリスタートしていくしかない」ということが語られた。**≪(略)ドロップアウト(略)(N)≫**については「新卒カードから続く見えないカード」で、選びたくても選べないものが出てくることが語られた。**≪(略)周囲の影響(略)(0)≫**では、ドロップアウトの原因として人間関係や病気が挙げられた。

【CL2：自分で将来像を設定し、自分でやっていく(0)】

≪将来・未来志向／目標をつくり逆算して取り組む(0)≫では、「自分的には刹那的に考えるものではない」と留保をつけた上で、「いい方向になるように」「非現実的なレベルではなく」「向上心はありつつ」「価値観があうところで」「逆算して取り組む」べきであることが語られた。**≪自分で変えられる(0)≫**では、職業選択は「自分はこう生きていきたい、自分はこういう人間だと表現する」要素があるが、「そういう人もいるしそうでない人もいる」ことが語られた。例えば「ステータスのために(中略)医者になる」「芸能人として生きていく」といったことが自己表現にあたるという。自分の場合は「自己表現の意味を持たせたわけではないが多少ある」とし、「自分はこんな地元で終わるわけではない」「ボーイスカウトから逃げ出すように地元を出た感じ(だから帰れない)」という意味づけを語った。この語りの背景には、**【CL3】≪運が絡む(0)≫**の語りがある[4]。ここでその内容を先取りすれば、彼は関西地方の下町出身で、周囲の親は所謂大手企業ではなく地元の鉄工所等に勤めており、子どもの将来も「なんとなくこうなるだろうな」という選択肢を取る傾向が高い地区だった。故に身近に想像し得る範囲内あるいは長期的な見通しを持たずに「刹那的に」生きていく人も多い中、彼は珍しく大学に進学した。違う世界を見て、その世界でも「ある程度自分が通用する」ことが分かり、「ある程度の向上心」を持ち生きていきたいと思うようになった。しかし、そう思うに至ったのも運であると言う。**≪未来志向とコントロールの基準(0)≫**では、コントロールの基準を持つことの重要性が語られつつも、「20 歳と 50 歳のキャリア像は違うので、変更しなければならない」「がんこにならない」「時として手放す」柔軟さが語られた。

【CL3：キャリアとは何ぞや(0)】

≪キャリアの定義(0)≫では、仕事に関することを連想するうちに人生そのものという概念も出てきた。連想順では狭義のキャリアが先だが、広義のキャリア＝人生設計の方が、「人生におけるウエイ

[4] 実際のインタビューでは CL3 から解釈の語りが始まっているため、記載の順番が逆転している。

トが高い(＝時間を使っている)」ので重要度は広義のキャリアが高いことが語られた。また、高校時代に OB がキャリア教育の一環で講演した際、「そこまで考えないといけないのか、生きるの大変だな」と感じたものが就職活動を通じて少し現実化したが、「まだまだ青二才」だと笑った。

≪運が絡む(0)≫では、「終身雇用がなくなり」「多様化した世界で」は、運の要素が強くなる。例えば「選択肢が増えたからこそ(自分に合う働き方を選ぶ際に)迷いが多くなる」「配属ガチャ」「あうあわないが増えてくる」等が挙げられる。なお、ここで先ほどの過去の経歴が語られている。運に対しては「割り切るしかない」「一時の感情の起伏は勿論ある」が、「無理やり自分を納得させる言い訳としての運」と「出来たときに自慢する運」があり、「短期的には運に左右される」が「長期的にはコントロールも可能」であることが語られた。

インタビューの最後に「キャリアのイメージを一文または簡潔に言うとすると」と質問すると、「(CL2,CL3 の周りを指でなぞりながら)キャリアってこういうものだよね、でもキャリアの概念というか善悪はないので、ニュートラルでいないといけないなという気がします」と締めくくった。

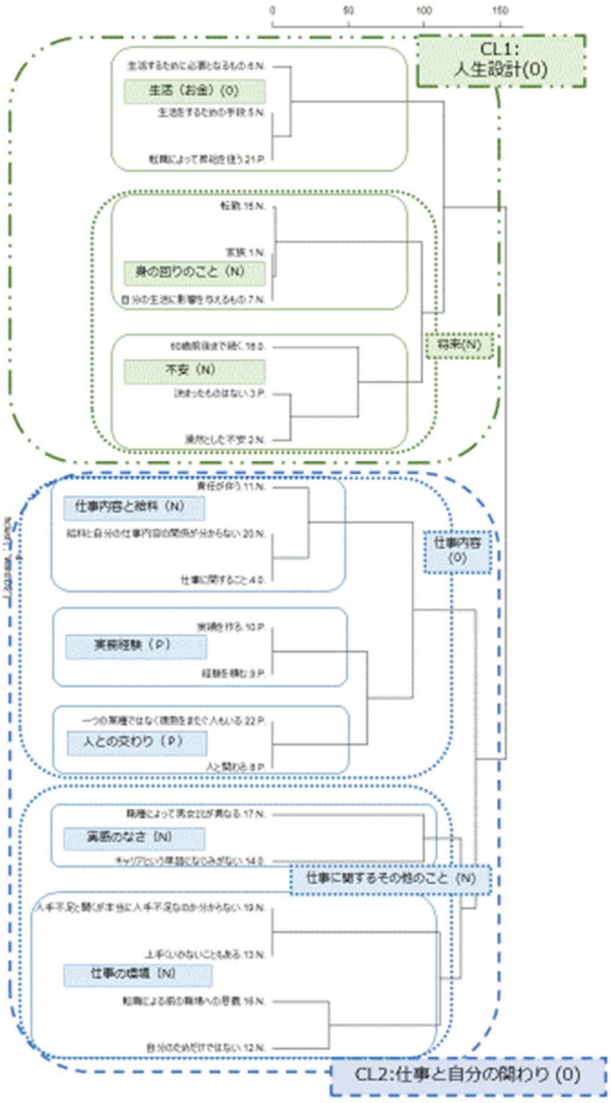
B 氏：22 個の自由連想を得た。想起順 1 位は＜キャリアという単語になじみがない＞で、重要度は 14 位となった。代わりに、想起順 22 位の＜家族＞が重要度では 1 位となった。感情的イメージは、(P)6 個、 (0)3 個、 (N)13 個であった。

クラスターとしては大きく 2 つに分かれた。

【CL1：人生設計(0)】このクラスターの要素は(N)が多いが、クラスター全体としては「不安な分ポジティブにもなりそう」なので(0)となっている。

≪生活(お金)(0)≫では、「お金の話題時代が現実的な考えになってしまう、夢がない」「お金について考えるのははしたない」が、「(趣味の電気系の)ものづくりをはじめ色々作りたい」「お金に糸目をつけず心配なく作りたい」し、「一人暮らしだと税金や家賃など必要なものが多い」ので、生活全般を考えると「あればあるほどいい」。ただ、「(お金がないので)材料を切り詰めて工夫する」という楽しさもあるし、稼いでいても「煩悩まみれ」かもしれないことが語られた。ただし、“給料”という自由連想項目は出ず、このことについて質問すると「あ、ほんとですね、なんでだろ…」と語っていた。**≪身の回りのこと(N)≫**では、＜家族＞は「家庭を持ったとき接している時間が一番長い」ため、影響が大きい。「(時間の使い方における)行動上の指針」として、例えば旅行の際に仕事を休んだり、仕事上のお付き合いより「家族を優先させ」たりするだろうことが語られた。また、＜転勤＞では、生活の基盤・土地が変わることで家族に影響を与えることや、内定先も転勤があるが「給料が高い」し「しょうがない」と語られた。**≪不安(N)≫**では、「就職後うまくやっていけるか」「どう転ぶか分からないことに対して自分自身不安がある」「倒産・リストラ等何もないまま外に出されるような気がする」「転勤も 1~2 か月前の通達で気にかかる」、70 まで働く時代に「60 歳以降が決まっていないから(金銭的にも生活基盤的にも)不安」「不安と(今の生活を変えることへの)めんどくささ」が語られた。

図 2：理系大学院修士課程 2 年生(B 氏)デンドログラム



【CL2：仕事と自分との関わり(0)】

≪仕事内容と給料(N)≫では、アルバイトの経験から、「この仕事内容でもらえる給料は果たして適切なのか？」「頑張っているのに報われないのは嫌」ではあるが、「逆に自分はそんなに頑張ってやって

いないのでまぁいいか」「仕事変えるのもめんどくさい」というアンビバレントさや、自身が希望した職種である組み込みエンジニアはそもそも給料が低く「もやもやするけどしょうがない」「新しいことをやって、大学院までの学びを無駄にしたくない」「大学院まで行けたのは親のおかげ」というアンビバレントさが語られた。**≪実務経験 (P)≫**では、「転職のことを考え」ていて、「働く中で色んな経験を積む」ことの重要性が語られたが、話すうちに「転職じゃなくても結構大事」と意識変容が起きた。**≪人との交わり(０)≫**では、「今は転職が当たり前」で「こういう人は色んな人と関わっているだろう」。自分は「転職しなくてもいい、給料が上がるなら考える」。**≪実感のなさ(N)≫**では、「(キャリアは)よく言うけどいざどういうものかは説明しづらい」ため、「よく分かっていない」「馴染みがないからかな？」と感じる。一方で「人生的なこと」「将来設計」「仕事は生活で、家族と関係する」ことが語られた。**≪仕事の環境(N)≫**は「内容・状況・周りの人間関係」に関係し、「自分一人では何もできない」「家族や会社のために働く」。転職すると「上司に対して申し訳ない感じ」がする。また、就職活動で 10 数社落とされたため、「本当に人手不足なのか」「全体を捉えられている感じがしない」というもどかしさが語られた。

インタビューの最後に「キャリアのイメージを一文または簡潔に言うとすると」と質問すると、「うまくいかないこともあるけど、やっぱりキャリア全般うまくいかないこともあるよね、っていう感じ…その場面に直面したときに対処すればいいかなって思っています」と締めくくった。

総合考察

両者を比較した際の相違点として、以下が考え得る。①自己表現の一部、あるいは人生の方向性は自分で創っていくといった抽象的かつ“生き様”とも表現し得るような要素が強い(A 氏)か、職業生活を中心としたお金や生活基盤等具体的な要素が強いか(B 氏)。②仕事の概念の中に「他者と共に」という要素がある(B 氏)か否か(A 氏)。③不安のレベルの違い：B 氏は随所に≪不安≫を抱え、A 氏は≪運が絡む≫が＜ある程度コントロールできる＞と語る。④運の要素がある(A 氏)かないか(B 氏)。⑤「めんどくさい」(B 氏に頻出)ものか、未来志向で計画的に進めるもの(A 氏)か。⑥感情イメージに N が多い(B 氏)か否か。⑦働く目的の力点の違い：A 氏は自己表現やよい未来のため、B 氏は家族・会社のため。

また、共通点は以下が考え得る。①＜人生設計＞と＜仕事＞という意味が共存する。ただし＜人生設計＞の意味は異なり、B 氏においては＜家族＞が最も重要で、家族・お金・居住地・趣味という要素が込められる一方、A 氏は仕事や家族、友人関係などを＜広義のキャリア＞に入れつつ、語りの大半は職業キャリアが念頭に置かれている様子である。②ライフ・キャリア・レインボー上の多様な役割が挙げられている。③決まったものはない、良し悪しがあるわけではない。④まだ遠い感じ：二人とも一人暮らしはしているが、A 氏は「青二才」、B 氏は＜実感がない＞と語る。⑤キャリア教育での学びというより、自分の過去の経験から概念を創っている：A 氏の語りで高校の OB の講演の話以外、学校教育で学んだという要素は登場しない。⑥不安は語られるが、困った際のリファー先については言及がない。藤田(2014)は、高等学校中退者や未就職者等、学校の目が届かない若者への支援が行き届いていない現状に対し、どうリスクを回避すべきかを学校が伝えていないことをキャリア教育の課題の一つだと言う。同じことは大卒者にも言えるだろう。厚生労働省がキャリアコンサルタントの活用を謳うのであれば、キャリア教育に組み込むべきである。

また、「キャリア」概念の下部構成要素としての「お金の話ははしたない」(B 氏)といった価値観は、職業キャリアの形成においてマイナスにも作用しうるため、対処する必要がある可能性がある。

一方で、望ましい・あるべきキャリアの概念を設定することも困難かもしれない。キャリア教育におけるキャリアカウンセリングは現在曖昧な位置づけである。その可能性は、こうした個別性への対処にあるだろう。

主な参考文献

菊池武剋.(2022). I 第 1 節キャリアとは何か. 新版キャリア教育概説. 日本キャリア教育学会編. 東京：東洋館出版社.

増淵裕子. (2019). 大学生における就職活動を通しての成長に関する研究の動向. 学苑・人間社会学部紀要, 940, 55-61.

内藤哲雄. (2002). PAC 分析実施法入門[改訂版]. 京都：ナカニシヤ出版.

高橋南海子. (2018). 大学生の就職活動に関する実証的研究の動向と課題. 明星大学明星教育センター研究紀要, 8, 11-15.

土田義郎.(2017). PAC-Assist2 ウェブサイト

(TAKANUMA, Rie)

2-4

小学校初任者教員の協同学習認識に関する研究

真田穣人
（兵庫教育大学）
key words：協同学習認識　初任者教員　小学校

はじめに

子どもたちの生きる力を育むために，アクティブラーニングの視点からの授業改善が求められている。そのようなアクティブラーニングに期待される主体的・対話的で深い学びを具現化する上で有力とされているのが協同学習である。

協同学習の有効性に関する研究は，多くの研究で実証的に明らかにされているものの，その実現の難しさも指摘されている。Deutsch（1995）は，効果的な協同の実践には教師の高い力量が要求されることを報告している。また，松尾・丸野（2007）は，多くの教師にとって，子どもたちに互いの考えを出させ，それらを上手く絡み合わせるための場づくりを行うことは容易でないこと，その原因として，話し合いを中心とした授業を実現するための具体的な手立てを教師が十分に持っていないことを指摘している。

それでは，教師は実際に協同学習の実践に対してどのような手立てをもち，また，どのようにして協同学習に関する専門性を高めていくのであろうか。中等教育学校教員に協働学習に関する認識について記述調査を行った石橋・千葉・橋本・細矢・南澤・秋田・小国・小玉（2014）は，教師が協働学習に対して課題設定の工夫やグループ構成の配慮等の実践の工夫や有効な観点を認識する一方で，実践上の心配や不安を多くもっていることを報告している。また，小学校教員と教職過程学生に比喩生成課題を実施し，協働学習に対する認識の教職経験による相違を検討した児玉（2017）は，協働学習の経験のない教職課程学生と比べて現職教員は教師のあり方や求められる能力に関する認識が多いことを示し，その認識は発達変容する可能性を指摘している。話し合いや学び合いを重視した学習における教師の専門性へ着目した研究は散見されるが，未だ十分な研究は蓄積されていない。

ところで，近年，ベテラン教師の大量退職に伴い，若手教員の育成，特に都市圏を中心に大量採用される初心者教員をどのように育成していくのかは，大きな課題となっている（宮橋・中山・須佐，2016）。東京都が初任教師を対象に行った意識調査（2008）では，８割以上の初任教師が日々の授業における授業技術や学習規律の保持について困難であると答えており，授業方法をはじめとする初任者育成は，主体的・対話的で深い学びによる授業改善の観点だけでなく，初任者教員の学校現場への適応の観点からも重要であると考えられる。

そこで，本研究では，これまでも他校種と比較して協同学習が行われてきたとされる小学校の初任者教員に着目し，協同学習に対する認識を探索的に検討することが目的となった。

方法

調査協力者：新卒で採用された初任者教員 A，B，C の 3 名。3 名とも学級担任を務めていた。
提示刺激：「半年間，教員として学校現場で指導を行ってきて，協同的な学びの実践に対してどのように感じていますか。協同的な学びの実践の際に，困っていることや困難なことはどのようなことですか。また，協同的な学びの実現のために，どのようなことが必要だと感じていますか。頭に浮かんだ文章やイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

尚，刺激文作成にあたっては，内藤（2017）の刺激文やその作成手順，留意点を参考にした。
手続き：調査協力者に，まず協同学習に対する認識について調査すること，自由連想された項目を用いて個人別にイメージの分析をすること，いつでも参加を中止できることを伝えた。ついで，調査結果について，匿名性を確保し，プライバシーを保護するという条件で，学会の大会で発表したり，学術雑誌で公開したりすることについて許可を求めた。
使用分析ソフト：HALBAU7

結果と考察

調査協力者 A（Figure 1）

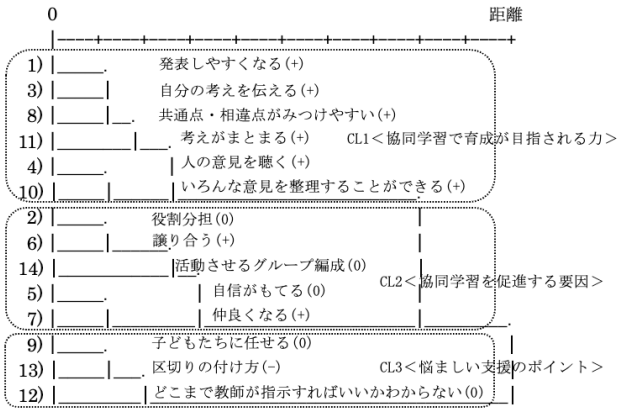


Figure 1　調査対象者 A のデンドログラム

（1）調査協力者 A による解釈

【クラスターごとの解釈：一部抜粋】

クラスター１は，活動をすることで，得られるメリット。グループだと発表しやすくなるし，それぞれのグループからでてきた意見で，同じ考えや，違う考えなど比較しやすくなる。考えとして掘り下げられたり，いろんな意見を整理したり。協同学習をすることでこんなことができるというイメージ。

クラスター2 は，協同学習をする基礎というか,話し合う前提のまとまり。これができると，活動がしやすくなる。自信がもてたり仲良くなれたりしたら心の余裕じゃないけど，譲り合ったりもするだろうし，譲りあったら仲良くなるだろうし，グループの形，グループ編成，この人とこの人を合わせたら話し合いがうまくいくというのはある。

クラスター3 は，どこまで手を出すかじゃないけど，どこまで支援するかというイメージ。理想としては，全部子どもたちに任せたい，自由に子どもたちに出させたいけど。活発に話し合いができないグループに対しては，この意見どうと聴いたり，ここまでは話し合ってねと指示を出したり。どこまで指示をして，どこまで自分がでたらいいか，悩みのようなイメージ。

【クラスター間の関係】

クラスター２ができたら，１につながる。２は協同学習が活発になるもと。１は協同学習をして１ができるようになったら，これを一人学びの場でできるようにつなげたいような中身。

クラスター３の自分の手立て次第で１ができるようになるか，なかなか進まないか，３次第で変わりそうな感じ。

クラスター２ができるようになったら，３はなくてもいいじゃないけど，考えなくてよくなるというか。２がしっかりできたら,心配ない。

（2）調査対象者 A についての総合解釈

クラスター１は，協同学習の導入が,「自分の考えを伝えること」や「人の意見を聴くこと」になり，その活動のなかで,「いろんな意見を整理することが」でき,「共通点･相違点を見つけ」たり,「考えがまとまる」など，協同学習の効用の内容とそれらを育んでほしいという教師の思いが含まれている。よって,「協同学習で育成が目指される力」と命名した。

クラスター2 は,「活動させるグループ編成」が適切に考慮され，グループ内で「役割分担」を活用した交流が生まれるなかで,「仲良く」なり,「自信がもてる」ようになり,「譲り合い」をしながら，建設的に考えを構築するようになるなど，協同的な学びが進んでいく要因でまとまっていた。そのため,「協同学習を促進する要因」と命名した。

クラスター3 は,「子どもたちに任せる」という支援も意識しながらも，必要に応じて交流を止める際の「区切りの付け方」に悩み,「どこまで教師が指示すればよいかわからない」というように，支援で悩む内容が含まれていた。そのため,「悩ましい支援のポイント」と命名した。

調査協力者 B（Figure 2）

（1）調査協力者 B による解釈

【クラスターごとの解釈：一部抜粋】

クラスター1 は，人間関係のこと。児童同士の関係とか，うまく話せない児童とか，結局は学級経営につながっている。教え合い，学び合いも普段の関係がないとできないと思うので。一番大事なのが学級経営になるのかな。

クラスター２は，教師の手立てというか，私が印象にいつも残っていること。授業が一部の発表する人だけの参加になっている。対話的な学びをするときの人数とか一部の児童のみの授業になっていることが難しいと感じている。

クラスター３は，子どもにこんな力がついてほしいなぁという思い。まずは自分の考えをもつ,表現する,そして相手を受け入れてほしい。あと，やっぱり失敗や間違えを恥ずかしくない雰囲気をつくってあげないと，自分の考えすら言えないし，発表とかもできないクラスになってしまうので。雰囲気とか間違えた子に対してどうフォローするのかが大切。

クラスター4 は，協同学習についての印象。対話的で深い学びができたのか，自分自身が印象をもちにくい。そこまで頭が回っていない。普段の授業でいっぱいいっぱいなので。児童の

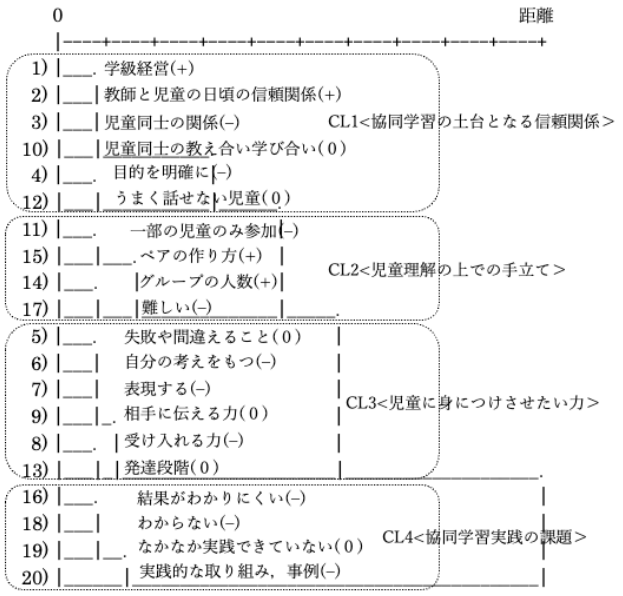


Figure 2　調査対象者 B のデンドログラム

実態によって変わってくることだと思うし，実践的な取り組み，型があっても，そのままましてもうまくいかないというのが普通だし。難しいわからないなぁというまとまり。

【クラスター間の関係】

クラスター２は教師の手立てというか働きかけだけど，１は教師と子ども，子ども同士の関係。築いていかないといけないもの。１が先でその後に２かな。大切なところは子ども同士の信頼や教師との信頼関係。1 で土台をつくって，次に考えるのが２なのかな。

クラスター２は取り組み的なこと，３は身につけさせたい力。3 の力を教師が分析とか，ちゃんと把握したうえで 2 をつくらないといけないのかな。

クラスター4 は自分がこれからやらなければいけないこと。自分自身の問題，課題。

（2）調査対象者 B についての総合解釈

クラスター１は,「教師と児童の日頃の信頼関係」や「児童同士の関係」をはじめとする「学級経営」が協同学習において一番大事で基礎となることであると捉えていた。そのため,「協同学習の土台となる信頼関係」と命名した。

クラスター2 は，授業に「一部の児童のみ参加」することがないように,「難しい」と感じながらも「ペアの作り方」や「グループの人数」を工夫しようとする内容になっていた。また，それらは児童理解の上に成り立つと感じていたため,「児童理解の上での手立て」と命名した。

クラスター3 は,「失敗や間違えること」を恐れずに,「相手に伝える力」や相手の考えを「受け入れる力」など教師が子どもにつけてほしい力に関する内容となっていた。そのため,「児童に身につけさせたい力」と命名した。

クラスター4 は，協同学習を「なかなか実践できていない」と感じるとともに,「実践的な取り組み，事例」も知らないために，実践の結果も方法もわからないという内容が含まれていたことから,「協同学習実践の課題」と命名した。

調査協力者 C（Figure 3）

（1）調査協力者 C による解釈

【クラスターごとの解釈：一部抜粋】

クラスター１は，授業支援。この 4 つがないと教材研究をしても授業がうまくいかないんじゃないか。児童を知ることが大事。発問力は必要な力。今は喋りすぎてしまうと言う欠点がある。現場に出ないとわからないことがたくさんある。そのうえで大事なのがこの 4 つなのかな。

クラスター２は，授業力かなぁ。興味をもたせるのって大事だし難しいなぁって。子どもって身近なことで，おもしろいなと思ったらのるけど，そうじゃなかったらのらない。指導書をどれだけ読んでも子どもがどう反応してくれるかわからないので。この３つが揃うと授業がきれいに進んでいくんじゃないかな。

クラスター３は，学級経営かなぁ。日頃の学級経営でも,今も対応していることがあるけど，人間関係が難しいことがある。地域に貧富の差がある。それで人間関係ができてくる。難しい。学級経営は意識しているけど答えがわからないので，それを探すのが 1 年目なのかな。学級経営が授業，学びにつながってくる。

クラスター４は，うちの学校は特に協力しないといけないと思っていて。特に引き継ぎ。よく聞くようにしている。以前担任された先生がいるから情報収集して対応していくことが大事。自分の能力が低いので，いろんな能力をもっている先生にお手伝いしていただいている。

クラスター５は, ICT。教師の ICT 活用能力。手段でつかえるぐらいで，無理やり使えなくてもいいんじゃないか。ICT は教育の現場に入る前からいいなと思っていたけど，現場で課題もたくさん見えてきた。どうやって支援にもっていくのかを教師が考える必要がある。

クラスター６は，どれだけ活用できるか，活用力。自分の意見を書いたあとに話し合う時間を作っているけど。そういうのを入れなくていいんじゃないと言われたこともある。協同の場面を入れるタイミングと回数。教科によって違う。回数や効果がわからない。これを手に入れ

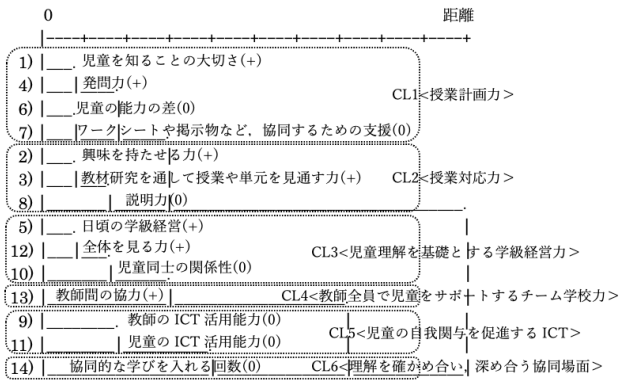


Figure 3　調査対象者 C のデンドログラム

たら大きな成長だと思う。

【クラスター間の関係】

協同的な学びを入れられない先生もいらっしゃるので，クラスター6 もプラスα。大事だけど，今は回数を意識するよりは１をフォーカスしたい。優先度が高い。結局 6 の力も１に入ってくる。１に入れたい。もっとすてきな授業ができるのでないか。子どもたちを知らないと協同できない。クラスター２がうまくなれば 6 もうまくなるし，6 の機会も増える。うまく有効に活用できる回数が増える。

（2）調査対象者 C についての総合解釈

クラスター1 は，「児童を知ることの大切さ」や「児童の能力の差」など，児童理解に関することと，「発問力」や「ワークシートや掲示物」など授業準備に関する内容でまとまっていたため,「授業の土台となる授業計画力」と命名した。

クラスター2 は，「興味を持たせる力」や「説明力」など授業中の教師の対応に関する内容でまとまっていたため,「授業対応力」と命名した。

クラスター3 は，「児童同士の関係性」や「全体を見る力」など，児童理解を中心とした学級経営に関する内容でまとまっていたため,「児童理解を基礎とする学級経営力」と命名した。

クラスター4 は，困難な児童対応のために，教師がお互いにアドバイスし合うことについて言及していたため,「教職員全員で児童をサポートするチーム学校力」と命名した。

クラスター5 は，教師と児童の ICT 活用能力に関する内容でまとまっており，それらが児童の興味関心を広げると捉えていたため,「児童の自我関与を促進する ICT」と命名した。

クラスター6 は,「協同的な学びを入れる回数」や場面，その効果について，特に学習内容のアウトプットの観点からの言及が多くあった。そのため,「理解を確認し合い,深め合う協同場面」と命名した。

総合考察

3 名の調査協力者の共通点から，以下のことが示された。初任者教員であっても，半年間の経験から，授業実践に必要な力，協同的な学びを展開する際に必要なことがらや課題を経験的に理解することができていた。ただ，それらの課題をどのように達成するか，どのように実践していくのかについては，理解できていなかった。つまり，実現が難しいとされる協同学習実践に必要なことがらの習得に対するレディネスは，半年間の教職経験であっても整う可能性が示唆された。

一方，調査協力者の相違点から，それぞれが担任する学級や学校の状態，同僚の教員や学校文化によって，協同学習への認識が変容する可能性が示された。

文献

Deutsch, M.,（1995）“Cooperation: The Fragile State,” in Bunker, B. B., Rubin, J. Z., & associates, Conflict, Cooperation & Justice: Essays Inspired by the Work of Morton Deutsch, San Francisco, CA: Jossey-Bass Publishers, p.257.

石橋太加志・千葉美奈子・橋本渉・細矢和博・南澤武蔵・秋田喜代美・小国喜弘・小玉重夫（2015）協働学習に 取り組む中等教育学校教師の抱える不安と有効性の認 識―教師と生徒の協働学習についての記述データの検討から 東京大学大学院教育学研究科紀要, 54, pp.565–584.

児玉佳一（2017）協働学習に関するイメージの教職経験による相違 ―小学校教員および教職課程学生を対象にした比喩生成課題から― 教師学研究 20(2).pp.57-68.

松尾剛・丸野俊一（2007）子どもが主体的に考え，学び合う授業を熟練教師はいかに実現しているか 教育心理学研究 55(1).pp.93-105

宮橋小百合・中山眞弘・須佐宏（2016）初任者研修プログラムにおける訪問指導の実際と課題 学校教育実践研究 1，pp.35-44

内藤哲雄（2017）PAC 分析実施法入門［改訂版］ナカニシヤ出版

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課編集（2008）『平成 20 年度初任者研修・新規採用者研修・期限付任用教員任用時研修実施の手引き』

(Shigeto SANADA)

第 8 巻の原稿募集について

投稿をお考えの方に対しては、本来は投稿規定と執筆要領を掲載すべきところ、現在これらについて変更のための検討を行っております。そのため、申し訳ありませんが、7 巻には投稿規定と執筆要領は掲載いたしません。5 月ごろには新規定が定まると思います。投稿関連の文書は PAC 分析学会の web に掲載いたします。また、ML などを通じて投稿の呼びかけも致しますので、しばらくお待ちいただけますようお願いいたします。

大枠については大きな変更はないかと考えられますので、あらかじめご準備いただけますとスムーズかと思います。

大変ご不便をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

（編集委員会）

編集後記

PAC 分析研究第７巻をお届けするにあたって、発行が予定より遅れました事をお詫び申し上げます。特に、投稿者の皆様にはご迷惑をおかけ致しました。ＰＡＣ分析学会としては、第 7 巻から編集委員会の人数を増して組織強化を図りましたが、それに伴って検討事項も増え、結果として査読者決定が大変遅れました。私は副編集委員長として、主に投稿者と査読者との連絡調整を行ってきました。役割を終えての感想としては、査読の先生方にはより良き論文の完成を願って最後まで丁寧な査読を行って頂きました。また、投稿者の皆様には査読者のコメントに沿って迅速に修正原稿をお送り頂きました。査読開始から終了に至るまでは順調に進行できたと思っております。改めて、査読者と投稿者の皆様に感謝申し上げます。

（編集委員会副委員長　江幡芳枝）

編集の最後の様式を整える作業をお手伝いさせていただきました。論文執筆の際のテンプレートが完備されておらず、様式を整えるのに少々難儀しました。次回の 8 巻では様式もそろうようにテンプレートを準備いたします。論文誌を出版するというのは学会のプレゼンスを高めるということにもなりますし、論文執筆者にとっても業績となることですので我々研究者にとっては大変重要な任務となります。今後も自律的な発展のために、編集作業をシステム化してゆくことが大事ではないかと思います。

最後に、執筆者、査読者、編集に携わった方々すべての方に感謝申し上げます。

（編集委員会委員　土田義郎）

PAC 分析学会誌
PAC 分析研究第 7 巻

発行日	2024 年 3 月 31 日
発行者	PAC 分析学会
理事長	内藤哲雄
学会事務局	いとうたけひこ(伊藤武彦)、今野博信
編集委員長	内藤哲雄
副編集委員長	江幡芳枝
編集委員	土田義郎、眞保貴美、末田清子、大久保智生、間中伴子、眞保貴美、佐藤弘一郎、上田賢悦、新井克之、志賀玲子

<著作権について>本誌に掲載された論文の著作権は本学会に帰属します。

Journal of PAC Analysis

Vol.7